

笛吹市文化財調査報告書 第26集

山梨県笛吹市

大蔵経寺前遺跡・寺の前古墳群

—遊技施設建設にともなう埋蔵文化財調査報告書—



2012

(株) マ ル ニ シ
笛吹市教育委員会
財団法人 山梨文化財研究所

山梨県笛吹市

大蔵経寺前遺跡・寺の前古墳群

—遊技施設建設にともなう埋蔵文化財調査報告書—

2012

(株) マ ル ニ シ
笛吹市教育委員会
財団法人 山梨文化財研究所

例 言

- 1 本書は山梨県笛吹市石和町松本637-1番地はか所在の大蔵経寺前遺跡・寺の前古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は株式会社マルニシの遺技施設（パチンコ店舗建設）に伴い、財団法人山梨文化財研究所が平成17年（2005）6月～9月に実施した。
- 3 石製模造品（白玉）については、斎藤あや氏が担当し、本書第3章第4節（15）を執筆していただいた。原稿を早々に提出されたにも関わらず、報告書刊行が遅れたことを心よりお詫びしたい。それ以外については藤原功一が執筆した。
- 4 発掘調査における基準点測量、空中写真撮影、全体図作成業務は株式会社テクノプランニングが実施した。
- 5 出土した金属製品の保存処理は、財団法人山梨文化財研究所で実施した。
- 6 本書に関わる出土品、記録類は笛吹市教育委員会が保管している。
- 7 発掘調査から報告書作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関からご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申

し上げた（順不同、敬称略）。

吉成昌志（（株）マルニシ）、小瀬忠秋・野崎進・内田裕一・瀬田正明（笛吹市教育委員会）、長田組土木、斎藤あや（藤沢市教育委員会）、古谷毅（東京国立博物館）、大賀克彦、森谷忠・柴田直樹（株式会社テクノプランニング）、三枝哲雄（二枝興業）、入江俊行（甲州市教育委員会）、首藤久士（浜松市教育委員会）、岡野秀典（中央市役所）、河西学・鈴木稔・畑大介・宮澤公雄・平野修・望月秀和・中山千恵（（財）山梨文化財研究所）、中山誠二・植月学（山梨県立博物館）、末木健、坂本美大、小林広和、吉岡秀樹・保坂和博・石神孝子（山梨県埋蔵文化財センター）、山月洋文・村石真澄（山梨県庁学術文化財課）、平塚洋一（甲府市教育委員会）、柴垣勇夫（静岡大学）、後藤建一（湖西市教育委員会）、笹生衛（國學院大学）、井上秀典（大蔵経寺住職）、黒川宥元（長谷寺住職）、岡田八郎、小栗明彦（檀原考古学研究所）、加賀美要次、大野淳史（（財）とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター）、大平知香（日本大学文理学部資料館）、青田千沙子（小田原市教育委員会）、副島藏人（川崎市民ミュージアム）

凡 例

- 1 遺跡全体図におけるX・Y数値は、世界測地系（測地成果2000）第8系（ $X = -37750.000$ 、 $Y = 12060.000$ 、グリッド番号Q-9）に基づく座標数値である。真北方向角は $-0^{\circ}4'40''$ 。各遺構平面図中の北を示す方位はすべて座標北である。
- 2 遺構および遺物の縮尺は次のとおりである。

竪穴住居	1 : 60
竈	1 : 30
土坑・ピット	1 : 40
全体図	任意
土器	1 : 3
土製品	1 : 2
白玉	1 : 1
白玉を除く石製模造品ほか小形石器	2 : 3
- 3 遺構図版中の遺物間実線は接合した2点の接合間

係を示す。遺構図中の遺物番号は遺物図版番号、遺物観察表番号、写真図版番号と一致する。

- 4 土器断面図中の黒線りは須恵器を示し、破線は接合帯を示す。
- 5 土層説明における土色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」を使用した。
- 6 本書図1は国土地理院発行の1/200,000地勢図「甲府」、図2は1/50,000地形図「甲府」「御岳昇仙峡」を使用した。
- 7 遺構図版中の平面・断面図における遺物の種別を示す記号内容は次のとおりである。

● 土師器・土器 ● 縄文土器 □ 土製品
▲ 須恵器 ■ 陶磁器 △ 石製品・石器
○ 鉄製品 ★ 炭化物 ☆ 木製品・自然木
◆ 竹 ◇ 粘土

本文目次

第1章 経過	1	第1節 調査の方法	10
第1節 調査の経過	1	第2節 層 序	10
第2節 発掘作業の経過	1	第3節 遺 構	11
第3節 整理作業の経過	2	第4節 遺 物	18
第2章 遺跡の位置と環境	3	第4章 総 括	30
第1節 地理的環境	3	報告書抄録	
第2節 歴史的環境	3	奥付	
第3章 調査の方法と成果	10		

挿入図目次

図1 遺跡の位置(1)	4	図9 白玉の側面形状模式図	25
図2 遺跡の位置(2)	4	図10 側面形状と最大径	26
図3 遺跡の位置と周辺の遺跡	5	図11 側面形状と最大厚	26
図4 調査区および現状	6	図12 側面形状と端面の仕上げ	26
図5 全体図	7・8	図13 側面形状と研磨方向	26
図6 手捏土器の分類	21	図14 側面形状と石材	27
図7 白玉の側面研磨方向模式図	24	図15 端面の仕上げと石材	27
図8 観察項目	24	図16 研磨方向と石材	27

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧	5	第6表 土製品観察表	48
第2表 石 材	25	第7表 鉄製品観察表	49
第3表 十指接合関係別表	34	第8表 石製道具品(円板形・剣形・勾玉形)観察表	49
第4表 土器観察表	35	第9表 白玉・土玉・ガラス小玉観察表	50
第5表 石器類観察表	48		

図版目次

第1区 1・2号壺穴	65	第25区 5号墳	93
第2区 2・3号壺穴	66	第26区 1・2号壺穴遺物	94
第3区 3～6号壺穴	67	第27区 2・3号壺穴遺物	95
第4区 4～6号壺穴、1～4号土坑	68	第28区 4～6号壺穴、3・4号土坑遺物	96
第5区 5～12号土坑	69	第29区 18・23号土坑、1・4・14・21・27号溝、2号ピット遺物	97
第6区 14～19号土坑	70	第30区 2号墳南・東・西、1・2号墳中間遺物	98
第7区 20～23号土坑	71	第31区 1・2号墳中間、1号墳墳丘内遺物	99
第8区 1～3号溝	72	第32区 2号墳突出東・中遺物	100
第9区 4～6・23・29・30号溝	73	第33区 2号墳突出西、2号墳北・西・北ピット・周溝、1号墳丘内遺物	101
第10区 7～11号溝	74	第34区 祭祀坑遺物(1)	102
第11区 8～21・24～28号溝	75	第35区 祭祀坑遺物(2)	103
第12区 祭祀坑	76	第36区 祭祀坑遺物(3)	104
第13区 祭祀坑	77	第37区 祭祀坑遺物(4)	105
第14区 祭祀坑	78	第38区 祭祀坑遺物(5)	106
第15区 祭祀坑	79	第39区 祭祀坑遺物(6)	107
第16区 祭祀坑	80	第40区 祭祀坑遺物(7)	108
第17区 祭祀坑	81	第41区 祭祀坑遺物(8)	109
第18区 祭祀坑	82	第42区 祭祀坑遺物(9)	110
第19区 1・4号墳	83・84	第43区 祭祀坑遺物(10)	111
第20区 2号墳	85・86	第44区 祭祀坑遺物(11)	112
第21区 1・4号墳	87	第45区 祭祀坑遺物(12)	113
第22区 2号墳	88	第46区 祭祀坑遺物(13)	114
第23区 3号墳	89・90		
第24区 5号墳	91・92		

第47回	祭祀坑遺物 (14)	115	第69回	白土 (2)	137
第48回	祭祀坑遺物 (15)	116	第70回	白土 (3)	138
第49回	祭祀坑遺物 (16)	117	第71回	白土 (4)	139
第51回	祭祀坑遺物 (17)	118	第72回	白土 (5)	140
第52回	祭祀坑遺物 (18)	119	第73回	白土 (6)	141
第52回	祭祀坑遺物 (19)	120	第74回	白土 (7)	142
第53回	祭祀坑遺物 (20)	121	第75回	白土 (8)	143
第54回	祭祀坑遺物 (21)	122	第76回	白土 (9)	144
第55回	祭祀坑遺物 (22)	123	第77回	白土 (10)	145
第56回	祭祀坑遺物 (23)	124	第78回	白土 (11)	146
第57回	祭祀坑遺物 (24)	125	第79回	白土 (12)	147
第58回	祭祀坑遺物 (25)、3号墳遺物 (1)	126	第80回	白土 (13)	148
第59回	3号墳遺物 (2)	127	第81回	白土 (14)	149
第60回	4号墳遺物、5号墳遺物 (1)	128	第82回	白土 (15)	150
第61回	5号墳遺物 (2)	129	第83回	白土 (16)	151
第62回	5号墳遺物 (3)、その他 (1)	130	第84回	白土 (17)	152
第63回	その他 (2)、須恵器、縄文土器 (1)	131	第85回	白土 (18)	153
第64回	縄文土器 (2)、弥生土器 (1)	132	第86回	白土 (19)	154
第65回	弥生土器 (2)	133	第87回	白土 (20)、土玉、ガラス小玉	155
第66回	弥生土器 (3)、石器類 (1)	134	第88回	石製模造品 (1)	156
第67回	石器類 (2)、鉄製品	135	第89回	石製模造品 (2)、他	157
第68回	白土 (1)	136	第90回	木製品、石碎	158

写真図版目次

図版 1	1 調査区南端写真(北西より石和温泉駅方面を望む)	3 突出部周辺完掘状況(北より)	
	2 調査区南端写真(南より大蔵経寺を望む)	4 祭祀坑上層埋土堆積状況(西より)	
図版 2	1 調査区南端写真(上より)	5 祭祀坑埋土断面(西より)	
	2 祭祀坑下層遺物出土状況(南より)	6 祭祀坑上層出土須恵器断片 7 祭祀坑溝巻風景	
図版 3	1 道祖神塚古墳(南より)	8 祭祀坑下層遺物出土状況(南より)	
	2 さんごうじ塚古墳(北より)	図版 8	1 祭祀坑遺物出土状況 2 祭祀坑遺物出土状況
	3 無名塚古墳 4 大蔵経寺塔(経藏)跡	3 祭祀坑遺物出土状況 4 祭祀坑遺物出土状況	
	5 物部神社(南より)	5 祭祀坑遺物出土状況 6 祭祀坑遺物出土状況	
	6 調査風景(サイロ解体を背景に)	7 祭祀坑遺物出土状況 8 祭祀坑遺物出土状況	
	7 重機による表土剥ぎ 8 遺構確認前の情景後	図版 9	1 祭祀坑遺物出土状況 2 祭祀坑遺物出土状況
図版 4	1 1号墳(南より) 2 4号墳(南より)	3 土敷人形出土状況(中央) 4 祭祀坑完掘状況	
	3 2号墳(さんごうじ塚古墳)と突出部(北より)	5 1号土坑完掘状況 6 2号土坑完掘状況	
	4 3・5号墳(西より) 5 3・5号墳(西より)	7 3号土坑遺物出土状況	
図版 5	1 1号墳断面(北より) 2 1号墳主体部	8 4号土坑遺物出土状況	
	3 3号墳周溝内調査風景	図版10	1 8号土坑(配石) 2 16号土坑遺物出土状況
	4 3号墳と5号墳の間の状況	3 18号土坑遺物出土状況 4 20号土坑完掘状況	
	5 5号墳周溝土須恵器壳	5 22号土坑周溝出土状況	
	6 1号壑穴遺物出土状況	6 21号土坑(集石)上層	
	7 2号壑穴遺物出土状況	7 21号土坑(集石)半截状況	
	8 2号壑穴周溝遺物出土状況	8 21号土坑最下層石組出土状況	
図版 6	1 2号壑穴石組状況	図版11	1 1・4号墳間の完掘状況
	2 3号壑穴完掘状況(北より)	2 調査風景(1号墳付近) 3 調査区全景	
	3 4号壑穴遺物出土状況(北より)	4 見学会風景	
	4 4~6号壑穴完掘状況(西より)	5 2号墳突出部周辺土壌水のための準備状況	
	5 2号墳突出部周辺遺物出土状況(北より)	6 祭祀坑出土遺物(一部)	
	6 2号墳突出部調査風景(北より)	7 白土・土玉・ガラス小玉	
	7 2号墳突出部周辺遺物出土状況(北より)	図版12	石製模造品ほか
	8 2号墳突出部周辺遺物出土状況断面(西より)	図版13	7人形、古絵図A・C
図版 7	1 2号墳突出部周辺遺物出土状況(南より)	図版14	炭化木炭灰・高坪穴の布日痕
	2 2号墳突出部調査風景(南より)		

第1章 経過

第1節 調査の経過

大蔵経寺前遺跡および寺の前古墳群は、山梨県笛吹市石町町松本域内の大蔵経寺山南側の山裾に建つ大蔵経寺南側の平坦面に所在し、標高は270mである。JR中央線、石和温泉駅の西北にあたり、大蔵経寺と国道140号線の間のブドウを主とした果樹地帯に位置し、東側に南流する平等川に面している。調査前には太平洋セメントの巨大な円筒形のサイロ3基が存在した。

平成17年(2005)、プラント撤去とパチンコ店舗の建設が計画された。建設予定地内には寺の前古墳群を含む大蔵経寺前遺跡が存在することから、笛吹市教育委員会(以下、市教委)では、開発予定地のうち、約2700㎡の店舗部分、および3700㎡の立体駐車場予定地内で遺物の有無確認、調査面積の絞り込みを行うため、2005年6月に7本のトレンチ(340㎡)を設定し、試掘調査を実施した。その結果、古墳時代を主とする遺物包含層および焼土、堅穴状の落ち込み、溝状の落ち込みが確認されたことから、市教委では店舗・立体駐車場予定地の東側部分に関して本調査の必要性があると判断した。

本調査については助山梨文化財研究所(以下、研究所)が実施することとなり、委託者岡マルニシ、受託者助山梨文化財研究所および笛吹市教育委員会が三者協定を結び、市教委の指導・監督のもと、本調査が行われることとなった。なお最終的な本調査面積は約3100㎡である。

第2節 発掘作業の経過

発掘調査は平成17年(2005)6月15日より開始した。まず重機でプラント東側から表土削ぎを開始し、北側へと移動していった。大蔵経寺前の調査区北側の住宅地周辺については、建物の撤去、庭木の移動を待って8月以降に調査を行った。6月末からは調査区隣地で発掘調査と並行して大型重機によるサイロ解体が開始されたため、けたたましい騒音のもとでの調査となった。

表土を削いで精査をしたところ、地山の確認面に周囲が焼状に黒色土で埋まった円墳状の遺構が数か所存在することが判明した。周溝の底までは深いと予想されたため、クローラダンプとミニコンボで覆土層を除去したが、梅雨時の雨で幾度となく調査区全体が水没し、水はけの悪い粘性の強い土質のため、調査を

思うように進めることができなかった。上層の平安末の堅穴住居、溝を調査し、さらに古墳の周囲を掘っていったところ、尾溝状を呈す部分が無数の上坑状の落ち込みの集合体からなり、さらにそれらが黒色土と黄褐色土の互層をなして細積した複雑な構相を呈していることが判明し、それらを土坑として捉えるべきかどうかの判断に迷いつつ、古墳として調査を実施した。調査の中間にあたる7月23日には現地見学会を実施した。その周知を兼ねて7月17日には山梨日日新聞紙上で「5世紀の古墳群発見!」として大きく報道された。調査の後半では2号墳(さんごうじ塚古墳)北西に方形の掘り残しによる造り出し状の突出部があり、さらにそれを取り巻く周溝内に多量の土師器が遺棄されている状況が確認された。とくに突出部端の方形堅穴状遺構(祭祀坑)では、多量の土師器塊、高坏、ミニチュア等がざっしりと集積した状態で検出され、土器片の間に滑石製模造品がいくつか混じっていることがわかった。そこで突出部周辺の土壌を簡内ですべて水洗し、模造品類を探すこととし、発掘と並行して毎日2人の作業員により土壌水洗を調査区の一画で実施した。当初、8月9日段階でF199個であったのが8月20日には1430個に達し、調査最終日の9月6日には2765個となるなど、毎日100~200個近い数の小さな白玉のほか、剣形、鏡形、鉄製片等が水洗作業により発見された。とくに方形の堅穴状遺構では多数の祭祀遺物が出土したことから、「祭祀坑」と仮称名を付けた。祭祀坑内では遺物を詰め込んだような出土状況を呈し、さらに中央、上坑底面からは完形の土製人形が1点出土した。白玉は、その後の遺物整理の段階で、土器洗いの際にも土器内の土中から見つかるなど、最終的には3370個を超える数となった。県内ではそれまで石製模造品が大塚遺跡(笛吹市一宮町)を除きほとんど単体でしか発見されておらず、石製模造品の乏しい地域性として理解されていただけに、大きな驚きとなった。8月13日には山梨日日新聞紙上で石製模造品の出土についての報道が行われた。

この突出部と石製模造品を多量に含む祭祀坑が見つかった2号墳の主体部に相当するさんごうじ塚は、石室周辺を楕円形の石垣で囲んだ区画として従来残されてきたが、店舗造成にあたってはそのまま保存されることとなった。したがって主体部が残るとみられる区画内は未調査のままで、古墳の時期と祭祀坑、さらには尾溝内側に存在する5世紀代の堅穴住居との関係が

暖かなままとなっていました。ただし明治年間に遺物が持ち出され、さらに戦後石室は解体されたといわれ、ピンボールで突いても石材の存在を確認できていない。

この2号墳(さんごうじ塚古墳)については、店舖東脇に植栽された状態で保存されたほか、道祖神塚古墳も駐車場内に現状のまま保存されている。

【作業日誌抄録】

平成17年(2005)

- 6月15日(水) 道具の搬入。重機による表土剥ぎを南から開始。長田組十木との打ち合わせ。溝等の遺構を確認。
- 6月17日(金) 表土剥ぎののち杭打ち。礎石掘削。
- 6月18日(土) 重機稼働。遺構確認および遺構掘り下げ開始。
- 6月20日(月) 表土剥ぎ。遺構確認、十坑調査。
- 6月27日(月) 本日まで重機稼働。一部拡張。古墳周溝にサプトレンチを入れる。
- 6月28日(火) 福原考古学研究所小栗明彦氏および市教委1名見学。
- 6月29日(水) 園庭整理。遺構確認。本日から調査と並行してプラントの撤去1事が始まる。
- 6月30日(木) ミニコンボを入れて周溝部分などの上層を掘削する。
- 7月1日(金) クローラダンプを導入。
- 7月8日(金) 麻理成文化財センター3名ほか見学。
- 7月14日(木) 麻理成文化財センター3名見学。事務所移動にともなう片付けなど。
- 7月15日(金) 博物館実習生見学など。
- 7月16日(土) 5号墳周溝を掘り下げ。須志器大薬片がまわって出土。
- 7月20日(水) 2号墳出土部脇の掘り下げで須志器大形破片など出土。
- 7月23日(土) 午前9時より遺跡見学会。約70名参加。
- 7月30日(土) 空撮準備。12時過ぎにラジヘリによる空撮実施。
- 8月1日(月) 5号住の調査。2号墳出土部東側の土器取り上げ。笛吹市長、建設課職員ほか見学。
- 8月9日(火) 重機による表土剥ぎ、杭打ち。土壌水洗による石製模造品抽出を開始。
- 8月12日(金) 山口新聞取材。土壌水洗で白玉など130個検出。
- 8月13日(土)~16日(火) お盆休み。
- 8月18日(木) 帝京平成大学学生ら9名、笛吹市教員6名ほか見学。
- 8月19日(金) 祭祀坑の下層を掘り下げる。土壌水洗継続。白玉が1150個を超える。
- 8月20日(土) 祭祀坑の調査に集中し、土器取り上げを続行。祭祀坑中央から土製人形出土。プランが方形であることが判明。土壌水洗で白玉は計1500点を超える。
- 8月21日(日) 祭祀坑の遺物取り上げ。朝、地元の見学者あり。
- 8月22日(月) 祭祀坑の白玉は計2000点近くに達する。
- 8月23日(火) 午前中雨の中、簡易テントを設営して遺物取り上げ。
- 8月25日(木) 台風の影響で午前中雨が降ったが、土器取り上げを実施。

- 8月28日(日) 東京国立博物館古谷毅氏来訪。
- 8月29日(月) 道祖神塚の脇の道路拡幅工事で塚の脇が削られることがわかったため、市教委が現地復原。
- 8月30日(火) 3・5号墳の調査。南アルプス市教委3名見学。
- 8月31日(水) 研究所職員見学。3号墳調査。馬場出土。
- 9月1日(木) 笛吹市教委4名見学。
- 9月3日(土) 3時過ぎにラジヘリによる空撮実施。大方の作業は終了とする。
- 9月5日(月) 園面整理、土壌水洗実施。プレハブの片づけ、荷物運搬。
- 9月6日(火) 土壌水洗は午前で終了。集石の調査。ホースの片づけなどを行い、完全撤収とする。一部埋め戻しを開始。

【調査作業員名簿】

芦沢はつ子・雨宮英郎・荒木昭彦・池谷富士子・岡田三恵子・奥山宗石・金井いく代・岸本美苗・草間正彦・久保幸一・倉田勝子・小池孝男・小林小路・五味奈々子・佐田金子・佐藤美喜男・坂本しのぶ・塩谷風季・須田泰美・首藤久士・武井美知子・田宮康子・土屋健作・手塚勇子・直井光江・長澤晴雄・波木井祥和・長谷川規愛・萩原忠・広瀬侯子・樋口進・平沢則子・柳本千恵子・山本秀雄・渡辺茂

第3節 整理等作業の経過

整理作業は、笛吹市石和町内の山梨文化財研究所内で実施した。調査終了後、遺物洗浄、注記、復元作業を開始し、実測、図版作成を行ったが、諸事情による中断期間を経て2012年3月末に報告書を発行することとなった。祭祀坑出土遺物については、土器に付着した土壌中に模造品が含まれる可能性が考えられるとして、節内で慎重に洗浄作業を行ったところ、白玉が多数検出されることとなり、遺物との関係を記録しながら作業を進めた。白玉などの石製模造品については、注記、収納をどのようにしたらよいか課題となり、当初、番号を直接記入したが、途中で注記は諦め、最終的にはケース内に入れる場所を決め、ケース本体に番号がわかるようにした。祭祀坑の土器類はあまりにも膨大で、同類の器種が多いことから接合作業を十分に実施することができず、総量把握のための個体数把握を行うことができなかったが、とりえず器形がわかる良好な資料について極力実測、図化を行うことができた。石製模造品については、県内での出土事例が少ないことから、全点実測、報告を方針として作業を行った。

2005年10月1日の2005年度上半期遺跡発表会では鶴原が調査概要の報告を行い、『山梨考古』第97号に概

要を掲載した。石製模造品および土製人形については、釈迦堂遺跡博物館の企画展「人のかたち—ひとがた・人形」（2006年3月20日～6月2日）、巡回展「山梨の遺跡展 2006」では2006年3月18日～4月9日に山梨県立考古博物館、2006年6月26日～8月31日に釈迦堂遺跡博物館で展示公開された。2008年1月18日発行の『帝京大学山梨文化財研究所報』第50号では祭祀坑の出土状況および出土遺物の写真を表紙に掲載し、遺跡を紹介した。2008年6月22日には山梨県立考古博物館の考古学講座で榎原が「石・土製模造品と埋納行為—笛吹市大蔵経寺前遺跡を中心に—」というタイトルで、大蔵経寺前遺跡を中心に発表した。また2008年

11月29・30日、山梨県考古学協会主催で行われた「土製模造品から見た古墳時代の神マツリ」では入江俊行が「山梨県内における土製模造品について」を報告し、紙上発表として斎藤あやが「大蔵経寺前遺跡の石製模造品」、岡野秀美が「大蔵経寺前遺跡出土の人形土製模造品」を掲載している。

【整理作業員】（順不動 敬称略）

入江俊行・斎藤あや・竜沢みち子・斉藤ひろみ・矢房静江・佐野靖子・岩崎満佐子・田中真紀美・須田奈美・古郡明・大野淳史・大平知香・吉田千沙子・關島藏人

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

遺跡が所在する笛吹市は、平成16年(2004)、東八代郡春日居町と東山梨郡石和町・御坂町・八代町・一宮町・境川村の6町村が合併して発足した市で、西側に甲府市、東側に甲州市が接する。遺跡は笛吹市石和町に所在し、甲府市との境に近い。

甲府盆地北縁、甲府市街地の北側には秩父山地より張り出した帯那山、棚山などの山々が分布し、先端に甲府盆地に突き出すように神奈備形を呈した大蔵経寺山が位置する。山嶽には真言宗大蔵経寺が建ち、その南面の旧寺域内に大蔵経寺前遺跡および寺の前古墳群が所在する。甲府盆地東部を流れる笛吹川の支流、平等川が遺跡脇の山裾を南西方向に流れ、周辺一帯は平等川および笛吹川により形成された沖積低地となっている。この大蔵経寺山は、甲府盆地をちょうど二分する位置にあることから、かつての山梨郡と巨摩郡の境として認識されたようである。

現在、遺跡東南にはJR石和温泉駅があり、駅南側にはかつての甲州街道石和宿の名残をとどめた通りがある。遺跡南側には国道140号線(青梅街道)が通過し、この一帯は交通の要衝でもある。

国道沿いには住宅地が広がるとともに、平地から山の斜面にかけてブドウを主とした果樹園が広がり、遺跡周辺もブドウ畑となっている。調査区画にはJR石和温泉駅から秩父セメントへの引き込み線があり、かつては盛んに利用された。調査区内南側には太平洋セメント(旧秩父セメント)の円筒形の巨大なサイロが3基存在し、一種のランドマークとなっていた。甲府市境に近く、甲府市側の川田地区に入ると、国道沿いには地元で採れる粘土を用いた瓦器が近年まで数多く

点在したが、現在では、旧来の形で瓦製造を行っている店はない。古代に遡ると、甲府盆地に堆積した良質な粘土を用いた甲斐型土器の生産地とされており、土器作りや瓦造りの歴史をもつ地域である。

第2節 歴史的環境

大蔵経寺前遺跡は、神奈備形の大蔵経寺山(御室山)の南面に位置する。山麓南麓には向かって右側に大蔵経寺、左側に物部神社(十社明社)があり、その南側の平地に大蔵経寺前遺跡、寺の前古墳群がある。

松本山大蔵経寺は、『甲斐国志』に次のようにある。「新義貞宮宗檀林七箇寺ノ一・三層塔迹 飛騨二匠ノ造建スル所山上五町余ニ在リ塔中ニ大蔵経並二唐本一切経ヲ置ク元禄辰辰六月七日延焼ス 彌勒像一軀黄金仏ナリ塔迹礎石ノアル処ヲ彌勒平ト云元禄十六年癸未二月五日土中石狭中ニ獲タリ・・・」

山中の彌勒平に大蔵経寺を納めた三重塔礎石があるという記述であるが、大蔵経寺山中では現在そうした遺構は確認できない。しかし大蔵経寺収蔵庫蔵の「変形火釜」を描いた絵図(古絵図A 享保6年 1721)には山中に「彌勒堂」という地名および礎石の絵があり、山上から現在地へ移転したという伝承は根強い。その他、寺の両側に三重塔を描く古絵図(古絵図B 年代不詳)、「五重塔ノアト」と記した「大蔵寺領内絵図面」(古絵図C 寛政3年 1791)があり、山中の塔跡とは別に境内に塔があったと考えられてきたが、近年の発掘整備に伴い境内の西側基地の一角に建物礎石群が明らかとなり、塔跡として保存されている。外圍5間×5間、内側3間×3間の礎石配置の中央に心礎といわれる孔の開いた長方形の礎石を配した建物跡



図1 遺跡の位置(1)



図2 遺跡の位置(2)

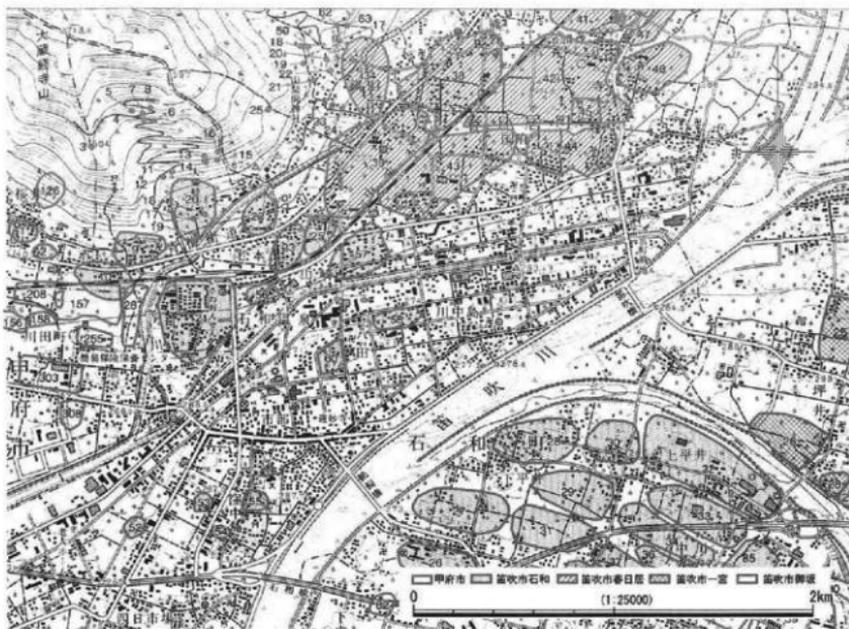


図3 遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 周辺遺跡一覧

甲府市		No.		遺跡名		時代		笹吹市御坂町	
No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	遺跡名
126	横田・桜井横石塚古墳群 (国府東支所)	古墳	18	さんごう七塚古墳 (今の御古墳跡)	古墳	82	下成田遺跡	古墳・奈良・平安	
196	龜田遺跡	古墳・奈良・平安・ 中世・近世	19	無名古墳(今の御古墳跡)	古墳	17	はたおり古墳	古墳	
197	北田遺跡	古墳・奈良・平安・ 中世・近世	20	大藏経寺前遺跡	縄文・弥生・平安・ 中世・近世	18	狐塚古墳	古墳	
198	久保田遺跡	古墳・奈良・平安	21	松本塚ノ越遺跡	奈良・平安	19	寺の前2号墳	古墳	
206	川田遺跡	奈良	22	大西遺跡	奈良・平安	20	無名塚	古墳	
207	北村遺跡	近世	23	中成遺跡	奈良・古墳・奈良・ 平安	21	寺の前2号墳	古墳	
235	川田遺跡	中世	25	古塚敷遺跡	奈良・平安	22	へび塚遺跡	古墳	
303	桜井遺跡	古墳・奈良・平安・ 中世	26	石和高校岡辺遺跡	奈良	23	無名塚	古墳	
308	外中代遺跡	古墳・奈良・平安	27	小石原遺跡	奈良・平安	24	無名塚	古墳	
笹吹市石和町			28	東田遺跡	平安	25	御家山古墳	古墳	
1	清水遺跡	平安	29	下前田遺跡	平安・中世	34	保雲寺橋遺跡	古墳・平安	
2	鳥積遺跡	奈良・古墳・奈良・ 平安	30	御堂遺跡	奈良・平安	38	熊野南遺跡	古墳・平安	
3	鞍掛塚古墳	古墳	31	溝中田遺跡	縄文・奈良・平安	39	大谷遺跡	平安	
4	七つ石1号墳	古墳	32	宮の上遺跡	古墳・奈良・平安	40	真町遺跡	古墳・奈良・平安	
5	七つ石2号墳	古墳	33	坪井遺跡	古墳・奈良・平安	41	加茂東遺跡	古墳・平安	
6	七つ石3号墳	古墳	34	赤井遺跡	奈良・平安	42	神東町遺跡	古墳・奈良・平安	
7	七つ石4号墳	古墳	35	御幸遺跡	古墳・奈良・平安	43	野田遺跡	古墳・奈良・平安	
8	七つ石5号墳	古墳	38	中川本遺跡	縄文・奈良・平安・ 中世	44	大平寺遺跡	平安	
9	小石田遺跡	古墳・奈良・平安	37	中新井遺跡	縄文・奈良・平安	45	寺本堂寺	奈良・平安	
10	唯作遺跡	縄文・奈良・平安	52	新岡町南遺跡	平安	47	加茂西遺跡	古墳・奈良・平安	
11	無名古墳(大藏経寺南古墳群西)	古墳	53	新岡町北遺跡	平安	48	春日神社遺跡	平安	
12	無名古墳(大藏経寺南古墳群西)	古墳	54	新岡町東遺跡	平安	60	寺の前1号墳	古墳・平安	
13	無名古墳(大藏経寺南古墳群東)	古墳	56	観音寺前遺跡	平安	62	平林2号墳	古墳	
14	無名古墳(大藏経寺南古墳群東)	古墳	57	三門遺跡	平安	63	死人2号墳	古墳	
15	大藏経寺山15号墳	古墳	58	伊勢の宮遺跡	平安	25	北郷倉遺跡	縄文・平安	
16	無名古墳(大藏経寺南古墳群東)	古墳	60	八田屋敷内遺跡	平安・近世	26	南西田遺跡	平安	
17	遺跡神塚古墳(今の御古墳跡)	古墳	61	石和陣屋跡	近世	28	南西田遺跡	平安	
						29	東前田遺跡	奈良	

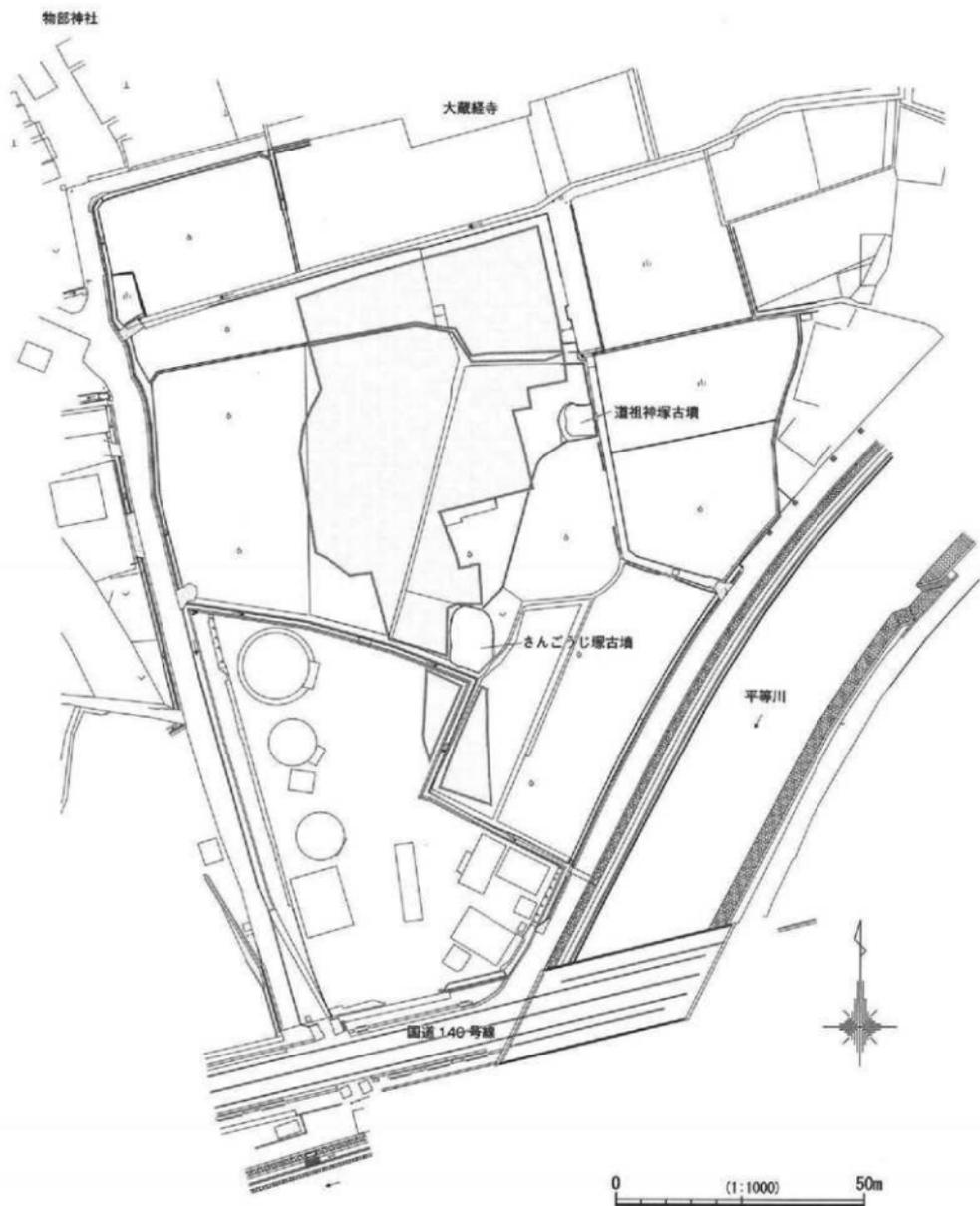


図4 調査区および現状



图5 全图

である。中央の心礎が周囲の礎石よりも低いこと、中心礎石が軸受け状の構造を呈していること、中世の塔であれば通常心礎を持たないことから、塔ではなく、大蔵経を納めた経蔵で、大津市岡城寺の一切経蔵のように中央に八面の同軸式書架を設けた輪蔵（転輪蔵）ではなかったかと考えておく。

寺の西側に墓地を挟んで並列する十社明神は、式内社物部神社に比定するのが一般的で、『甲斐国志』に次のようにある。「・・・物部氏ノ祖ノ神ヲ祀ル物部神社是ナリ往古ハ御幸山ノ山頂ニ鎮座アリシヲ後今ノ地ニ遷スト云リ」と記し、大蔵経寺と同じく下山伝承をもつ。

大蔵経寺山については東に張り出した尾根を「御室山」（みむろやま）といい、山麓東側に東面して建つ山梨岡神社の旧社地はやはり山中にあったといわれる。山梨岡神社は本殿が室町末建立の四指定重文で、飛騨匠の建築と伝えられる。

大蔵経寺山には積石塚古墳群が分布する。3か所の文群があり、大蔵経寺裏文群に6基、セツ石文群に5基、鞍掛塚文群に5基があるほか、現在では消滅したが大蔵経寺裏に3基、採石場付近に数基の積石塚があったといわれる。直径10m程度で、南～南西向きの横穴式石室をもつ古墳を主とするが、鞍掛塚文群には東西向きの横穴式石室がある。このうち大蔵経寺15号墳では、1984年の調査で金環、玉、刀子などが見つかり、6世紀後半築造と判明した。

大蔵経寺南側に存在する寺の前古墳群には、『石和町誌』によれば、現状で確認できる古墳として道祖神塚古墳、さんごうじ塚古墳、無名墳の3基があり、蛇塚については消滅し形態は全く不明とされる。遺存する3基の古墳については次のように記載されている。「道祖神塚古墳は、大蔵経寺の参道に接して存在し、現状は一辺がハメートルの方形に残されているが、封土のほとんどは失われている。一部に天井石や側壁石と思われるものが認められるが、現在、中央に道祖神が祀られている。さんごうじ塚古墳は、戦後の農地解放前まで横穴式石室の姿をとどめていたが、現状は墳丘の基底部付近が残されているのみである。残存部の高さは約〇・六メートルで、平面は東西九・三〇メートル、南北一・八〇メートルの不整形形となっている。副葬品としては高坏や馬具などがあつたとされているが、のちに埋納されたものといえる古瀬戸灰輪蔵子の出七も伝えている。無名墳は、天井石や側壁石などと考えられるものが、東西七メートル、南北一・五〇メートルの範囲に現存する。周囲に土器片の散

布がわずかにみられる程度で、副葬品などについては不明である。」

蛇塚は古絵図Cに「蛇ツカ」として、方形区画を図示するが、現状では消滅している。調査の結果、5号墳として岡溝のみ確認でき、円墳と判明した。古絵図Cには石室があつたと考えられる位置に区画が描かれていることから、近世までは墳丘の一部ないしは石室が残っていたと思われる。

さんごうじ塚古墳は、古絵図Cでは「山宮守塚」と記し、現状とはほぼ同じ小さな区画を図示しているが、当初の塚の範囲を分筆縮小して現状となった過程が図に残り、当初は傍近い大きさが残っていたことがわかる。本調査で2号墳とした円墳に相当し、地元では「おさんぐうじ」と呼ばれている。かつて2段の石積みで囲んだ区画だったが、戦後、農地解放後に横穴式石室を解体したところ、馬具、高坏、古瀬戸灰輪蔵子が出たこととされ、現状では1段の石垣で囲まれた楕円形の塚の痕跡となっている。後藤守一の『考古学講座』20（昭和3年）には、「東山梨郡岡部村字松本発掘のもの」として「鉄製壺鏡」の写真を掲載し、「輪縁のもの・・・に足先を受ける壺の部分に附装したものといえることが出来る」と記しているが、現存、東京国立博物館収蔵品の壺鏡として「東八代郡岡部村字松本さんごう塚古墳」出土品があり、博物館の台帳には「明治42年2月2日 二枝源次氏より寄贈」との記載があることがわかった。鉄製壺鏡は東日本に多い遺物で、山梨県内には数例存在するが、『考古学講座』の写真によれば笛吹市八代町古柳塚出土品と同類であり、7世紀初頭と考えられる。ただし写真の壺鏡は今日、|笛吹市春日居町権沢無名墳出土|として保管するものと同一らしく、『山梨県史』ではそのように扱っているが、『考古学講座』以降、何らかの原因で出土地名に誤解、混乱が生じたのだろうか。また壺鏡を発掘したのが明治42年で、『考古学講座』の壺鏡と同一とすれば戦後にいわれた石室解体以前、明治42年に副葬品の一部が持ち出されていたことになる。

道祖神塚古墳は大蔵経寺正面に通じる参道脇にあり、寺の前古墳群では高塚として唯一残る古墳である。周囲の削土で墳丘は縮小し、墳頂には道祖神を祀り、古絵図Cでは「道祖神」と記載されている。石室に用いられたらしい大形の礫が石積みの間に見える。

無名墳は、大蔵経寺東側の宅地脇に石室の石材とみられる巨礫のまとまりが露出し、石材が散乱した状態をコンクリートで囲って保存している。石材の配置は原形を残していないため石室の構造を推測することは

難しいが、もとは横穴式石室であろう。

大蔵経寺南面一帯は「大蔵経寺前遺跡」として『石和町誌』に載り、縄文中期の土器が少量発見されたことを記し、今回の調査でも縄文中期の上坑が検出されている。また平成4年の宅地開発のさいに50mの調査区から弥生時代の土坑3基を検出した。調査が行われたのは今回の調査区内北側に存在した大蔵経寺前の宅地内で、今回の調査で再調査した結果、5号墳の墳丘内に相当する場所であることがわかった。

そのほか、石和温泉駅周辺には古墳時代後期から平安時代の集落跡が濃密に分布し、駅前通りのホテルや店舗建設に伴い遺跡調査が実施されてきた。箭吹川の氾濫による厚い堆積砂層に保護されるように埋没するため、地表面での遺物確認は難しいが、土器の遺存状況は良好な場合が多い。松本塚ノ越遺跡は、古墳時代後期から平安時代の集落で、その一部にあたるホテルやまなみ地点では平安期の埴内から砂金が出土し、「東内」銘黒青土器が多数存在するなど、重要な発見があっ

た。また「甲州風土記」に写真掲載されている土馬(野沢昌康コレクション)は戦後、石和温泉駅西の畑で採集されたものという。古墳時代の土製模造品で出土地点は定かではないが、平等川べりともいわれ、松本塚ノ越遺跡周辺ではなかったかと推測される。このように石和温泉駅周辺には古墳時代以降の拠点的な無落が存在し、西北側の平等川対岸に墓域としての寺の前古墳群、積石塚古墳群が存在する構図として理解できる。

古墳時代には笛吹市御坂町の姥塚と甲府市の加牟那塚古墳が甲府盆地の東西にあったとされる2大勢力圏の存在を象徴的に示すといわれる。大蔵経寺山は甲府盆地を二分する境界にあたることから、山麓の積石塚古墳群や本遺跡の祭祀坑の存在は、そうした境界における葬送、祭祀行為を示すもので、積石塚古墳群を構築した渡来系集団の存在を背景に想定する必要がある、物部神社(十社明神)の存在についてもそうした背景を踏まえて理解できよう。

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

重機による表土剥ぎのち、国家標準を基準とする5m方眼のグリッドを設定し、実測のための基準坑とした。遺構、遺物の実測にあたっては、当初、調査区南西を基点にして、光波測量機で読み取ったX・Y座標値を方眼紙上に点で落とし、点をつないで遺構図を円化するという方法で行った。また遺物の取り上げについては、X・Y・Z値を台帳に記録し(後半ではデータコレクターを使用)、整理段階でパソコンに入力し、後に開発された遺跡調査ソフト「遺構くん」(アイシン精機製)にデータを入れて整理を行った。最終的にはカメラ搭載のラジコンヘリで空撮を行い、全体図作成の原図とした。

ピットはNoを付け、南側を平載したのち土層をチェックして完掘した。ピットよりも大形の穴を土坑とし、半截のち断面図等を記録した。また古墳周辺の周溝状の落ち込みについては、いくつかを土坑として調査したほか多数は番号を付けていない。

遺物については、ピット一括、グリッド一括でまとめた土器片を除き、ほとんどの遺物を光波測量機で測定し、座標値をもつデータで取り上げた。祭祀坑内の膨大な遺物も駆力点で取り上げることに努めたが、2号墳突出部周辺の極小遺物である白玉などの石製模造品類については発掘時に肉眼で見出すことが不可能

だったため、水洗選別によりほとんどの遺物を抽出した。その方法としては、突出部を中心に東区、中区、西区に大別し、さらに西区では黄色土下の方形竅穴状遺構内を「祭祀坑」として区別して腐土を調査区脇に仮置きし、水道水を用いて篩の中で水洗することにより遺物の抽出を行い、排水は調査区脇の側溝に流した。水洗にあたっては、当初、1~2mmメッシュ程度の粗い目の篩に土を投入し、ホースの先に取り付けたシャワーヘッドの水圧で洗い流したが、のちにポリバケツ状の容器内に3槽の篩が入った水洗専用機(第一合成製 ウォーター・セパレーション)を用い、シャワーの水圧で選別した。篩目は1mm、2.5cm、5mmメッシュの3種である。この作業により、多数の石製模造品のほか、微細な鉄製品、炭化種実、骨片などを検出することができた。

第2節 層序

調査区は平等川に面した不安定な堆積状況であったため、とくに基本層序を設定せず、遺構各所で作成した断面で観察した。おおむね表土下層に黒褐色粘質土、暗褐色粘質土が堆積し、遺構跡面は黄褐色土、黄褐色粘質土となる。覆土、地山はともに粘質土を主とするため、水はけが悪く、調査は難航した。

1号墳では調査が済んだ段階で重機により東西に立

ち割り、墳丘部の確認面下層を深さ2m程度観察したところ、以下の通りであった(第21図)。

- 1 鈍い黄褐色土層(粒質土) 遺構構築面。
 - 2 暗褐色土層
 - 3 褐色砂質土層
 - 4 褐色砂層 5層上に部分的に存在し、湧水あり。
 - 5 褐色砂層 湧水あり。
- いずれの層も有機物、遺物出土はなかった。

第3節 遺構

発見された遺構には円墳5、古墳時代中期(5世紀後半)の堅穴住居4、祭祀坑、平安時代末の堅穴2、溝、縄文中期の袋状土坑、集石炉がある。

出土遺物には縄文土器、弥生後期土器、古墳時代土師器・須恵器、平安時代土師器、石製模造品(白玉、勾玉、円板形、剣形)・朱製品、土製人形、手捏土器、鉄製品などがある。

(1) 堅穴住居

平安末の堅穴住居2軒、古墳中期の堅穴住居4軒の計6軒を検出した。平安末の2軒(1・2号堅穴)は1・5号墳間にあり、古墳中期の堅穴は2号墳墳丘内に存在する。

1号堅穴(第1図、図版5)

調査区北西寄り、1号墳北側に位置する。南北4.5m、東西3.55mの隅丸長方形で、主軸方向はN-25°-E。壁高は北側で10cm、南・東壁はごくわずかにくぼむ程度であった。竈は北東隅に存在するコーナー竈で、袖石の礎、支脚石は遺存しない。規模は奥行き0.95m、幅1mである。竈周辺には炭化物が分布し、焼土が広がる。また東壁寄り、中央付近には床面に炭化材や炭化物が分布することから、火災住居であったと思われるが、床面には被熱痕が顕著ではない。また硬化面も確認できなかった。なお竈内の焼土は底面より浮上し、床面に薄い間層をはさんで炭化物層があり、2~3cmの間層をはさんで焼土が再堆積している。周溝は竈付近を除きほぼ全周する。遺物は竈付近を中心に、床面直上付近で細かな土師器片等が出土している。床面には北西隅と南西隅に浅い掘り方状の落ち込みがある。

2号堅穴(第1・2図、図版5・6)

調査区北西寄りのR3・4グリッド、1号墳北側に位置する。4.2×4mの隅丸方形で、床面までの深さは15~20cm。主軸方向はN-17°-E。南東隅にコーナー竈をもつ。覆土中央には1号溝が重複する。また北壁

と西壁は不整大形土坑状の浅いピット群と重複する。周溝は南西隅と北側のピットとの重複部分を除いて断続的に存在する。竈は長さ30cm程度の礎を右袖に4個、左袖に2個立て並べたもので、犬爪石、支脚石、左袖の一部の礎は遺存していないことから抜き取られたと考えられる。規模は長さ80cm、幅90cm程度で、運道は伸びていない。竈周辺には炭化物が広がり、また西壁際の中央から北寄りには焼土ブロックを多く含んだ土層が三角堆積している。また床面上にもわずかな炭化材、焼土小ブロックが分布することから、本堅穴は火災住居の可能性が高い。遺物は南東隅の竈付近を中心に、床面付近から出土し、とくに竈北側には完形に近い遺物が分布している。

3号堅穴(第2・3図、図版6)

2号墳墳丘内、17グリッド内に位置する。5.7×5.5mの隅丸方形で、西隅が2号墳周溝とみられる段差により欠失し、南隅が調査区外にかかっている。主軸方向はN-33°-W。周溝は30~90cmと幅広く、深さ約10cmである。北西隅に礎が分布しているが、これは2号墳に伴う葺石状の配石で、配石が遺存することから堅穴のほうが先行し、2号墳が新しい。床面、竈付近には直径0.8~1.2mの円形土坑が6~7基存在し、いくつかは土坑どうしが重複するように存在する。そのうち床面中央の2基はやや深く、土坑蓋の可能性が高い。柱穴にふさわしい深めのピットは6本あるが、うち1~4の本が柱穴であろう。かはない。遺物の出土は少ないが、北西側の壁寄り、周溝中を中心にややまとまって分布する。

4号堅穴(第3・4図、図版6)

JK8グリッド内、2号墳の墳丘内に所在し、4~6号堅穴が重複する。東側が5号堅穴と重複するため東西長は明確ではないが南北4.6mで、東西は2.3m遺存する。主軸方向はN-23°-W。隅丸方形で、壁高は10cmと浅い。西壁中央付近にわずかに周溝状の落ち込みがあるほか、4号堅穴北壁延長線上の5号堅穴床面に周溝が存在することから、本来周溝は存在したと考えておきたい。とくに北東の周溝には東壁へ続く周溝の一部があることから、4号堅穴東壁に伴う周溝が6号溝の周溝が重複すると考えると、東西幅は4mと考えられる。か不明。柱穴も不明だが、南西隅のピットと5号堅穴内のピットが4本柱穴のうちの南側2本の可能性が高い。遺物は床面より10cm程度浮いた面から比較的多くの土師器片などが出土し、いくつかの礎もみられる。5号堅穴西壁周溝を境に遺物の出土状況が異なることから、4号堅穴は5号堅穴に切られると

判断した。

5号竪穴（第3・4図、図版6）

2号墳墳丘に存在し、4～6号竪穴が重複する。4号竪穴が西側に、6号竪穴が東側に重複し、その間に挟まれてL字状に遺存する。竪穴規模は6号竪穴との重複によりわかりにくい、東西4.7m、南北5.8m以上。主軸方向はN-19°-W。出土遺物は少ない。床面より12cm程度浮いて炭化材や焼土が平らに遺存する面が部分的に存在することから、4号竪穴覆土が埋没したか、埋め戻した後に5号竪穴の床面が構築されたとみられ、火災住居と考えられる。したがって5号竪穴として調査した部分は5号竪穴掘り方、あるいは4号竪穴覆土の可能性がある。柱穴は不明で、6号竪穴にかけていくつかのピットが存在するが、確定できない。周溝は6号竪穴と重複する部分を除き存在することから、全周するとみられる。西側では30～60cm、北側は20cmと狭く浅い。北壁近くは3条の溝があるが、6号竪穴にも存在し、耕作痕とみられる。

6号竪穴（第3・4図、図版6）

2号墳墳丘面に存在し、5号竪穴と重複する。調査区外に東・南壁がかり、竪穴の全体像は調査できなかったが、東西5m以上、南北6.3m以上の大形竪穴である。主軸方向はN-22°-W。周溝は北・西壁側がL字状に存在し、幅50～60cmと幅広である。柱穴らしきピット群が北西側に存在し、4本以上の柱穴配置と考えられる。東側には調査区外にかかるように小竪穴状の落ち込みがあり、いくつかのピットが内部に存在する。竪穴内の何らかの施設と考えられるが、重複の可能性もある。跡は不明。

(2) 古墳および祭祀坑

高塚系円墳3基（2・3・5号墳）、低墳丘系円墳2基（1・4号墳）が存在する。高塚系のうち2基（2・3号墳）は高塚の墳丘が一部現存し、1基（5号墳）は古絵図に線が描かれているが、現状では残存していない。高塚系円墳の直径は20～30mに及ぶ大形で周溝を伴い、群集墳を構成する。低墳丘系円墳は直径15m以下の小形で、高塚系の隙間を埋めるようにして存在し、周溝は明瞭ではなく、土坑状の落ち込みが多数墳丘を取り囲むようにして存在する。主体部を確認できた例は2号墳のみである。

1号墳（第19・21図、図版4・5）

調査区中央西寄り、N4・5、O4・5付近に位置する。周囲に多数の土坑状の掘り方が分布し、円形に掘り残したように12.5m×12mの円墳部を形成する。現状では墳丘の盛り土が遺存せず、本来盛り土の量が少ない、

高さの低い低墳丘系だったと考えられる。墳形は主体部南端で形が潰れ、やや横長楕円形のようになっていて、東西長16m、南北12mを測る。円墳中央には地山面の黄褐色土面に南北の溝状掘り方があり、主体部（埋葬施設）と考えられる。主体部は6.5×1.5m、深さ18cmの溝状を呈した土掘り土坑で、主軸方向はN-24°-Eである。当初、周囲に分布する溝のひとつではないかと考えたが、墳丘を東西に2分する位置にあることから主体部と認識した。主体部南端には直角に湾曲した排水溝と考えられる溝が尾のように東方向に2m延びている。主体部内には石を用いていないことから木棺直葬と推測できる。副葬品はなく、一部土壌の水洗を行ったが、微小遺物は皆無であった。円墳裾周りは整った円ではなく、土坑状の掘り方が虫食い状に述べていて、南から東側にかけて登き石の一種と思われる人頭大の角礫が巡る。礫は土坑状の覆土内に集石のような状態でまとまって存在するもの（23号土坑）、列状に運るものがあり、東側に目立ち、西側・北側には非常に少ない。周囲の土坑状の落ち込みは3号周溝墓のように一定の幅をもって存在する民溝とは異なり、土坑状の掘り方が連続した構造を呈し、その範囲は明確ではないが、南北側で10m幅、東側で8m幅が周溝に相当する範囲で、西側については調査区外に延びている。

1号墳の時期は、1号墳南出上の土師器類および1・2号墳中間12の須恵器片から5世紀後半と推定できるが、9・10の6～7世紀代の須恵器片も含まれていることから判断は難しい。

2号墳（さんごうじ塚古墳）（第20・22図、図版4・6・7）

明治年間に産鏡が出土し、東京国立博物館に収蔵品があることから、本来は横穴式石室をもつ古墳だったと考えられるが、『石和可誌』にもあるように戦後、石室は解体されて多少の出土品があったようである。野沢昌康コレクション中にも土師器杯、須恵器ハソウ片がある。いづれにしても馬具を伴い、解体するような巨岩を伴う石室があったとすれば、古墳そのものは7世紀初頭の横穴式石室をもつ高塚系円墳だったと考えられる。古除図Cには「山宮守塚」とあり、「さんごうじ」が「さんごうじ」に転訛したとみられるが、条里地割を残す塚の区画の間に古墳を示す地割が描かれ、周囲を削土されて縮小された過程が図に残っている。現状では南北13m、東西9mの楕円形で低く平らになった円形の範囲が古墳の範囲として存在し、現在ではパチンコ店舗の脇に古墳の範囲が植栽された状態で残る。北西側1/4の範囲を調査した結果、やや

直線的な周溝状の落ち込みが検出され、推定直径26m以上の円墳と考えられるが、5世紀後半の祭祀遺物を伴う祭祀坑が検出されるなど、5世紀代の遺構とそれを埋める7世紀代の2時期の遺構の重複として捉えることができる。

北西部には、周溝を掘り残した4×3mの突出部(造り出し)があり、その周洲には二方を取り囲むように祭祀遺物の集積が認められた。その出土状況は東側がブロック状にまとまり、北側は量的に少ないが帯状のブロック状をなし、西側は希薄となって祭祀坑の膨大なブロックへとつながっている。突出部は平坦で、5本程度的小ピットが存在するが、突出部に伴うものかどうかは不明である。2号墳の墳丘と突出部にはわずかに段差があり、突出部が祭祀行為を行うための舞台のように区画され、その周辺に祭祀遺物が廃棄されたような状態で出土している。突出部西側の祭祀坑は内径約3mの方形の壑穴状を呈し、突出部側から壑穴内に落ち込むように多量の高坏、小形丸底蓋、手捏土器を主とした5世紀後半の土師器類の膨大な量の遺物集積が見られた。突出部周囲および祭祀坑の覆土を篩で水洗したところ、白土を主とする多量の石製模造品が出土し、その総数は白玉3372、ガラス小玉2、円板形30、銅形14、勾玉形7、白玉木成晶12を数える。また特殊品として掘り方中央の床面直上から土製人形1点が出土した。そのほか墳丘内部(下層)では5世紀後半の壑穴4軒(うち3軒は1か所で重複)が検出されている。そのうち3号壑穴は北西隅が2号墳周溝により欠けていて、壑穴形成のち周溝が構築されたことがわかる。祭祀坑は上層に黄色土が厚く堆積し、人為的に埋め戻された状況を呈している。その埋め上面に7世紀代の湖西窯(静岡県)産須恵器壺口線部等が出土していることから、さんごうじ塚古墳構築段階に周溝が埋め土されている。

以上の状況を整理すると、次のようになる。

①壑穴住居の構築・重複(5世紀後半)、突出部・祭祀坑構築(5世紀後半～末)

②祭祀遺物堆積・廃棄(5世紀後半～末)

③堀め戻し、さんごうじ塚古墳構築(7世紀初頭)

①の突出部・祭祀坑構築が古墳造営と関係ある場合、さんごうじ塚古墳に先行する突出部をもつ5世紀後半の古墳が存在し、その後7世紀に全く同じ場所に古墳が再び造営されたことになる(想定1)。時期の異なる古墳が重複することは極めて異例であり、また円墳の周溝中で多量の祭祀遺物が出土する事例は、祭祀遺物の出土状況としては一般的でないことから、突出部、

周溝が果たして古墳に關係するかどうか、検討を要する。問題は周溝とした部分の続きが南側の三角形の調査区に認められないこと、円墳の周溝にしては直線的で、円弧の一部と認識することは難しく、1号溝を含めて前方後円墳と推測する考え方もあり得るが、古墳と突出部は切り離して考えるべきであろう。

突出部・周溝構築が古墳と無関係とするならば、集落域の一面にまるで大蔵経寺山に対峙するかのようになり祭祀を執行する場として突出部を設けたことになり、後に偶然円墳が構築された(想定2)。この想定によれば、現状で残る円墳の裾周り、周溝をどのように理解すべきだろうか。3号墳のような高塚系古墳であれば、底溝があるのが普通だが、2号墳では明確な周溝は確認できなかった。南側の1号溝を含めて集落を囲う溝と判断できるかどうか、また、さんごうじ塚古墳の墳形をどの範囲と理解すべきかが課題といえる。

3号墳(遺祖神塚古墳)(第23図)

調査区東側、P-S10・11グリッド付近に位置する。現状で道祖神を祀る塚があり、その西側を調査した。調査の結果、幅5.5～6mの円弧を描く周溝を検出し、推定直径26mの円墳で、周溝を含むと直径36m程度と判明した。周溝の断面形は鍋底状で、底面は平らである。周溝内には他の周溝溝のような土坑状の掘り方はないが、西南側のO10・11グリッドでは10号土坑が周溝に沿って存在し、U11グリッドでは馬の塚と考えられる22号土坑が存在する。22号土坑に隣り合う20号土坑については、縄文時代の貯蔵穴とみられる。周溝内からは土師器、須恵器片がやや多く出土しているが、いずれも小破片で復原個体はない。分布のし方はRS10グリッド付近に濃く、その他では薄い。西側には4号墳があるが、3号墳の周溝とはぎりぎりのところで接し、切り合い関係にはない。周溝内側の立ち上りには礫が数個分布するが、1・4号墳のような崖き石状のあり方は異なり、書き石はないと思われる。墳丘側には他の墳基河縁に土坑状の掘り方が存在している。

4号墳(第19図、図版4)

1号墳と3号墳にはさまれた直径10mほどの不整形を呈した円墳。墳丘の盛り土はなく、1号墳と同じく低墳丘墓ではなかったかと考えられる。墳丘周囲には南側を主に東側にも1号墳同様の礫が廻り、葎石状の石と考えられる。墳丘周囲は土坑状の掘り方が連続し、周溝は存在しないが、南側では土坑状の掘り方がやや深く連続し、溝状を呈している。主体部は存在しない。墳丘部は東西9.5m、南北10mで、3号墳により切ら

れているようにも見えるが、葺石状の礫が4号墳東に遺存すること、3号墳周溝の立ち上がりがP10グリッド内で確認できることから切り合いはないと考えておく。時間的には定かではないが、後出する3号墳が1・4号墳を意識して構築したとみられ、古墳群としての血縁的なまとまり、集団としての同族性がうかがえる。1号墳に類似した構造を呈することから、1号墳に後続する時期と考えるべき。

5号墳（蛇塚古墳）（第24・25図、図版4・5）

調査区北側、U-X6-9グリッド付近に存在する円墳。東西方向の用水路に分断され、さらに調査当初、調査区の一部に民家が存在したため、用水路の南側を最初に調査し、民家の取り壊しを待って用水路から北側を調査した。検出された周溝によれば、墳丘は東西直径24mの円墳で、北側が調査区外にあたるため、南北直径は20m以上である。周溝は南東～北西で幅1.5～3.5mの溝底面が平たい周溝痕跡を確認している。周溝は南側では土坑状落ち込みが密集し不鮮明となるが、西側では幅1m未満の周溝痕跡が遺存する。したがって墳丘形は南側を除き比較的整った円弧（円周）を描いている。なお、南東周溝がU10-V10-11グリッドで2重になっている。おそらく外周と内周側の法面下の周溝底面がより深く溝状になっているため、2重構造を呈していると考えられ、2本の周溝間が同じ1本の周溝と考えられる。また西側には28号溝としたけりなりの溝があり、同様に周溝の外周側を区画する周溝内の2重の掘り方を示す痕跡と考えられる。

古絵図Cによれば「蛇ツカ」と記した方形区画を描いている。調査前には民家脇にフェンスで囲った小さな区画があって、古墳に関する区画かとも思われたが、調査では塚の封土を完全に失った状態が明らかとなり、石室に関わる遺構の痕跡を見出すことができなかった。ただV7グリッドに小礫が集中的に分布する部分があり、現場では自然露、あるいは建物等の基礎に関わるものと判断し、重視しなかったが、ちょうど石室に相当する場所に存在することから、石室基底部あるいは内部の礎床に関わる礎坪の可能性が。遺物は、南側周溝中で須恵器壺のまとまりが3箇所存在した。本墳周溝に伴う遺物で、周溝中に副葬品の壺が意図的に配置された墓前祭祀に関わる遺物と考えられる。壺の年代観から、円墳の時期は7世紀代と推定される。

祭祀坑（第12～18・20・22図、図版6～9）

2号墳突出部西側、溝溝とみられる内側に1辺3mの方形竅状の掘り方が検出され、多量の祭祀遺物が

出土した。5世紀後半の高坏、小形丸底甕、手捏土器が多量に出土し、さらに覆土を篩で水洗したところ、白玉を主とした多量の石製模造品が出土した。さらに掘り方中央、床面直上から土製人形1点が出土した。祭祀坑上層は黄色土で整地され、その上層からは7世紀後半の須恵器の壺片が出土し、2号墳構築時に整地されたらしい。なお2号墳南側の1号溝からも土製人形数点が出土している。

(3) 土坑・ピット

土坑は22基あり、3号壑穴付近から2号墳南にかけて円形土坑が分布する。また1～5号墳周辺には多数の土坑状遺構があり、それらのうち、遺物を伴うものなどに関しては土坑Noをつけて調査したが、全体ではかなりの数が存在するため、大多数は土坑とはせずに完掘を行っている。1・5号墳間ではそれらの中に馬歯を伴うもの、自然遺物としての木片を含むものがあった。ピットは2号墳突出部周辺、5号墳西側などに存在し、調査時には24号ピットまで設定した。時期不明ながら柱または杭を残すピットがいくつか見られたが、ブドウ壘に関わるピットも多く、現代のピットとの区別が難しい状況にあった。なお13号土坑は欠番とする。

1号土坑（第4図、図版9）

調査区南端、2号墳南側の1号溝のへりに位置し、2号土坑と隣り合う。1.3×1.2m、深さ22cmの略円形土坑で、断面形は桶状。底は平らで、黄色土中に礫層が露出する。覆土は黒褐色砂質土、鈍い黄褐色砂質土で、遺物はない。

2号土坑（第4図、図版9）

調査区南端、1号土坑の東側にあり、直径1.2×1.1mの略円形土坑で、深さ34cm。覆土は黒褐色砂質土で、上層に約10～15cmの礫を数個含む。断面形は桶状で、底面に礫が露出する。遺物はない。

3号土坑（第4図、図版9）

2号墳の南側に位置する直径1.3m、深さ20cmの円形土坑で、断面は瓦状。覆土は暗褐色砂質土、黒褐色砂質土で、数個の礫、土器片のほか中世の青磁碗片を含む。

4号土坑（第4図、図版9）

3号土坑の隣にあり、直径1.3m、深さ33cmの円形土坑で、断面はボール状。形態的には1～3号土坑に類似する。覆土は黒褐色砂質土で、土坑中央には20～40cm大の礫4個が底から約15cm浮上してまとまり、礫直下、礫に同一個体の土器壺大形破片が遺存した。人骨等は出土していないが、墓坑的なあり方を示す。

5号土坑（第5図）

P5グリッドに位置する。1号墳北側の落ち込みのひとつ。2.3×1.4mの不整形円形で、深さ12cm。覆土は黒褐色土を主とする。

6号土坑（第5図）

1号墳北側の落ち込みで、Q5グリッドに位置する。1.4×1.2mの不整形で、深さ18cm。覆土は黒褐色土。

7号土坑（第5図）

1号墳と3号墳の間、QR7グリッド上層に位置する不整形の土坑で、1.84×1.7m、深さ24cmをはかり、断面皿状を呈す。

8号土坑（第5図、図版10）

2号墳の突出部前方、1・2号墳間に位置し、2号墳突出部の向きと同じ方向に主軸を向ける。1.8×0.64m、深さ0.3mの隅丸長方形の土坑で、底面には平たい面を持つ角礫を敷いている。主軸方向はN-30°-W。長方形土坑の南端に段状の掘り方が接続した構造で、壁は全体によく被熱、赤変し、礫面上層には炭化物層が長方形の範囲全体に認められた。焼骨は出土していないものの土坑墓の様相を呈し、礫床墓の一種と考えておきたい。作出する遺物は皆無で時期は不明だが、位置的に2号墳および突出部と関連性があり、時期的にも古墳時代の所産と推測しておく。

9号土坑（第5図）

P11グリッド内、3号墳周溝内側の壁立ち上がりに位置する。1.2×1m、深さ18cmの不整形円で、断面は皿状である。

10号土坑（第5図）

3号墳周溝中、O10・11グリッドに位置する。2.15×1.4m、深さ0.62mの楕円形土坑で、断面箱状。周溝西壁下端ラインに沿うように主軸方向を向けて、北側がやや幅広となっている。土師器高坏脚部が出土したが、調査中に紛失した。周溝底面から掘り込んでいことから3号墳より新しく、3号墳と同時期か近い時期の構築であろう。土坑形態から墓坑と考えられ、3号墳に關係した土坑墓ではないだろうか。

11号土坑（第5図）

T7グリッド、5号墳南に位置する。1.7×1.16m、深さ34cmの楕円形土坑で、断面は鍋底状。覆土上層から遺構確認面上層で須恵器片が分布する。

12号土坑（第5図）

1号墳と3号墳の間、Q7グリッドに位置する不整形の土坑。2.5×2.5m、深さ42cmで断面は皿状。覆土は黒褐色粘土・粘質土で、周辺に多数分布する土坑状の落ち込みとおおむね同じである。

14号土坑（第6図）

1号墳北側のQR6グリッドに位置する。1号墳周囲の土坑状落ち込みのひとつで、複数の落ち込みが重複し、不整形となっている。3.2×2.7m、深さ55cmで、覆土下層には礫が数個分布するほか、自然遺体としての木片、脆くなった骨片が存在する。骨は分析していないが、墓坑的な性格も考えられる。

15号土坑（第6図）

2号墳南、G8グリッドに位置する土坑で、現代の方形の掘り方に接して存在する。現状で1.35×0.7mの不整形円で、断面形は皿状。

16号土坑（第6図、図版10）

K6グリッド、1号墳と2号墳の間に位置する。径0.6～1mの土坑群の重複で、土師器がまとまって分布した部分を土坑とした。全体では1.2m、幅75cmの不整形円形である。土坑断面はボール状。覆土中には底から10cm程度浮いて完形に近い土師器丸底甕などが出土している。

17号土坑（第6図）

R11グリッド内、3号墳墳丘内に位置する。南側は調査区外にかかり、全形が調査できなかったが、現状で1.8×1.1m、深さ34cmの長楕円形で、断面形はボール状。覆土上層より土師器片が出土している。形および主軸方向は10号土坑に類似し、3号墳に關係した土坑墓の可能性はある。

18号土坑（第6図、図版10）

S10グリッド内、3号墳北西の周溝の外側に接するように存在する。1.4×1.3m、深さ35cmの円形土坑で、断面形はボール状。覆土には15cm程度浮上して20～30cm大の礫が7個存在し、土坑中央、底面に近い位置から土器類が出土した。

19号土坑（第6図）

UV11グリッド付近、3号墳周溝北側、5号墳周溝との間にあるやや大形の落ち込み。3.4×2.4m、深さ55cmの不整形で、覆土は黒褐色粘土・粘質土を主とする。

20号土坑（第7図、図版10）

U12グリッド内、3号墳、北側周溝内に位置する袋状土坑で、22号土坑の南側に位置する。0.85×0.6mの楕円形で、深さは0.64m。内部は袋状になっていて、底は平らに近い。縄文中期の遺構で、堅穴住居内の屋内貯蔵穴の可能性が高く、本来は堅穴住居の床面に伴うと考えられるが、床面やピットは周溝構築により削平されたと考えられ、住居の痕跡は皆無である。本遺跡では、縄文期の遺構としては他に21号土坑の屋外集

石がある。

21号土坑 (第7図、図版10・11)

調査の最終段階で検出された遺構で、3号壑穴南側のI18グリッド内に位置する。確認面では1.5×1.14mの楕円形土坑で、上層には円礫による集石をもち、下層には礫敷き面が2面存在した。最下層の石敷き面は地山直上に置かれ、7割程度の礫で作られたやや小形で、その上に約10cmに礫11個で作られた礫敷き面が存在した。礫間の覆上には炭化物が多く含まれていて黒色を呈する。遺物は特になく時期は不明ではあるが、集石の状態から縄文時代の屋外炉(集石炉)で、縄文前～中期の時期と考えられる。遺構外に中期中葉、井戸尻式期の遺物があることから、その時期か。

22号土坑 (第7図、図版10)

3号壑馬溝の北側、U11グリッドで検出。周溝の外側立ち上がりに近い位置に存在し、周溝の向きに沿って構築されたようである。2.5×1mの不整形円形土坑で、深さ8cmと浅い。周溝底面に構築され、馬首が掘って列状に存在することから、東置位で横に寝かせた状態で埋葬した馬の墓と考えられる。馬首は周溝底面より5cm程度浮いていることから、埋葬前が先行するのではなく、周溝構築後、周溝がやや埋まりかけた状況での構築と推定される。馬具等の伴出遺物といえるものはなく、古墳との関連性も不明ではあるが、時間的には3号墳の構築時期に近いと考えられる。

23号土坑 (第7図)

1号墳南、M5・6に位置する。墳丘周りにある礫を伴う落ち込みのひとつ。3.1×2mの不整形円形で、断面形はボール状。覆土上層に20～80cmの礫が多く分布し、土坑に対する配石状を呈している。墳丘周りの葺石的な礫かと思われるが、土坑との関連性がありそうである。覆土は黒褐色土と黄褐色土の互層をなし、馬蹄の土坑状落ち込みと同じ状況を示し、礫層面下より上層部片がやや多く出土した。

(4) 溝

30本確認したが、うち22号溝は1号墳主体部に變更し欠番とした。条里地割的な直線溝が上層に多く、大蔵経寺所有の古絵図との対比が可能であった。また2本平行した道間溝をみつけ確認された。条里地割的な溝は幾度かの変遷を示し、また作り替えによる重複状態が観察されるものもある。

1号溝 (第8図)

調査区南端、F8～10グリッドに位置し、1・2号土坑と重複する。調査区壁に沿って南側に落ち込む溝で、東西方向の溝であるが、南側の立ち上がりが未確

認で調査区外に想定されるため、はたして溝なのか、馬溝状の落ち込みなのか定かではない。C9・10グリッド付近から徐々に傾斜が付いていて、確認した範囲では深さ約30cmである。遺物には中近世遺物のほか、下層から数点の土製人形片(第29図)が出土したことから古墳時代の遺構の可能性があり、2号墳突出部周辺を中心として周囲の溝が何らかの祭祀の場として一体的に機能した可能性がある。2号墳北西に確認された直線的な掘り方と直交する位置関係にあることから、想像を逞くすれば居館の堀の可能性もあるが、非常に浅いことから可能性は低い。C8グリッドの状況も見方によれば2号墳北側の突出部に類似した掘り出しのようにも見える。ただ隣接する逆三角形の調査区内では1号溝との連続性を示すような溝はなく、E8グリッドの落ち込みにつながるようにも想定でき、分断された調査区の状況からは全体像を把握したい。

2号溝 (第8図)

調査区南、2号墳南のE19グリッドに位置する南北方向に直線的に延びる溝。長さ6m、幅40cm、深さ15cm、主軸方向N14°Eで、さらに北へ延びるが、北側には水路を挟んで2号墳があることから、水路までと考えられる。西側の3号溝と約4mの間隔で平行し、遺の傾斜状を呈す。近世の古絵図Cによれば、山宮寺塚(さんごうじ塚古墳)の南側には水路の位置に東西の道があり、南北の道と交差する三叉路として描かれている。この道の痕跡と考えてよいだろう。

3号溝 (第8図)

2号墳南、F8・G9グリッドに位置する南北の溝で、長さ5m、幅20cm、深さ13cm。主軸方向N13°Eで、2号溝と平行し、遺の傾斜状の遺構である。

4号溝 (第9図)

調査区南、E7・8グリッドに位置する東西方向の溝で、おおむね直線的だが、わずかに弓なりに曲がる。西端は調査区外にかかり、東端は南北の溝状の落ち込みと交差する。長さ4m、幅70cm、深さ35cmで西側がやや幅広となる。2・3号溝と直交することから関連性がありそうだが、古絵図では確認できない。

5号溝 (第9図)

調査区南側、F7グリッドに位置する南北の直線的な溝で、北端はG7グリッド付近の溝状落ち込みに接続する。長さ3.5m、幅30cm、深さ16cmで、主軸方向はN5°E。東側に6号溝が存在する。2・30号溝に近い主軸方向の溝である。

6号溝 (第9図)

F7・8グリッドに位置する弓なりに曲がる南北方向

の溝で、長さ4m、幅20cm、深さ5cm。5号溝の東側に位置する。

7号溝 (第10・11図)

5号墳西側、U4・5グリッド上層に位置する長さ5.4m、幅50cm、深さ10cmのはほぼ直線的な溝。現在の地割に平行し、比較的新しい溝ではないか。

8号溝 (第10・11図)

調査区北側、5号墳北西にかかるようにしてほぼ直線的のびる溝で、長さ14m、幅30～80cm、深さ20cmをはかる。北西端では10号溝に切られている。南側の13号溝と幅11～12mの距離を置いて平行し、さらに南側では19号溝とも平行することから、14・17号溝と同時代の地割と考えられ、8号溝東端が14号溝に連続していくようにも見えることから、L字状に直角に折れた溝であった可能性がある。

9号溝 (第10・11図)

調査区北西、U3・V4グリッド上層に位置する長さ7.5m、幅30～50cm、深さ10cmの溝で、南端が膨らんでいる。主軸方向はN-37°E。8・13号溝におおむね直交することから、同時期の区画溝と思われる。

10号溝 (第10・11図)

調査区北西側、V2・3、W3グリッドに位置する東西方向の直線的な溝。調査区内では長さ7.5m、幅80～100cm、深さ15cmをはかり、両端は調査区外に延びている。他の溝にくらべ幅広で、深さがあり、地山面への掘り込みがしっかりしている。8・11号溝が接続し、11号溝は10号溝で差切れている。

11号溝 (第10図)

調査区北西側、VW2グリッドに位置する10号溝に取り付け短い溝で、長さ1.3mを確認したが、さらに調査区外へ延びている。幅30～40cmで、南端は10号溝で止まっている。

12号溝 (第11図)

調査区北側、T3～7グリッド上層に位置する東西の直線溝で、T6グリッドの試掘坑で分断されているが、長さ21m、幅20～40cmをはかる。掘り上がり状態は13号溝に切れ、14号溝を切るように図示されているが、13・14号溝より新しい段階の区画溝で、古絵図Cには描かれていないことから絵図よりも新しい段階と考えられる。T7グリッドでは16号溝と平行し、畦道状の遺構を示すとも考えられる。

13号溝 (第11図)

調査区北西側、U3～T5・S5グリッドに位置する東西溝で、東端がL字状に南東へ曲がる。東西12m、南北3m、幅30～50cm、深さ12cmをはかる。17・21

号溝に直交する溝で、古絵図Cの蛇塚周辺の区画溝とは角度が異なることから、古絵図以前の一段階古い条里地割を示し、17・21号溝も古い段階の条里地割を残す区画と考えられる。

14号溝 (第11図)

R～T5、TU6グリッドの上層に位置する南北方向の溝。17号溝の延長線上、北側に直線的に延びる溝で、長さ15.5m、幅約40～70cm。13号溝の東側と一部平行しているが、13号溝はL字に曲った21号溝の延長線上に当たり、道の側溝と考えられ、古絵図Cの蛇塚に繋がる南北の地境に一致すると思われる。

15号溝 (第11図)

調査区北西側、T3～S5グリッドに位置する、ほぼ直線的な溝。長さ12.3m、幅0.7～1m、深さ10cmのやや幅広の溝で、東端は2号竪穴を切る。平安末以降、中世頃の溝かとも考えられる。

16号溝 (第11図)

5号墳南側、T7グリッドに位置する。12号溝の東端と平行した溝で、長さ2.5m、幅20～30cm、深さ10cm。12号溝との間隔は60～70cmである。比較的新しい時期の畦道側溝か。

17号溝 (第11図)

調査区中央、西側、M4～R5グリッド上層に存在する南北溝で、1号墳に重複する。長さ23m、幅約30～70cm、深さ12cmのはほぼ直線的な溝で、南側には26・27号溝が分岐する。また北側には14号溝があり、14号溝、26号溝を合わせると、全長36mの直線的な長い溝となる。溝の主軸方向はN-16°E。西側に位置する21号溝と幅2mの距離を置いて平行する道の側溝とみられ、14号溝と同様に古絵図Cに描かれた地境の一部と一致すると考えられる。

18号溝 (第11図)

1号墳北側、P・U5グリッド上層に位置する南北方向の直線的な溝。長さ8m、幅30～40cm。近世の地割とは異なる方向を持つ溝のため、新しい時期と考えられる。

19号溝 (第11図)

調査区中央西側、Q3・4グリッド上層に位置する東西溝で、断続的に9.5mを確認した。幅20～30cm。Q1グリッドで21号溝北端部と直角に接する。古絵図Cの地境の区画溝とみられるが、絵図上で場所の特定は難しい。

20号溝

調査区中央西側、Q3グリッド上層に位置する溝状遺構で、長さ3m、幅40～50cm。北端は19号溝と接

するが、他の地境溝、区画溝と考えられる溝とは方向角が異なる。

21号溝 (第11図)

調査区中央西側、O3～Q4グリッド上層に位置する南北の直線溝。長さ15m、幅40～50cmで、17号溝の西側に23mほど間隔をあけて平行する。主軸方向はN-19°-E。17号溝とセットで道の側溝であったと考えられ、古絵図Cに描かれた地境の一部とみられる。

23号溝 (第9図)

1号墳東側、N7グリッド上層に位置し、長さ4.5m、幅30～50cm、深さ10cmをはかるカーブした溝。

24号溝 (第11図)

調査区中央のPQSグリッド、4号墳北側に位置する。長さ4.5mの緩やかに湾曲したような溝状遺構で、幅45cm、深さ10cmをはかる。上層地割の溝とは関連性が薄い。

25号溝 (第11図)

調査区中央、R8・S9グリッド上層、3号墳周溝西側に位置する。長さ13.5m、幅40cm、深さ10cmの直線的ではあるが一部途切れた溝である。主軸方向はN-50°-E。上層区画溝の方向とは異なり、関連性は定かではない。

26号溝 (第11図)

M4～O4グリッドに位置する南北溝で、1号墳主体部西側に存在する。17号溝から分岐するようにして存在する。長さ8m、幅40cm～1m、深さ18cm。

27号溝 (第11図)

N3～P4グリッド上層に位置し、17号溝から分岐した南北溝。長さ7.5m、幅30～40cmで、17号溝南側に3本に分かれているうちの1本。3度にわたる作り替え(掘り直し)の経緯を示している。

28号溝 (第11図)

調査区北西、V4～T5グリッドに位置する緩くカーブした溝で、長さ12m、幅80cm。5号墳の西側にあたり、円弧を描くようにカーブすることから、周溝外縁の立ち上がりに相当する溝と考えられ、5号墳の墳丘から6～6.5mの位置にあり、その間が周溝に相当する幅と思われる。

29号溝 (第9図)

調査区北側、5号墳内東側に位置する直線的な溝で、V9・W10グリッドに位置する。長さ5m、幅20～30cm、深さ10cmをはかる。

30号溝 (第9図)

調査区市、2号墳南のF8、G9グリッドに位置する。両端は調査区外にかかる長さ5m、幅20cmの直線的な

溝で、裾溝をはさんで東側の2号溝と平行し、4号溝とおおむね直交する。2・30号溝は遺側溝とみられ、古絵図Cの山崎地塚南の道に相当するとみられる。

第4節 遺物

(1) 塚穴住居

1号壜穴 (第26図)

1～3は土師器杯、4は土師器羽釜、5は土師器甕。

1～3の杯はいずれも甕底面からの出土で、11世紀前半段階であり、甲斐型杯と同質の胎土である。4は11世紀がわずかに甲斐型杯の玉縁の名残を留めている。4・5も甕近くからの出土である。4は直立気味の薄い器壁で、短く薄い鈔を口縁近くにもつ羽釜で、鈔部以下、外面にススが附着する。また胴部内面、ハケメ以下の器面は使用痕によるとみられる荒れが生じている。5の外面にも全体的に薄くススが附着する。

2号壜穴 (第27図)

1～16は土師器杯、17・18は土師器高台杯。19は甕内混入の須恵器蓋。3・4のみが完品で、2・7・10・12は大形破片である。1～17は胎土が甲斐型杯と同質なものを主とするが、14のみ砂質となっている。10は内外面に灰色で、焼成が悪く、2次焼成等を受けた可能性がある。15は口唇部に1か所、燈芯痕をもつ燈明具で、16も燈明皿として使用され、内面に燈芯痕がある。

3号壜穴 (第27図)

1～4は土師器高杯、5は手捏土器、6・7は甕、8は瓶、9は割れ口に磨きをもつ須恵器片。

5は上半を欠く手捏土器で、壜穴住居の南東隅から出土。7と8は胎土に長石・石英粒を多く含み、ざらついた器肌を呈し、色調も類似することから同一個体の瓶の可能性もある。9の須恵器器片は、色調が灰白色で、斜格子状叩きを部分的に残す長方形を呈した破片であり、破損した四角のうち長い2辺の割れ目が摩耗する。転用砥石であれば、表裏面も磨り抜いて使用しそうであるが、使用痕は断面に限られる。長方形に整形するために磨いたのではないかと考えられる。

4号壜穴 (第28図)

1は土師器杯、2は土師器壜、3～6は土師器高杯、7～9は土師器甕。4は坏部内外面に暗文状の放射状磨きをもつ高杯で、脚部を欠失するが、坏部はほぼ完存する。7は直立きみの段状1線をもつ甕で、呉系統のである。

5号壜穴 (第28図)

1は土師器杯、2・3は土師器高杯。2は脚部を欠

く高坏で、坏部は完存する。

6号竪穴（第28Ⅳ）

1は土師器坏、2は土師器高坏。

(2) 上坑・ピット

3号土坑（第28Ⅳ）

1は蓋弁文をもつ青磁碗。混入品であろう。

4号土坑（第28Ⅳ）

1は土師器坏、2は土師器甕。2は高さ33cmの甕だが、胴部中央でわずかに接点をもち、上下2片に分かれた破片である。

16号土坑（第30Ⅳ）

4は土師器高坏、6・7は土師器埴（壺）。6は胴部中央の接合帯で、上下の胎土・色調が著しく異なる。上半は赤味が強く、砂粒は細かい。下半は橙色で、砂粒は大きく、ざらついた肌触りとなる。7は完形品で口縁が直に立ち上がり、外面に黒塗をもつ。精選された坏系胎土であるが、これもよく見ると胴部下半の接合帯上下で胎土が違っている。上半は通常の褐色土であるが、下半は白色土と褐色土が精状に混合した胎土である。6・7は壺形を製作する際に一気に積み上げたのではなく、胴部の屈曲部で乾燥させた後、下半とは違う粘土を積み上げたことがわかる。

18号土坑（第29Ⅳ）

1は土師器壺I線部で、I口に小さい返りがある。

23号土坑（第29Ⅳ）

1・2は土師器高坏脚部。いずれも屈曲部をもつ階段タイプの脚である。

2号ピット（第29Ⅳ）

1は棒状上製品で、何らかの形代の一部とみられる。人形の腕の可能性もある。

(3) 溝

1号溝（第29Ⅳ）

1・2は手握上器。3は小形水滴。4～6は上製人形。

1・2はともに高坏状で、高坏または円形か。3は陶器水滴で、あまりに小さいことから実用品ではなく、ミニチュアであろう。底面を除き外面全体に灰釉を掛ける。1号溝2層からの出土である。4は棒状の胴体に短く開いた脚をつけた筒素な人形で、足裏は平たく、かろうじて自立する。文様はないが、股間に剥離痕があることから男根があった可能性があり、男性の人形と考えられる。5は長い頭のみの人形で、目、口は刺突で表現し、鼻は細長く積み出している。耳はない。6は下半身の人形片の可能性が高い土製品で、短く開いた脚は4と類似する。足裏はやはり平たく、自立するとみられる。1号溝だけで計3点の人形片があ

り、それぞれ別個体であることから、1号溝は人形祭祀が集中的に行われた場と考えられる。また1号溝が2号墳の南側にあたることから、2号墳北西周溝中の祭祀坑出土の人形とも関連性があるとみられ、2号墳周辺は土製模造品祭祀が行われた場であったと考えられる。縄文時代の土偶のように、最終的には壊された可能性がある。

4号溝（第29Ⅳ）

1は土師器坏。注目すべきは底部外面で、木葉痕が黒斑状に焼き付けられている（図版14）。つまり葉脈以外が黒く、主脈と側脈からなる葉脈が白く抜けて土器の色調のままとなっている。これは土器焼成の際、あるいは2次的な焼成の際に木の葉を敷物として火に掛けた結果生じたものと考えられる。土器整形時に付着した木葉痕とは全く別のものだが、土器の下に葉を敷くという行為には共通性がある。

14号溝（第29Ⅳ）

1は須恵器坏で、直立した返りが立ち上る。

21号溝（第29Ⅳ）

1は須恵器甕で、詳しい器種は不明。上半にはカキ目状の横位線をもち、下半はヘラ削りとする。灰白色の色調から湖西方面の産か。

27号溝（第29Ⅳ）

1は土師器高坏、2は須恵器ハソウ。2は胴部に横位の平行線内を斜位の沈線で充填し、下半に叩き目を残すもので、内面底部近くには、接合帯付近に多数の指頭痕を残している。表面にも指紋が多数認められる。

(4) 1号墳および周辺

1号墳南（第30Ⅳ）

1～8は土師器で、1・2は坏、3・4は高坏、5は壺、6・7は手捏土師。8は土鍾。9～12は須恵器で、9は坏蓋、10は坏、11は壺、12は瓶？。1は小形坏で、やや強い内湾が特徴的である。5は丸底壺かと思われる底部に焼成前ヘラ描き「十」がある。6は薄手の砲弾状を呈したミニチュアで、底径は1.3cmと小さい。7は祭祀坑の手握上器に多いタイプで、内面には左回りで放射状のナデを残す。胎土は甕系である。8は円筒状の土鍾で、途中を裁断したような形態を呈す。11はハソウかと思われる細頸の壺頸部。12は器種不明だが、提菴の類で、箱の付着状況から丸い方が上と思われる。頂部には円板で蓋をして塞いだ状況が内面からわかる。

1号墳東（第30Ⅳ）

1は土師器坏、2は須恵器壺頸部。1の坏は薄手で、内面が薄く黒変することから、黒色処理された土器か。

2はハソウなどの壺頸部で、色調が灰白色な点から葦西産須恵器かと思われる。

1号墳西(第30区)

1は土師器手捏土器。臼形で、内面は放射状ナデを残す。

1・2号墳中間(第30・31区)

1～3・5・8～11は土師器高坏、堯など、12は須恵器甕。4・6・7は16号土坑として区別する。1は砂粒を多く含んだ甕系胎土の坏。2は高坏。3～5はいずれも脚の短い高坏。8・9は手捏土器。8は折れの強い高坏で、坏系胎土を示す。9は臼形で、砂粒を多く含んだ甕系胎土である。8は内面をナデで滑らかにしているが、9は放射状の指ナデ痕を坏・脚内面に残す。また8の脚内面には赤色塗彩らしき色調が残る。10は球形甕。11は円筒形の胴部に把手をつけた甕。12は11縁直下に1条の降帯を付けた須恵器甕で、胴部外面の叩きは平行叩き、内面の当ては同心円で、弱い。陶色薬年というTK216(高蔵寺216号窯式)に相当し、5世紀前半～中頃に位置づけられる。薬内では古い須恵器である。

1号墳墳丘内(第31区)

1は、土師器高坏の坏部。

(5) 2号墳突出部

突出部東(第32区)

1～19は土師器で、1は坏、2～5は埴、6～20は高坏脚、21～29は手捏土器。6は小形の高坏脚部で、円孔を1箇所もつ。10の高坏脚部には内面に布目痕らしき圧痕がある。17の脚部裏面にも布目痕が残り、脚部製作が型作りで行われた可能性を示している。手捏土器には胎土に精選された坏系胎土、小粒子を多数含んだ粗い甕系の2者があるが、22は甕系である。

突出部中(第32区)

1は土師器坏。

突出部西(第33区)

1～4は土師器高坏。5は須恵器甕、6・7は須恵器甕。5はTK216に相当するとみられ、5世紀前半から中葉の時期である。6・7は上層出土の甕で灰白色を呈し、静岡県湖西窯の製品と考えられる。6は口縁部に棒状工具で2段の波状文を拵き、7は隆線間に2段の簡描波状文を施文する。

2号墳北(第33区)

1は土師器坏、2・6は手捏土器、3は鉢、4は土製紡錘車、5は須恵器坏。4は直径5cmで、側面に線刻による斜線文様を描く。5は7世紀初頭頃の須恵器坏で、さんごうじ塚占墳の年代を示唆する資料といえ

る。

2号墳西(第33区)

1は土師器甕、2～4は手捏土器。

2号墳周溝(第33区)

1は須恵器坏。

2号墳墳丘内(第33区)

1は土師器高坏の坏部か。

2号墳一括(第33区)

1は有段の高坏脚部、2～6は手捏土器。

(6) 祭祀坑(第34～58区)

1～14は土師器坏、15～395は土師器高坏、396～499は土師器小形埴・ハソウ、500～514は壺・ハソウ、515～818は手捏土器、819～822は大形壺、823・824は須恵器坏、825は須恵器ハソウ、826・827は須恵器甕、835は土製人形。

坏のうち1～6は口縁が直立する単純口縁、7～14は短く屈曲する折り返し口縁の坏で、5は甕系胎土を示す。

15はミニチュアの可能性のある小形高坏。高坏にも坏部に16のような折り返し口縁があるほか、ほとんどはハの字状に開く口縁だが、37・39は1段の屈曲部をもつ有段口縁となる。また特殊例として45は見込み部に立ち上がりをもつ。18は内面に線刻で「十」を記し、同様な線刻は377にも存在する。21は脚部に小さな未貫通孔を3ヶ所にもつ。46～395は高坏脚部で、46・65・264・266・267は未貫通孔を1箇所、47・48・58・63・64・160は貫通孔を1箇所もつ。また59・265は貫通孔を2箇所、66は未貫通孔を1箇所もつ。67は脚部裏面に布目痕、析痕をもち、140・143・231・318・323・359・367・370にも布目痕がある(図版14)。析痕は196にも存在するほか、355には何らかの種実圧痕がある。また361には虫らしき圧痕を持つ例。87・91・164・180・341の脚は甕系胎土の例。329には脚部内面に5本のへら描沈線文をもつ。207・255も胎土が異質となる。384～395は脚部が有段状になるタイプで、384には貫通孔を2箇所もつ。そのほか外面ないし内外面が赤彩されたとみられる脚部は多数存在するが、確実な赤彩といえるものは少なく、焼成により赤味を帯びた類が多い。

396～497は小形の埴(小形壺)で、396～397・485～491には胴部に孔を1箇所もつ、いわゆるハソウである。髣髴的には頸部が細く、大きく開く396のタイプ、頸部径がやや大きく、口縁部が直立気味で口径が大きい406のタイプ、その中間的なタイプがあるほか、464は11縁部が欠けていてはつきりしないが有段タイ

ブとみられる。胴部の上に若目するとやや潰れたタイプ、ソロバン玉に近いタイプのほか、球形に近いタイプがある。また432・433は極小タイプとなる。底部は小さな底径例を主とするが、やや径の大きなものがあるほか、わずかに上げ底状になるタイプがある。485～491を区別したのは、底部が丸底、あるいは丸底に近いため、ハソウに丸底が多いことがわかる。492～499も小形ではあるがやや大きい増で、口縁部が単純口縁タイプのほか、有段タイプがある(496～499)。また492・494は鬘系胎土である。500～514は球胴帯で、500は体部上半に孔をもつハソウ。口縁部には段状になる500のほか、直線的にハの字状に広がる単純口縁となる。丸底に近い小さな底部をもつタイプが多い。

515～818は手捏土器。それらは平底形(I類)、丸底形(II類)、台付形(III類)の3大別でき、さらに平底形は平(Ia類)、浅杯(器高低、Ib類)、長頸(Ic類)、短頸(Id類)、無頸(Ie類)に細分できる。丸底形は平(IIa類)、長頸(IIc類)がある。台付形には坏形(A類)、皿形(B類)、臼形(C類)があり、脚の状況からさらに低脚高台(1類)、中脚高台(2類)、高脚高台(3類)、中実高台(柱状高台、4類)の4種に分類でき、低脚高台坏(III A1類)、中実高台坏(III A4類)、低脚高台皿(III B1類)、中脚高台皿(III B2類)、高脚高台皿(III B3類)、中実高台皿(III B4類)、中脚高台臼(III C1類)、中実高台臼(III C4類)があり、全体では15細分される。

515～597は手捏土器のうち坏形タイプ(Ia類)で、口径と高さが同程度のもの。口縁部は凹凸があり、平らに載えていない。また内面は指ナデで花卉状に稜線を残すものが多い。これらのうち515～540は極小タイプ、542～564・569・570等は中形タイプとして、3種程度に大きさが区別できるかもしれない。また597は内外面を丁寧に整形、調整した小形坏で、手づくね土器としての坏形上製品とは区別できる。また底部付近に丸みを持ち、外面にナデ整形

を行う519・520・527・564のタイプのほか、底部が小さいタイプなど、いくつかの器形別細分が可能かと思われる。胎土には坏系と鬘系があるが、やや粗い鬘系を主としつつ、精選されたような坏系胎土が認められる。598～601も坏形だが、口径に対し器高が低い平たいIb類。

602～610は壺形土器(Ic類)で、増のミニチュア土器とみられる。球胴にやや長い口縁部をもち、坏形と異なり口縁部は平らに整形されている。611～619も壺形ではあるが、Ic類の立ち上がりが高く、指で摘んだように薄く尖り、口縁はでこぼこしている(I d類)。611～613の極小サイズ、614～617の中形、618・619の大形がある。

620～622は口縁の立ち上がりがなく、すぼまるIe類で、口縁はでこぼこしている。623～631も同じような器形だが、直立しないしは開き気味の坏形で、底部が円い特徴をもつIIa類。Ic類は平らではなく、でこぼこするのは坏形に共通した特徴といえる。631は内面をハケメ整形とし、595と共通した技法、器形となっている。

638・639はハソウ形、増形(IIc類)で、638には胴部に孔をもつ極小サイズである。633はIc類部上面(内面)に3～4本、胴部に4～5本のヘラ描き線文を2箇所ずつ精選された坏系胎土のミニチュア土器で、文様をもつものは珍しい。



図6 手捏土器の分類

634~818は台付形(Ⅲ類)で、脚部をもつ杯・皿・白形を呈している。634~714は坏部の口縁が直立し、坏部に較べて脚部が小さく、脚高高台ようになるⅢA1類、715~721は脚部が柱状高台になるⅢA4類、722~781は口縁部がハの字状に開き、脚部がやや大きいⅢB1類、782~814は有脚で括れが弱いⅢC1類、815~818は脚部が柱状で括れが弱いか、脚部がなく底部が厚いⅢC4類である。634~640は極小サイズで、脚は短く、上げ底状を呈するものが多い。柱状高台状を呈す716~721はいずれも極小~小サイズとなる。729と730は器形が類似するうえ、坏部内面に横ハケメを施文し、よく似たペアといえるが、こうした2~3個の類似関係を示すものとして697~699、716~718、755~757、760・761、771~774などにみられ、かつて笛吹市大原遺跡の手捏土器の観察から推測された類似性の強いペア関係と同様のあり方が認められる。

819・820・822は大きさ、器形が類似した大形壺3個体で、いずれも底部が小さく胴長で、器壁は厚い。高さが70~80cmほどあり、とくに口縁を欠く820は高さ90cm以上と推測でき、かなりの大形品である。祭祀坑の北壁側に細片化した状態で分布し、819が西側、822が東側、820が中間付近に存在した。おむねそのほかの土器類と同様な分布を示しているが、個体ごとに分布域・出土レベルが違うことが注意される。820→819→822の順で廃棄されたと考えられ、820が下層から、822が上層から出土する傾向がある。破砕後に廃棄されたか、廃棄後に破砕されたのか定かではないが、故意に細片化された状況を呈す。他の手捏土器類や石製模造品類の分布状況と何らかの関連性をもつと考える。823はTK216~TK23の特徴をもつ坏で、5世紀後半と考えられる。824はMT85(陶器山85号窟)あたりの坏で、6世紀後半か。1号墳南西地点の出土遺物と接合する。825はハソウで、TK208あたりか。1・2号墳中間地点出土遺物との接合関係をもつ。5世紀後半。826はTK208の時期と考えられる壺。5世紀後半か。827はTK216の特徴をもつ壺。突出部周辺出土遺物と接合する。828は祭祀坑の中央、床直で出土した長さ49cmの人形で、手足は短く、顔面は目・口を小さく沈線で表現するのみで、耳、鼻はない。祭祀坑では唯一一点のみ人形が出土した。

(7) 3号墳(第58・59図)

1・2は土師器坏、3~20は土師器高坏、21~24は土師器小形壺、25~28は土師器手捏土器、29は土師器壺、30・31は須恵器壺・甕。15の高坏脚は縁に近い位置に貫通孔を1箇所もつ。31の甕口縁部は3段の

襷描波状文をもち、円形の粘土粒を貼付する。TK208期相当で、5世紀後半代か。

(8) 4号墳(第60図)

1・2は土師器坏、3・4は土師器高坏、6は土師器小形壺、7・8は須恵器小形壺(ハソウ)、9は土師器小形坏、10は土師器手捏土器である。1の坏は底部が柱状高台状に肥厚した坏で、特殊である。2には底部外面に「十」の線刻をもつ。6の壺には口縁に2孔1対の孔をもち、弥生土器の可能性はある。

(9) 5号墳(第60~62図)

1は須恵器高坏、2・3は須恵器壺、5は須恵器鉢、6は須恵器甕、7・8は須恵器フラスコ形長頸壺、9・10・13は須恵器甕、11・12は須恵器壺、14は土師器坏。

1は脚部に長方形の透かしをもつ。2は体部下半を横削り整形した小形壺。7・8は球門の体部に頸を接合した長頸壺。湖西編年のⅢ期末~Ⅳ期末(7世紀前半~7世紀末)にフラスコ甕がある。9は斜めの刺突文を口縁部に1段運らす甕。10は内面に同心円状の当て具痕をもつ。11は広口壺で、湖西編年Ⅲ期後~Ⅴ期(6世紀末~8世紀)に存在するが、本例は口縁部形態からⅣ期後(7世紀後半)相当と考えられる。12は横壺等の楕円口縁かと思われる口縁部で、その形態からⅢ期末~Ⅳ期前(7世紀前半~7世紀中)あたりかと思われる。13は9と同様に口縁部に1段の斜めの刺突文をもち、口縁部から底部まで接合し器形復元された甕である。色調は灰白色で、静岡湖西産とみられる。甕の年代観ははっきりしないが7世紀代であろう。なお遺構外として掲載したが、第63図25の須恵器脚付長頸壺は5号墳東側周溝からの出土で、5号墳関連遺物として理解すべき資料である。脚の長さが長脚から次第に短く変遷するが、25は湖西編年Ⅳ期前に相当し、7世紀中葉と考えられる。14は平安時代、9世紀代の坏で混入品か。

(10) その他(第62・63図)

1~5は土師器坏、7~11は土師器高坏、12は弥生土器小壺、13~16は平安末の土師質土器坏、高台坏、15・16は土師質土器、17~19は手捏土器。20~25は須恵器で、20は底部外面にヘラ描き文をもつ坏あるいは甕、21は高坏、22は返りのある甕、23・24はハソウ、25は有脚長頸壺、26・27は甕。

6は器台で、脚に2箇所以上の孔をもつ。4世紀末~5世紀初か。13・14は11世紀前半。15・16は13~15世紀代か。25については5号墳で記したとおり。

(11) 縄文土器(第63・64図)

1は前期諸磯c式、2・3は前期末十三苜提式、4・

5は中期五領ヶ台式、6～14は井戸瓦式。14は20号十坑出土の台形土器である。

(12) 弥生土器 (第64～66図)

遠橋外からではあるが、弥生後期の土器片がややまとまって存在する。弥生後期中部高地系の甕を主に牽が混じる。1～9・11・15・24～26は甕、12～14・16～20は甕である。梅指波状文(1～6・8～10)、梅指波状文と縹状文(7・11・15)、縹指文によるT字文(13・18～20)がある。口唇部には刻みをもつものが多い。21は弥生6期の幅広有段口縁甕で、口縁部に棒状浮文を5本貼付する。22は内外面赤彩された片口鉢。23は赤環脚部。

(13) 石器類 (第66・67図)

遠橋外から縄文・弥生時代の石器が出土している。1～10は打斧、11は横方形石器、12は粗製石匙、13は石匙、14・15は石鏃、16・17は磨斧、18は凹み石。19～21は古代以降の砥石。22は近世の石片片。

(14) 鉄製品 (第67図)

1は3号墳周溝出土の鉄鍔。
2～15は2号墳突出部西側(祭祀坑上層)出土、16～24は祭祀坑出土。祭祀坑およびその上層からは土器類に混じて多数の鉄片、鉄製品が出土している。祭祀儀礼に用いられた鉄製品と考えられる。製品としてわかるのは5の鉄製バツル金具で、大きさから馬具の一部かと思われるが定かではない。そのほか10・15は鉄鍔で、23もその可能性がある。また11は刀子か。そのほかは不明鉄製品と呼ぶ資料で、不整形の板状を呈し、20～22は刃部をもつ鎌かと思われるが定かではなく、長方形の鉄素材そのものようである。2・19・24等は小型鉄鍔とみられ、祭具としての鉄鍔のミニチュアとも考えられる。図化資料以外に小型鉄鍔を含む10数点の鉄製品が出土している。

(15) 白玉 (第68～87図、第8表)

本遺跡では手捏土器、土製品、石製模造品、鉄製品と共に白玉(製品)3372点が出土した。本項では、白玉を対象に分析を行う。

[分析資料]

白玉3372点のうち、3105点(92%)はウォーカーセパレーションによる検出である。残りの267点は祭祀坑内の土器の内部などから出土した。出土位置は、突出部の西・東・中央の3箇所に分かれる。西は3306点(98%)で大部分を占め、東51点、中央14点、他1点であったが、形状、法量、石材の差はみられず、使用状況などの検討はできなかった。白玉は完形が2439点(72%)で、欠損のあるものもみられたが、法

量分析はそのなかで残りの良い3305点(98%)を対象に行った。

次に、分析の視点を提示する。白玉の計測部位は最大径・最大厚・孔径であり、ノギス・ディバイダー・直定規で20分の1mmまで計測を行った。また、観察方法は10～20倍のルーペを使用し、詳細部分は顕微鏡を使用した。

[観察項目・分析]

白玉を観察するにあたり、まず、製作技法から項目設定を行う。白玉は祭祀遺跡や製作遺跡の未製品から製作工程の復元がなされてきた(篠原1995他)。また、玉類全般では寺村光晴氏が「荒削→形削→(側面打突)→研磨→穿孔→仕上げ」の工程を想定されている(寺村1966、1980)。

本遺跡では形削工程品→穿孔工程品、剥片などの白玉未製品が出上った。詳細は(21)白玉未製品に譲るが、ここでは製品に近い段階として「端面研磨」「穿孔」「側面研磨」の前後関係を観察した。成形の進んだ穿孔工程品(3452～3456)には、端面研磨が施されるものはあるが、側面研磨は開始されていない。また、未穿孔で端面研磨が施されるものは皆無であった。よって、穿孔が先、側面研磨が後になる。次に、上下面を研磨した板状未製品(第90図3469・3471～3480他)は未穿孔で、製品でも端面が穿孔の剥離に切られることから、端面研磨が先、穿孔が後になる。なお、未製品には端面が剥離面のもので研磨されたもの(の両者)があり、製品にも片面研磨、両面研磨、未研磨の3通りみられた。つまり、端面研磨は省略されることがある。また、側面が端面を切るもの(3・225・2590・3188他)があるので、側面研磨が先、側面研磨が後になる。さらに端面で、剥離の角が直角で、孔周りに剥離が少ないもの(2206・2571他)は、最後に仕上げ端面研磨が施された可能性がある。

端面研磨は、成形研磨と仕上げ研磨の見分けが困難な場合がある。研究史では、側面研磨後の仕上げ端面研磨が指摘されるが(小野1995、廣瀬2002、大垣市教育委員会2003他)、今回は上記の理由から仕上がりが良いものに一括した。端面は擦痕が見えづらく、側面は粗い擦痕が残ることが多いが、これは工具の違い(砥石の精粗)によるものと思われる。

穿孔は、両面穿孔、片面穿孔に大別される。筆者が穿孔実験を行った結果、片面穿孔の場合は上面の孔径が下面よりも大きく、下面孔の形状はレモン形で、その周囲には剥離が残ることが多かった。よって、上下面の有無や剥離状態から、両面穿孔、片面穿孔の2分

類を行う⁹⁾。

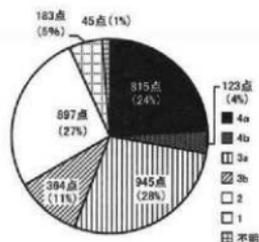
側面研磨では、形状と擦痕方向が着目される。擦痕方向は孔に平行するものをタテとし、斜め方向を右上・左上に分けた。その理由については後述する。また、左右方向がみられるものは左右として区別した(図7)。

右上		孔に対して斜め方向の研磨を施したもので、擦痕が右上がりになるもの。
左上		孔に対して斜め方向に研磨を施したもので、擦痕が左上がりになるもの。
タテ		孔に対してタテ方向の研磨を施したもので、擦痕が縦方向になるもの。
左右		縦の上下で擦痕の向きが異なり、横を境に右上、左上の擦痕が確認されるもの。
		研磨方向が右上、左上の両方みられるもの。

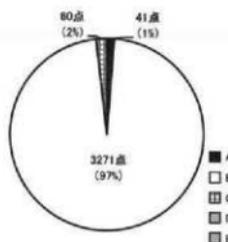
図7 白玉の側面研磨方向模式図

以上の結果から、白玉製作工程は基本的に「端面研磨→穿孔→側面研磨」の順になり、その後、仕上げ端面研磨が行われる場合があると想定された。よって、上記の技法復元を中心に観察項目 a～e を設定する。

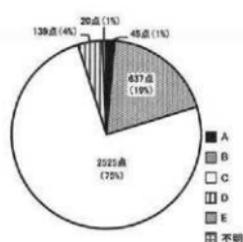
a) 端面の仕上げ



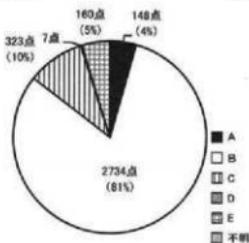
(ア) 端面の仕上げ



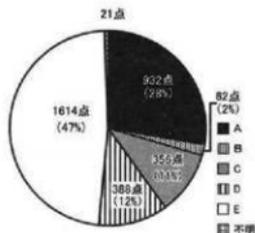
(イ) 穿孔方向



(ウ) 側面形状



(エ) 側面の研磨方向



(オ) 石材

図8 観察項目 (n = 3372)

端面の仕上がりにより、レベル1～4を設定した。数字が大きくなるほど、仕上がりは良好になる。

レベル4 上下端面は平滑で、穿孔後の剥離も少なく、仕上がりは特に良好といえる。上下端面が平行になるものA、斜めになるものBがある。

レベル3 上下端面は平滑で、孔周りに穿孔時の剥離がみられるが、仕上がりは良好といえる。上下端面が平行になるものA、斜めになるものBがある。

レベル2 片方の端面のみ平滑だが、仕上がりはやや悪い。

レベル1 上下端面は平滑でなく、仕上がりは悪い。結果は、レベル4が938点(22%)、レベル3が2206点(52%)、レベル2が897点(21%)、レベル1が183点(4%)であった。また、レベル4・3には端面が斜めになるものを1～2割程度含む(レベル4は123点、レベル3は323点) [図8 (ア)]。白玉の約7割が仕上がりが良好な状態で、穿孔後も上下端面の平滑さを維持できたことがわかる。

b) 穿孔

穿孔方向は、3271点(97%)が片面穿孔で、両面穿孔は41点(1%)、不明60点であった [図8 (イ)]。

白玉の場合、片面穿孔が多いことは時代や地域を問わず共通するようだが、それは白玉の厚さや硬度などに起因するものと思われる。また、孔内に不連続な凹痕が観察されることから、穿孔具は鉄錐が想定される。

孔は白玉の中央に穿たれることが多いが、端に寄るものも25点みられた(99・542・711他)。それらは側面研磨でも修正できなかったものと考えられる。また、孔径は0.9mm~3.2mmの範囲に収まり、1.7mm~2.0mmに集中する。片面穿孔は上面、下面で孔径が異なるが、現時点で0.1mm以下の計測は難しく、孔径の計測位置や形状の分析も困難なため、今回は十分な計測・分析はできなかった。また、現状の研究でも白玉の孔の十分な検討がされているとは言えず、今後、穿孔具を検討する上で重要な課題と思われる。

c) 側面研磨方向

研磨方向は斜め方向が大部分を占めた[図8(エ)]。そのうち、右上は2734点(81%)、左上は323点(10%)であり、左右方向で偏りがみられた。その他、ケテが148点(4%)で、左右が7点であった。右は稜の上下で擦痕の向きが異なるもの3点(2・390・645)、部分的に網目状になるもの3点(257・441・2114)、半分ずつ左右になるものが1点(2382)など3種類みられた。F玉の擦痕方向は右が大部分を占めており、それは工人の利き手(右利き)に関係するものと思われる。

d) 側面形状

側面形状から以下の分類を行う(図9)。

結果は、Aが45点(1%)、Bが637点(19%)、Cが2525点(75%)、Dが139点(4%)、Eが20点、不閉6点であった[図8(ウ)]。また、稜が端に寄るものがAに11点、Bに182点みられた(15・50他)。側面形状は、擦痕の手間を考慮するとA→B→C、または、E→Dへの省略化が推定される。最も数が多いのはCで、次にBが続く。また、EよりDが多い。つまり、稜のあるA・B・Eは702点(20%)で、稜のないC・Dは2664点(80%)を占める。よって、より省略の進んだ形状が多いといえる。

A		稜は明瞭で、貫筒形を呈する。分割研磨を行うタイプ。厚さは径の3分の1以上。
B		稜は鈍く、貫筒形~弱張円筒形を呈する。分割研磨を行うタイプ。厚さは径の3分の1以上。
C		稜は無く、円筒形~弱張円筒形を呈する。分割研磨しない場合が多い。厚さは径の3分の1以上。
D		稜は無く、断面はCに類似するが、厚さは径の3分の1以下。
E		稜は明瞭で、断面はAに類似するが、厚さは径の3分の1以下。

図9 白玉の側面形状模式図

e) 石材

石材は全て広義の滑石に含まれるが、いくつかのバリエーションがあった。ここでは、粒度、硬さ、透明度、色調などによりア〜カを設定した(第2表)。

結果は、アが932点(28%)、イが62点(2%)、ウが356点(11%)、エが388点(12%)、オが1614点(47%)、カが21点になった[図8(オ)]。ただし、それらは理化学的分析ではなく、肉眼観察による。そのため、必ずしも境界が明瞭ではなく、特にアとオの判断が困難なものもあった。

「属性間の関係」

次に、各属性間の関係について検討する。ここでは、全ての属性ではなく、主要なものに絞った。

a) 側面形状と法量

最大径、最大厚を0.5mmずつ区切り、側面形状別に個数を出した。白玉の最大径は2.5mmから7.0mmの範囲にあるので、2.5mm~7.0mm、最大厚は0.9mmから5.6mmの範囲にあるので、1.0mm~6.0mmを設定する。例えば4.5mmの場合、4.0mmより大きく、4.5mm以下のものを指す。これらのデータから図10・11を作成した。(ア)はX軸に最大径や最大厚、Y軸に個数とり、集中箇所を解り易く示している。また、(イ)は側面形状別に100%換算したもので、個数の少ないA、D、Eの割合を見る際に有効である。グラフ内の数字は個数を示す。例えば図9(イ)のEの内訳は、4.5mmが4点(20%)、5.0mmが13点(65%)、5.5mmが3点(15%)になる。また、2.5mm、3.0mm、7.0mmなど数が少ないものはグラフ

第2表 石材

	粒度	硬さ	透明感	色調
ア	細粒・雲母少量含む	やや軟質~硬質	不透明	黒灰色~青灰色
イ	粗粒・雲母多く含む	軟質	不透明	灰色
ウ	やや細粒・明度低い筋や粒子含む・風化あり	やや軟質~硬質	半透明~不透明	褐色
エ	やや粗粒・明度の低い筋や粒子含む	やや軟質	半透明	黄灰色~淡黄灰色
オ	細粒・明度の低い筋や粒子含む・風化あり	やや硬質	不透明	暗緑灰色~緑灰色
カ	緻密・均質	硬質	透明~半透明	淡緑色~淡黄灰色

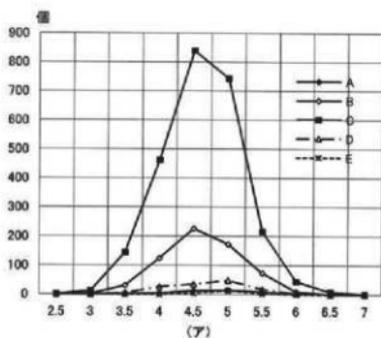


図10 側面形状と最大径

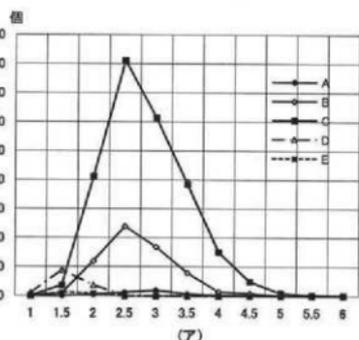
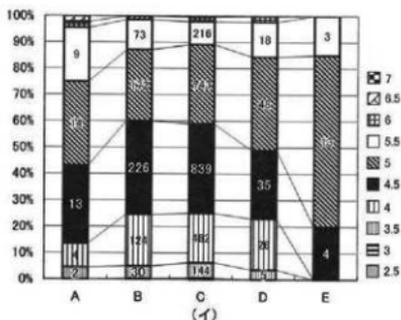


図11 側面形状と最大厚

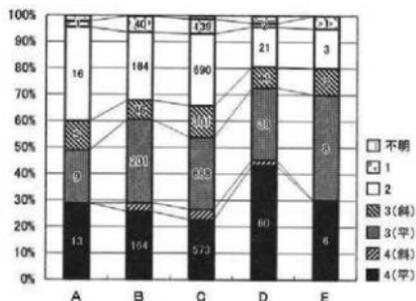
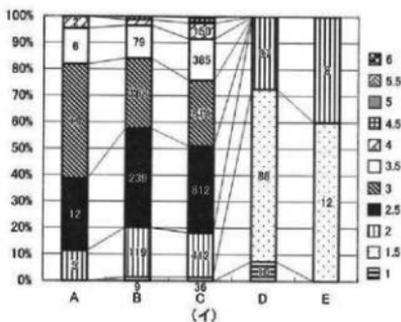


図12 側面形状と端面の仕上げ

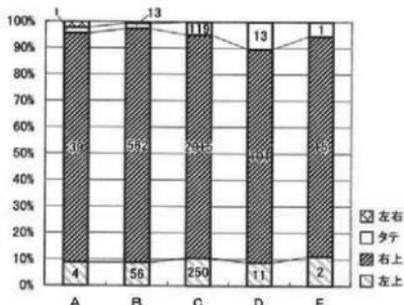


図13 側面形状と研磨方向

に示されないことが留意される。

最大径は4.0mm、4.5mm、5.0mmに集中し、4.5mmにピークがある [図10 (ア)]。側面別に見ると、B・Cは4.5mm、5.0mm、4.0mmの順に多く、類似傾向にある。Aは4.5

mm、5.0mmが多く、5.5mmの割合も高めなので、やや大きいことが言える。また、Dは5.0mmがやや多くAに類似するが、全体的にはB・Cに類似する。また、Eは4.5mm、5.0mmに集中する [図10 (イ)]。

最大厚はA～CとD・Eに分けて特徴を見る(図10)。A～Cは2.5mm、3.0mmに集中し、2.5mmにピークがある[図11(ア)]。側面別に見ると、B・Cは2.5mmにピークをもち、3.0mm、2.0mmが続くなど、類似傾向にある。また、Aは3.0mmにピークがあるので、やや大きいと言える[図11(イ)]。次に、D・Eは1.5mmにピークがあり、2.0mmが続くが、後のないDにのみ1.0mmがあることは留意される[図11(ア)(イ)]。

このように、どの側面形状においても、最大径は4.0mm、4.5mm、5.0mm、最大厚は2.5mm、3.0mmの狭い範囲に集中する傾向がみられた。よって、側面形状と法量の相関関係はあまり見られなかったが、後の退化したBと後のないCの法量が類似する点は、後の形成意義を考えるうえで重要と思われる。

b) 側面形状と端面の仕上げ

端面の仕上げは、側面形状に関わらずレベル4と3が多く良好であった(図12)。特に、D・Eはその割合が高かった。これは数が少ないことも考慮すべきだが、厚さの薄いDやEでも削れたままではなく、上下端面を磨く丁寧な作りが多いことを示す。

c) 側面形状と研磨方向

側面形状に関わらず、研磨方向は右上が多く、左上、タテ、左右の順であった(図13)。タテ方向は側面Dにやや多くみられた。これは、厚さが薄いことに起因すると思われる。また、後が端に寄るタイプには、後を挟んでタテと右上、タテと左上の組み合わせが多い。

d) 側面形状と石材

石材に関係なくCが多くみられた(図14)。また、D・Eはオの割合がやや高めになることが指摘できるが、全体的には側面形状と石材には関連が薄いことが確認された。

e) 端面研磨と石材

端面と石材は顕著な差はみられないものの(図15)、石材イとエはレベル2が多く、端面の仕上げがやや悪いといえる。イとエは石材がやや軟質であることが共通する。

f) 研磨方向と石材

研磨方向と石材にも際立った差はみられなかったが、左上の研磨はエがやや多いといえる(図16)。

[まとめ]

本節では、白玉の側面形状、法量、端面の仕上げ、擦痕方向、穿孔方向、石材などの属性によって分類し、属性間関係を検討した。

検討の結果、最大径は4.5mm前後に集中し、最大厚は厚めのもの(A～C)が2.5mm、薄めのもの(D・E)

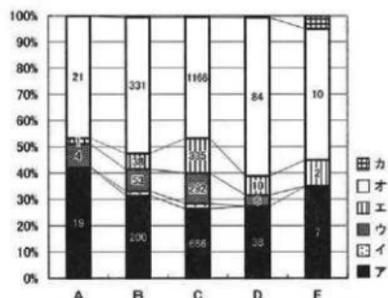


図14 側面形状と石材

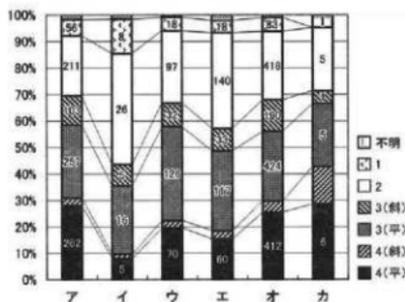


図15 端面の仕上げと石材

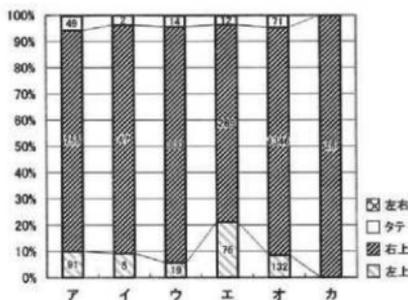


図16 研磨方向と石材

が1.5mmにピークがあり、側面形状による法量の違いはみられなかった。よって、側面の後は積極的に作り出すことを志向したというよりも、研磨の仕方によりできたと考えられる。また、研磨は右上方向、穿孔は片面穿孔、端面は仕上げが良好なものが多くみられた。本遺跡の白玉は石材や側面形状にバリエーションがあると思われたが、法量、研磨方向、穿孔方向、端面の

仕上がりなどで共通するものが多く、製作技術上の大きな差はみられなかった。

次に、白玉の時期に言及する。白玉は古墳時代前期後半から古墳に副葬され、中期に最盛期を迎え、後期には集落や祭祀遺跡へ移行する。近年の報告書では白玉の詳細な検討がとめられているもの(世田谷区教育委員会 1999 他)は、体系的にまとめられているものは少ない。ここでは篠原祐一氏の白玉編年を参照すると(篠原前掲)、C2が約70%、B2が約20%を占め、その他(A2、A3、B3、C3、E2)が少量みられた。C2は5世紀中葉から後葉、B2は5世紀前葉から中葉の年代が与えられる。祭祀坑出土の須臾器はTK208型式併行期(田辺 1981)、土師器は山梨県史編年のVI期(坂本 1999)に相当し、白玉の時期も上器の時期と齟齬がないものと捉えられる(斎藤 2008)。

最後に本遺跡の白玉の意義を考えてみたい。山梨県内では白玉(石製模造品)の出土が希薄なことが指摘されている(宮澤 1993)。本遺跡の白玉は3372点で突出しており、他に笛吹市大原遺跡 WT-3 号土坑の49点(一宮町遺跡調査会他 1990)が挙げられる。両者は祭祀に関連する土坑とされ、時期は山梨県史編年VI期頃に相当する点で共通する。県内では石製模造品の製作址が検出されておらず、本遺跡をはじめ白玉の多くは他の遺跡からの搬入の可能性が考えられる。本遺跡の白玉の意義は、全体的に石製模造品が普及する時期(山梨県史編年VI期)に山梨県内でも石製模造品祭祀が取り入れられたことを示す契機になったことにあると考えられる。(斎藤あや)

【註】

- 1) 製品と未製品が共存しているが、全ての工製品や工具が出土している訳ではない。
- 2) ただし、未製品の溝内は製品に比べて埋填が粗いため、成形段階に損傷を使用した可能性が指摘できる。
- 3) 片面穿孔は更に幅広穿孔、押入穿孔、凹底押入(世田谷区 1999)、直接技法、内穿技法、押入穿孔A・Bなどに分類されているが(大塚市 2003)、今回の分析では採扱していない。
- 4) 片面穿孔の場合のみ、上下面を設定する。孔を穿ち始める面を上にして、上面・下面の区別をする。
- 5) 今回はこれ以上の区別はできなかった。なお、両面穿孔には下面付近で段差がみられるものも含む。
- 6) 右利きの場合、白玉を右上方向に磨削する方が、より自然な動作と思われる。
- 7) 芥天古墳でも横が溝に寄るタイプが報告されている(芥天古墳発掘調査団 1993)。
- 8) 別に扱う埋山としては、先の断面形状の分類で、D・Eを厚さが最大径の3分の1以下のものと定義したからである。

【参考文献】

- 大塚市教育委員会 2003 『史跡 早稲大塚古墳』
財団法人大阪府文化財センター 2002 『亀川遺跡』
小野久雄 1996 『古墳時代内河内における玉土室について』『研究紀要 vol.2』財団法人大阪府文化財センター

- 斎藤あや 2008 『大塚麻寺前遺跡の石製模造品』山梨県考古学協会 2008 年度研究集会「土製模造品から見た古墳時代の神マツリ」資料集 山梨県考古学協会
坂本英夫 1999 『4 古墳時代の編年』山梨県史 資料編 2 原始・古代 2
篠原祐一 1995 『白玉研究私論』『研究紀要』第 3 号 財団法人熊本県文化財調査事業団熊川文化財センター
志免町教育委員会 2001 『七ヶ浦古墳』
世田谷区教育委員会・野毛大塚古墳調査会 1999 『野毛大塚古墳』
出田昭三 1981 『須臾器大成』角川書店
財団法人千葉県文化財センター 1992 『研究紀要』13
寺村光晴 1966 『古代玉作の研究』吉川弘文館
寺村光晴 1980 『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館
廣瀬内資 2002 『池島・裾万寺遺跡の滑石製品―出土滑石製品とその「生産」について―』池島・裾万寺遺跡 2 分析・考察編 財団法人大阪府文化財センター
芥天古墳発掘調査団 1993 『柏市史調査研究報告』Ⅲ
宮澤公雄 1993 『山梨県における古墳時代の祭祀』『古墳時代の祭祀』東日本歴史文化財研究会
一宮町遺跡調査会・一宮町教育委員会 1990 『大塚遺跡発掘調査報告』

(16) ガラス小玉 (第87図)

3376・3377の2点があり、いずれも水洗選別で白玉とともに検出した。3376は直径4mm、色調は明紺色透明。裏表面が平面で、側面は円筒状を呈し、引き伸ばし法による製作と考えられる。3377は直径3mm、色調は紺色、鋳造法による製作と考えられ、磨きによる平面がない。なお3377は本来完存したが、整理段階で破損した。

(17) 土玉 (第87図)

3373~3375の3点あり、球状タイプ(3373)と紡錘状タイプ(3374・3375)がある。水洗選別で白玉とともに検出。白玉と同じ玉形と考えられるが、上からみた大きさ(径)は白玉と大差ないものの、断面形が大きく異なる。白玉と土玉は、ともに玉の模造品であるが、素材の違いが形態差を生んでいる。

(18) 円板形(鏡形)石製品

滑石製。3377~3402の26点は2孔をもつボタン状を呈し、3403~3405は孔がない円板形、3406はやや不整円形だが円板形とみなし、孔がないタイプは計4点である。また勾玉形とした3437も円板形の可能性がある。円形を基本とするが、横方向にやや長いタイプがあり(3379~3382)、孔の配置も横長方向に対し、横に並べている。3380は図上側のラインが直線的となっていて隅丸長方形に近い形ともいえる。また3379のように丸みのある円板とするもの、3387のようなやや強い丸を残すものがあり、後者が多い。3377・3380・3383・3389・3390等は孔径が小さいのに対し、3386・3387は径が大きい。孔径の大きい3386は、2孔とも2つの孔が連続して大きな径を形成する。また側縁に孔が寄るタイプと中心に寄るタイプがある。また中央を通る直

径線上に2孔を開けるのが普通だが、3398・3399のように小形タイプには片側に偏った孔も見られる。大ききには大(3377~3381)・中(3382~3396・3402)・小(3397~3401)の3種がみられ、大形例は孔間を離し、中・小形例に孔が寄るタイプがある。また中形に孔径の大きな例が目立ち、円板形の大ききとは無関係のようである。2孔を基本とすることから、紐のようなものを通して挿み状にしたと考えられるが、孔がないタイプについては未成品の可能性、孔がなくても完成品同様に機能したとみる考え方ができる。大・中・小の数については大5、中16、小5となるが、この比率が何を意味するのかよくわからない。ほかの剣形、勾玉形との組成により儀礼が行われたと考えるが、剣形が円板形とはほぼ同数なのに対し、勾玉形は数が少ない。表面の磨き痕については、粗い擦痕をよく残すもの、滑らかに磨いたもの(3388・3394)、やや粗い面のままとするもの(3381)があり、同じ滑石でも石質の差により硬度差が若干異なるものかもしれない。表裏面の区別なく、両面とも同じような仕上げとし、大きく一方からの細かな擦痕を残し、わずかに方向を変えた磨り分けが認められるものが多い。剣形と比較すると、擦痕が非常に細かく、鏡形として実際の鏡面同様に丁寧な研磨が行われたと見られる。また孔は片面穿孔と見られ、片面の孔径がやや大きく、断面が漏斗状を早すもの、方面のみ孔周囲に細かな剥離をもつものが多いが、剥離については両面に認められるものがある。銅線には、表裏面同様に平らな砥石面で整形した際の平らな磨り面が連続する。また磨き前に粗割りを行った際の剥離面を周縁に残すものが多く、ある程度の仕上げで完成としたようである。完形が多いが、破損品、破損品が接合した例、銅線の一部を欠くもの、孔を通る中央で欠損したものがある。中には著しい破損面をもつものがあるが、整形時の粗割痕か、祭祀行為あるいはその後の埋没過程での破損かどうかの判別が難しい。また3394・3401などは孔の部分に割れ口があり、穿孔時に破損した可能性があるが、穿孔により割れやすいため、後の破損かもしれない。断面形は薄い板状を基本とするが、3378のように厚みに偏りがあるもの、3382のように中央が厚く、銅線が薄い断面形となるものがある。石材には淡緑色タイプ(3377・3379)、暗濃緑色タイプ(3378・3380・3382・3387・3388・3389・3392ほか)、淡黄緑色で滑らかなタイプ(3394・3404・3406)、白色の縞が入るやや粗いタイプ(3381・3384)などがある。

製作工程を整理すると次のようになる。

- ①素材の粗割、剥片獲得
- ②剥片の粗割、円形調整
- ③表裏面・側面の磨き
- ④穿孔

(19) 剣形石製品

孔を端部にもつ完成品は3407~3420の計14個がある。孔を縦に2つもつタイプ、1つのみのタイプ(3408~3410・3418~3420)があり、2孔タイプでは2孔が近い位置にあるタイプ(3411~3413・3415~3417)と、やや離れたタイプ(3407・3414)がある。形態は頭部が平らなもの(3410・3418・3420)、平らに近い丸みをもつカーブとするもの(3407・3415)、直角程度の三角形とするもの(3409・3412)がある。銅線は直線的なもの、丸みをもつものがある。3418は頭部側が厚く、厚みに偏りがあり、孔径がきわだって大きく特異である。石材はすべて滑石で、円板形と同じくいくつかの特徴的な石材を指摘できるが、そのほかに黄灰色系でやや粗いタイプがある(3410・3414)。研磨痕は縦方向を意識したものが目立つほか、横方向のものがある。また円板形が非常に丁寧に磨かれたものが多いのに対し、剣形には荒砥段階で止めたような粗い擦痕を残すものがある(3411)。いずれもほとんど板状だが、3409・3421はわずかに磨き分けにより稜を付けようとしたかと思われる。剣形とする割には刃部を鋭利にした例はなく、いずれも円板形同様に断面角頭状を呈す。完形例が多いが、先端を欠くもの(3418)、両端を欠くもの(3414・3421)、頭部の一部を欠くもの(3413・3419)があり、これも円板形と同じく製作時の剥離痕なのか、使用時あるいはその後の破損なのか判別が難しい。3419~3434は剣形未成品または剣形片で、側面に粗割痕をとどめるもの(3425)がある。3422は図正面の中に稜をもち、2方向の磨り面をもつもので、中央は割れ面のままとしている。一応、未成品と考える。3424は刃部を意識したように磨り分け、稜をもつタイプで、剣形にしては幅がある。3433は二等辺三角形で、これで完結しているように見え、剣形の省略形もしくは剣形とは別の模造品の可能性がある。

3425は表裏面を研削した段階の未成品だが、銅線は剥離痕をとどめ、研磨が認められない。したがって表裏面研磨のち銅線研磨を行ったことが推測でき、製作工程を次のように整理できる。

- ①素材の粗割、剥片獲得
- ②外形の粗整形
- ③表裏面の研磨、板状化
- ④銅線の研削

⑤穿孔

3425は第3段階、3426・3428・3431・3432・3434は第4段階の未成品といえる。

(20) 勾玉形石製品

石材は滑石。確実な例として3435・3436・3438～3442の7点があり、孔をもつものが普通だが、3442は2つあるうち、片方は途中で止まっている。また3443は孔がなく、また端部の丸みもないことから勾玉形未成品と考える。3437は剣形の可能性もある資料。3435・3440・3442は厚みがあり、面取りを行い立体的とし、そのほかは板状だが、円板形、剣形に較べると非常に厚い。円板形と剣形が形の差はあるものの、板状で2孔もつ点、厚さなど両者には共通点があるのに対し、勾玉形は立体的で厚みがあるなど、異なった特徴を示す。鏡形、剣形とは異なる模倣化の工程を示している。また腹部の挟りは円弧状のもの(3435・3436)、コの字状に近いもの(3440)があり、3435によれば、背にあたる縁辺は円板形、剣形と同じく平らな砥石に当てて面取りを繰り返しているが、腹部は滑石よりも硬度の高いナイフ状の道具で数回の削りを行っていて、円弧に仕上げている。同じ加工液をもつものに3436があり、やはり腹部のみに刀子状工具による削り痕が認められる。3438と3439は黄褐色系の滑石である。3444は勾玉端部片としたが、剣形かもしれない。欠損状況としては両端を欠くもの(3438)、頭部側を残すもの(3441)がある。形態変遷としては、立体的でコの字状腹部をもつタイプが古く、板状で円弧状腹部のタイプが新しいと考えられる。3435と3436は断面形が立体的、板状の違いはあるが、外形が非常に類似し、孔の位置もほとんど同一といえる。どちらかを元にもう1点を製作したか、同じ型があってそれを見本として製作したと考えられる。2個1対の可能性はあるほか、同一または関係者が製作したと考えられる。ただし石材はともに滑石ではあるが、母岩が異なる。また3438と3439は、大きさが異なるが類似した母岩で製作している。

製作工程を整理すると次のとおり。

- ①素材の粗削、剥片獲得
- ②外形の粗整形
- ③両面研磨・背面研磨

④面取り(腹部を刀子による削り?)、形の調整

⑤穿孔

なお滑石剥片の3481は、厚み、輪郭ともに勾玉形に類似し、第3段階の未成品の可能性はある。

(21) 白玉未成品

石材は滑石。3445～3456は白玉未成品と考えられる穿孔をもつ剥片(3445～3451・3454)、または粗制整形による円形とするもの(3452・3453・3455・3456)。薄い滑石剥片に孔を開けたもの(3445)、表面を研磨した剥片に孔を開けたもの(3445～3451)、その後周囲を細かく打ち欠きおおむね円形とした段階の未成品と考えられ、そうした後に研磨を行ったと思われる。製作工程のうち2つの段階が認められることから、出土地点周辺での製作が考えられ、製作から祭祀、魔竈までが近い場所で行われた可能性がある。

白玉の製作過程を整理しておく。

- ①素材の粗削、剥片獲得
- ②表裏面(端面)研磨(省略することがある)
- ③穿孔
- ④周縁の調整刺磨(省略することがある)
- ⑤端面・側面研磨

3445～3447・3449・3450が第2段階、3448・3451が第3段階、3452～3456が第4段階と考えられる。

(22) 未製品・剥片・素材片(第89・90回)

滑石製で、大きく素材(3502ほか)、剥片、未成品に分けられる。そのほか大形の原石、原材料の段階が想定できるが、未確認である。素材は厚手で、断面形は平らではなく、自然面を残す。本来の原石そのものではなく、粗く打ち欠きした段階の剥片と言った方がよいかもしれない。剥片は素材を意図的に削り、薄い剥片としたもの。未製品は表裏面を平らに整形した板状未製品で、側縁は不整形、粗削のままとする。未製品の中には勾玉形、剣形の表裏面研磨が済んだ粗削のままの輪郭をもつものが存在する。

(23) 石製紡錘車(第89回)

3457は滑石製紡錘車片で、色調は緑灰色で黄色味を帯びる。石製模倣品を製作するために紡錘車を打ち欠いた残片と思われる。表裏面が節理方向に割離している。これを母岩とすると考えられる同質の白玉が存在する。

第4章 総括

今回の調査では、民間開発にともない大蔵経寺南面の旧寺域内に点在する寺の古墳群周辺を発掘した結

果、これまで知られていた3基の円墳のほか2基の低墳丘墓が明らかになった。さらに祭祀遺物が多量に

出土した祭祀坑を検出し、従来石製模造品の検出例が少なかった本県にとって、充実した内容の発見例となった。

古墳以前には縄文中期・弥生後期土器が出土し、縄文・弥生の集落遺跡が存在したと考えられるが、竪穴は検出できていない。おそらく低墳丘墓・古墳造営に伴う崩土により消滅したと考えられるが、縄文時代の遺構としては集石十坑、貯蔵穴が検出されている。

この一帯は旧笛吹川流路に相当する平等川流域にあり、弥生時代以降は水田を中心とした生産域として開発が進み、周辺に集落が進出した地域で、とくに古墳時代中期以降の開発が顕著となる地域と考えられる。とりわけ北側の大蔵経寺山から横根・桜井の山麓にかけて渡来系といわれる積石塚古墳群が分布することから、古墳時代中期以降、積石塚を基軸とする集団によって周辺の開発が行われた可能性が高いことが従来指摘されてきたところでもある。平等川をはさんだ東側の松本塚ノ越遺跡では当該期の集落域が検出され、古墳時代中期以降、奈良・平安時代にかけて継続的に集落が持続されているが、想像が許されるならば、平等川西岸を基軸とする集団が東岸を拠点に集落を形成していたとも考えられる。もっとも、後述するように本調査区内には数軒の古墳中期の竪穴住居が検出されていて、古墳群形成直前に集落の一部が存在したことが判明したが、古墳群形成とともに集落は移転し、墓域化したようである。

また本地域では7世紀後半の郡寺ともいわれる寺本廃寺や甲斐国府があったとされる笛吹春日居町西府に近く、同じ笛吹川右岸にあり、甲斐国の中心地域周辺部に相当する。また本遺跡西側には寺本廃寺、甲斐国分寺瓦を生産した川田瓦窯跡群が分布し、さらに西側の甲府市桜井町には大坪遺跡があり、8世紀後半から10世紀前半の甲斐型土器を集中的に生産した遺跡が存在する。積石塚古墳群を中心にするかのように、そうした遺跡群が分布することから、積石塚古墳群の形成、寺本廃寺造営を契機として技術者集団、工人集団が数多く居住した地域と考えることができる。

このように本地域を中心とした一帯は、甲府盆地低部に堆積した粘土を利用した、当時としては先進的な窯業地帯であった。土師器や瓦などの生産物を運搬するのに利用されたと考えられるのが平等川の水運で、寺本廃寺と同じ瓦類が松本塚ノ越遺跡から出土していることから、松本塚ノ越遺跡を含む石和温泉駅周辺の古代集落がそうした物資の流通の中継地点の役目を担っていたことも考えられる。

本遺跡での古墳群成立の前段階として、5世紀代の集落が存在し、2号墳（さんごうじ塚古墳）墳丘内に住居群が分布する。2号墳北西の突出部および祭祀坑から祭祀遺物が多量に出土したのは、7世紀初頭築造のさんごうじ塚古墳での祭祀行為ではなく、5世紀後半代の集落に伴う祭祀遺構での祭祀遺物と考えられる。集落域北西隅に古墳の突出部のような造り出しを設け、その周囲に土師器高杯、坏、小形壺、石製模造品、手捏土器、鉄製品を中心とした祭祀遺物が廃棄されている。また突出部西側には隅丸方形の竪穴状の掘り方を設置し、突出部壁から投棄したように片流れの遺物集積状況が形成している。当初、2号墳の周溝に相当すると判断し、古墳の周溝中で祭祀行為が行われたと考え、2号墳の時期を5世紀後半と推定した。しかし2号墳が5世紀代の古墳と断定するデータがないこと、明治年間に寄贈された東京国立博物館所蔵の壺鏡の台帳の記載や、戦後石室を壊したという聞き取りから、2号墳は横穴式石室をもつ7世紀初頭の円墳と考えた。

したがって突出部および祭祀坑、2号墳を取り巻く周溝状の遺構は、集落域の周界を限る何らかの溝ではなかったか。集落または居館を囲う溝の可能性を想定する必要がある。ただし溝が竪穴住居の隅と重複する箇所があるほか、祭祀坑上層はロームで埋め戻され、その上面から7世紀代の湖西産須恵器壺が出土したこと、突出部および祭祀坑周辺が2号墳周溝と重複することは確実である。

祭祀坑内では上製人形が1点出土したが、調査区南端の1号溝内からも形態は異なるものの上製人形片が数個体分出した。したがって1号溝が2号墳北西側の祭祀関連遺構群と同時期の遺構で、関連性をもつことが考えられる。1号溝では上製人形とわずか2点の手捏土器が出土し、多量の祭祀遺物を伴う2号墳北西遺構群の出土状況とは異なるが、1号墳から2号墳北西にかけて溝が形成されていたとすれば、居住域を十字に囲むような溝といえる。しかし竪穴住居は2号墳北側のみ集中し、南側には存在しないこと、竪穴以外の建物痕跡がないこと、溝と竪穴の間隔があまりに近接し、一部重複することなどから、居館の溝、集落を囲む溝と区別するには躊躇する。したがって突出部および祭祀坑については、暫定的に集落域の外縁に設けられた祭祀遺構群と認識することとしたい。また、突出部北側に存在する8号土坑は、時期を決める出土遺物を欠くものの、突出部との位置関係から関連性のある石敷きの土坑墓ではないかと考えておく。そうす

ると突出部とその周辺での祭祀行為は、土坑墓を対象とする可能性も考えられる。

祭祀遺構群からは手捏土器をはじめとした土製模造品、臼玉などの石製模造品を中心に高坏類を主とする土師器が多量に出土し、そのほか鉄製品が混在している。

山梨県内出土の土製模造品については、入江俊行によりまとめられている(2008)。県内では従来、出土事例が散発的であったが、入江は本遺跡のほか大原遺跡(笛吹市)WT-3号遺構の100個体以上の手捏土器、50点以上の石製模造品を含む土坑例、松本塚ノ越遺跡(笛吹市)の竪穴、遺構外での手捏土器出土の事例、西門遺跡(甲州市)での竪穴(4世紀後葉～5世紀前葉)、溝からの手捏土器出土の事例、足原山遺跡(山梨県)での谷状地形からの多量の土師器類とともに出土した手捏土器の事例(4世紀後半～5世紀初頭)などをあげ、土製模造品祭祀の類型を以下の3種に分類するとともに、a→b→cの変遷を想定した。

- a-土師器を主体とし、溝(谷)への廃棄行為(古墳時代前期、西門・足原山遺跡)
- b-多量の手捏土器を主体とし、石製模造品、祭祀用土師と共存する(古墳時代中期、大原・大蔵経寺前遺跡)
- c-住居内における祭祀(古墳時代後期～奈良・平安時代、松本塚ノ越遺跡)

時期変遷に伴う祭祀遺物出土の場の変化については、広く県外の事例を含めて検討する必要があるが、この中で西門遺跡の溝内から祭祀遺物が出土した点に関し、出土した溝は集落を南北に分け境界としての役割があったとする見解、足原山遺跡での集落外縁に位置する谷状地形を集落内外の境界とする認識は、本遺跡の突出部周辺のあり方を考える上で示唆的である。また大原遺跡例と大蔵経寺前遺跡例を比較した場合、後者の高坏等の破損事例がほとんどであったのに対し、前者では完存例が多く、祭祀後の土器製の扱いについて差異がある点を指摘した点は注目される。

手捏土器類に関し、興味深いのは遺跡間における器種の共通性、類似した器形の存在、壺系と坏系に2大別できる胎土についてである。

大原遺跡WT-3号遺構では97点の手捏土器が図示されている。本遺跡との比較をすと、白形、台付埃・台付坏が主体的なのは本遺跡と同じ傾向である。また大原遺跡例では2個セットの関係が指摘されているが、本遺跡例でもほとんど同じ胎土、同じ法量、同じ製作技法によるよく類似した同一器種を見出すことが

でき、同一器種で2個体以上の複数個の類似品が存在する点が注目される。ただ相違点として、白形の中脚・高脚高台が多い点、および本遺跡には存在しない鏡餅状の上面に窪みを入れた形の上製品が大原遺跡例には5点存在する点が異なる。また大原遺跡例では平底系の坏類がわずから5点と少ないほか、短頸壺がない点も大きな違いである。こうした視点で県内外の事例を比較検討する必要性があるが、器種が全国的に統一的な様相をもつことから、石製模造品同様に古墳文化の波及とともに伝播した土製模造品祭祀の中で手捏土器を捉えるべきであろう。

土製模造品の胎土に関しては、岡野(2008)が指摘するように、特定の場所の粘土を用いることに意味があるという観点は興味深い。『肥前国風土記』佐嘉郡条にある人形・馬形を下田村の土を用い神を祀った話、『神武紀』にある磯城の八十皇師等を討伐するさいに天神の夢に従って大香山の土で土器を作り、天神地祇を祀った話など、特別な灵力、呪力がある土で作ることに意味があるという。したがって本遺跡の手捏土器の胎土に壺系、坏系の2種があるのは、何らかの意味があったと考えられよう。2種の土の使い分けについては、特定の器種に胎土が限定されるのではなく、同一器種に異なる胎土が存在している。これを製作者の集団の違いとみることができるかどうかは難しく、土の採取から製作、祭祀にわたる祭祀行為全体がどのように行われたのか、また本遺跡をとりまくどのような集団が参集して、何に対して祭祀を実行したのか想像する中で、胎土の違いについても考えていきたい。

土製人形については岡野が考察している(2008)。岡野は古墳時代の人形を「人形土製模造品」、奈良時代以降のものを「人形土製品」と区別したうえで、大蔵経寺前遺跡例について、各地の事例と比較を行った。岡野によれば古墳時代から平安時代の人形の全国での出土例は83遺跡あり、北関東および長野県では古墳からの出土傾向があるほか、明ヶ烏5号墳下層(磐田市)、谷畑遺跡(倉吉市)などいくつかの遺跡で人形が多出する遺跡がある。形態としては脚を略した弥生時代の人形の系譜を引く古墳時代前期の事例が空港跡地遺跡(香川県)にあり、中期では「大」の字形の一般的な人形となる。立つもの、立たないものがあり、男女の区別が明らかな事例、本遺跡例のように性別不明な事例がある。出土地点では河川、溝、住居、土坑、方形壇、古墳、竪穴、土器集積遺構がある。注目されるのは草山遺跡(松原市)での方形台状遺構盛土中からの出土例、明ヶ烏5号墳下層(磐田市)の古墳下層からの

出土状況があり、祭祀の場に壇や古墳が築かれた事例がある。本遺跡では祭祀坑を埋めるように整地したのち円墳を築いていて、7世紀代の円墳との間に数数十年の隔きがあるが、祭祀の場が先行し、のちにそこに墳墓を築くという経過の共通性を指摘できる。ただ多量の土器、土器中に1点のみ人形が出土した事例は類例がなく、他に容器形以外の多種多様な土製模造品を伴わないのも珍しいとされる。

石製模造品の白玉については本文に詳しいが、白玉を中心に勾玉形、円板形、剣形があるほか、滑石の石材片、穿孔した剥片などの木製品がある。齋藤あやはとくに石製模造品の時期、未製品の意味について以下のように論考した（2008および本書第3章参照）。

白玉は断面形状から5大別され、篠原祐一の編年（篠原編年）を参照するとC2が70%、B2が20%で、前者が5世紀中葉～後葉、後者が5世紀前葉～中葉と推定され、5世紀後半を中心としつつ4世紀末～5世紀末の年代幅を有する。円板形は篠原編年を参照すると5世紀中葉～末葉の粗葉、世帯段階期に該当するという。剣形は同じく篠原編年によれば5世紀後葉～末葉に該当する。勾玉形は山梨県史編年IV期（5世紀前葉）までは断面に丸みがあるが、V（5世紀中葉、5世紀第2四半期）～VI期（5世紀第2～3四半期）には板状に変化することから、県史編年V～VII期（5世紀中葉～末）に収まるといえる。

このように白玉が5世紀後半を中心としつつ、やや時間幅が想定されるものの、そのほかの石製模造品は5世紀後半の時間幅でまとまりをみせている。齋藤は伴出したTK208型式の須恵器甕、土師器類が県史編年VI期に相当することから、長期にわたって廃棄されたと考えられるよりも比較的短期の廃棄と考え、石製模造品とも時期的な齟齬はないとした。

木製品については、白玉3000点以上にに対し、未製品が30点程度であることから、千葉県、栃木県、群馬県などに分布する石製模造品製作遺跡に比べ未製品の点数が微量であることから、齋藤は製品搬入時に未製品が混入した可能性、一部を遺跡内で製作した可能性を想定しつつ、前者の可能性が高いことを指摘した。

さらに山梨県内での石製模造品の波及に関しては、県史編年VI期に本遺跡のほか大原遺跡、伊勢町遺跡が認められることから、全国的に石製模造品祭祀が普及する時期に山梨県地域でも出現をみたとする。

石製模造品は、原石となる滑石の産地が県内にはないことから、本遺跡で多量の製品が若干の木製品、剥片とともに出土したのは、別の製作遺跡から流通した

のか、あるいは本遺跡に石材が運ばれて本遺跡内で製作・使用されたのか定かではない。篠原祐一によれば、石製模造品は「他地域間との交渉を伴う原石の確保と生産、配布・消費に至る社会機構に組み込まれた産物地」であり、「消費段階に於いては、祭式やその背景となる祭祀内容への理解など、文化的要素も持ち得ていなければ成立しない」もので、「畿内との関係の中で導入し得た首長が、地域整備を進める中で用いた」と評価する。本遺跡では素材片とともに、F1玉と共通した石質で上半を欠く滑石製鈴鐺片が出土したことから、石製模造品の石材として再利用されたと考えたが、そうであれば遺跡内で製作され、祭祀行為ののち、他の祭祀遺物とともに廃棄されたと考えられる。石製模造品は製作が容易で製作過程そのものが祭祀行為の一部と考えると、突出部周辺、あるいは集落内での製作をとりあえず想定すべきであろう。当時としては最新の畿内的な祭式を理解した人物により、古墳築造や須恵器導入とともに、畿内の祭祀を実施したことが考えられる。石製模造品・土製模造品祭祀の場や、祭祀行為の実際は各地にいろいろなパターンが存在するようであるが、各地で出土する土製模造品には器種に一定の面一性があり、石製模造品についても器種、規格に全国的な共通性が認められることから、用いられた祭祀具の種類、形には厳格性が認められ、篠原が想定するように祭式に関与する三人そのものが畿内から東国へ移動したことも考えなければならないだろう。

祭祀坑から出土した各種鉄製品については、鉄鏃、馬具と思われるバックルのほか、鎌かとみられる破片や鉄板のような類を多く含んでいる。5世紀代の各地の祭祀遺構では石製模造品、土製模造品とともに鉄製の武器、農具を伴う点に関し、笹生衛は金属製の模造品や鉄鏃を伴う祭祀用具の組合せが5世紀前半から中葉には成立したとして注目しており（2008）、千葉県千代田遺跡の祭祀遺構での遺物の構成が本遺跡に類似するものとして注目される。なお本遺跡の鉄製品について、笹生氏に実現していただいたところ、刀子のほか複数の小型鉄鏃を含む良好な構成を示すことをご指摘いただき、未実測の鉄製品を含めて改めて再報告する必要性を感じている。そのほか、水洗選別により炭化種実（コメカ）、骨片（未同定）がわずかに出土し、祭祀の実態を示唆する資料とした注目しておきたい。

また祭祀坑の遺物出土状況について注目すべきなのが大量の出土状況である。細かく細片化した土器は岡上復元として3個の上師器甕として復元できたが、出土状況を検証すると突出部側から投棄されたかのよう

に個体別に同一個体片の分布が並んで広がっている。それぞれの壺の分布に伴うかのように手掘土器や高坏等の土師器類が分布し、壺と土器類がひとつの祭式具の単位として3単位で祭式が実施されたような状況を示している。例えば、千葉県千束白遺跡では片穴甕に須恵器大甕1個体を据え、人甕を中心として周囲に土師器坏、高坏類を積積し、大甕+土器群という祭式土器類の構成が考えられているが、須恵器大甕の代用品として本遺跡では土師器壺が特別に用意され、用いられたのではないだろうか。祭祀後に土師器類とともに廃棄され、意図的に壊されたと考えられる。なお3個体の壺の出土状況は、断面投影によればそれぞれレベル差をもつことから若干の時間差を考える必要がある。

寺の前古墳群については、今回の調査でその構造、内容を明確にすることができた。5世紀代を第1段階、6～7世紀代を第2段階とすると古墳群の造営過程が明らかとなった。5世紀代に遡る墳墓として低墳丘墓の円墳である1号墳があり、主体部は推定木柱直葬、墳丘周囲に石積みがわずかに認められる。時期は墳丘周囲から出土したTK216相当の須恵器壺により5世紀前半に遡る可能性があり、祭祀坑との前後関係が微妙である。3号墳については高塚であり、石室の存在が推定され、横穴式石室をもつ7世紀代の円墳の可能性があるが、周溝の調査では5世紀代に遡る遺物、土坑が検出され、1号墳とともに第1段階の可能性もある。また4号墳についても1号墳に類似した低墳丘墓で第1段階と推測することもでき、第1段階に古墳群が形成された可能性がある。第2段階としては2号墳、5号墳があり、2号墳は高塚で、5号墳も近世古絵図の

塚名表記から高塚が存在したと考えられる。2号墳については規模、内部構造を確定することはできなかったが、かつて横穴式石室を有した円墳で、前述したように7世紀初頭と推測される。

そのほか、祭祀坑を中心に多量に出土した高坏脚部には、内面に布目痕が認められたものがあり、製作技法を考える上で重要な発見となった(図版14)。いずれも脚部内面、傾斜が変換する部分に存在し、脚部が形作りにより製作され、その際に布を用いたことが推定できる。管見では類似がないが、本遺跡のみの技法とは考えにくいことから、今後広く類別を求めている。

以上、雑駁ではあるが人藏経寺前遺跡の調査成果について整理した。あまりにも膨大な出土資料を前にして報告書刊行までに時間を割いたわりには十分な考察ができなかったが、この間に山梨県考古学協会主催によるシンポジウムで9割模造品、石製模造品を中心に検討を行い多くの知見を得ることができ、各氏から本遺跡の遺物群に関する考察を寄せていただいた。それらの成果を本書に十分に生かすことができたとはいえないが、今後改めて本遺跡の様々な課題について各方面から検討が加えられることを期待したい。

文末ではあるが、本遺跡の調査、整理、報告書刊行に至るまで多くの方々のご指導、ご鞭撻をいただいたことに対し、心より感謝申し上げる次第である。

【参考文献】

- 藤原祐 2008「マツリで使われる石製模造品と土製模造品」『土製模造品から見た古墳時代の神マツリ』山梨県考古学協会
 入江俊行 2008『山梨県における土製模造品』同上
 笹生 剛 2008『千束帯の祭祀遺跡と土製模造品』同上
 齋藤あや 2008『人藏経寺前遺跡の石製模造品』同上
 岡野秀典 2008『大藏経寺前遺跡出土の人形土製模造品』同上

第3表 土器接合関係別表

地点	坑	注記
第9号墳	S19	138-1348-1866-1903-1993-2041-2190-2390-2391-2430-2454-2460-2488-2500-2523-2546-2608-2611-2612-2617-2625-2643-2823-2831-2883-2904-2963-3012-3247-3275-3291-3306-3403-3443-3446-3609-3615-3518-3531-3664-3696-3820-3804-3608-3610-3637-3642-3664-3700-3743-3790-3798-3777-3862-3922-3937-3939-4104-4229-4707-4960-5035-5099-5111-5121-5136-5144-5157-5158-5161-5242-5253-5238-5316-5359-5450-5466-6188-6205-6613-6537-6548-6200-7200-7476-7473-7476-8129-8277-8728-8281-8307-8303-8343-8585-8510-8677-8558-8894-8895-8997-8731-8932-8748-8746-8751-8761-8768-8781-8784-8786-8790-8796-8842-8893-8924-8934-8941-8947-8965-8971-8991-9189-9242-9278-9379-9488-9473-9484-9492-9499-9501-9505-9721-9730-1077-10909-10515-10554-10688-10687-10576-10575-10553-10550-10807-10626-0661-10682-10690-10694-10958-11432-11456-12719-12734-12739-12861-12849-13609-13637-13803
		1838-8364-8638-9617-9729-10307-10312-10316-10379-10380-10475-10838-11314-11622-11664-11114-11528-12551-12670-12681-12750-12762-12779-12968-13085-13098-13165-13310-13367-13456-13500-13585-13568-13583
		1103-1952-1775-1979-1987-1988-2004-2223-2224-2260-2409-3985-4199-4218-4736-4221-4551-4319-4217-4525-4538-4588-4589-4620-4708-4733-5361-5259-5628-5629-5665-5671-5678-5884-5886-5987-6097-5722-5791-5830-5854-6560-6888-6818-6819-6827-6832-6907-6826-6688-6599-6717-6761-6927-6233-6950-6981-6997-7091-7096-7117-7114-7305-7309-7211-7333-7338-7378-7382-7390-7547-7549-7577-7618-7661-7824-7825-7826-7827-7828-7845-7847-7859-7872-7874-7988-7897-7712-7772-7774-7790-7803-7893-7894-7895-8848-8854-8667-9109-9110-9140-9145-9147-9151-9848-9589-10043-10216-10260-10279-10435-10436-10436-10449-10465-10922-10974-10929-11090-11107-11115-11157-11157-11194-11190-12113-12132-12132-11782-11245-11257-1209-11333-11343-11562-11693-11740-11744-11763-11821-11821-12535-12537-12581-12582-12652-12654-12664-118678-12811-12846-12983-12984-13134-13138-13145-13150-13151-13151-13381-13386-13421-13425-13443
		95-104-729-733-734-804-813-818-823-823-826-85-841-843-847-850-851-855-858-860-863-867-870-874-888-892-896-898-928-929-931-935-939-953-966-968-981-965-968-970-988-1008-1058-1067-1069
		1197-2207-737-806-811-811-877-831-834-849-850-880-886-882-887-888-908-910-980-983-990-992-1003-1006-1058-1089-1071-1075-1078-1092-1094-1101-1110-1105-1119-1125-1132-1136-1168-1194-1224-1237
		154-822-716-1123-1170-1145-1242-1249-1253-1254-1326-1438-1491-3135-3136-3137-3141-3142-3190-3200-3204-3213-3232-4804-6884

№	種別	集録 番号	種別	巻数	時期	口/巻/内 頁	収録 率%	撮影 形式/巻	色調 外/内	脚本	演出	備考	
51	録音映画	551	106	2	学生	6.7/10/4.7	80	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10294	
52	録音映画	552	106	2	学生	6.7/10/4.7	80	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10295	民芸映画館
53	録音映画	553	106	2	学生	6.7/10/4.7	80	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10296	民芸映画館
54	録音映画	554	113	7	学生	1.54/3.7/4.9	60	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10297	民芸映画館
55	録音映画	555	113	7	学生	1.54/3.7/4.9	60	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10298	民芸映画館
56	録音映画	556	30	1	学生	3.6/4.1/1.8	100	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10303	民芸映画館
57	録音映画	567	30	1	学生	3.6/4.1/1.8	100	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10304	民芸映画館
58	録音映画	568	30	1	学生	3.6/4.1/1.8	100	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10305	民芸映画館
59	録音映画	569	30	1	学生	3.6/4.1/1.8	100	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10306	民芸映画館
60	録音映画	570	30	1	学生	3.6/4.1/1.8	100	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10307	民芸映画館
61	録音映画	571	30	1	学生	3.6/4.1/1.8	100	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10308	民芸映画館
62	録音映画	572	30	1	学生	3.6/4.1/1.8	100	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10309	民芸映画館
63	録音映画	573	30	1	学生	3.6/4.1/1.8	100	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10310	民芸映画館
64	録音映画	574	35	1	学生	6.3/2.9/4.1	75	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10311	民芸映画館
65	録音映画	575	25	1	学生	4.2/2.5/5.5	100	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10312	民芸映画館
66	録音映画	576	25	1	学生	4.2/2.5/5.5	100	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10313	民芸映画館
67	録音映画	577	25	1	学生	4.2/2.5/5.5	100	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10314	民芸映画館
68	録音映画	578	25	1	学生	4.2/2.5/5.5	100	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10315	民芸映画館
69	録音映画	579	31	1	学生	15.2/2/6/5.8	60	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10316	民芸映画館
70	録音映画	580	31	1	学生	15.2/2/6/5.8	60	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10317	民芸映画館
71	録音映画	581	31	1	学生	15.2/2/6/5.8	60	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10318	民芸映画館
72	録音映画	582	31	1	学生	15.2/2/6/5.8	60	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10319	民芸映画館
73	録音映画	583	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10320	民芸映画館
74	録音映画	584	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10321	民芸映画館
75	録音映画	585	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10322	民芸映画館
76	録音映画	586	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10323	民芸映画館
77	録音映画	587	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10324	民芸映画館
78	録音映画	588	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10325	民芸映画館
79	録音映画	589	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10326	民芸映画館
80	録音映画	590	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10327	民芸映画館
81	録音映画	591	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10328	民芸映画館
82	録音映画	592	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10329	民芸映画館
83	録音映画	593	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10330	民芸映画館
84	録音映画	594	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10331	民芸映画館
85	録音映画	595	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10332	民芸映画館
86	録音映画	596	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10333	民芸映画館
87	録音映画	597	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10334	民芸映画館
88	録音映画	598	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10335	民芸映画館
89	録音映画	599	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10336	民芸映画館
90	録音映画	600	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10337	民芸映画館
91	録音映画	601	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10338	民芸映画館
92	録音映画	602	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10339	民芸映画館
93	録音映画	603	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10340	民芸映画館
94	録音映画	604	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10341	民芸映画館
95	録音映画	605	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10342	民芸映画館
96	録音映画	606	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10343	民芸映画館
97	録音映画	607	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10344	民芸映画館
98	録音映画	608	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10345	民芸映画館
99	録音映画	609	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10346	民芸映画館
100	録音映画	610	24	1	学生	7.1/3/4/4.8	55	ナゾゾナゾ	黒	中野実・藤田昌久	長	10347	民芸映画館

品	地点	集	実収	種類	器機	時期	口/産/割合	割合	形状	外/内/産	色調	外/内	絵文	構成	注記	備考	
51	京都市	1639	106	土師器	平土	土師	3.5/1.0/33	100	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		10474	
54	京都市	1688	23	土師器	赤土	土師	4.3/3.8/72	72	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		3522	外周部土
54	京都市	1691	131	土師器	赤土	土師	6.0/5.4/71	90	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		11515	
54	京都市	1641	21	土師器	赤土	土師	3.3/3.3/100	90	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		5872	
54	京都市	1643	157	土師器	赤土	土師	5.3/3.2/60	60	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		4204	
54	京都市	1644	80	土師器	赤土	土師	3.2/3.2/100	100	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		4204	
54	京都市	1645	191	土師器	赤土	土師	1.3/2.7/50	90	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		41503	
54	京都市	1646	80	土師器	赤土	土師	6.1/2.5/49	90	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		41503	
54	京都市	1647	147	土師器	赤土	土師	5.1/3.0/50	10	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		41503	
54	京都市	1648	210	土師器	赤土	土師	4.4/3.5/50	85	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		7824	外周部土
54	京都市	1649	201	土師器	赤土	土師	3.4/1.1	81	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		11175	外周部土
54	京都市	1650	29	土師器	赤土	土師	5.4/3.5/69	100	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		12445	外周部土
54	京都市	1651	909	土師器	赤土	土師	6.2/3.4/53	55	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		313	外周部土
54	京都市	1652	91	土師器	赤土	土師	3.7/2.4/50	100	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		4954(京山部)	外周部土
54	京都市	1653	220	土師器	赤土	土師	5.4/2.4/50	95	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		7181	
54	京都市	1654	231	土師器	赤土	土師	5.4/4.6/82	100	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		10902	
54	京都市	1655	182	土師器	赤土	土師	6.2/2.4/42	95	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		10124	外周部土
54	京都市	1656	323	土師器	赤土	土師	3.2/2.4/75	100	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		4100	外周部土
54	京都市	1657	138	土師器	赤土	土師	4.9/2.4/42	60	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		2687	外周部土
54	京都市	1658	211	土師器	赤土	土師	6.4/4.1/69	90	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		10587	外周部土
54	京都市	1659	124	土師器	赤土	土師	6.7/4.4/77	58	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		451	外周部土
54	京都市	1660	30	土師器	赤土	土師	6.7/4.7/59	100	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		15321	外周部土
54	京都市	1661	201	土師器	赤土	土師	5.2/1.8/59	70	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		12403	
54	京都市	1662	242	土師器	赤土	土師	10.4/1.4/15	65	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		6492	
54	京都市	1663	186	土師器	赤土	土師	6.3/3.5/55	60	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		11987	外周部土
54	京都市	1664	30	土師器	赤土	土師	6.2/3.0/47	65	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		11418	外周部土
54	京都市	1665	90	土師器	赤土	土師	3.4/3.5/100	100	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		11003	外周部土
54	京都市	1666	136	土師器	赤土	土師	5.6/3.2/58	95	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		4204	外周部土
54	京都市	1667	71	土師器	赤土	土師	5.2/4.5/81	90	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		13298	
54	京都市	1668	79	土師器	赤土	土師	4.8/4.1/59	100	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		41418	
54	京都市	1669	78	土師器	赤土	土師	3.7/3.0/82	100	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		12325	外周部土
54	京都市	1670	83	土師器	赤土	土師	5.3/4.3/80	100	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		10777	
54	京都市	1671	232	土師器	赤土	土師	6.2/4.2/50	100	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		3095	
54	京都市	1672	179	土師器	赤土	土師	7.6/4.4/59	90	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		13900	外周部土
54	京都市	1673	61	土師器	赤土	土師	5.3/4.1/51	90	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		10964	
54	京都市	1674	45	土師器	赤土	土師	3.7/3.8/100	75	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		11517	外周部土
54	京都市	1675	198	土師器	赤土	土師	6.2/3.0/50	90	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		10678	
54	京都市	1676	135	土師器	赤土	土師	5.1/4.0/77	57	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		11008	外周部土
54	京都市	1677	142	土師器	赤土	土師	3.8/4.1/100	80	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		21440	外周部土
54	京都市	1678	216	土師器	赤土	土師	7.6/4.9/52	65	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		6516	外周部土
54	京都市	1679	92	土師器	赤土	土師	7.8/2.9/54	80	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		11024	外周部土
54	京都市	1680	159	土師器	赤土	土師	6.2/5.0/77	100	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		13014	外周部土
54	京都市	1681	144	土師器	赤土	土師	7.1/4.6/57	60	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		11981	外周部土
54	京都市	1682	89	土師器	赤土	土師	7.1/4.6/53	90	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		11970	外周部土
54	京都市	1683	62	土師器	赤土	土師	6.2/2.7/61	90	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		12600	外周部土
54	京都市	1684	129	土師器	赤土	土師	6.3/3.8/59	80	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		41308	外周部土
54	京都市	1685	65	土師器	赤土	土師	6.5/3.4/61	100	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		5912	外周部土
54	京都市	1686	34	土師器	赤土	土師	7.2/3.8/53	100	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		12371	外周部土
54	京都市	1687	100	土師器	赤土	土師	6.1/3.5/60	100	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		13440	外周部土
54	京都市	1688	89	土師器	赤土	土師	8.2/5.2/61	100	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		11330	外周部土
54	京都市	1689	717	土師器	赤土	土師	9.2/1.5/19	90	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		3475	
54	京都市	1690	52	土師器	赤土	土師	7.1/4.8/59	100	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		11691	外周部土
54	京都市	1691	160	土師器	赤土	土師	3.0/3.0/100	95	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		10084	
54	京都市	1692	30	土師器	赤土	土師	3.0/3.0/100	95	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		10855	外周部土
54	京都市	1693	215	土師器	赤土	土師	9.2/4.3/64	95	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		12437	外周部土
54	京都市	1694	123	土師器	赤土	土師	3.7/4.1/100	73	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		11420	
54	京都市	1695	247	土師器	赤土	土師	10.1/1.1/61	60	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		7202	外周部土
54	京都市	1696	90	土師器	赤土	土師	8.1/5.1/51	100	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		12545	外周部土
54	京都市	1697	69	土師器	赤土	土師	8.6/5.0/50	100	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		12320	外周部土
54	京都市	1698	163	土師器	赤土	土師	8.8/5.3/57	90	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		3056	
54	京都市	1699	118	土師器	赤土	土師	9.2/5.8/54	90	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		11111	
54	京都市	1700	167	土師器	赤土	土師	8.4/6.0/64	95	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		2512	外周部土
54	京都市	1701	64	土師器	赤土	土師	8.7/5.1/53	90	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		10970	
54	京都市	1702	63	土師器	赤土	土師	4.9/3.4/64	90	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		5583	外周部土
54	京都市	1703	269	土師器	赤土	土師	4.2/2.7/68	65	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		2681	
54	京都市	1704	262	土師器	赤土	土師	3.1/3.0/100	20	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		6061	
54	京都市	1705	265	土師器	赤土	土師	5.4/3.5/57	90	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		6979	
54	京都市	1706	121	土師器	赤土	土師	3.7/4.0/77	95	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		2455	外周部土
54	京都市	1707	224	土師器	赤土	土師	4.4/3.2/63	100	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		13124	外周部土
54	京都市	1708	204	土師器	赤土	土師	3.9/3.8/100	92	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		4101	外周部土
54	京都市	1709	77	土師器	赤土	土師	3.0/4.9/90	90	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		11205	
54	京都市	1710	80	土師器	赤土	土師	6.7/5.0/59	90	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		11620	外周部土
54	京都市	1711	68	土師器	赤土	土師	7.3/3.1/60	100	ナツナフナフ		赤褐色	外	中央部・口縁・内	黒		11640	外周部土
54	京都市	1712															

題	地点	集	集	種別	標準	時期	口数/高	積	割合	形状	外/内	色調	外/内	出土	構成	注記	備考
54	奈良	766	774	土師器	中器	古墳	5.8/3.5/2.0	100	75%	ナツナツ/ナツ	赤黒	(赤)黒	赤・黒・赤	赤・黒	赤・黒	3552	高野内田遺跡
55	奈良	769	149	土師器	中器	古墳	5.8/4.0/2.0	90		ナツナツ/ナツ	黒	(赤)黒	黒・赤	赤・黒	赤・黒	1711	環濠跡
56	奈良	770	149	土師器	中器	古墳	4.7/3.5/1.5	50		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	10732	環濠跡
57	奈良	768	166	土師器	中器	古墳	5.7/3.5/2.0	100		ナツナツ/ナツ	黒	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	10466	環濠跡
58	奈良	789	277	土師器	中器	古墳	5.6/3.5/2.0	90		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	11736	環濠跡
59	奈良	776	64	土師器	中器	古墳	1.6/3.8/2.3	39		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	13386	環濠跡
60	奈良	793	352	土師器	中器	古墳	5.2/3.5/2.0	95		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	140797	環濠跡
61	奈良	794	183	土師器	中器	古墳	4.7/3.5/1.5	50		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	10672	環濠跡
62	奈良	794	183	土師器	中器	古墳	4.5/3.5/1.5	50		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	14570	環濠跡
63	奈良	795	283	土師器	中器	古墳	5.5/2.7/2.0	80		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	9281	環濠跡
64	奈良	796	273	土師器	中器	古墳	6.1/4.7/4.1	90		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	7360	環濠跡
65	奈良	797	184	土師器	中器	古墳	6.1/4.6/2.3	70		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	14564	環濠跡
66	奈良	798	146	土師器	中器	古墳	5.7/3.0/3.3	90		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	14974	環濠跡
67	奈良	799	273	土師器	中器	古墳	3.2/3.1/2.2	80		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	10968	環濠跡
68	奈良	800	249	土師器	中器	古墳	6.4/4.1/2.4	90		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	10256	環濠跡
69	奈良	801	132	土師器	中器	古墳	3.1/4.9/5.6	100		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	11390	環濠跡
70	奈良	802	132	土師器	中器	古墳	6.0/3.4/2.9	75		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	13054	環濠跡
71	奈良	803	132	土師器	中器	古墳	6.0/3.4/2.9	75		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	11809	環濠跡
72	奈良	804	204	土師器	中器	古墳	7.6/5.8/3.3	100		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	5183	環濠跡
73	奈良	805	159	土師器	中器	古墳	6.9/5.4/3.1	90		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	13236	環濠跡
74	奈良	806	200	土師器	中器	古墳	6.5/5.6/2.9	100		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	10029	環濠跡
75	奈良	807	56	土師器	中器	古墳	1.8/3.4/1.4	100		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	11753	環濠跡
76	奈良	808	143	土師器	中器	古墳	6.2/4.6/2.3	90		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	9011	環濠跡
77	奈良	809	48	土師器	中器	古墳	4.4/3.1/1.9	90		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	11388	環濠跡
78	奈良	810	136	土師器	中器	古墳	6.7/4.8/2.4	95		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	11441	環濠跡
79	奈良	811	903	土師器	中器	古墳	7.4/5.1/2.5	90		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	12087	環濠跡
80	奈良	812	120	土師器	中器	古墳	3.1/3.7/2.7	100		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	10978	環濠跡
81	奈良	813	213	土師器	中器	古墳	6.7/3.6/2.4	90		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	5481	環濠跡
82	奈良	814	174	土師器	中器	古墳	8.2/5.1/3.5	70		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	12874	環濠跡
83	奈良	815	333	土師器	中器	古墳	3.1/3.0/2.3	95		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	995	環濠跡
84	奈良	816	195	土師器	中器	古墳	4.8/3.2/2.4	85		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	3868	環濠跡
85	奈良	817	46	土師器	中器	古墳	1.5/3.5/1.5	100		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	10552	環濠跡
86	奈良	818	12	土師器	中器	古墳	10.3/6.9/5.6	90		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	14111	環濠跡
87	奈良	819	14	土師器	中器	古墳	36.7/13.9/70.0	90		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	1000	環濠跡
88	奈良	820	12	土師器	中器	古墳	1.5/3.1/1.2	100		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	14111	環濠跡
89	奈良	821	9	土師器	中器	古墳	1.3/3.1/1.2	100		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	14111	環濠跡
90	奈良	822	13	土師器	中器	古墳	37.8/12.2/22.0	90		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	1000	環濠跡
91	奈良	823	13	土師器	中器	古墳	19.0/7.1/3.3	35		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	13310	環濠跡
92	奈良	824	8	土師器	中器	古墳	19.0/7.1/3.3	35		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	13310	環濠跡
93	奈良	825	78	土師器	中器	古墳	1.1/1.1/1.1	30		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	4427-0417-0310	環濠跡
94	奈良	826	78	土師器	中器	古墳	1.1/1.1/1.1	30		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	13881-02-23	環濠跡
95	奈良	827	3	土師器	中器	古墳	2.0/3.0/1.7	100		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	4430	環濠跡
96	奈良	828	1	土師器	中器	古墳	3.0/3.0/1.7	100		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	999-3320-3200	環濠跡
97	奈良	829	1	土師器	中器	古墳	1.8/3.0/1.4	45		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	7054	環濠跡
98	奈良	830	2	土師器	中器	古墳	14.8/3.9/5.7	60		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	10212-13019-13052	環濠跡
99	奈良	831	119	土師器	中器	古墳	17.1/7.1	20		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	12077	環濠跡
100	奈良	832	14	土師器	中器	古墳	11.1/7.1	35		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	14032	環濠跡
101	奈良	833	203	土師器	中器	古墳	19.8/7.1	25		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	12042	環濠跡
102	奈良	834	6	土師器	中器	古墳	7.6/7.1	40		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	12023	環濠跡
103	奈良	835	7	土師器	中器	古墳	7.1/6.1/3.0	40		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	12026	環濠跡
104	奈良	836	8	土師器	中器	古墳	11.4/7.1	30		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	12019	環濠跡
105	奈良	837	9	土師器	中器	古墳	7.1/6.1/3.0	40		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	12018	環濠跡
106	奈良	838	10	土師器	中器	古墳	7.1/6.1/3.0	40		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	12009	環濠跡
107	奈良	839	11	土師器	中器	古墳	7.1/6.1/3.0	40		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	12008	環濠跡
108	奈良	840	12	土師器	中器	古墳	7.1/6.1/3.0	40		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	12007	環濠跡
109	奈良	841	13	土師器	中器	古墳	7.1/6.1/3.0	40		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	12006	環濠跡
110	奈良	842	14	土師器	中器	古墳	7.1/6.1/3.0	40		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	12005	環濠跡
111	奈良	843	15	土師器	中器	古墳	7.1/6.1/3.0	40		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	12004	環濠跡
112	奈良	844	16	土師器	中器	古墳	7.1/6.1/3.0	40		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	12003	環濠跡
113	奈良	845	17	土師器	中器	古墳	7.1/6.1/3.0	40		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	12002	環濠跡
114	奈良	846	18	土師器	中器	古墳	7.1/6.1/3.0	40		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	12001	環濠跡
115	奈良	847	19	土師器	中器	古墳	7.1/6.1/3.0	40		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	12000	環濠跡
116	奈良	848	20	土師器	中器	古墳	7.1/6.1/3.0	40		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	11999	環濠跡
117	奈良	849	21	土師器	中器	古墳	7.1/6.1/3.0	40		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	11998	環濠跡
118	奈良	850	22	土師器	中器	古墳	7.1/6.1/3.0	40		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	11997	環濠跡
119	奈良	851	23	土師器	中器	古墳	7.1/6.1/3.0	40		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	11996	環濠跡
120	奈良	852	24	土師器	中器	古墳	7.1/6.1/3.0	40		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	11995	環濠跡
121	奈良	853	25	土師器	中器	古墳	7.1/6.1/3.0	40		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	11994	環濠跡
122	奈良	854	26	土師器	中器	古墳	7.1/6.1/3.0	40		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	11993	環濠跡
123	奈良	855	27	土師器	中器	古墳	7.1/6.1/3.0	40		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒	11992	環濠跡
124	奈良	856	28	土師器	中器	古墳	7.1/6.1/3.0	40		ナツナツ/ナツ	赤	(赤)黒	赤・黒	赤・黒	赤・黒		

図	地点	No.	分類	種類	器種	時期	口径/底径	高さ	容積	内径	色	質	胎土	焼成	注記	備考
64	遺構外	11	3	弥生	土器	Ⅰ	23.9/17	11	1.5	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	475		
64	遺構外	11	13	弥生	土器	Ⅰ	23.9/17	11	1.5	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	475		
64	遺構外	1	22	弥生	土器	Ⅰ	19.0/14	10	1.0	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	14.38		
64	遺構外	2	23	弥生	土器	Ⅰ	19.0/14	10	1.0	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	12.49+110		内面黒染
64	遺構外	3	24	弥生	土器	Ⅰ	21.0/15	11	1.2	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	199+218+611		外黒染
65	遺構外	4	25	弥生	土器	Ⅰ	13.8/10	7	0.5	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	12.15		外黒染
65	遺構外	5	26	弥生	土器	Ⅰ	13.8/10	7	0.5	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	400		内面黒染
65	遺構外	6	27	弥生	土器	Ⅰ	19.0/14	10	1.0	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	15.148		内面黒染
65	遺構外	7	28	弥生	土器	Ⅰ	11.3/8	6	0.4	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	65		内面黒染
65	遺構外	8	29	弥生	土器	Ⅰ	11.3/8	6	0.4	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	403		内面黒染
65	遺構外	9	30	弥生	土器	Ⅰ	11.3/8	6	0.4	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	1496		
65	遺構外	10	31	弥生	土器	Ⅰ	19.0/14	10	1.0	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	128		内面黒染
65	遺構外	11	32	弥生	土器	Ⅰ	19.0/14	10	1.0	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	28		内面黒染
65	遺構外	12	33	弥生	土器	Ⅰ	13.8/10	7	0.5	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	1100		
65	遺構外	13	34	弥生	土器	Ⅰ	19.0/14	10	1.0	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	987		
65	遺構外	14	35	弥生	土器	Ⅰ	19.0/14	10	1.0	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	1363+1388		
65	遺構外	15	36	弥生	土器	Ⅰ	19.0/14	10	1.0	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	1393+1403		
65	遺構外	16	37	弥生	土器	Ⅰ	19.0/14	10	1.0	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	237		外黒染
65	遺構外	17	38	弥生	土器	Ⅰ	19.0/14	10	1.0	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	1306		
65	遺構外	18	39	弥生	土器	Ⅰ	19.0/14	10	1.0	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	1397+1397		器口上下は赤か
65	遺構外	19	40	弥生	土器	Ⅰ	19.0/14	10	1.0	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	121.95		
66	遺構外	20	41	弥生	土器	Ⅰ	19.0/14	10	1.0	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	98		
66	遺構外	21	42	弥生	土器	Ⅰ	19.0/14	10	1.0	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	1053		
66	遺構外	22	43	弥生	土器	Ⅰ	19.0/14	10	1.0	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	1053		
66	遺構外	23	44	弥生	土器	Ⅰ	19.0/14	10	1.0	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	1306		外黒染
66	遺構外	24	45	弥生	土器	Ⅰ	19.0/14	10	1.0	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	1342		外黒染
66	遺構外	25	46	弥生	土器	Ⅰ	19.0/14	10	1.0	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	1394		外黒染
66	遺構外	26	47	弥生	土器	Ⅰ	19.0/14	10	1.0	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	1179		外黒染
66	遺構外	27	48	弥生	土器	Ⅰ	19.0/14	10	1.0	ナデ	緑い泥	(中)相良・赤・青	良	2200		外黒染

第5表 石器類観察表

図版	地点	No.	分類	長/幅/厚	重量	石材	色	注記	備考
66	遺構外	1	打石	14.4/6.7/2.2	230.5	安山岩	暗灰	966	器の裏面に自然痕あり
66	遺構外	2	打石	11.8/4.5/1.3	99.7	ホルンフェルス	灰褐色	14170	
66	遺構外	3	打石	11.7/4.0/1.2	74.8	ホルンフェルス	灰褐色	1018	
66	遺構外	4	打石	11.5/5.7/1.3	120.0	砂岩	暗石灰	972	
66	遺構外	5	打石	13.8/4.8/1.1	67.0	粘板岩	青褐色	917-950	焼い
66	遺構外	6	打石	11.0/6.2/1.5	99.0	粘板岩	暗灰	14039	
66	遺構外	7	打石	12.8/6.2/2.0	158.8	ホルンフェルス	灰褐色	14001	
66	遺構外	8	打石	8.6/4.9/1.0	64.3	粘板岩	翠青	表裏	刃部黒染
66	遺構外	9	打石	10.3/4.4/1.3	74.8	ホルンフェルス	灰褐色	14088	
66	遺構外	10	打石	10.0/5.3/1.1	72.7	粘板岩	暗青	1378	
66	遺構外	11	横刃形	16.0/6.8/1.2	100.7	粘板岩	暗青	1080	
66	遺構外	12	石匙	5.9/2.1/1.2	31.1	ホルンフェルス	灰褐色	14005	
66	遺構外	13	石匙	5.6/3.5/1.0	18.2	頁岩	灰	表裏	
66	遺構外	14	石匙	2.1/1.5/0.4	0.97	黒曜石	黒		
66	遺構外	15	剥片	2.1/1.9/0.4	1.77	黒曜石	黒		石片形
67	遺構外	16	磨石	8.4/1.8/3.8	198.5	緑色凝灰岩	暗灰	435	
67	遺構外	17	磨石	9.0/5.3/3.5	153.2	砂岩	赤灰褐色	表裏	
67	遺構外	18	磨石	11.7/7.3/3.9	370.8	安山岩	灰	12637	器口黒染
67	遺構外	19	磨石	8.8/3.1/3.1	32.5	砂岩	褐色	表裏	器口黒染
67	遺構外	20	磨石	6.4/2.8/2.8	40.9	砂岩	暗灰	14142	器口黒染
67	遺構外	21	磨石	3.0/3.0/1.6	14.6	砂岩	白	471	器口黒染
67	遺構外	22	磨石	14.0/16.8/11.6	—	安山岩	暗灰	13948	

第6表 土製品観察表

図版	地点	No.	性別	時期	長/幅/底径	高さ	残存%	群別技法等	色	胎土	焼成	注記	備考
29	2号南北	1	大形	古墳	1.5/1.5/1.5	7.7	—	ナデ	緑い泥	(前)赤・黒	良		人形の観か
29	1号南	1	大形	古墳	6.5/6.0/2.4	32.3	—	ナデ	緑い泥	(前)赤・黒	良	7	下半部 粘りに黒染
29	1号南	3	大形	古墳	1.2/1.1/1.6	88.0	—	ナデ	緑い泥	(前)赤・黒	良	16	断面黒染
29	1号南	6	大形	古墳	4.1/3.4/2.5	20.0	—	ナデ	灰褐色	(前)赤・黒	良	8	下半部
30	1号南	8	土製	古墳	3.1/2.0/2.0	13.1	100	ナデ	黄褐色	(前)赤・黒	良	470	完全
33	2号南北	4	土製	古墳	3.4/3.0/2.1	44.8	95	ナデ	灰褐色	(前)赤・黒	良	290	断面に黒染模様
38	新橋	828	大形	古墳	4.9/4.7/2.4	42.3	100	ナデ	黄褐色	(前)赤・黒	良	10716	完全

第7表 鉄製品観察表

図号	地点	No.	実測番号	種別	材質	長/幅/厚 cm	重量	注記	備考
67	3号墳出土	1	19	物	鉄	7.3/2.0/5	6.5		
67	2号墳出土	2	11	小刀	鉄	6.9/1.3/0.3	5.5		西
67	2号墳出土	3	17	刀子	鉄	4.9/2.3/0.9	13.2		西
67	2号墳出土	4	14	刀子	鉄	5.6/2.0/0.6	5.3		西
67	2号墳出土	5	8	小刀	鉄	4.7/1.0/0.8	2.1		西
67	2号墳出土	6	0	不明	鉄	3.4/2.7/0.5	8.0		西
67	2号墳出土	7	13	不明	鉄	3.3/0.9/0.3	1.0		西
67	2号墳出土	8	23	不明	鉄	2.6/1.8/0.5	1.5		西
67	2号墳出土	9	12	刀子	鉄	3.1/1.7/0.6	2.2		西
67	2号墳出土	10	20	不明	鉄	2.8/1.0/0.7	4.1		西
67	2号墳出土	11	21	刀子	鉄	2.9/1.0/0.4	1.2		西下層
67	2号墳出土	12	16	不明	鉄	1.8/1.6/0.3	0.8		西
67	2号墳出土	13	19	不明	鉄	3.0/1.6/0.3	2.1		西
67	2号墳出土	14	不明	鉄	3.7/1.4/0.4	2.8		西	
67	2号墳出土	15	22	不明	鉄	3.4/1.2/0.8	3.5		西
67	2号墳出土	16	2	不明	鉄	2.3/1.8/0.3	1.8		7610
67	2号墳出土	17	9	不明	鉄	1.9/1.8/0.5	1.4		13011
67	2号墳出土	18	6	不明	鉄	2.6/1.3/0.7	3.8		11149
67	2号墳出土	19	7	不明	鉄	2.2/1.2/0.4	1.1		11898
67	2号墳出土	20	1	刀子	鉄	8.0/5.8/0.7	19.0		8180
67	2号墳出土	21	8	刀子	鉄	5.1/3.2/0.6	14.5		12975
67	2号墳出土	22	3	刀子	鉄	1.2/2.9/0.7	5.5		9253
67	2号墳出土	23	4	刀子	鉄	4.6/1.0/0.5	4.0		10648
67	2号墳出土	24	6	刀子	鉄	4.7/1.3/0.3	4.2		11895

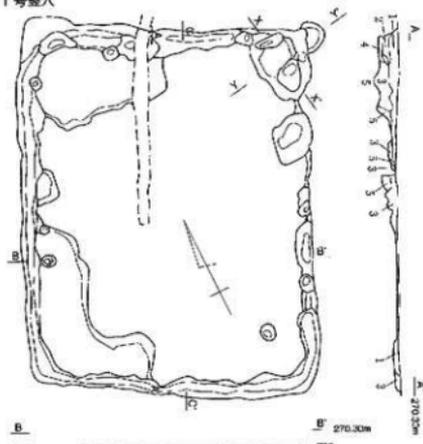
第8表 石製建造品(円板形・剣形・勾玉形)観察表

図号	種別	形状	材質	色調	長	幅	厚	重量	注記	備考
89-3377	石製	円板形	石	黄緑	3.70	3.70	0.80	11.12	9.25	20.9
89-3378	石製	円板形	石	黄緑	3.50	3.50	0.90	11.19	11.28	22.3
89-3379	石製	円板形	石	黄緑	3.00	3.15	0.90	11.15	10.22	17.4
89-3380	石製	円板形	石	黄緑	2.60	2.60	0.80	10.15	5.48	8.6
89-3381	石製	円板形	石	黄緑	2.50	2.50	0.80	10.15	6.87	10.0
89-3382	石製	円板形	石	黄緑	2.50	2.70	0.80	10.16	8.94	12.7
89-3383	石製	円板形	石	黄緑	2.25	2.35	0.80	10.14	6.97	10.0
89-3384	石製	円板形	石	黄緑	2.50	2.50	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3385	石製	円板形	石	黄緑	2.50	2.50	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3386	石製	円板形	石	黄緑	2.50	2.50	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3387	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3388	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3389	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3390	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3391	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3392	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3393	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3394	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3395	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3396	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3397	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3398	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3399	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3400	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3401	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3402	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3403	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3404	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3405	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3406	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3407	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3408	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3409	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3410	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3411	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3412	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3413	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3414	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3415	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3416	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3417	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3418	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3419	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3420	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3421	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3422	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3423	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3424	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3425	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3426	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3427	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3428	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3429	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3430	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3431	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3432	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3433	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3434	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3435	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3436	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3437	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3438	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3439	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3440	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1
89-3441	石製	円板形	石	黄緑	2.45	2.45	0.80	10.16	7.96	11.1

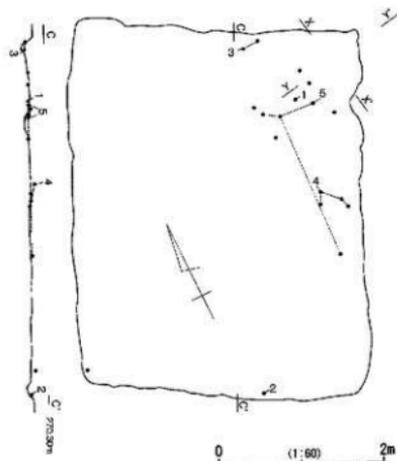
品番	品名	数量	単位	価格	金額	備考	出所
85-2011-2001
85-2011-2002
85-2011-2003
85-2011-2004
85-2011-2005
85-2011-2006
85-2011-2007
85-2011-2008
85-2011-2009
85-2011-2010
85-2011-2011
85-2011-2012
85-2011-2013
85-2011-2014
85-2011-2015
85-2011-2016
85-2011-2017
85-2011-2018
85-2011-2019
85-2011-2020
85-2011-2021
85-2011-2022
85-2011-2023
85-2011-2024
85-2011-2025
85-2011-2026
85-2011-2027
85-2011-2028
85-2011-2029
85-2011-2030
85-2011-2031
85-2011-2032
85-2011-2033
85-2011-2034
85-2011-2035
85-2011-2036
85-2011-2037
85-2011-2038
85-2011-2039
85-2011-2040
85-2011-2041
85-2011-2042
85-2011-2043
85-2011-2044
85-2011-2045
85-2011-2046
85-2011-2047
85-2011-2048
85-2011-2049
85-2011-2050

品番	品名	数量	単位	価格	金額	備考	出所
85-2011-2051
85-2011-2052
85-2011-2053
85-2011-2054
85-2011-2055
85-2011-2056
85-2011-2057
85-2011-2058
85-2011-2059
85-2011-2060
85-2011-2061
85-2011-2062
85-2011-2063
85-2011-2064
85-2011-2065
85-2011-2066
85-2011-2067
85-2011-2068
85-2011-2069
85-2011-2070
85-2011-2071
85-2011-2072
85-2011-2073
85-2011-2074
85-2011-2075
85-2011-2076
85-2011-2077
85-2011-2078
85-2011-2079
85-2011-2080
85-2011-2081
85-2011-2082
85-2011-2083
85-2011-2084
85-2011-2085
85-2011-2086
85-2011-2087
85-2011-2088
85-2011-2089
85-2011-2090
85-2011-2091
85-2011-2092
85-2011-2093
85-2011-2094
85-2011-2095
85-2011-2096
85-2011-2097
85-2011-2098
85-2011-2099
85-2011-2100

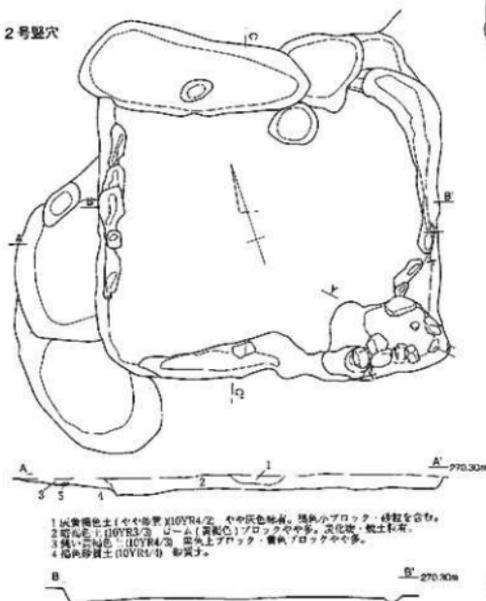
1号壁穴



- 1 階層地 (10YR2/3) ローム小ブロック・灰化物の多。
- 2 階層地 (10YR2/3) 土砂を多含む。灰色ブロックや砂。
- 3 階層地 (10YR2/7) 粘性强。しりみ。
- 4 灰・砂を多含む (10YR4/3) 黄色砂質土多。
- 5 階層地 (10YR5/4) 砂質土。

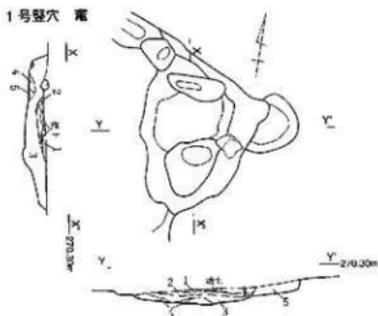


2号壁穴



- 1 灰質粘土 (やや砂質) 10YR4/2 やや灰色粘着。塊状小ブロック・砂粒を含む。
- 2 階層地 (10YR3/3) ローム (黄褐色) ブロックの多。灰化物・粘土和。
- 3 階・砂質土 (10YR4/3) 砂の上ブロック・黄褐色ブロックの多。
- 4 階層地 (10YR5/4) 砂質土。

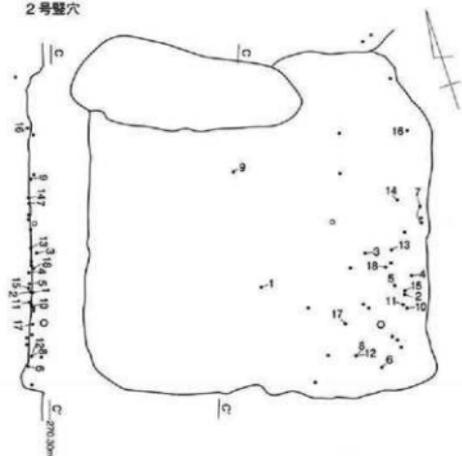
1号壁穴 裏



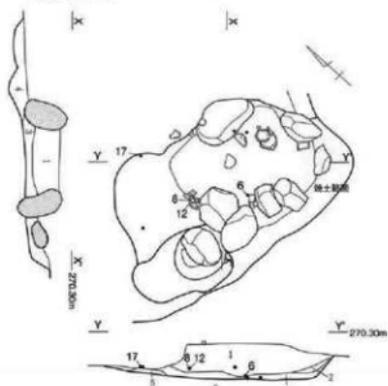
- 1 階層地 (10YR3/4) 灰質粘土。
- 2 階層地 (10YR3/3) 灰質粘土。塊状小ブロック・砂粒を含む。
- 3 階層地 (10YR3/3) 灰質粘土。塊状小ブロック・砂粒を含む。
- 4 灰質粘土 (10YR4/2) 3層に類似。
- 5 階層地 (10YR5/4) 砂質土の多。

第1図 1・2号壁穴

2号壁穴



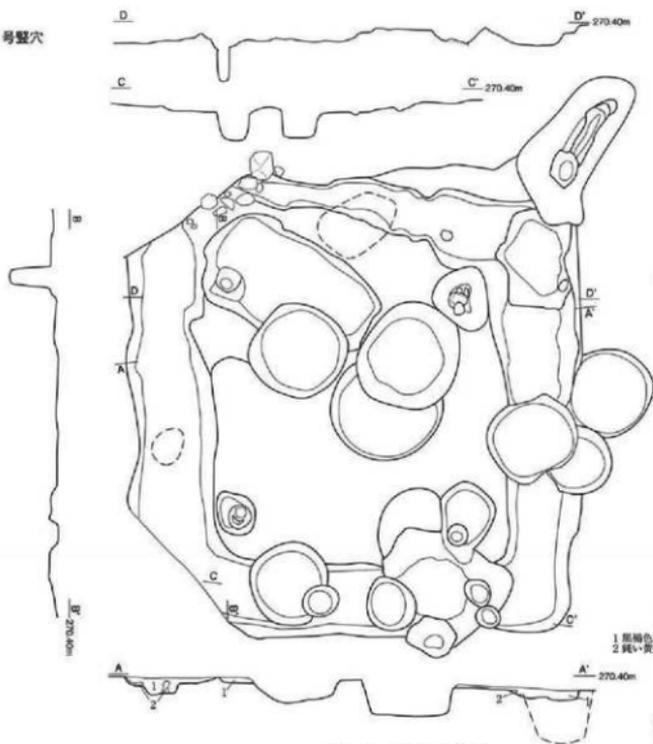
2号壁穴 南



- 1 暗褐色土 (0Y R3/3) 黒色小ブロック・黄土小ブロック多。
 2 赤土粘着心。
 3 赤土層。
 4 黒色炭化物層 (10YR17/1) 炭化材多。
 5 暗褐色土 (10YR3/3) ローム土ブロックやや多。
 6 黄褐色砂黄土 (10Y2S/6)

0 (1:30) 1m

3号壁穴

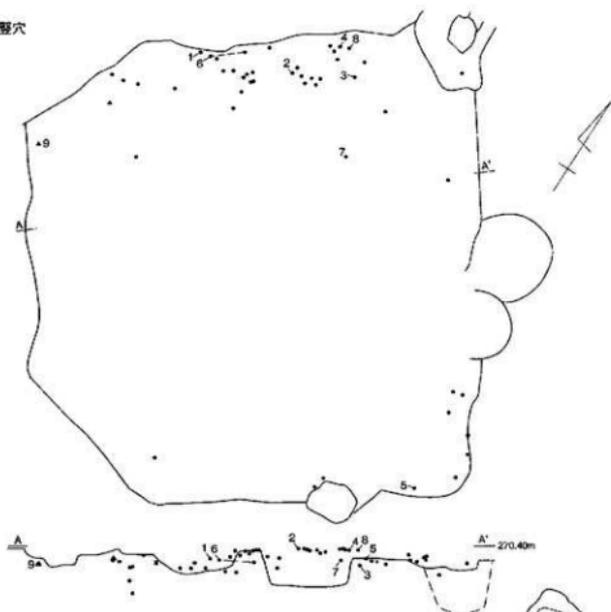


- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 中々粘着性。
 2 黄い黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒やや多。

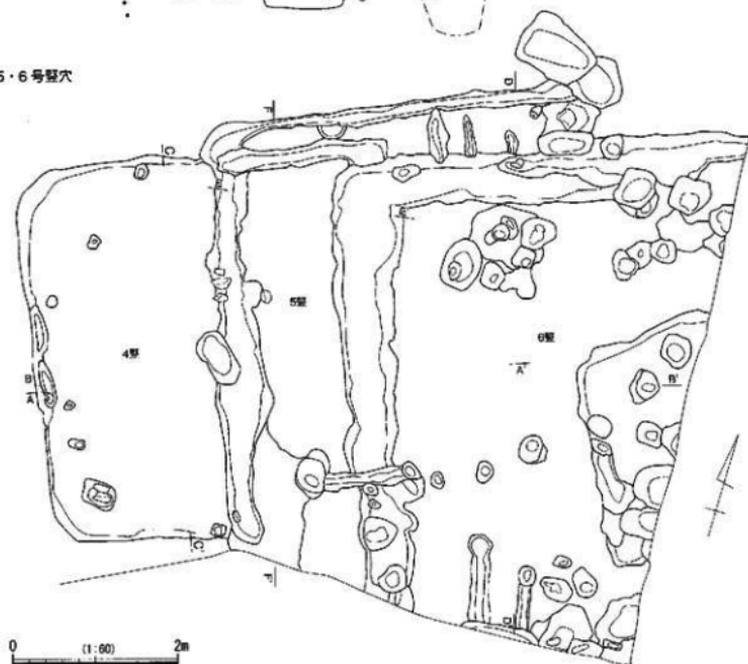
0 (1:60) 2m

第2図 2・3号壁穴

3号整穴

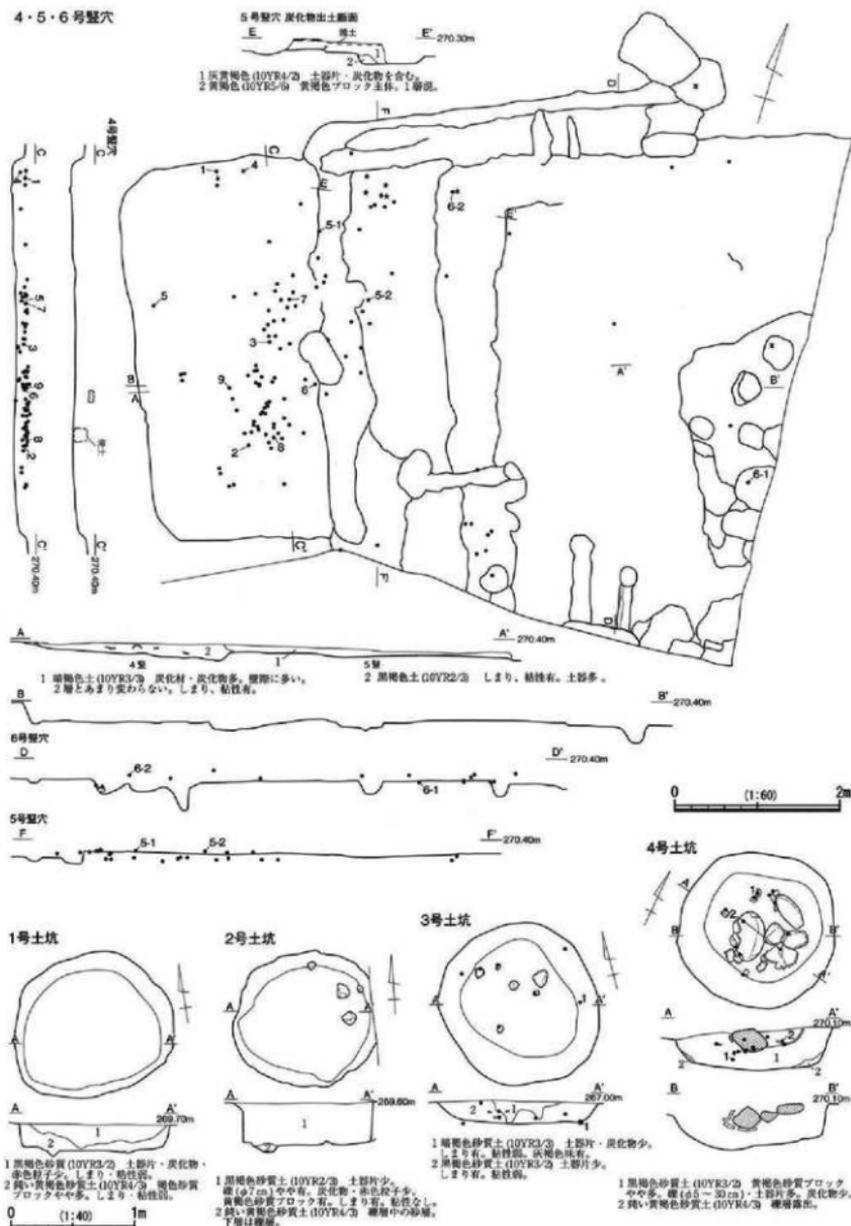


4・5・6号整穴



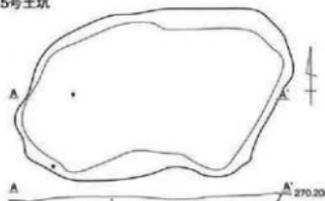
第3図 3~6号整穴

4・5・6号壁穴



第4図 4~6号壁穴、1~4号土坑

5号土坑



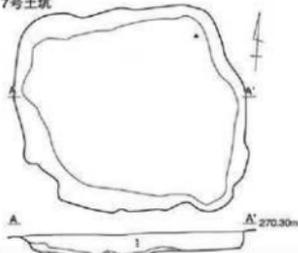
- 1 黒褐色土 (00YR3/2) ロームブロックを含む。
やや灰褐色味有。
2 黄褐色砂質土 (00YR5/6)

6号土坑



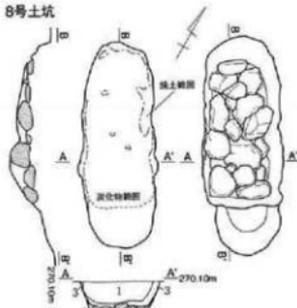
- 1 黒褐色土 (00YR3/2) ローム小ブロックを含む。
白色灰やや多。赤色味有。
2 黒褐色質土 (00YR2/3) 粘性・しまりともに強い。
粘質土。

7号土坑



- 1 黒褐色土 (00YR3/2) ロームブロックを含む。しまり・粘性有。
2 鈍い黄褐色砂質土 (00YR5/6) ロームブロック多。
3 黒褐色粘質土 (00YR2/2) 粘性・しまり強。

8号土坑



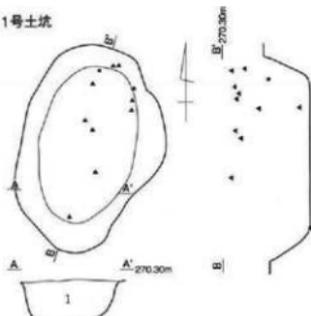
- 1 黒褐色土 (00YR3/2) ロームブロック入。灰化物有。
しまり有。粘性やや有。
2 赤褐色灰化物層 (00YR2/2) 焼土小ブロック少。
3 焼土層 一部が陥っている。風は飛ばしていない。

9号土坑



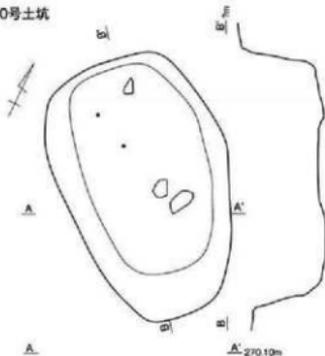
- 1 黒褐色土 (00YR2/2) 赤色粒を含む。
しまり有。粘性やや有。
2 黄褐色土 (00YR5/6) ロームブロック
多。しまり・粘性有。

11号土坑



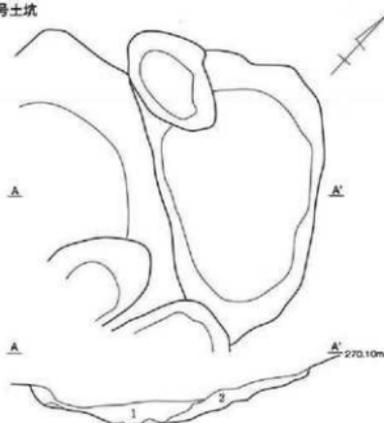
- 1 灰黄褐色土 (00YR6/2) 黄褐色土ブロックを全体に多く含む。
灰褐色味強。しまり・粘性有。

10号土坑



- 1 黒褐色土 (00YR3/2) 黄褐色砂質土の灰濁土か。
2 黄褐色粘質土 (00YR2/1) 4層に相当。
3 暗褐色土 (00YR3/2) 1層に相当。湖沼土か。
4 黒褐色粘質土 (00YR2/2) 粘性の強い黒褐色土。
5 黄褐色砂質土。
6 湖沼

12号土坑

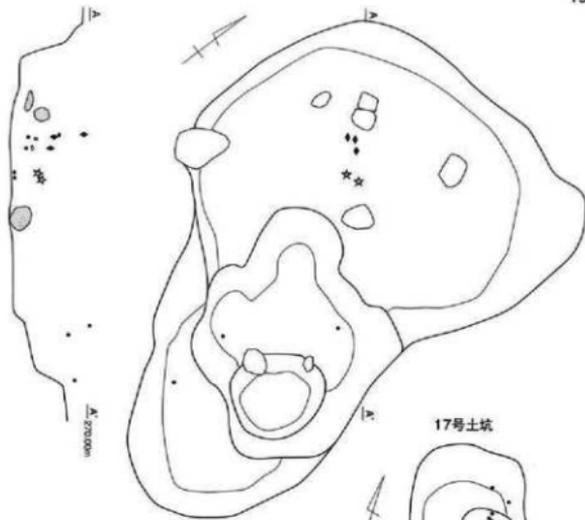


- 1 黒褐色粘土 (00YR3/1) ローム粒・ロームブロックをやや多く含む黒褐色土。粘性極めて高い。しまり有。
2 黒褐色粘質土 (00YR2/2) 砂粒・ローム粒・ロームブロック多。木片有。

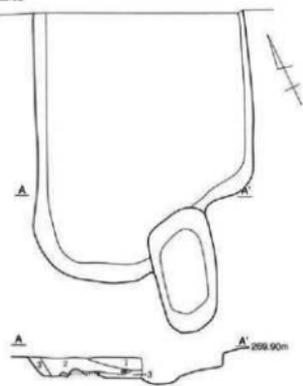
0 (1:40) 1m

第5図 5～12号土坑

14号土坑



15号土坑



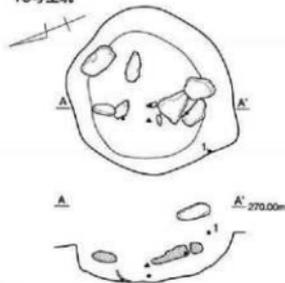
- 1 暗褐色土(00YR5/3) 黒色土ブロック多、
- 2 赤褐色土層(00YR12/1) 灰化層多、鐵土少、
- 3 赤褐色土(00YR5/9) 黒色土ブロック多、

17号土坑

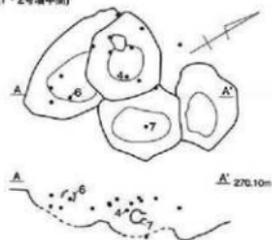


- 1 赤褐色土(00YR5/3) 土器片・炭(φ5cm)を含む、灰化層少、しまり、粘性强。
- 2 暗褐色土(00YR5/3) ローム土主体、しまり、粘性强。
- 3 暗褐色土(00YR5/3) ローム土が層状に入る、しまり、粘性强。

18号土坑

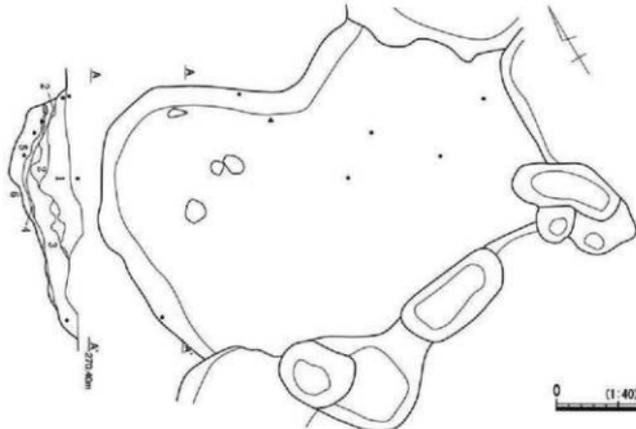


16号土坑
(1・2号坑中間)



19号土坑

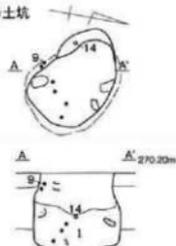
- 1 暗褐色土(10YR2/1) 2層の小ブロックを含む多、鐵土ブロック多、
- 2 暗褐色土(00YR5/3) 赤褐色土層、黒色土ブロック多、
- 3 暗褐色土(00YR5/3) 赤褐色土層、黒色土ブロック多、
- 4 暗褐色土(00YR5/3) 2層の小ブロックを含む多、
- 5 暗褐色土(00YR5/3) 赤褐色土層、黒色土ブロック多、
- 6 暗褐色土(00YR5/3) 赤褐色土層、黒色土ブロック多、
- 7 暗褐色土(00YR5/3) 赤褐色土層、黒色土ブロック多、
- 8 暗褐色土(00YR5/3) 赤褐色土層、黒色土ブロック多、
- 9 暗褐色土(00YR5/3) 赤褐色土層、黒色土ブロック多、
- 10 暗褐色土(00YR5/3) 赤褐色土層、黒色土ブロック多、



0 (1:40) 1m

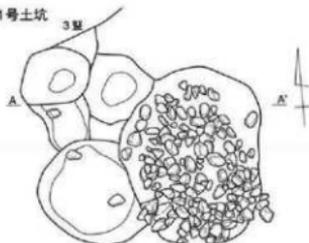
第6図 14~19号土坑

20号土坑

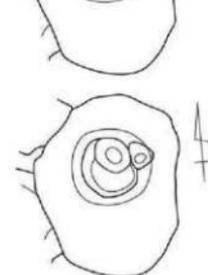
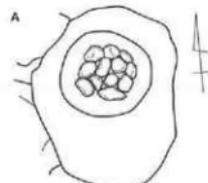


1 黒色粘質土 (10YR2/1) しまり有、粘性强、炭化物やや多。

21号土坑



1 黒褐色土 (10YR2/2) 炭化物多、炭化粒を全体に含み、黒味強、しまり・粘性强。
2 黒褐色土 (10YR2/2) 黒味強、炭化物やや多。
3 黒褐色土 (10YR2/2) 黒味強、炭化物やや多。
4 黄褐色粘質土
5 礫物

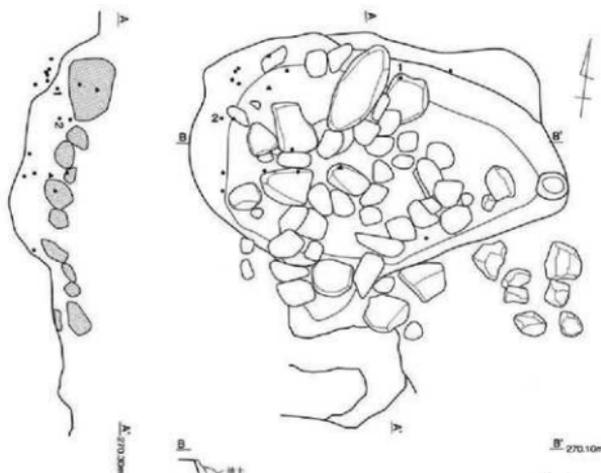


22号土坑



1 黒色粘質土 (10YR2/1) 黒褐色土と同じ。
2 鈍い黄褐色粘質土 (10YR4/2) 黒色土混。

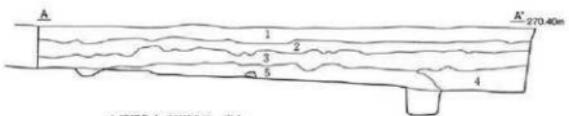
23号土坑



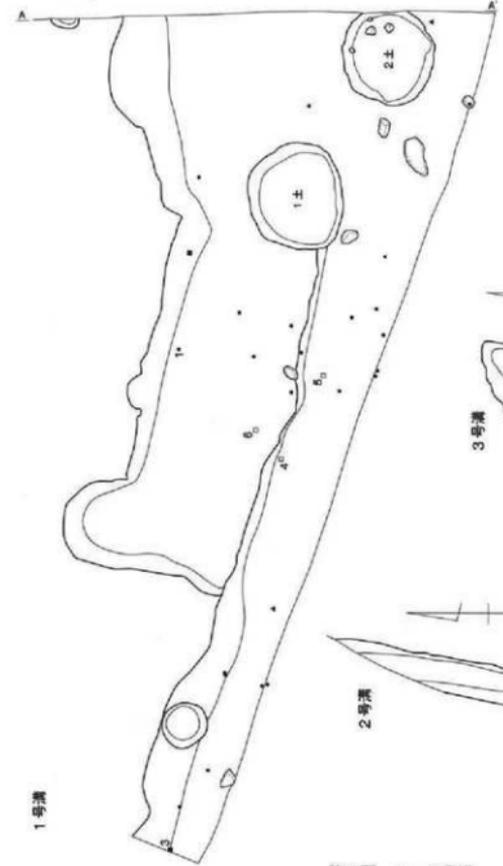
1 黒褐色土・焼土混合土 (10YR2/2) 焼土を含む。
2 黄褐色土 (10YR5/6)
3 黒褐色土 (10YR2/1) 黄褐色土小ブロック・サビ含む。
4 黄褐色土

第7図 20~23号土坑

0 (1:40) 1m

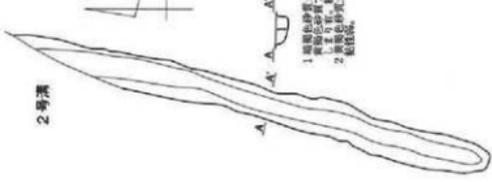


- 1 暗褐色土 (OYR3) 表土。
- 2 褐色土 (OYR4) 中の赤土。しまり、粘性强。
- 3 暗褐色砂質土 (OYR3) 腐化腐。硬少。土器片入。2層の小ブロック入。灰化砂質土をまばらに全体の包含。
- 4 暗褐色砂質土 (OYR3) 土器片。赤色粒少。灰化物含む。
- 5 腐りも弱味有。しまり有。粘性强。
- 6 暗褐色砂質土 (OYR3) 4層よりやや黄味有。腐・灰化物・赤色粒少。しまり有。粘性强。
- 7 褐色砂質土 (OYR6) 腐。

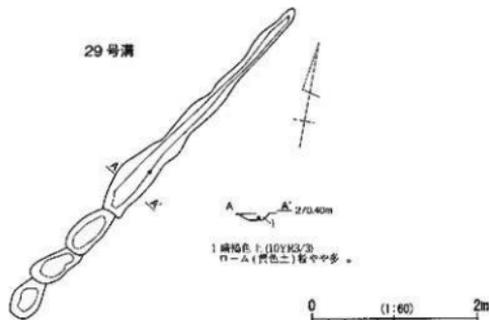
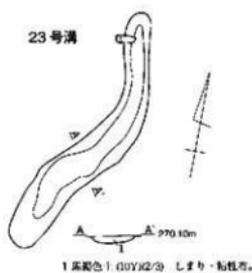
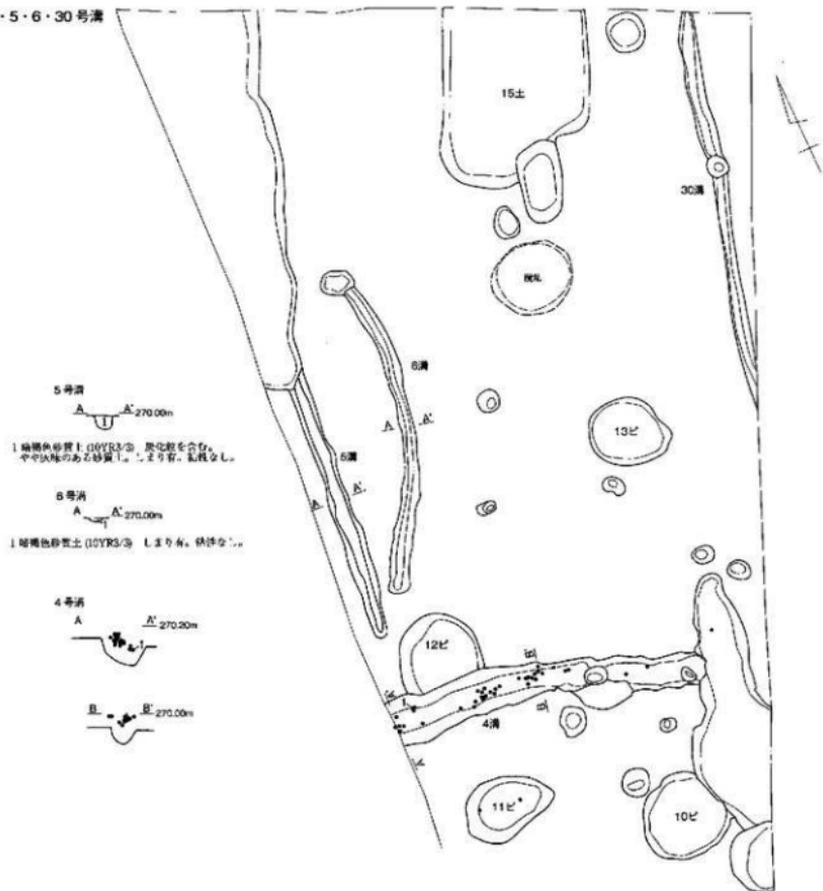


- 1 暗褐色砂質土 (OYR3) 腐。
- 2 暗褐色砂質土 (OYR3) 腐。
- 3 暗褐色砂質土 (OYR3) 腐。

- 1 暗褐色砂質土 (OYR3) 腐。
- 2 暗褐色砂質土 (OYR3) 腐。
- 3 暗褐色砂質土 (OYR3) 腐。

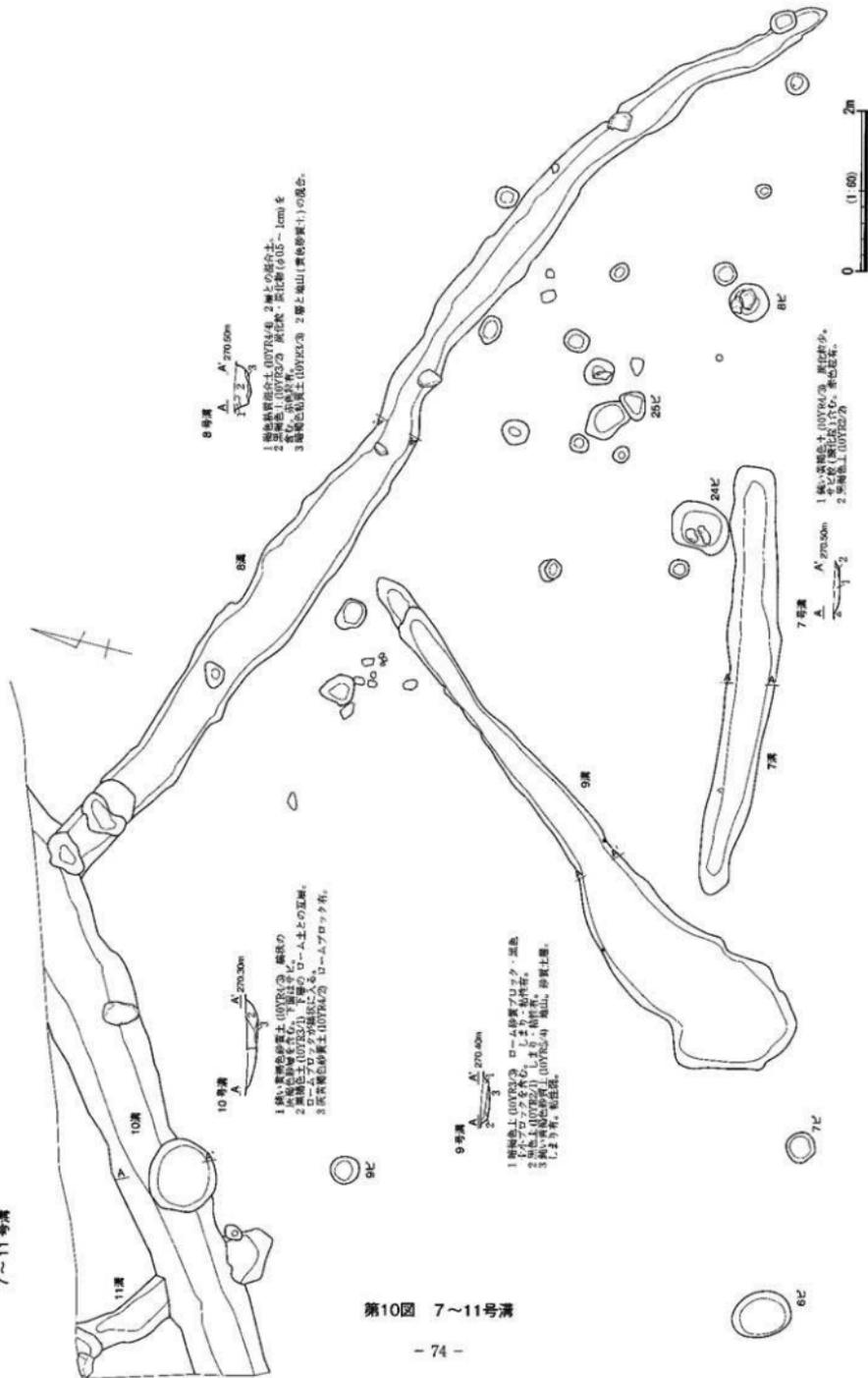


第8図 1~3号溝

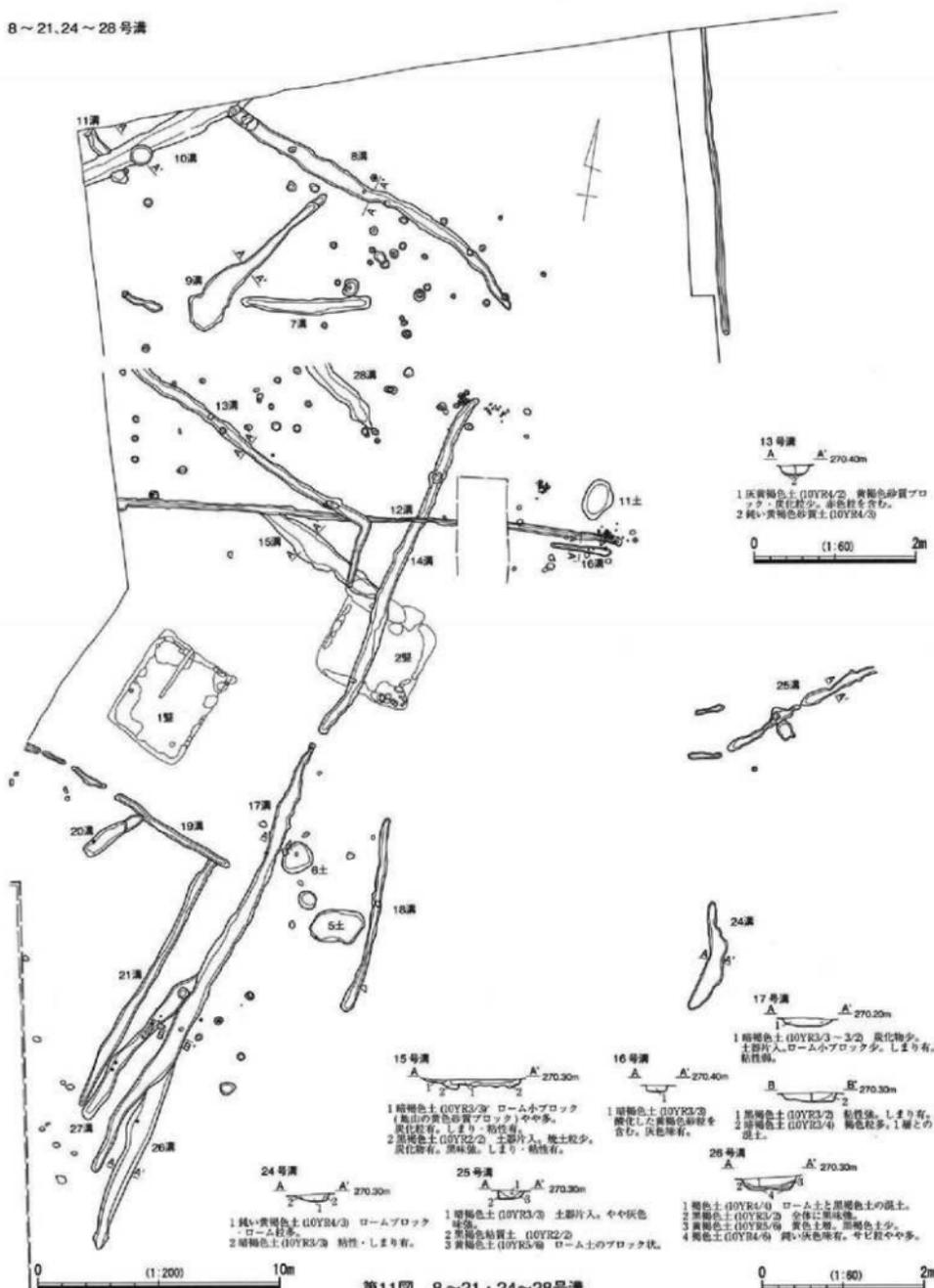


第9図 4・6・23・29・30号溝

0 (1:60) 2m



第10図 7~11号溝



10号溝
A A' 270.40m

1 灰青褐色土 (OYR3/2) 黄褐色砂質ブロック。灰化部少。赤色層を含む。
2 純い黄褐色砂質土 (OYR3/3)

0 (1:60) 2m

17号溝
A A' 270.20m

1 暗褐色土 (OYR3/3-3/2) 灰化物少。
土層内、ローム小ブロック少。しまり有。
粘性强。

B B' 270.30m

1 暗褐色土 (OYR3/2) 粘性强。しまり有。
2 暗褐色土 (OYR3/4) 褐色粒多。1層との混土。

15号溝
A A' 270.30m

1 暗褐色土 (OYR3/3) ローム小ブロック (奥山の黄褐色砂質ブロック) やや多。灰化部有。しまり・粘性强。
2 暗褐色土 (OYR3/2) 土層片入。粘土粒少。灰化部有。灰味強。しまり・粘性强。

16号溝
A A' 270.40m

1 暗褐色土 (OYR3/2) 灰化した黄褐色砂質層を含む。灰色層有。

24号溝
A A' 270.30m

1 純い黄褐色土 (OYR3/3) ロームブロック・ローム粒多。
2 暗褐色土 (OYR3/2) 粘性强・しまり有。

25号溝
A A' 270.30m

1 暗褐色土 (OYR3/2) 土層片入。やや灰色味強。
2 黄褐色粘質土 (OYR2/2)
3 黄褐色土 (OYR3/3) ローム土のブロック状。

28号溝
A A' 270.30m

1 暗褐色土 (OYR3/4) ローム土と暗褐色土の混土。
2 黄褐色土 (OYR3/2) 全体に暗味強。
3 黄褐色土 (OYR3/6) 黄色土層。暗褐色土少。
4 黄褐色土 (OYR3/6) 純い灰色層有。サビ粒やや多。

第11図 8~21・24~28号溝

完備狀況



確出土狀況



0 (1:60) 2m

第13圖 祭祀坑

祭祀坑 遺物出土状況



須恵系



土製品・鉄製品



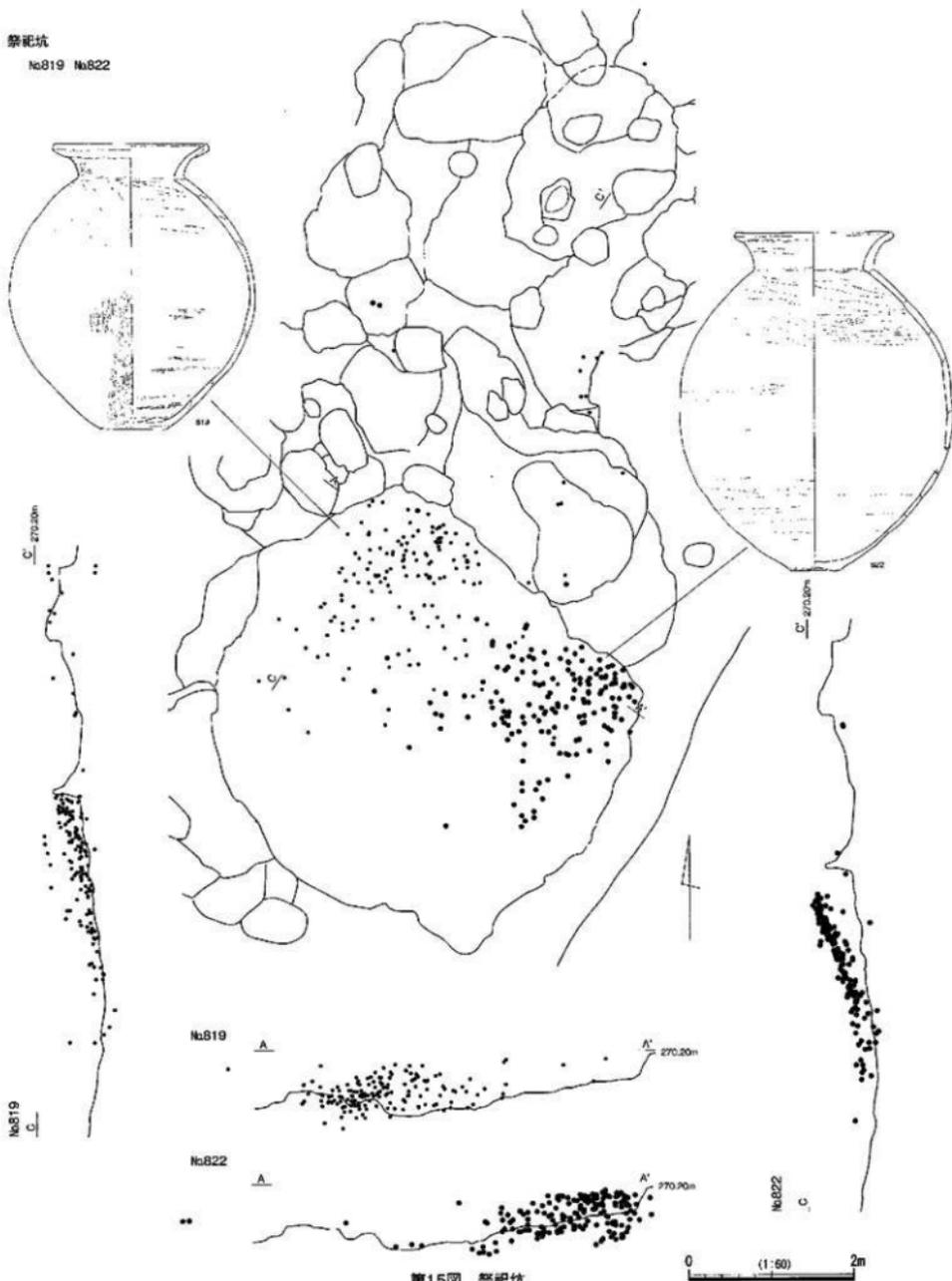
石製品



第14図 祭祀坑

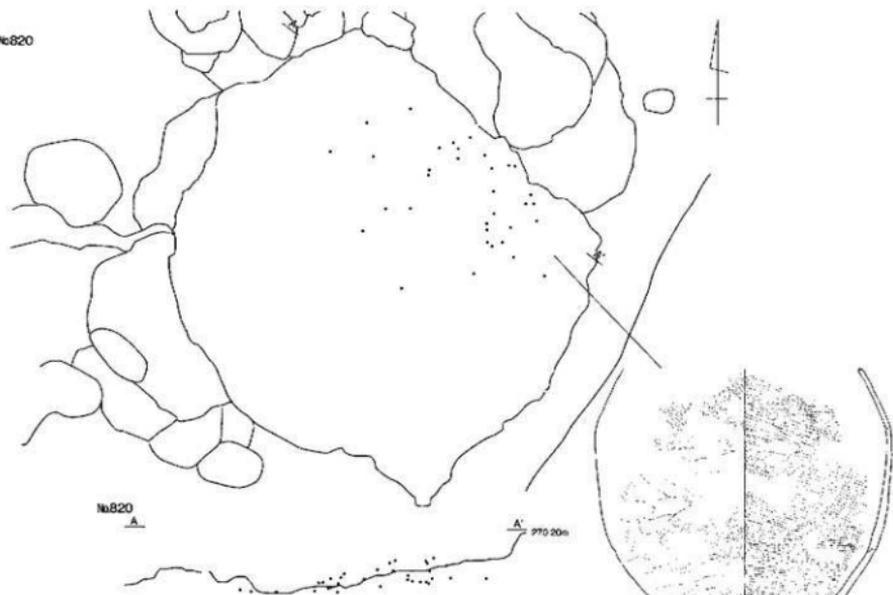
祭祀坑

No.819 No.822

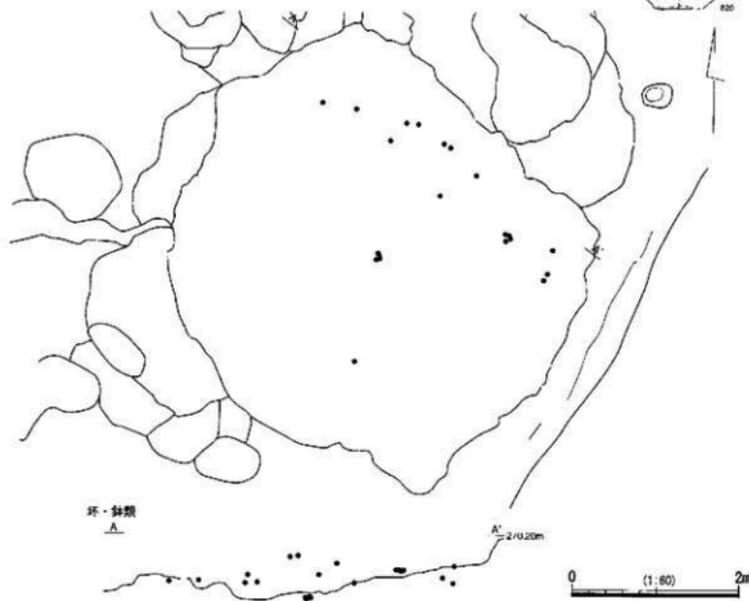


第15圖 祭祀坑

No.820

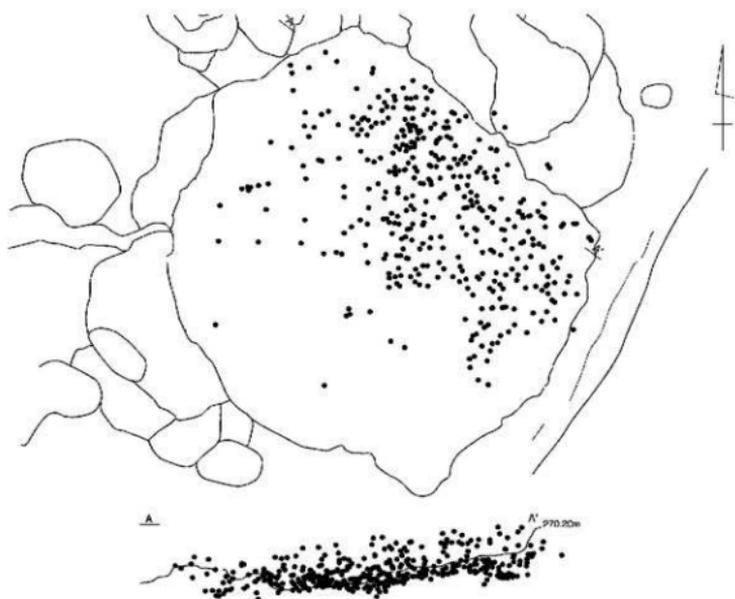


环・鉢類

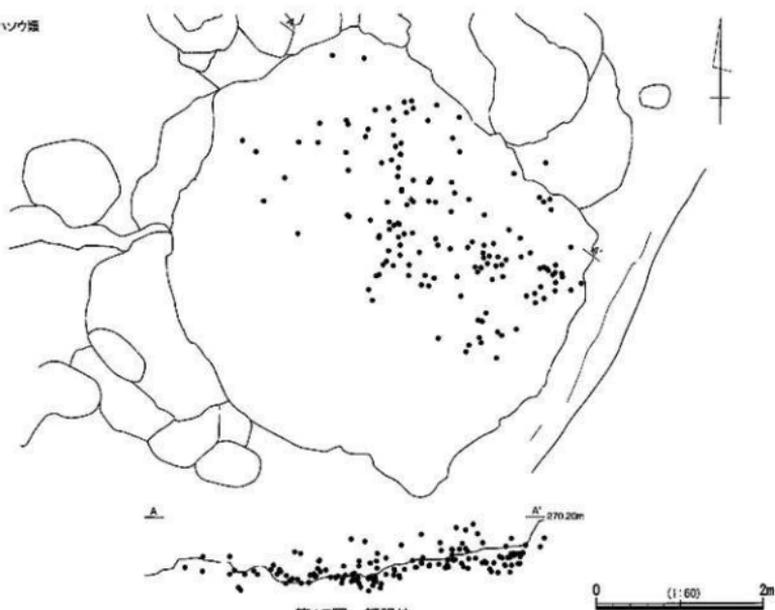


第16図 祭祀坑

高坪跡

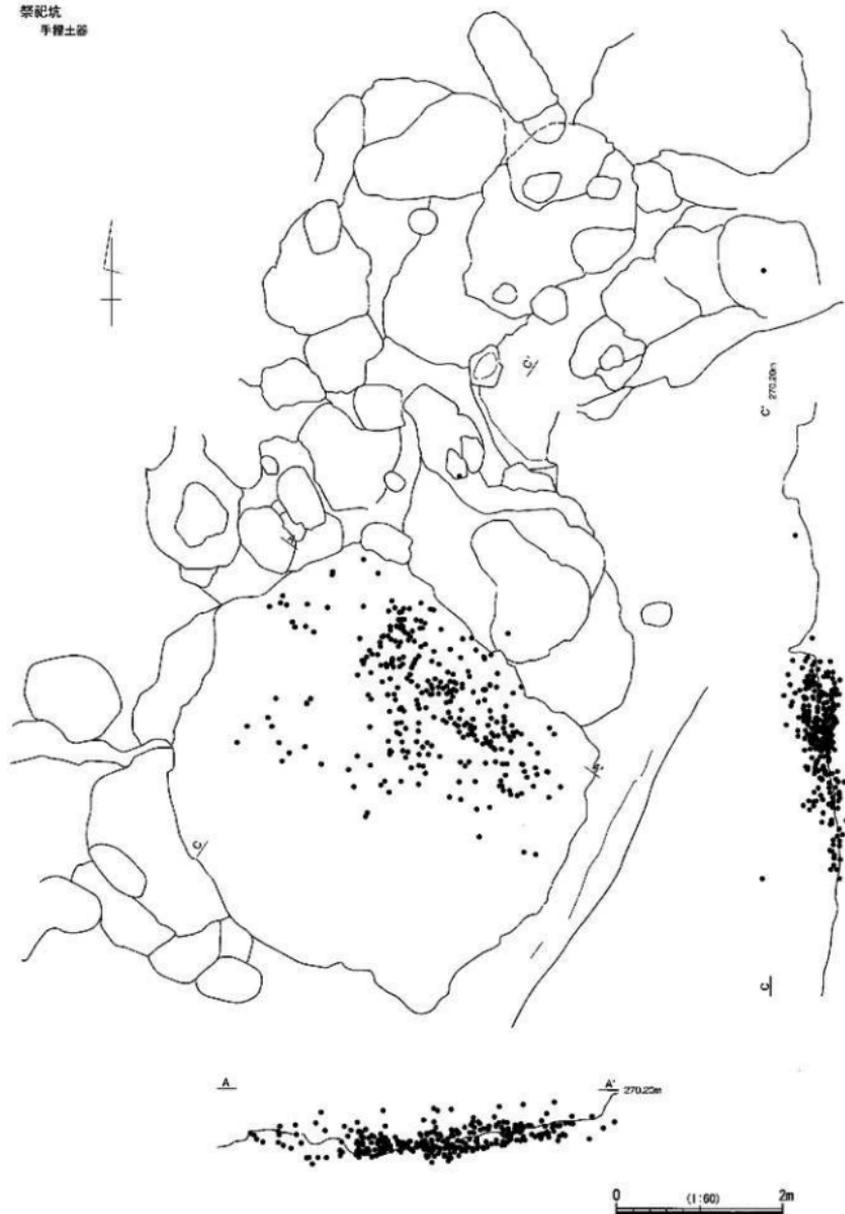


小形壘-壘・ハンウ跡



第17図 祭祀坑

祭祀坑
手標土器



第18圖 祭祀坑

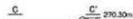


第19図 1・4号墳

2号墳



- 1 暗褐色砂質土 (0YR2/0) 砂物・土器多。
- 2 暗褐色砂質土 (0YR2/0) 土器を多数含む。褐色ブロックをのみ多。
- 3 暗褐色砂質土 (0YR2/0) 砂物の多い土。炭化物。
- 4 暗褐色砂質土 (0YR2/0) 2層と黄色砂質土の混合土。
- 5 黄褐色土 (0YR5/0) コーアブツカ。
- 6 黄褐色土 (0YR2/0) 黄褐色土 (0YR5/0)

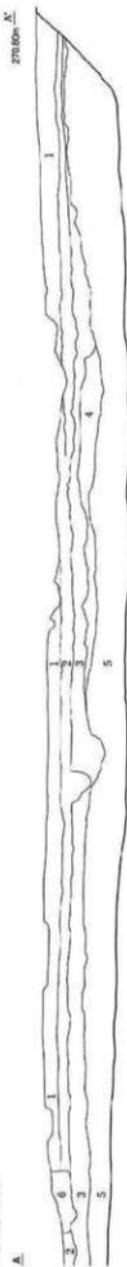


- 1 暗褐色砂質土 (0YR2/0) 黄色砂質土を多く含む。土器は少ない。



1 暗褐色砂質土 (0YR2/0) 砂物・土器多。
 2 暗褐色砂質土 (0YR2/0) 土器を多数含む。褐色ブロックをのみ多。
 3 暗褐色砂質土 (0YR2/0) 砂物の多い土。炭化物。
 4 暗褐色砂質土 (0YR2/0) 2層と黄色砂質土の混合土。
 5 黄褐色土 (0YR5/0) コーアブツカ。
 6 黄褐色土 (0YR2/0) 黄褐色土 (0YR5/0)

1号墳(下層)



- 1 黒色粘板岩土 (01734) 中や黄色砂土、土砂、粘石等。
- 2 黒色粘板岩土 (01735) 中や黄色砂土、土砂、粘石等。
- 3 黒色粘板岩土 (01734) 黒色粘板岩、土砂、粘石等。
- 4 黒色粘板岩土 (01734) 黒い砂土、粘石等。
- 5 黒色粘板岩土 (01735) 粘石等。
- 6 黒色粘板岩土 (01732) 粘石等。



黒色粘板岩土と黒色粘板岩土の互層。

- 1 黒色粘板岩土 (01722) 黒色粘板岩土と黒色粘板岩土の互層。
- 2 黒色粘板岩土 (01722) D-1 (黒色) プログラ (65~8cm) やや多。
- 3 黒色粘板岩土 (01722) 黒色粘板岩土と黒色粘板岩土の互層、黄色土等。
- 4 黒色粘板岩土 (01722) 黒色粘板岩土と黒色粘板岩土の互層、黄色土等。
- 5 黒色粘板岩土 (01725) 粘石等。

第21図 1・4号墳



- 1 黒色粘板岩土 (01722) D-1 土砂。
- 2 黒色粘板岩土 (01722) と黒色粘板岩土 (01726) の互層。
- 3 黒色粘板岩土 (01725) 。



- 1 黒色粘板岩土 (01722) 。
- 2 黒色粘板岩土 (01725) 。

- 1 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 2 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 3 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 4 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 5 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 6 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 7 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 8 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 9 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 10 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 11 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 12 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 13 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 14 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 15 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 16 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 17 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 18 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 19 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 20 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 21 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 22 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 23 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 24 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 25 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 26 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 27 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 28 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 29 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 30 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 31 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 32 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 33 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 34 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 35 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 36 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 37 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 38 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 39 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 40 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 41 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 42 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 43 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 44 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 45 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 46 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 47 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 48 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 49 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 50 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 51 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 52 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 53 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 54 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 55 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 56 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 57 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 58 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 59 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 60 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 61 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 62 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 63 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 64 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 65 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 66 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 67 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 68 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 69 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 70 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 71 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 72 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 73 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 74 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 75 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 76 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 77 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 78 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 79 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 80 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 81 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 82 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 83 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 84 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 85 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 86 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 87 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 88 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 89 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 90 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 91 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 92 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 93 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 94 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 95 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 96 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 97 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 98 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 99 黒色粘板岩土 (01725) 。
- 100 黒色粘板岩土 (01725) 。

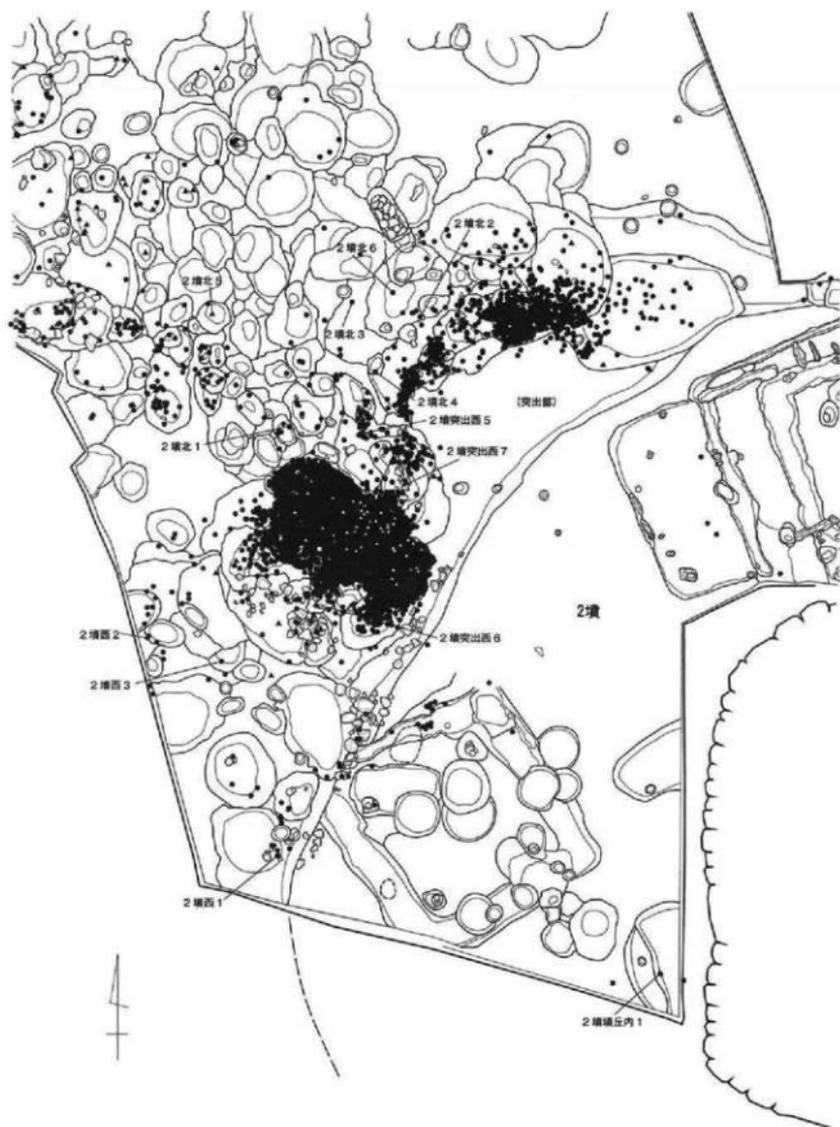
4号墳



- 1 黒い黄褐色土 (01724) 。
- 2 黒色粘板岩土 (01724) 。
- 3 黒色粘板岩土 (01724) 。

黒色の沖で土を多く含む。

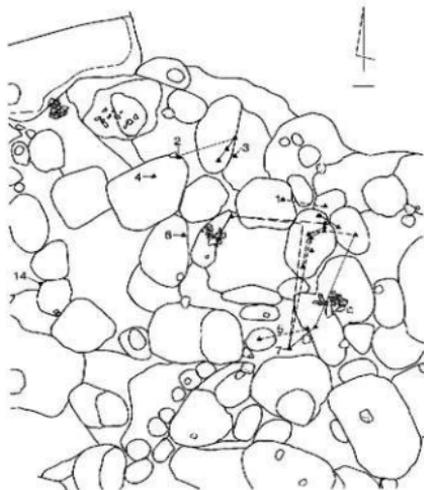




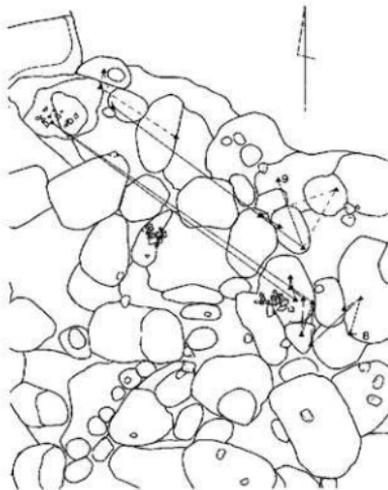
第22図 2号墳

5号墳

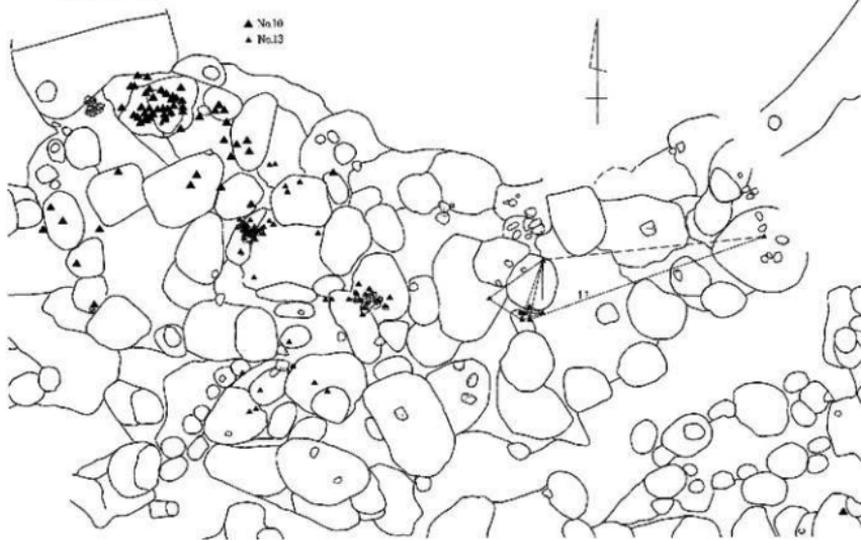
No.1 ~ 7・14



No.8・9



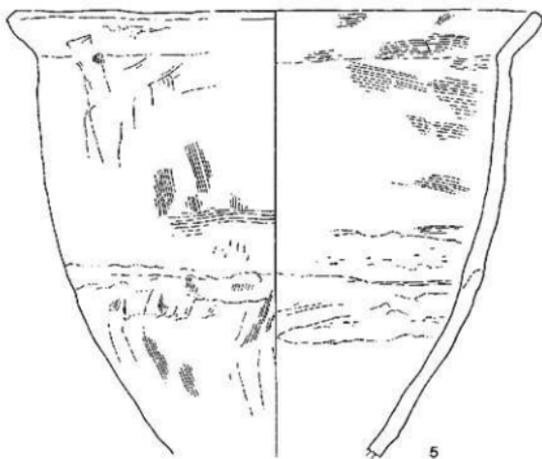
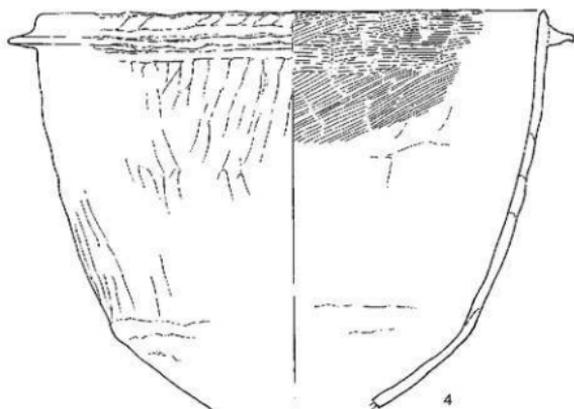
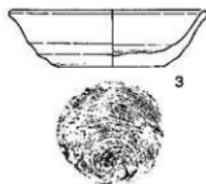
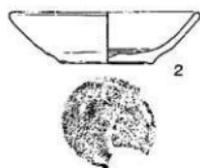
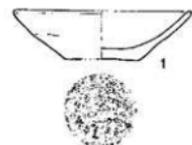
No.10・11・13



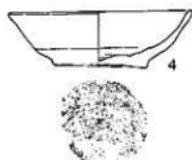
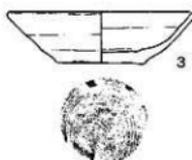
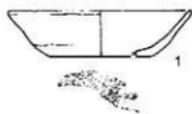
0 (1:120) 4m

第25図 5号墳

1号竖穴



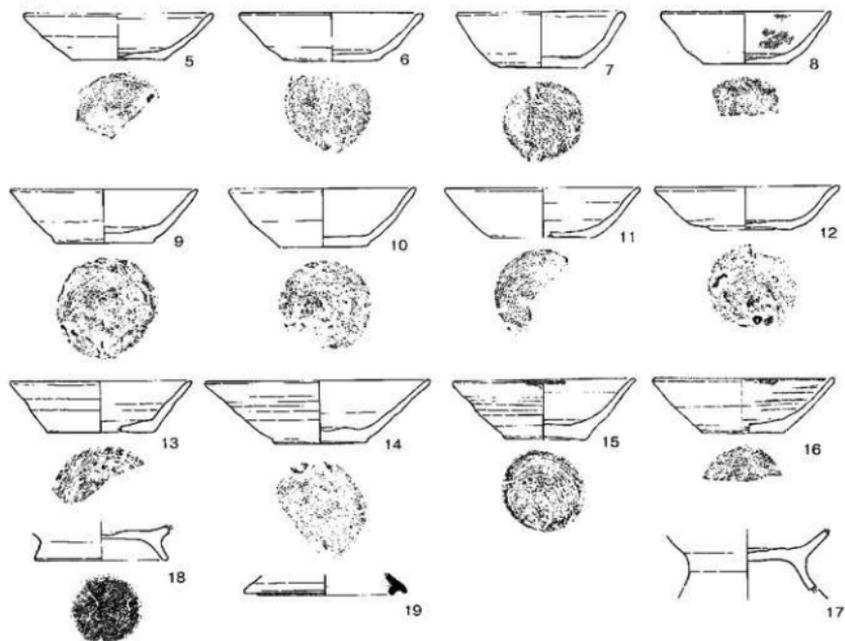
2号竖穴



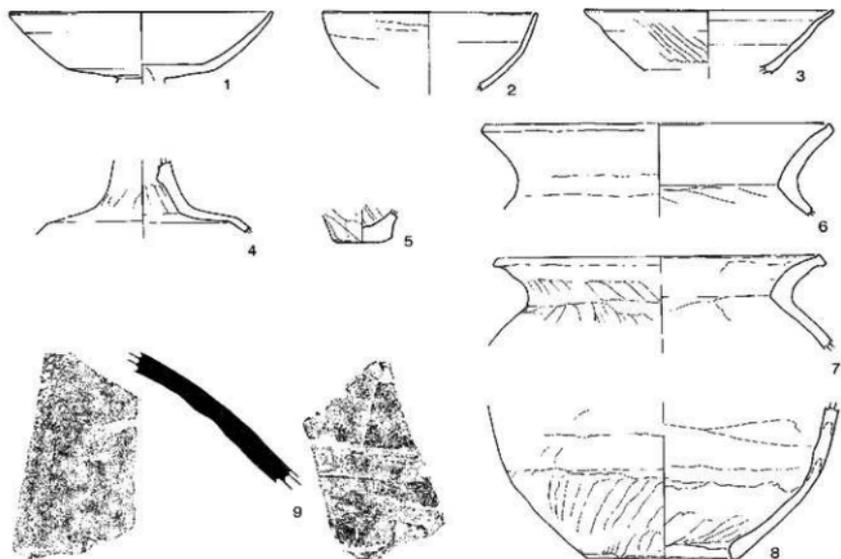
第26图 1・2号竖穴遺物

0 (1:3) 10cm

2号竖穴



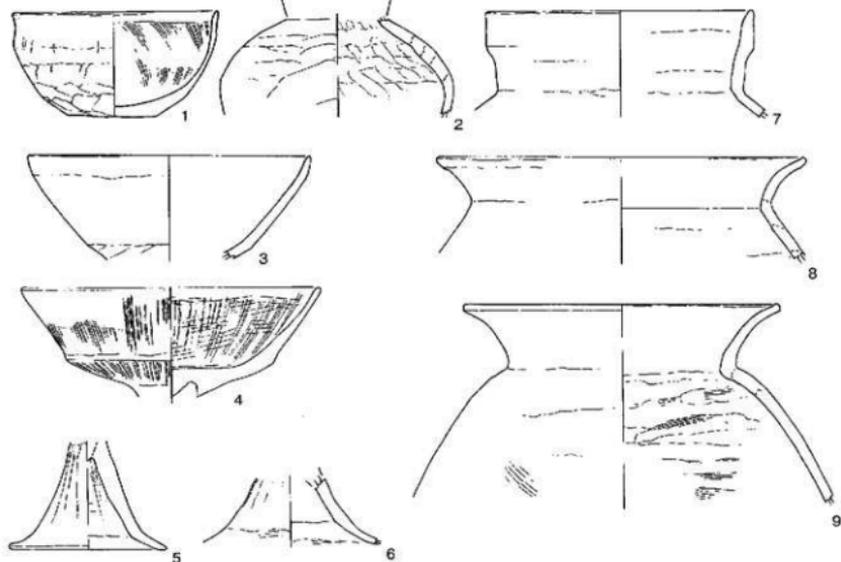
3号竖穴



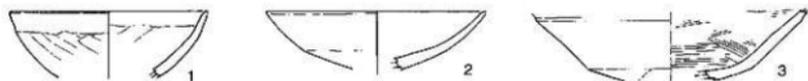
第27图 2・3号竖穴遺物

0 1:3 10cm

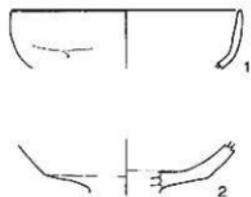
4号整穴



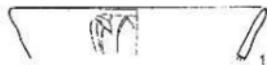
5号整穴



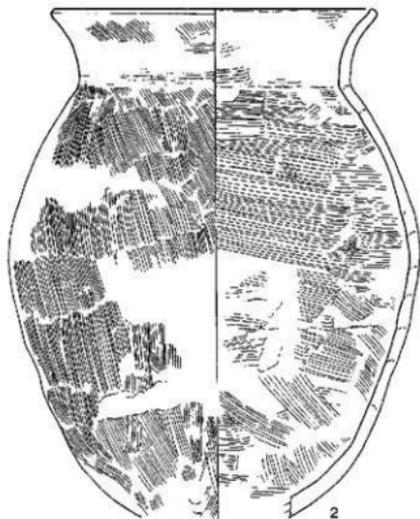
6号整穴



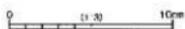
3号土坑



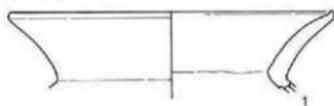
4号土坑



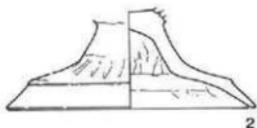
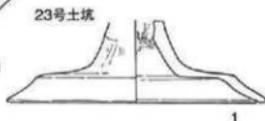
第28图 4~6号整穴、3·4土坑遺物



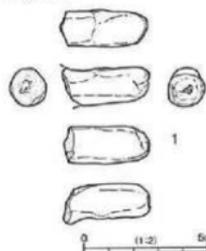
18号土坑



23号土坑

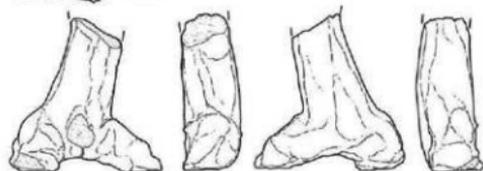


2号ピット

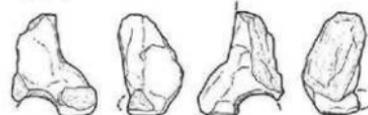
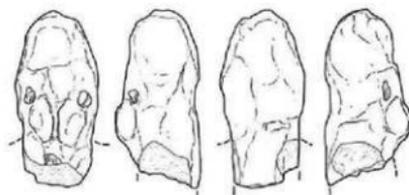


0 (1:2) 5cm

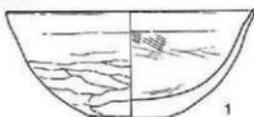
1号溝



0 4-6 (1:2) 5cm



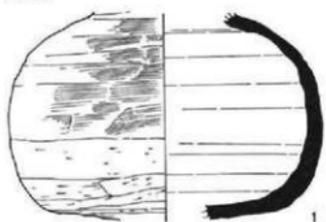
4号溝



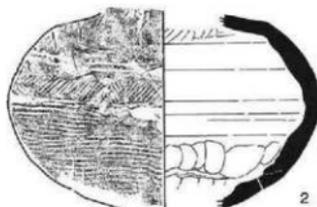
14号溝



21号溝



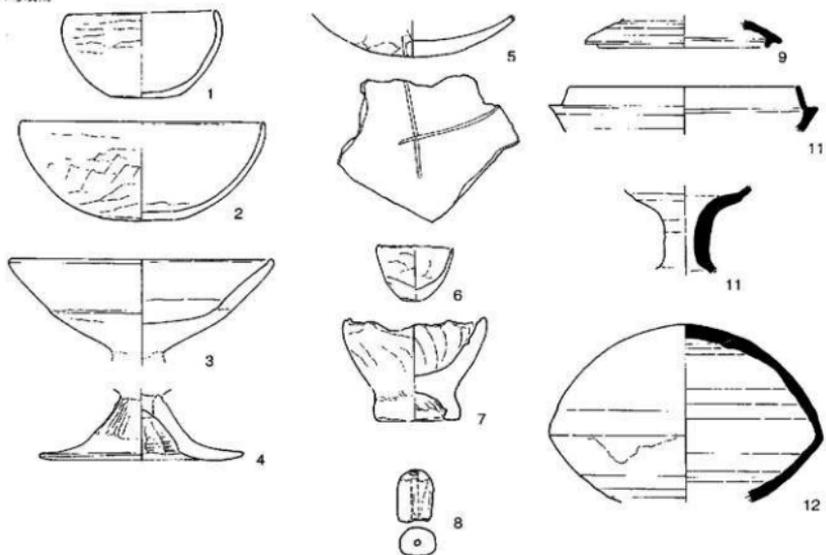
27号溝



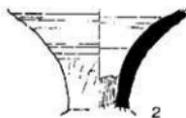
0 (1:3) 10cm

第29回 18・23号土坑、1・4・14・21・27号溝、2号ピット遺物

1号墳南



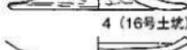
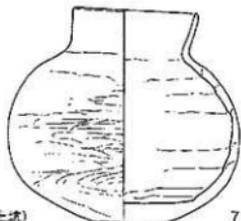
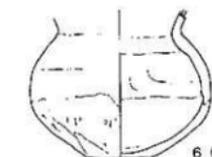
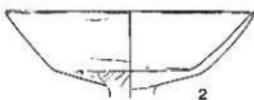
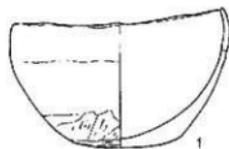
1号墳東



1号墳西



1・2号墳中間 (16号土坑)



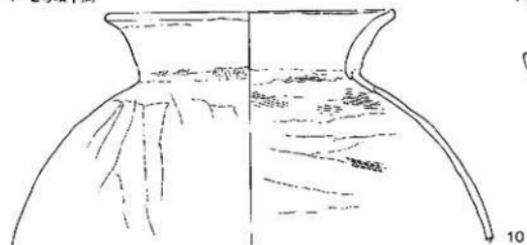
6 (16号土坑)

7 (16号土坑)

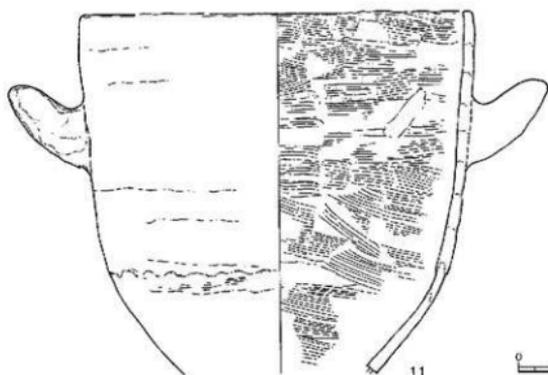
0 (1.3) 10cm

第30圖 1号墳南・東・西、1・2号墳中間遺物

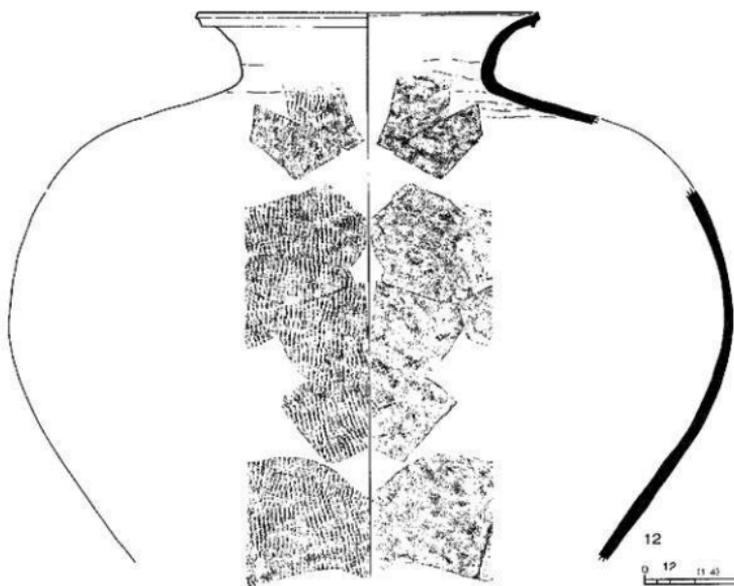
1・2号墳中間



1号墳 墳丘内



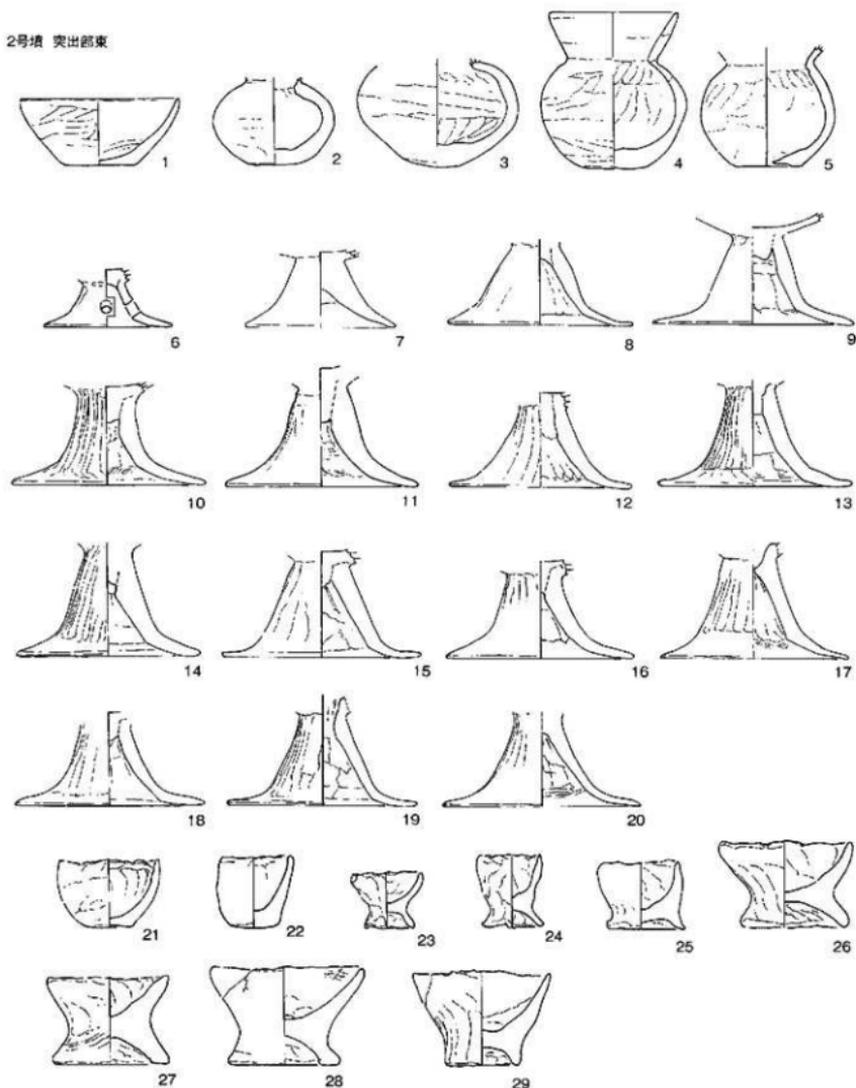
0 10cm



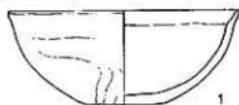
0 10cm

第31圖 1・2号墳中間、1号墳墳丘内遺物

2号墳 突出部東



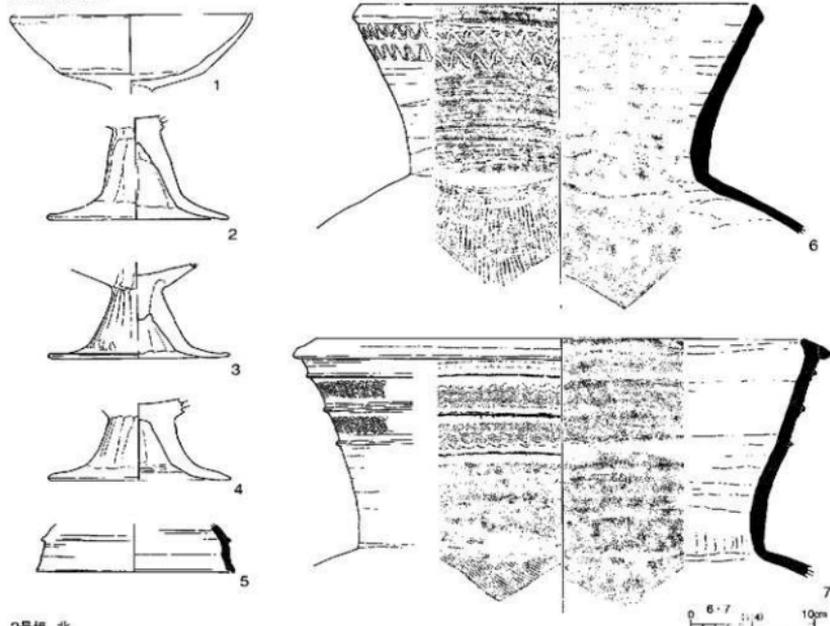
2号墳 突出部中



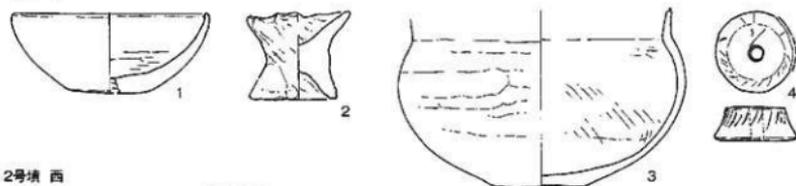
0 1 3 10cm

第32図 2号墳突出部東・中遺物

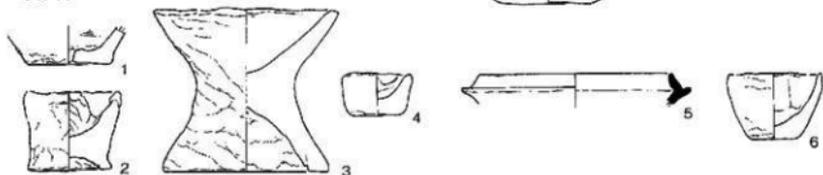
2号墳 突出部西



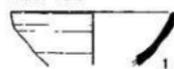
2号墳 北



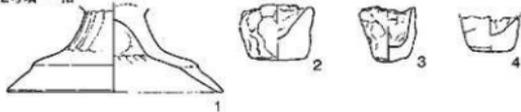
2号墳 西



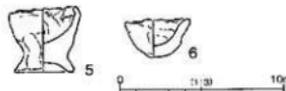
2号墳 周溝



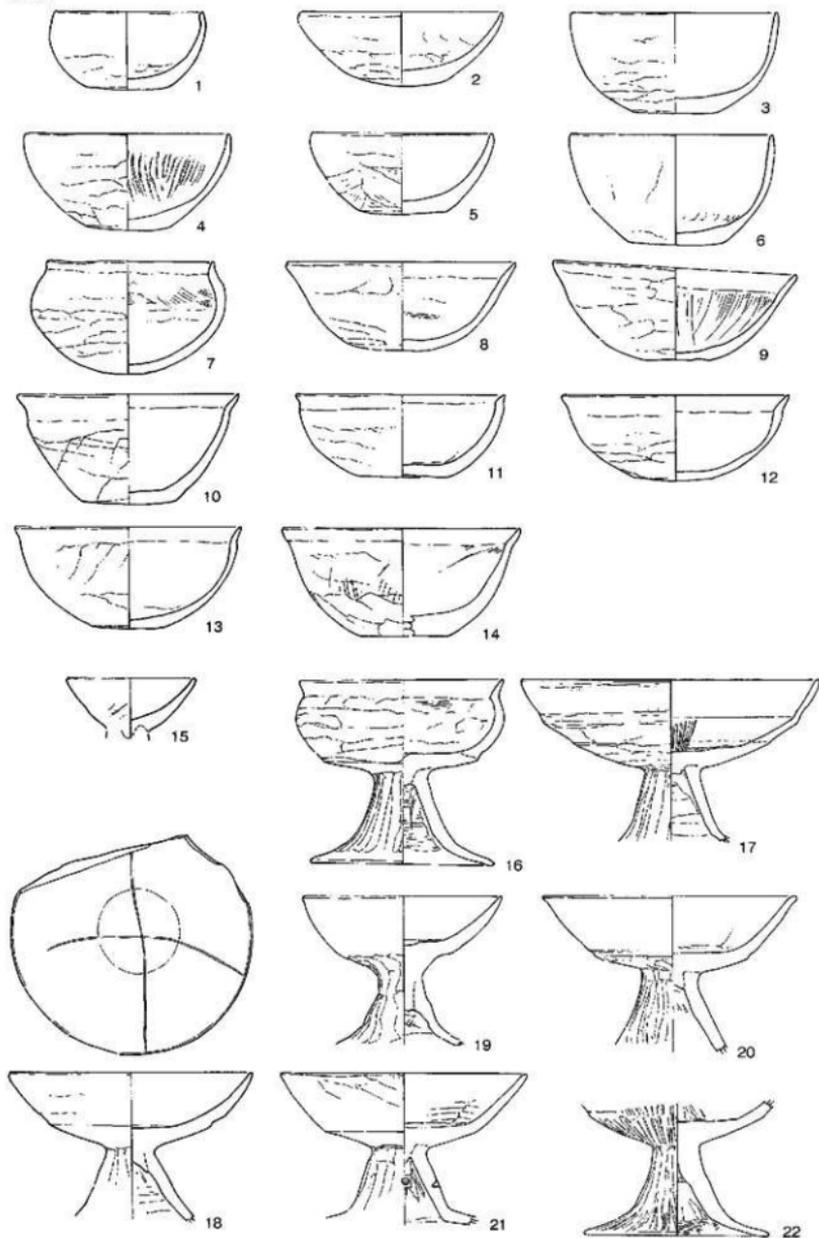
2号墳 一括



2号墳 墳丘内

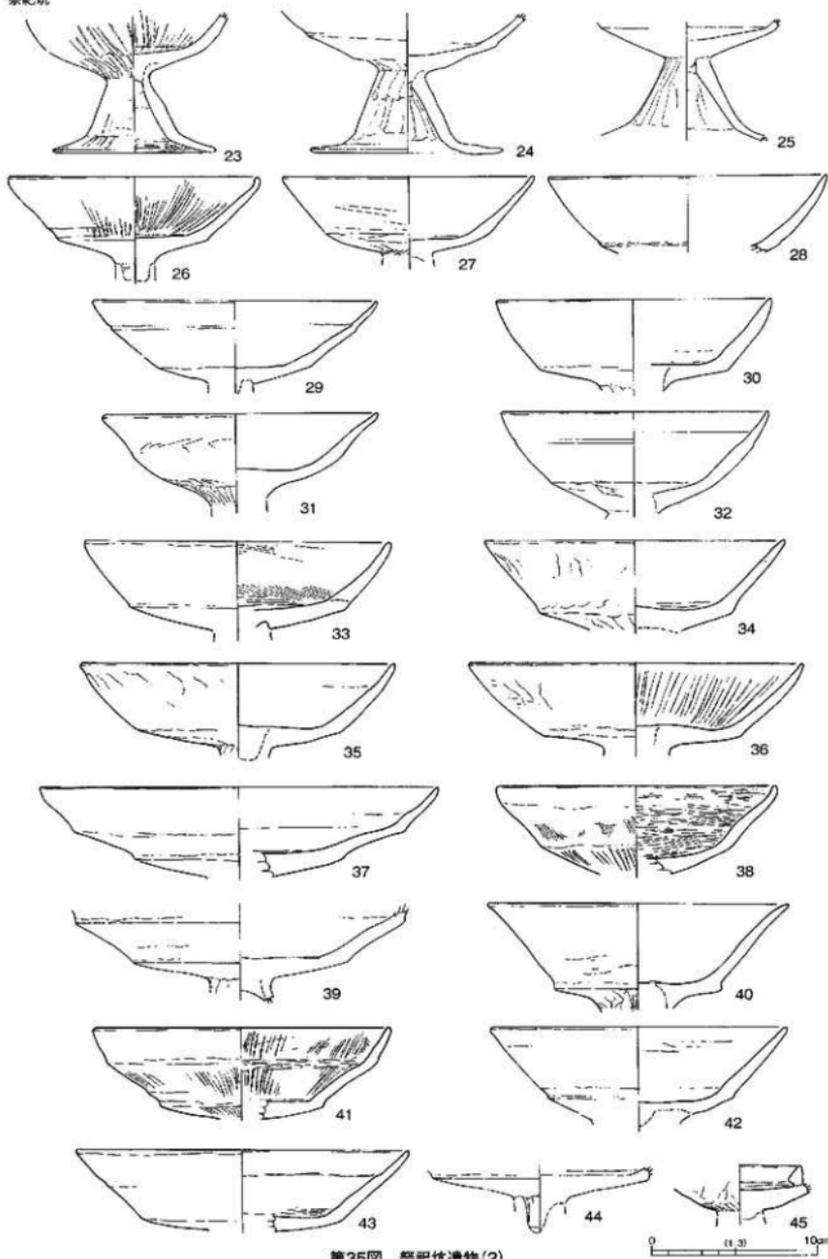


第33図 2号墳突出西、2号墳北・西、北ビット・周溝・一括・墳丘内遺物



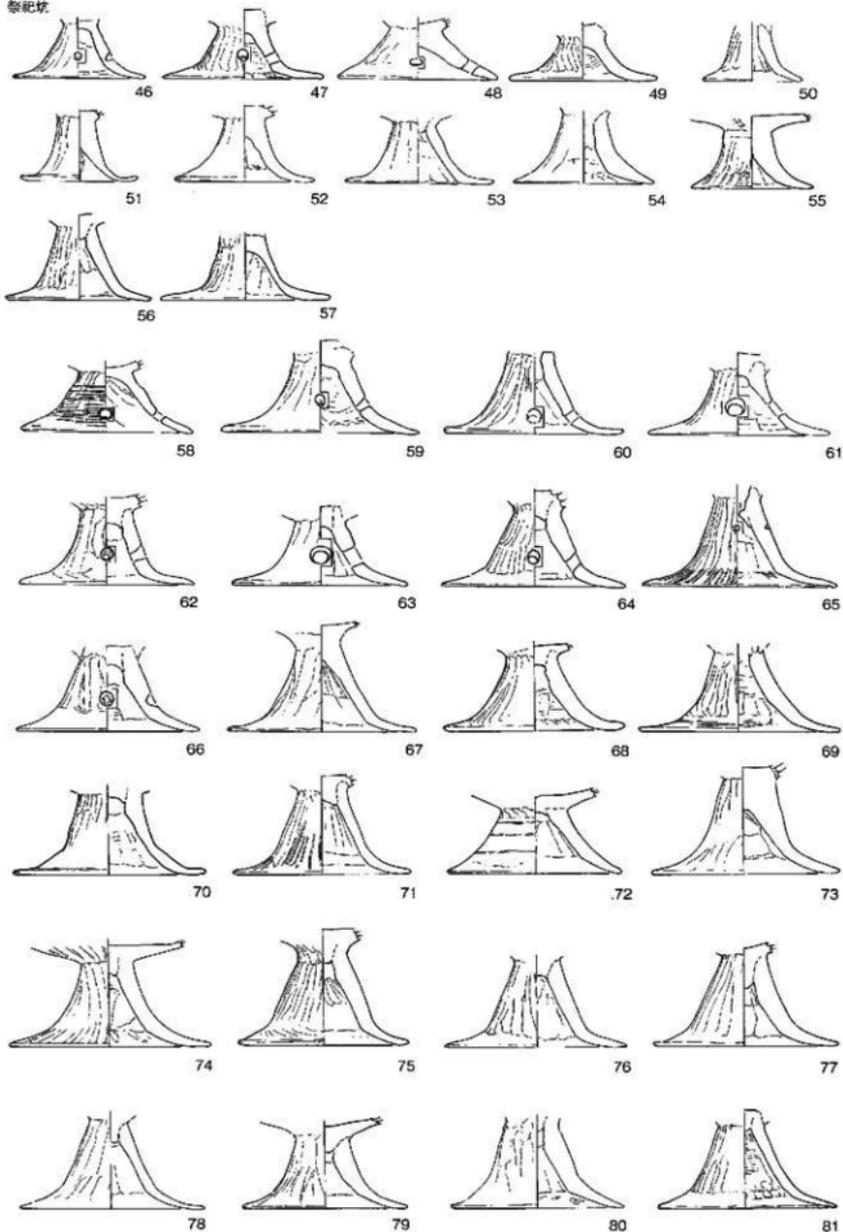
第34图 祭祀坑遺物(1)

祭祀坑



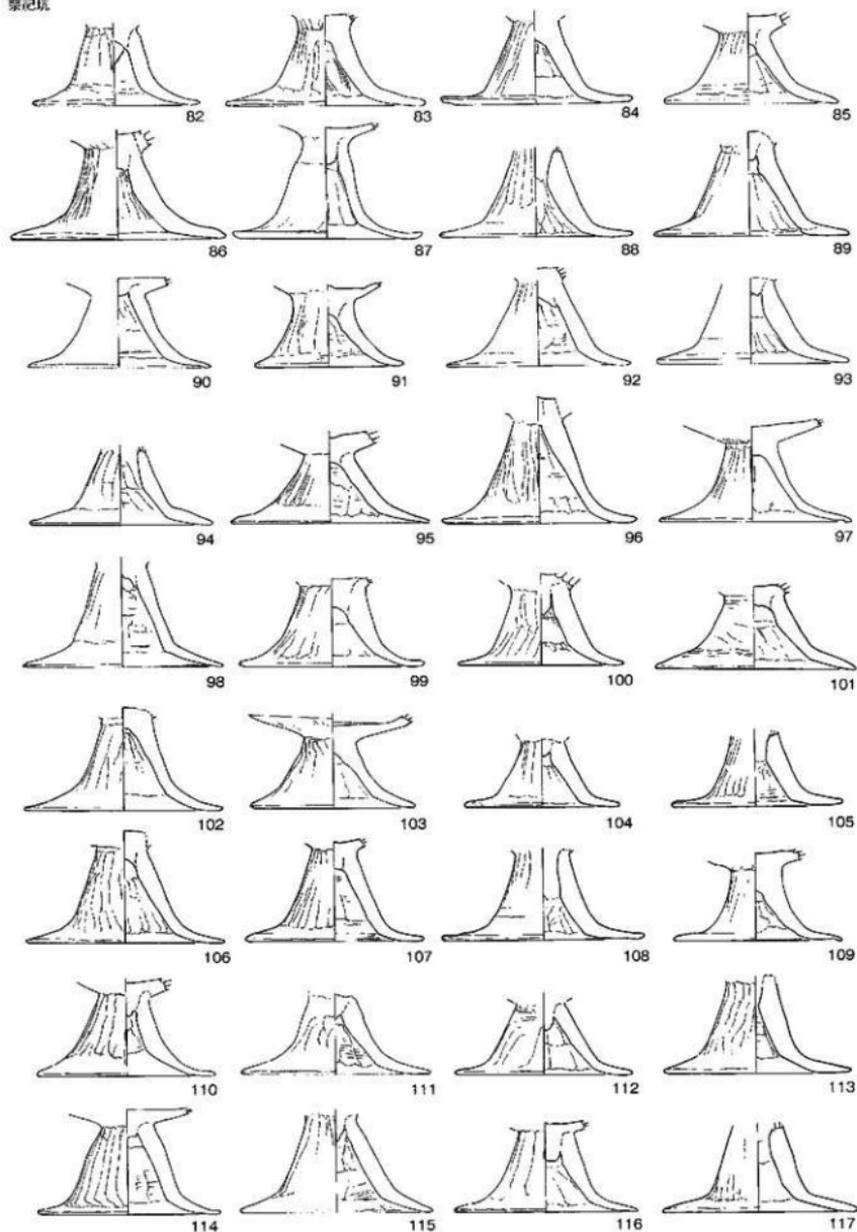
第35图 祭祀坑遺物(2)

祭祀坑



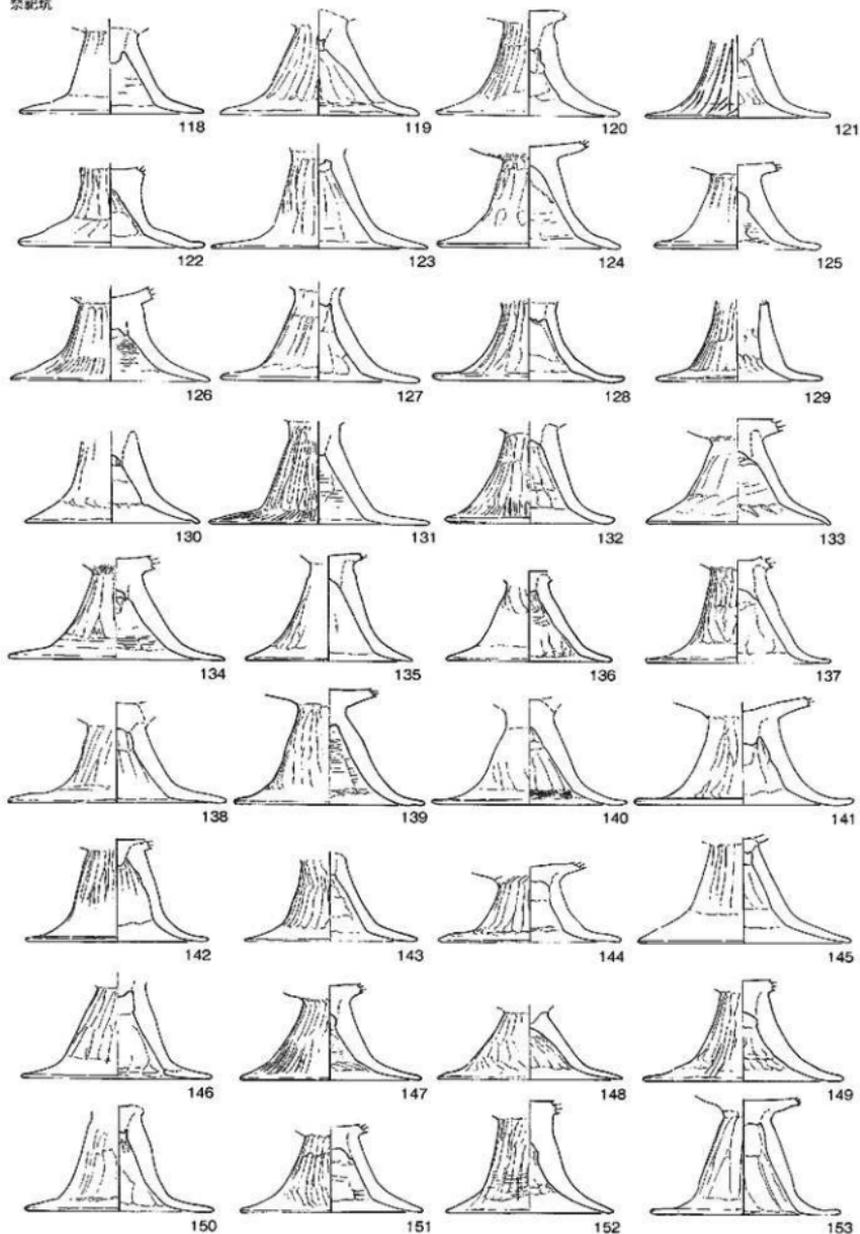
第36圖 祭祀坑遺物(3)



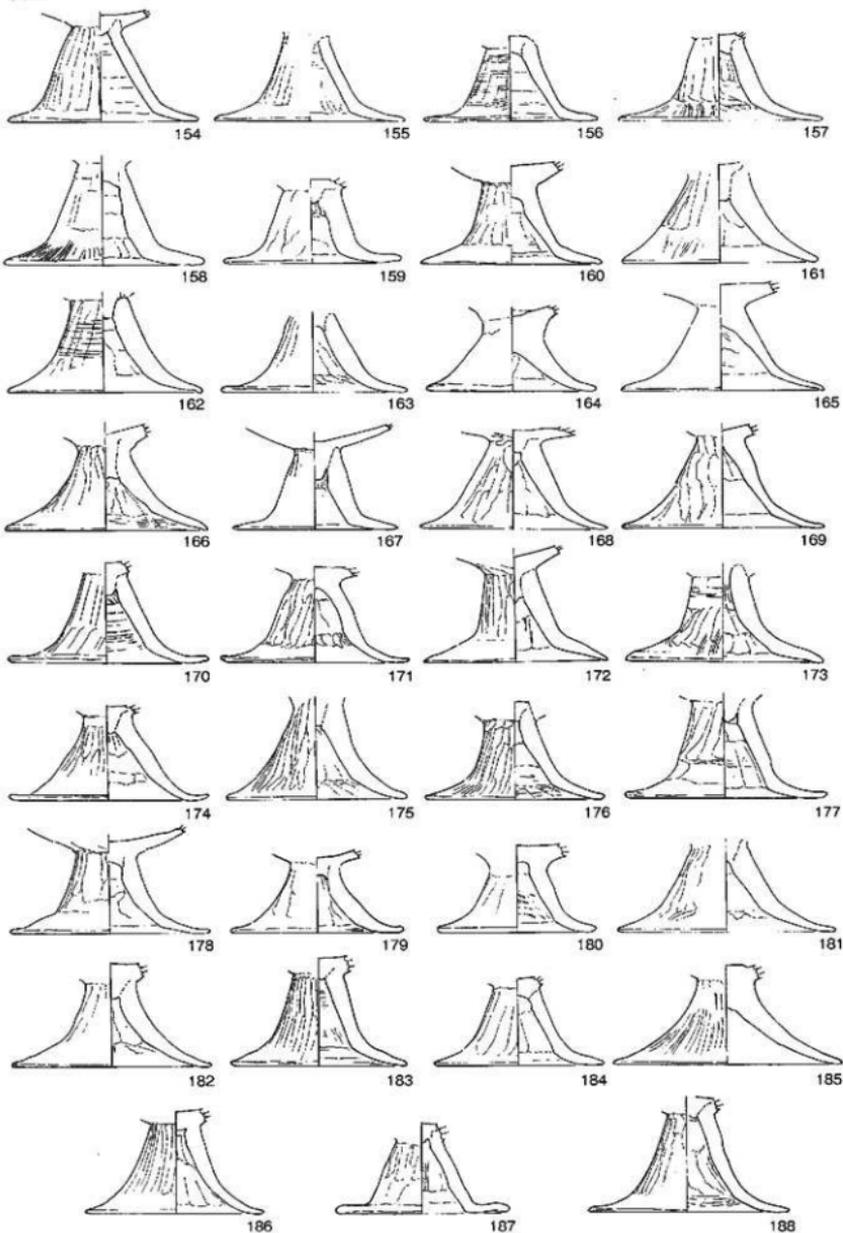


第37圖 祭祀坑遺物(4)





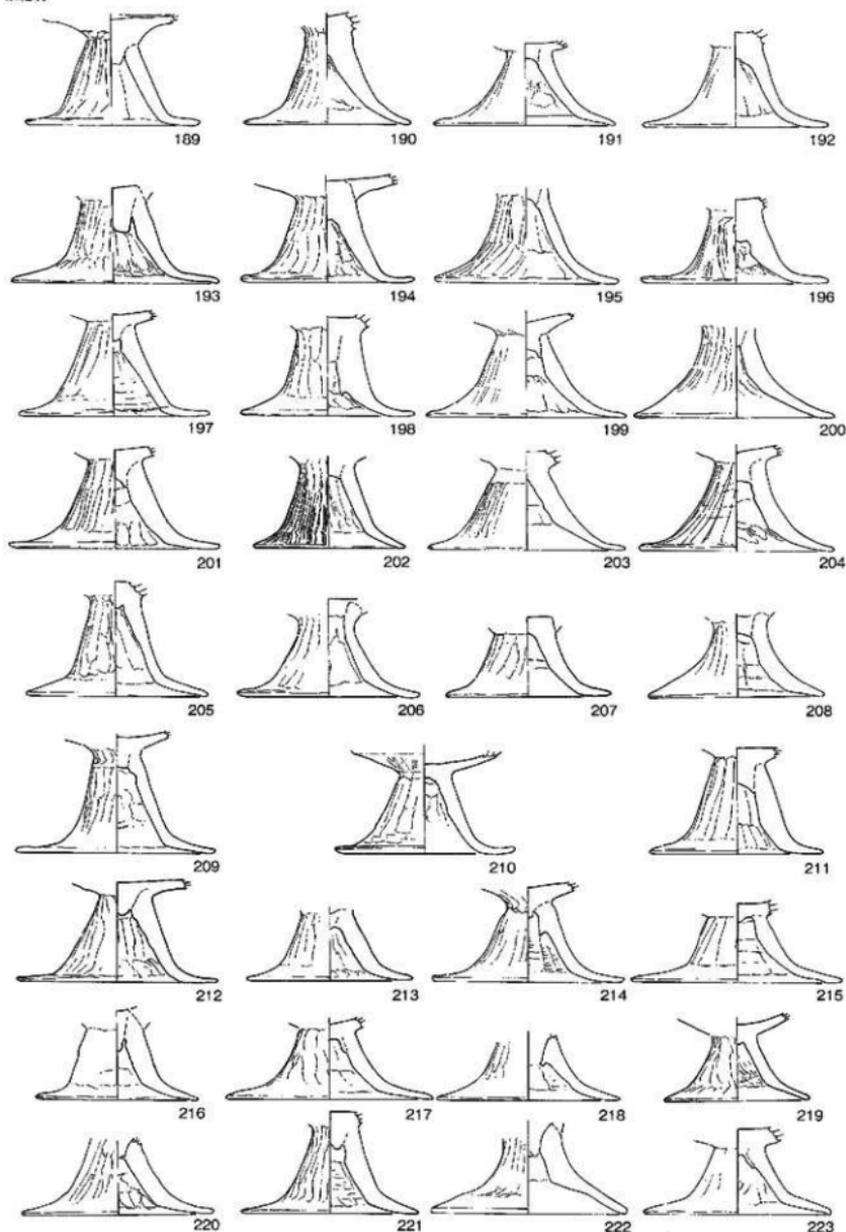
第38圖 祭祀坑遺物(5)



第39图 祭祀坑遺物(6)

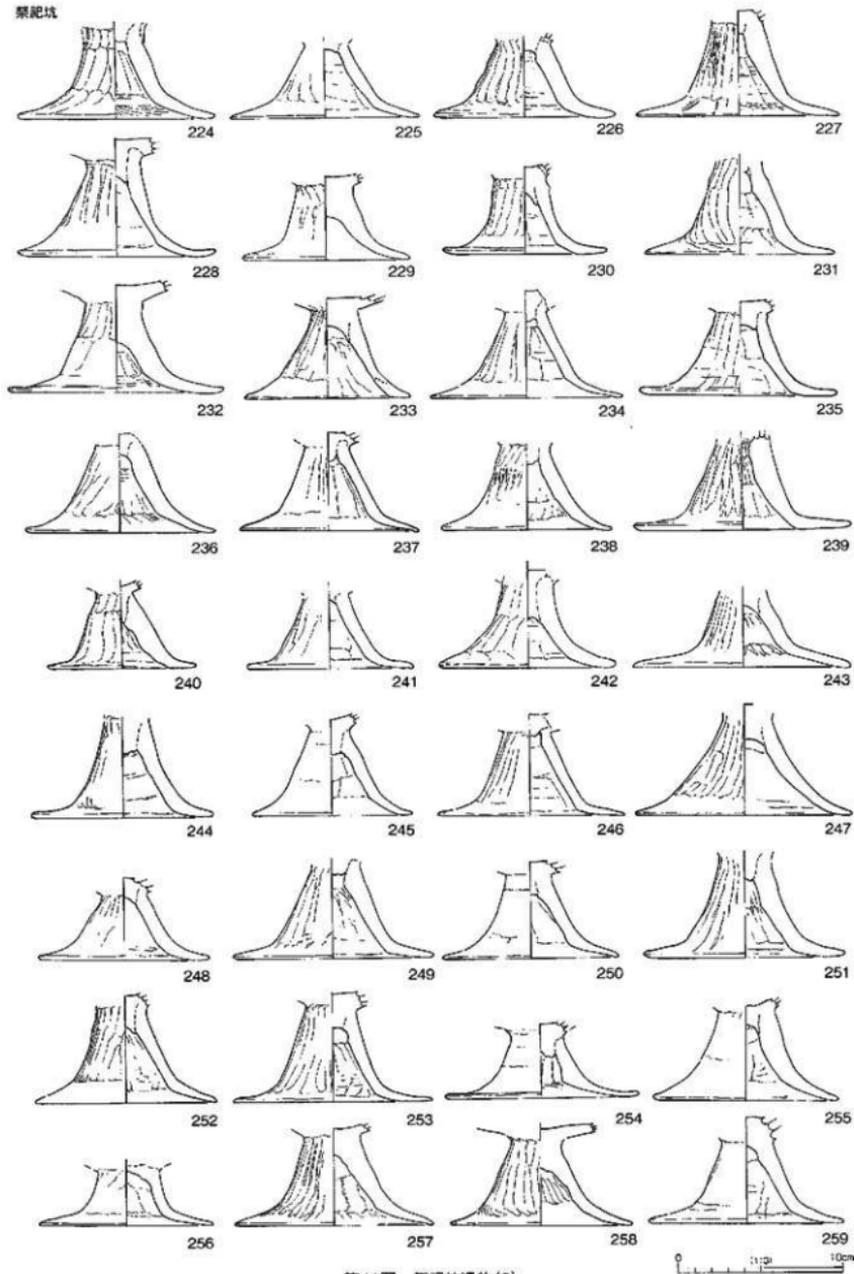


祭祀坑

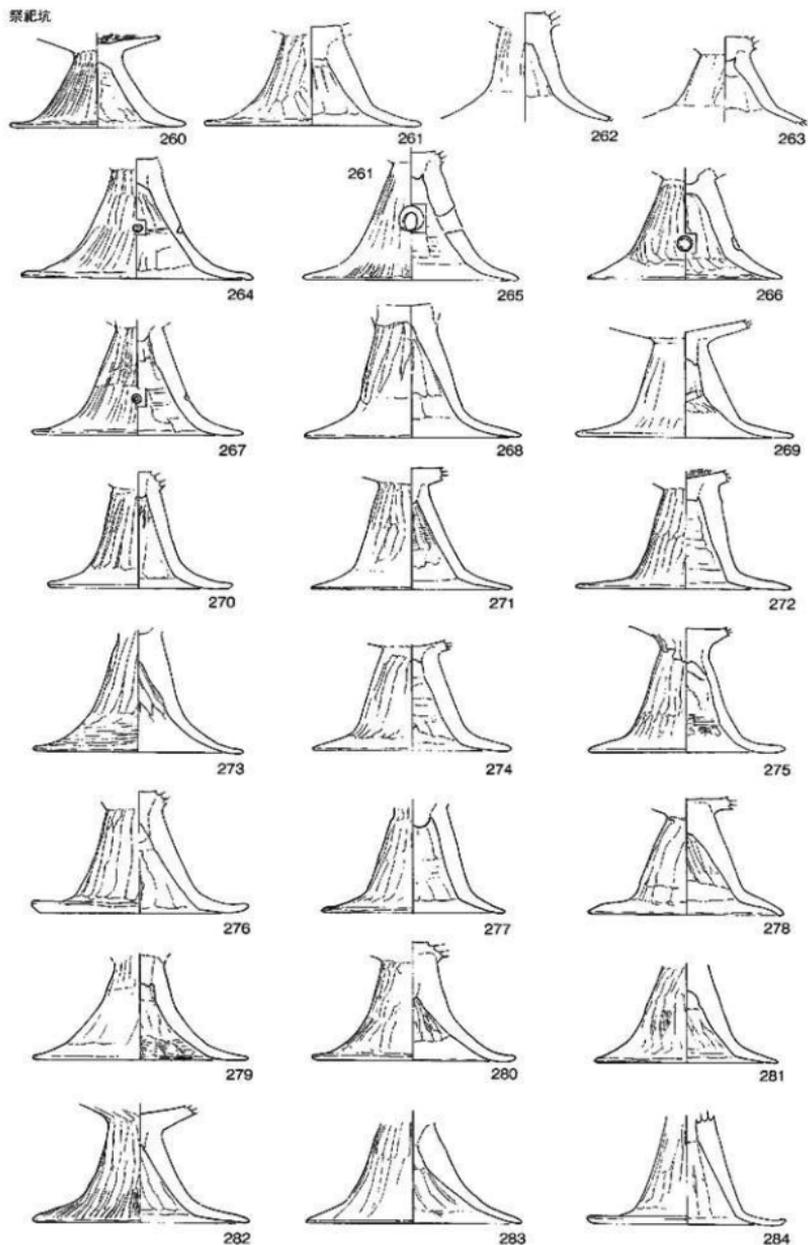


第40圖 祭祀坑遺物(7)

0 1:30 10m



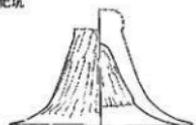
第41圖 祭祀坑遺物(8)



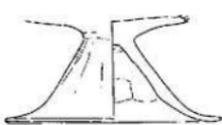
第42圖 祭祀坑遺物(9)

0 (1:3) 10cm

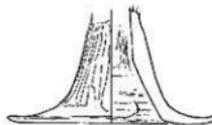
祭祀坑



285



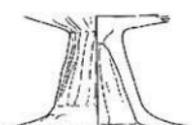
286



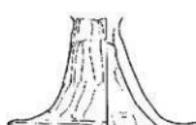
287



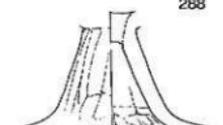
288



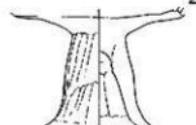
289



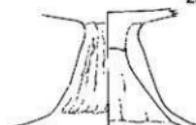
290



291



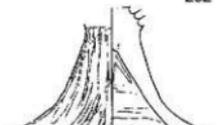
292



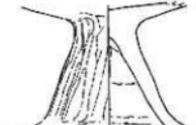
293



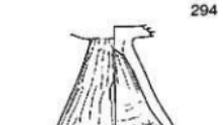
294



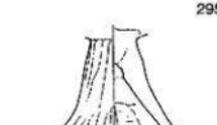
295



296



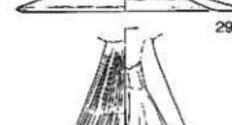
297



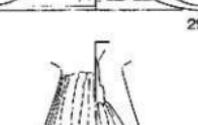
298



299



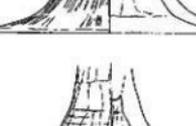
300



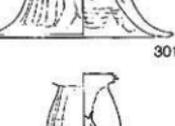
301



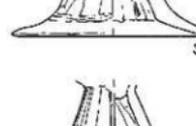
302



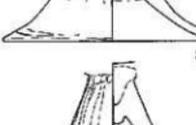
303



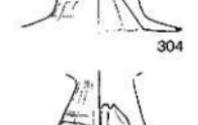
304



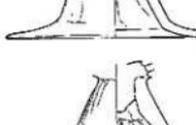
305



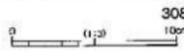
306



307

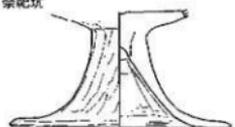


308

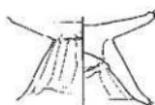


第43圖 祭祀坑遺物(10)

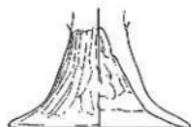
祭祀坑



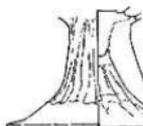
309



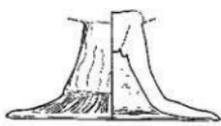
310



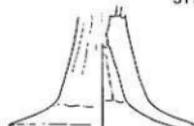
311



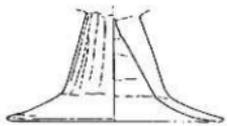
312



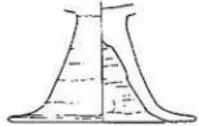
313



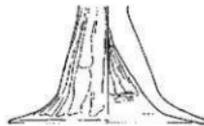
314



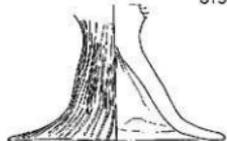
315



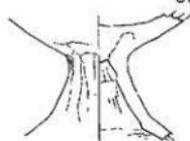
316



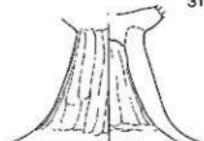
317



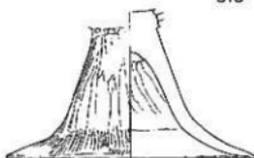
318



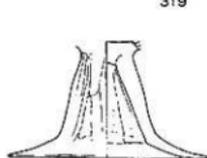
319



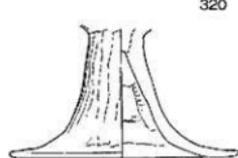
320



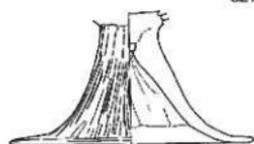
321



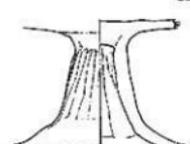
322



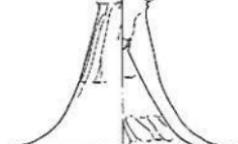
323



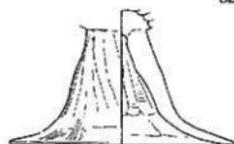
324



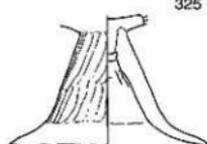
325



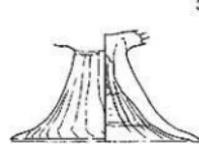
326



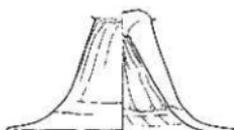
327



328



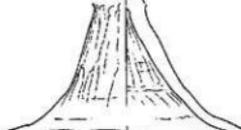
329



330



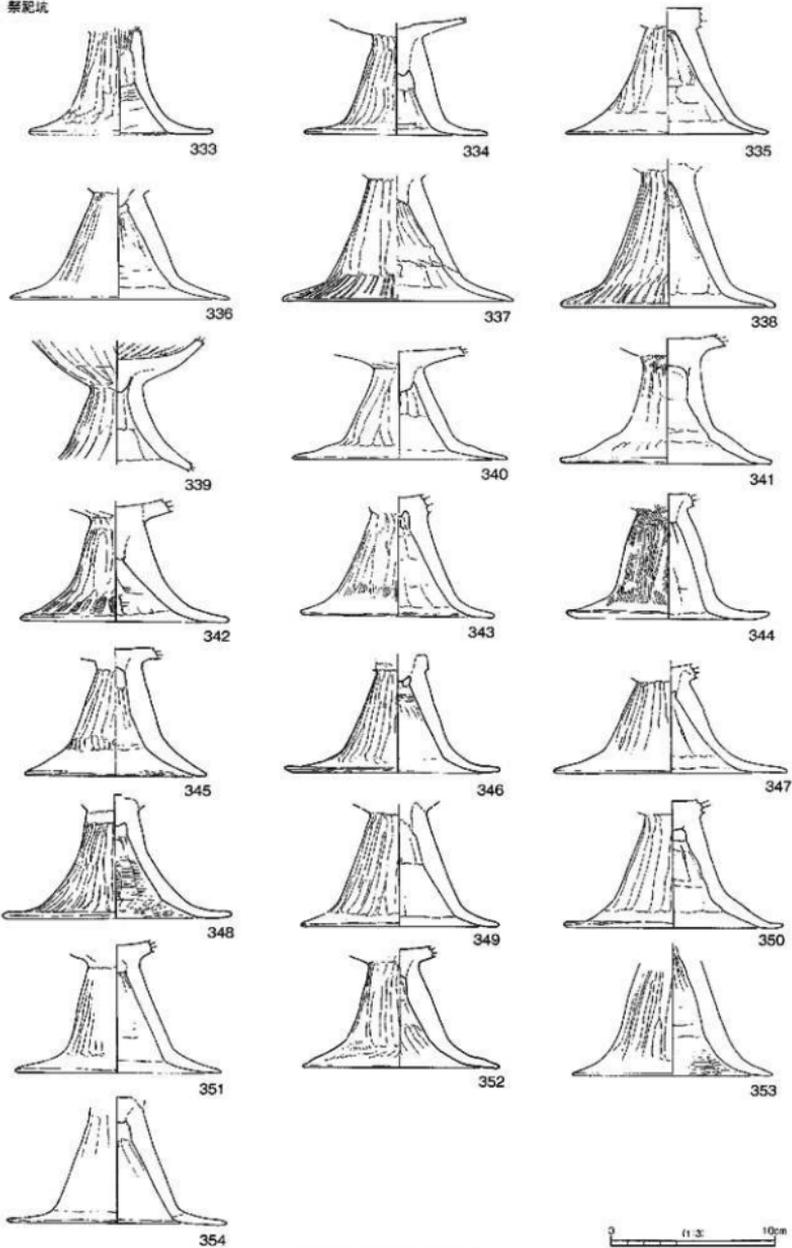
331



332

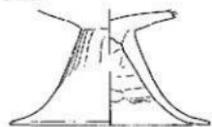
第44圖 祭祀坑遺物(11)

0 10cm

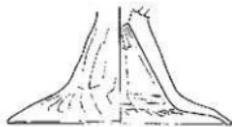


第45圖 祭祀坑遺物(12)

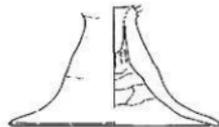
祭祀坑



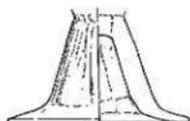
355



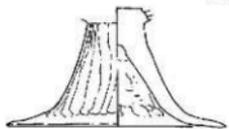
356



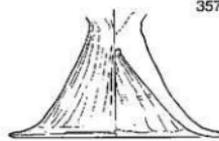
357



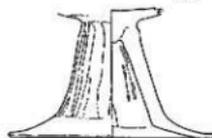
358



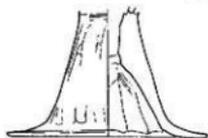
359



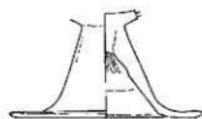
360



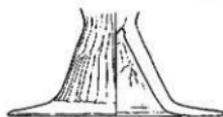
361



362



363



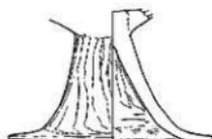
364



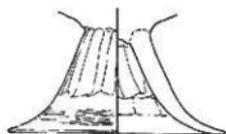
365



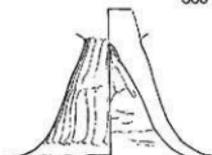
366



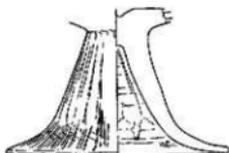
367



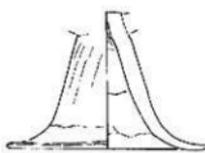
368



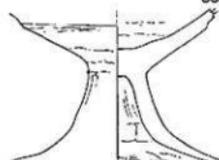
369



370



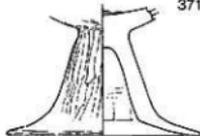
371



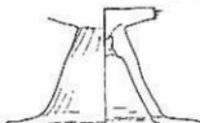
372



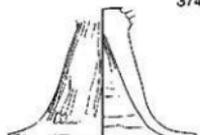
373



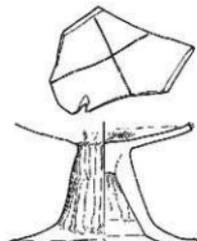
374



375



376

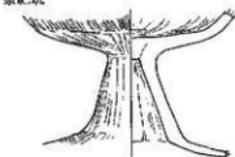


377

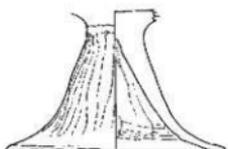
第46圖 祭祀坑遺物(13)

0 (1:3) 10cm

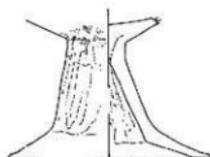
祭祀坑



378



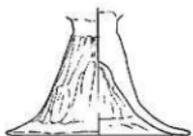
379



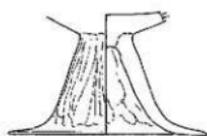
380



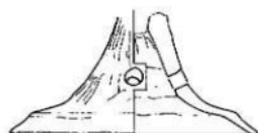
381



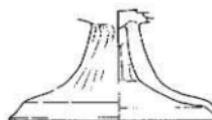
382



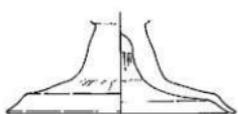
383



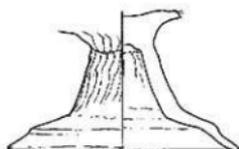
384



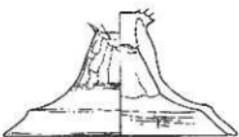
385



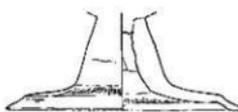
386



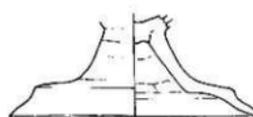
387



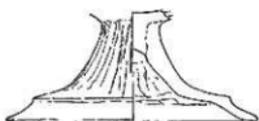
388



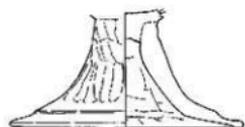
389



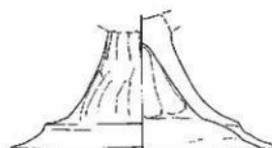
390



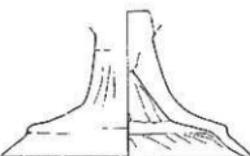
391



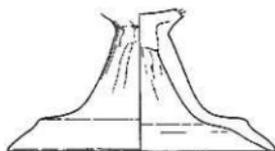
392



393



394

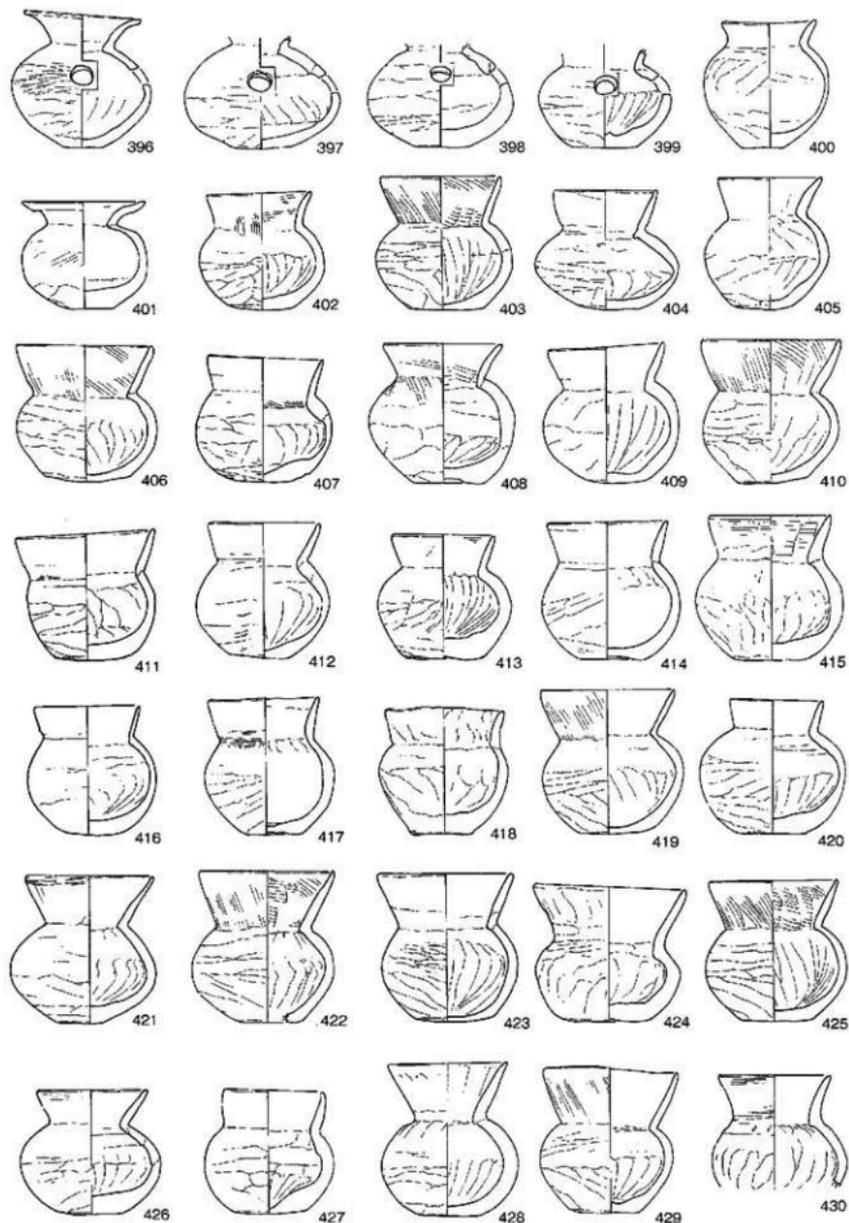


395

0 1:30 10cm

第47圖 祭祀坑遺物(14)

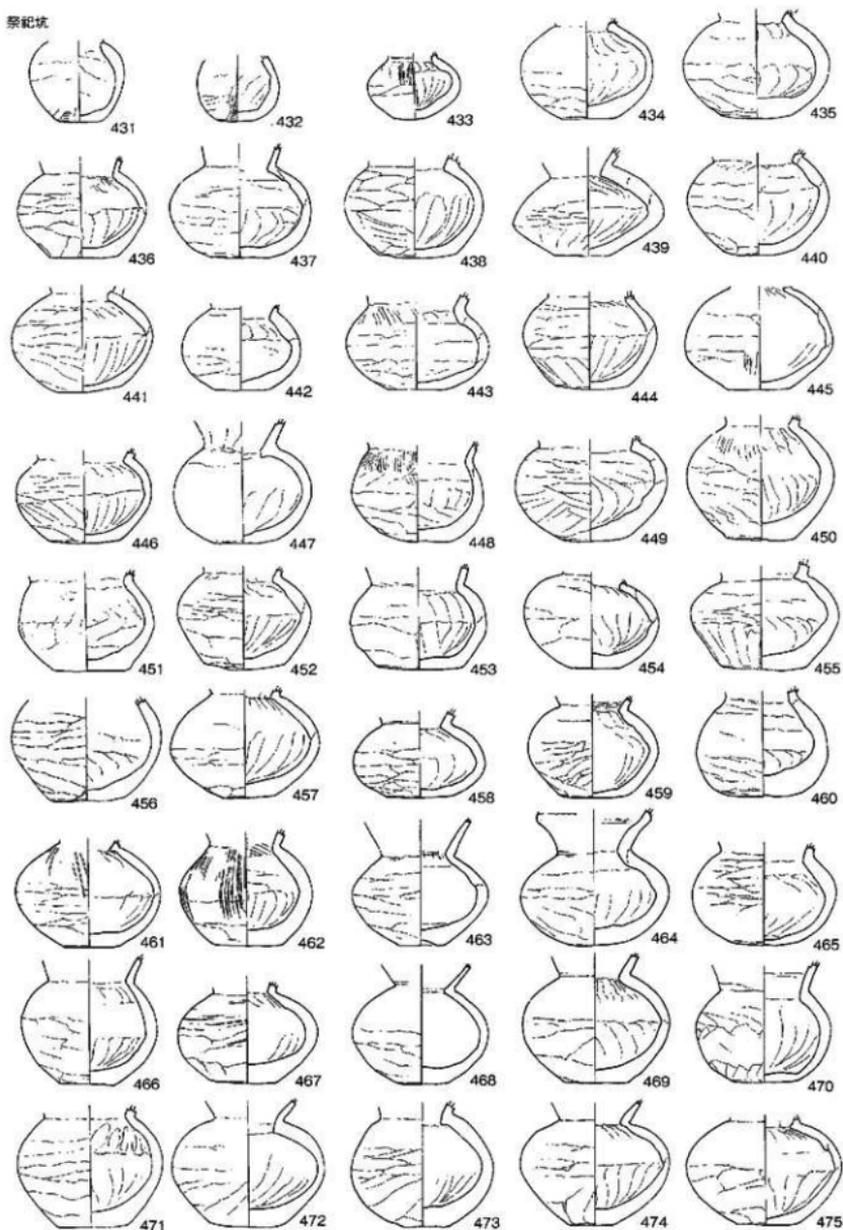
祭祀坑



第48图 祭祀坑遺物(15)

0 1:3 10cm

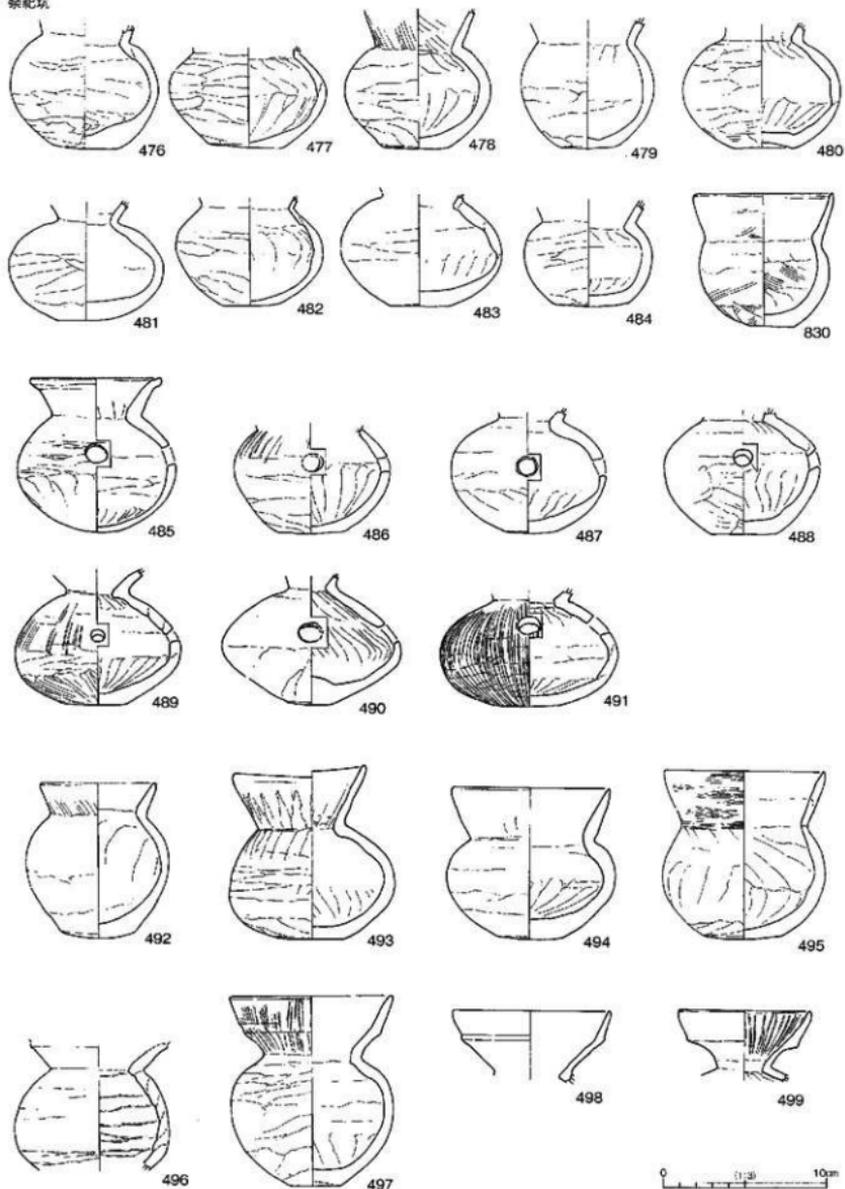
祭祀坑



第49图 祭祀坑遺物(16)

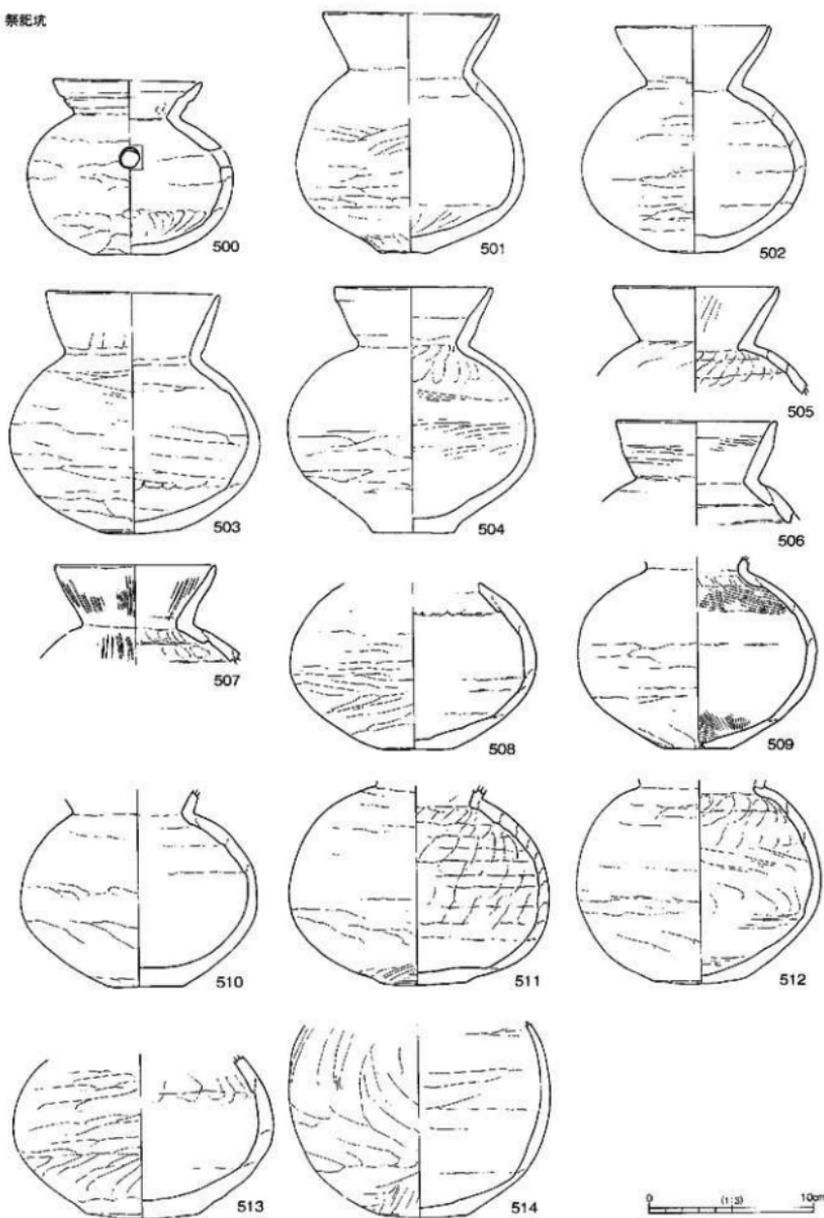


祭祀坑



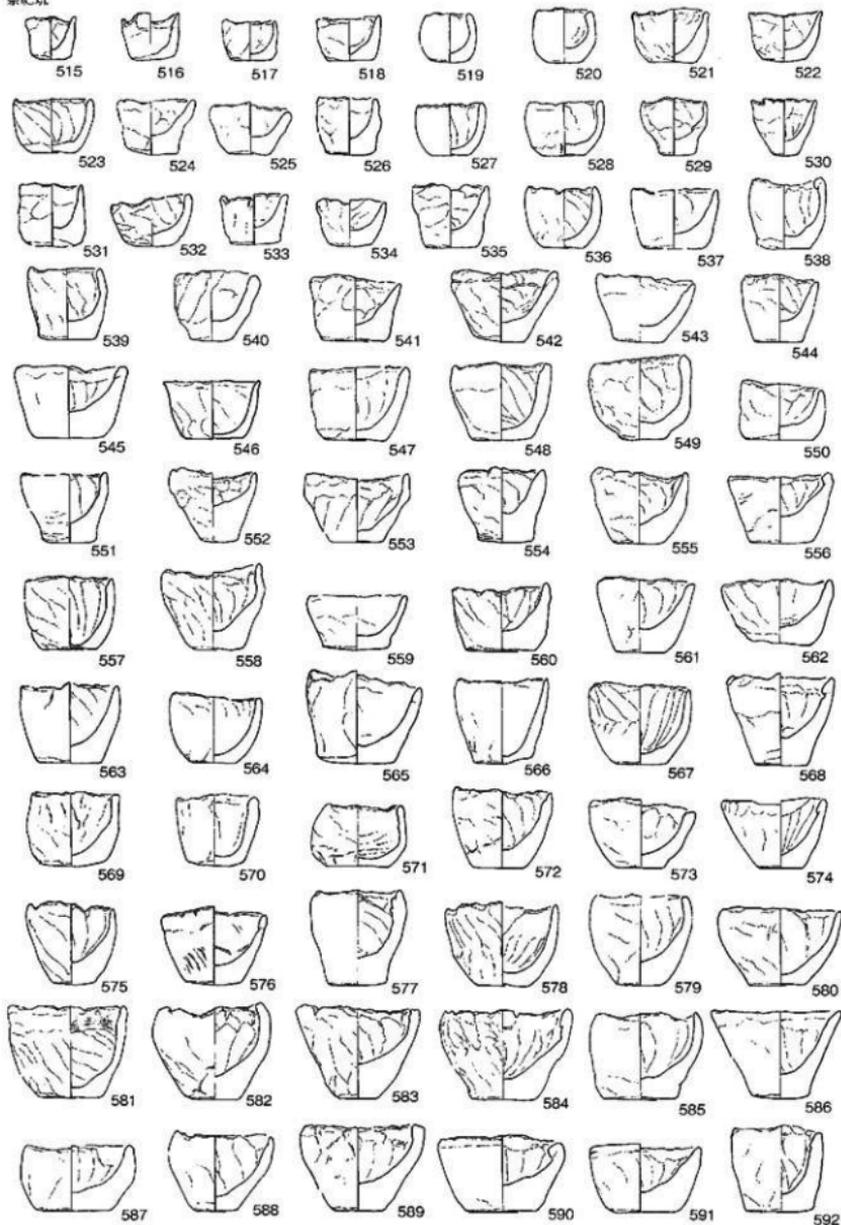
第50圖 祭祀坑遺物(17)

祭祀坑

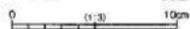


第51图 祭祀坑遺物(18)

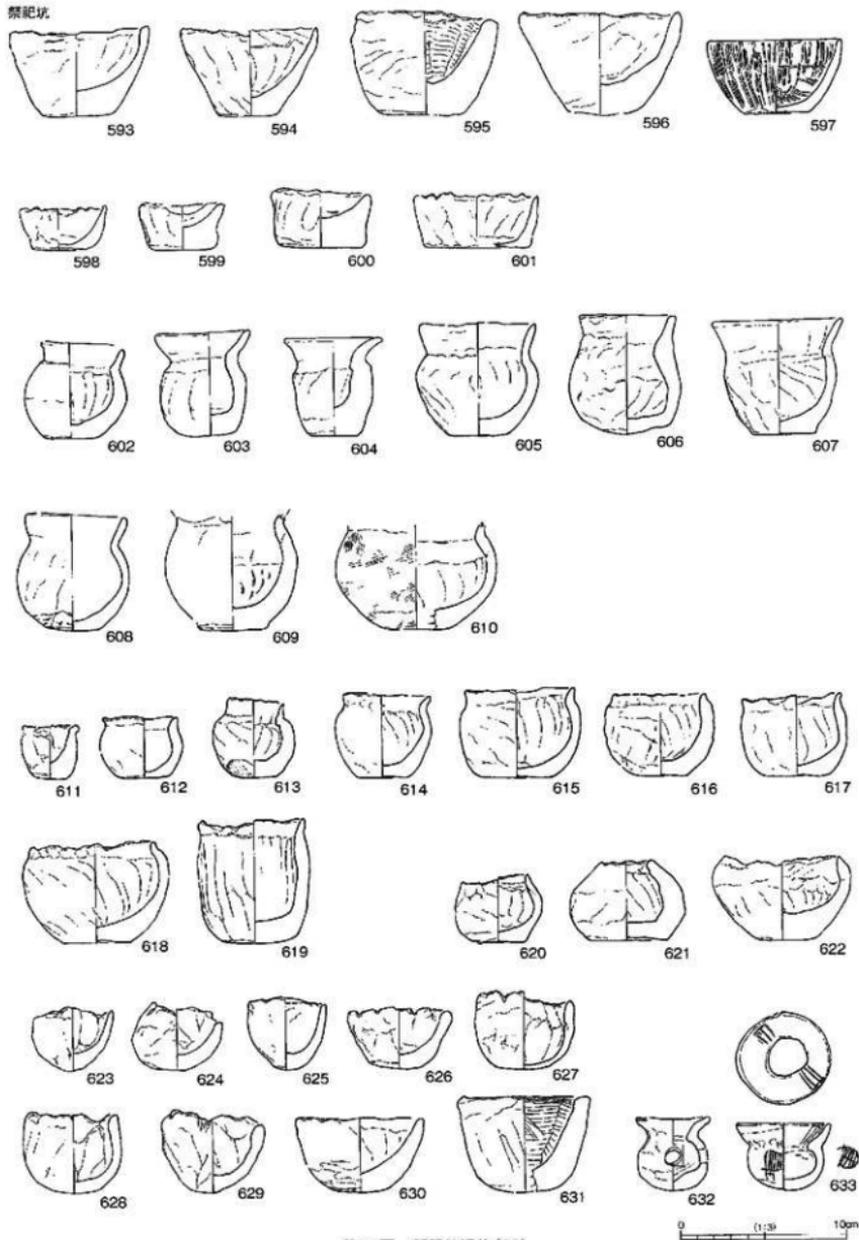
新紀坑



第52圖 新紀坑遺物(19)

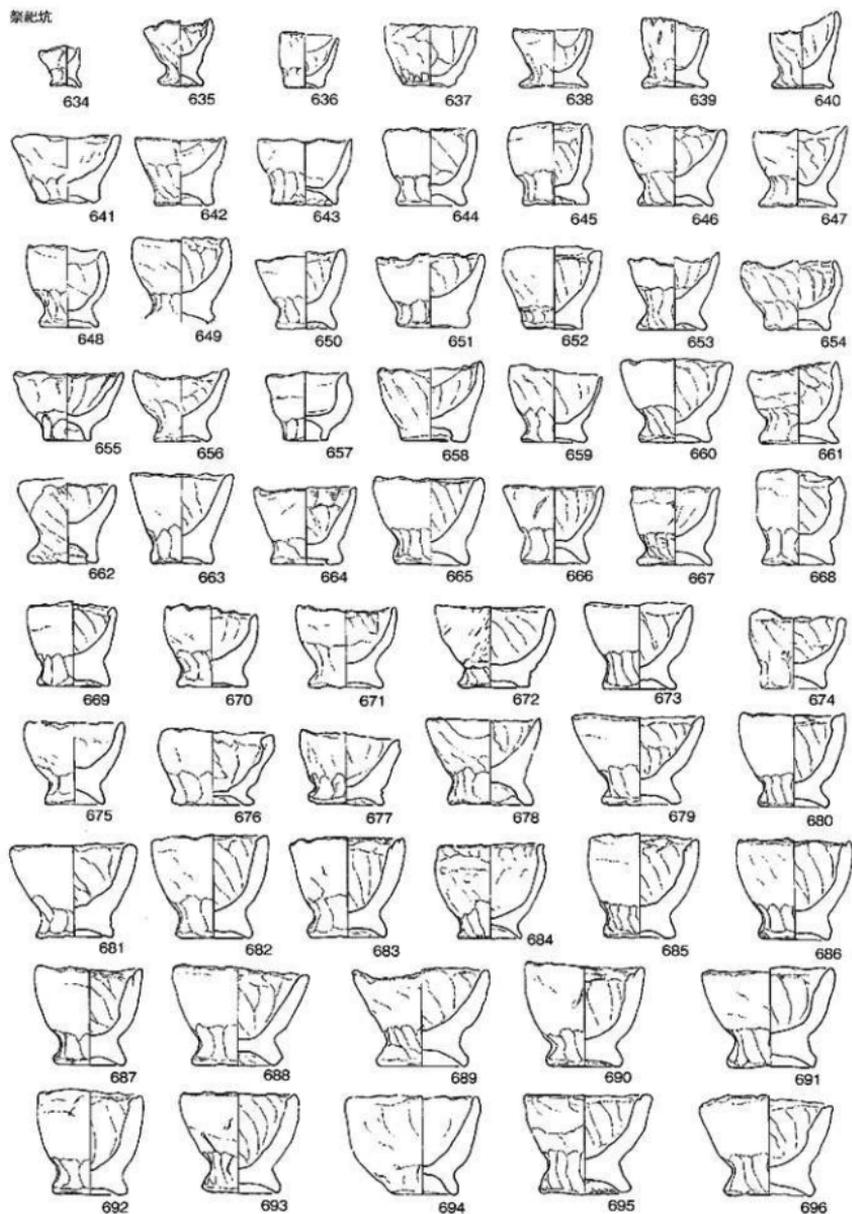


祭祀坑



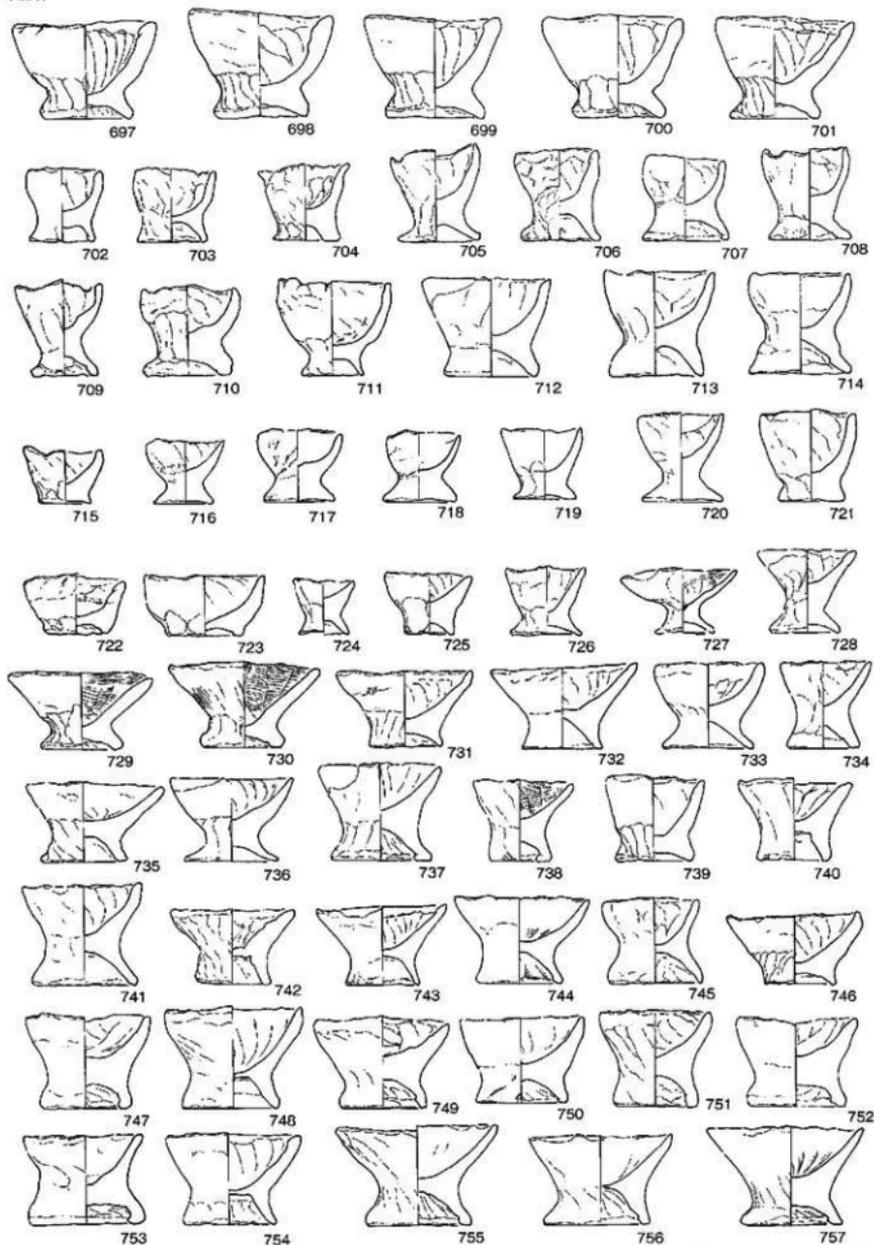
第53圖 祭祀坑遺物(20)

祭祀坑



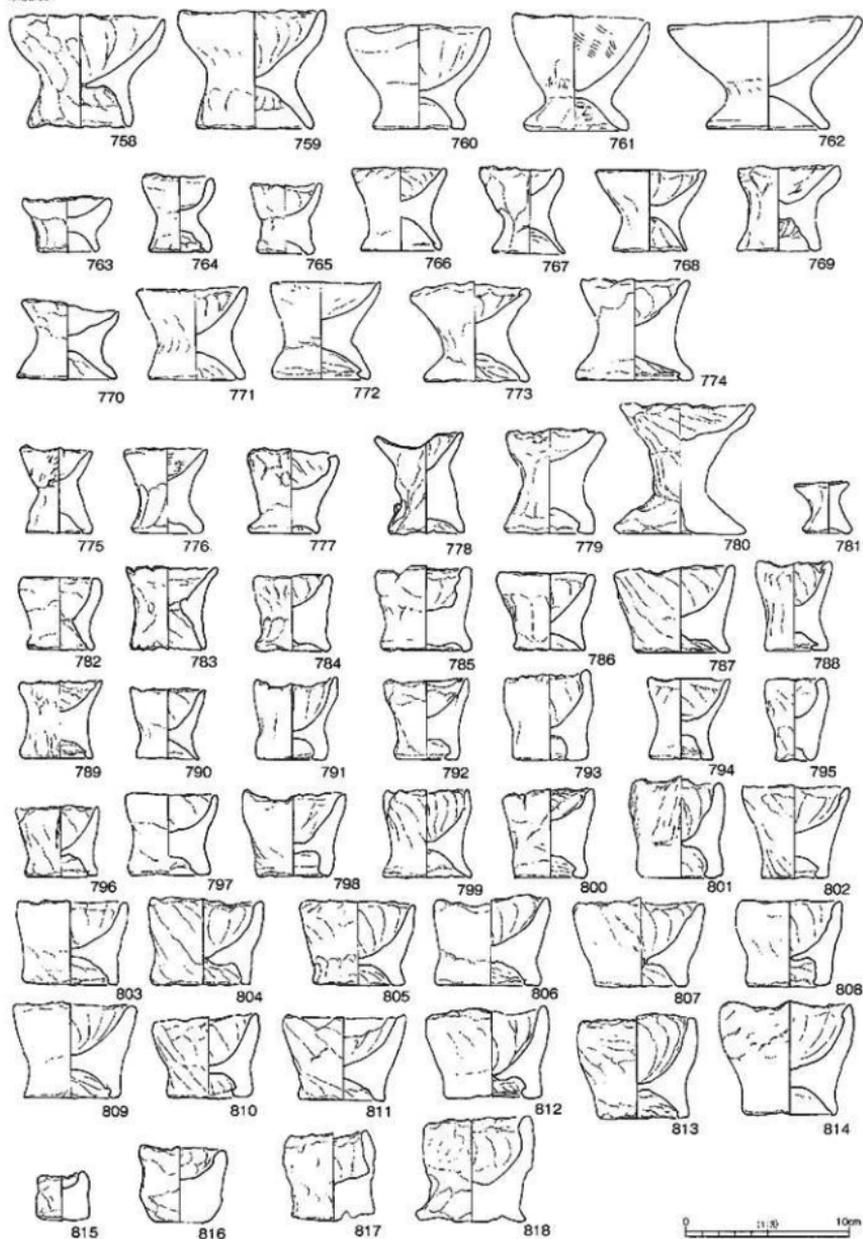
第54圖 祭祀坑遺物(21)



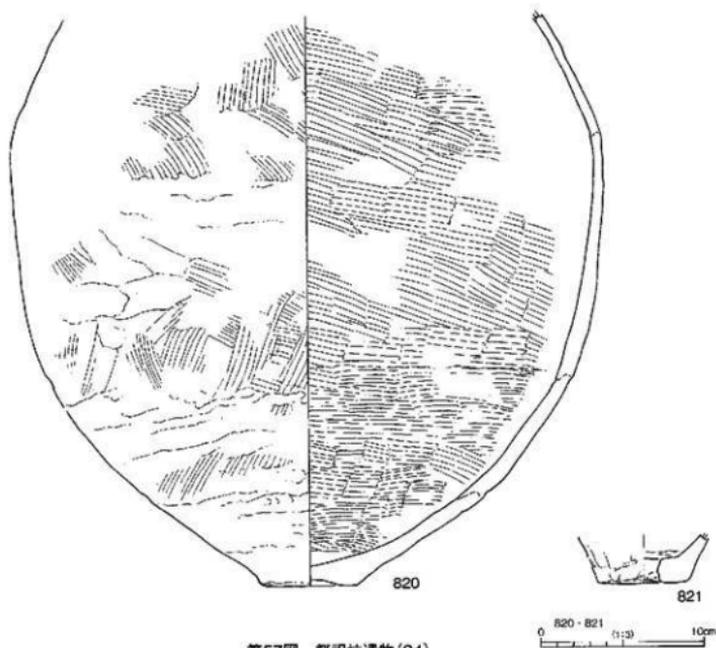
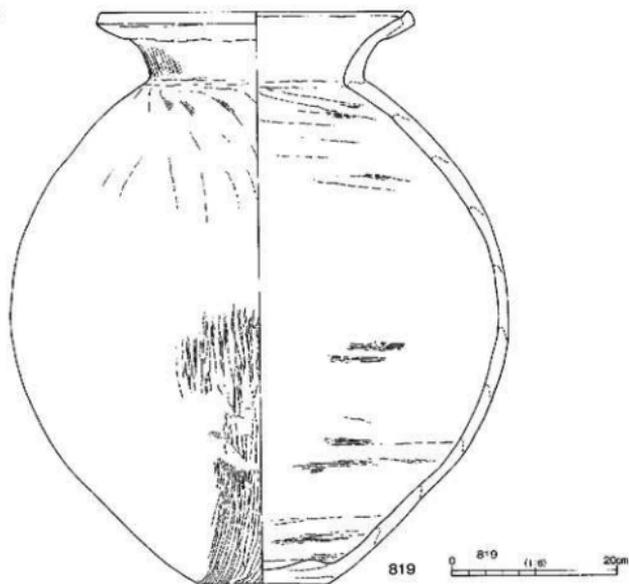


第55圖 祭祀坑遺物(22)

祭祀坑

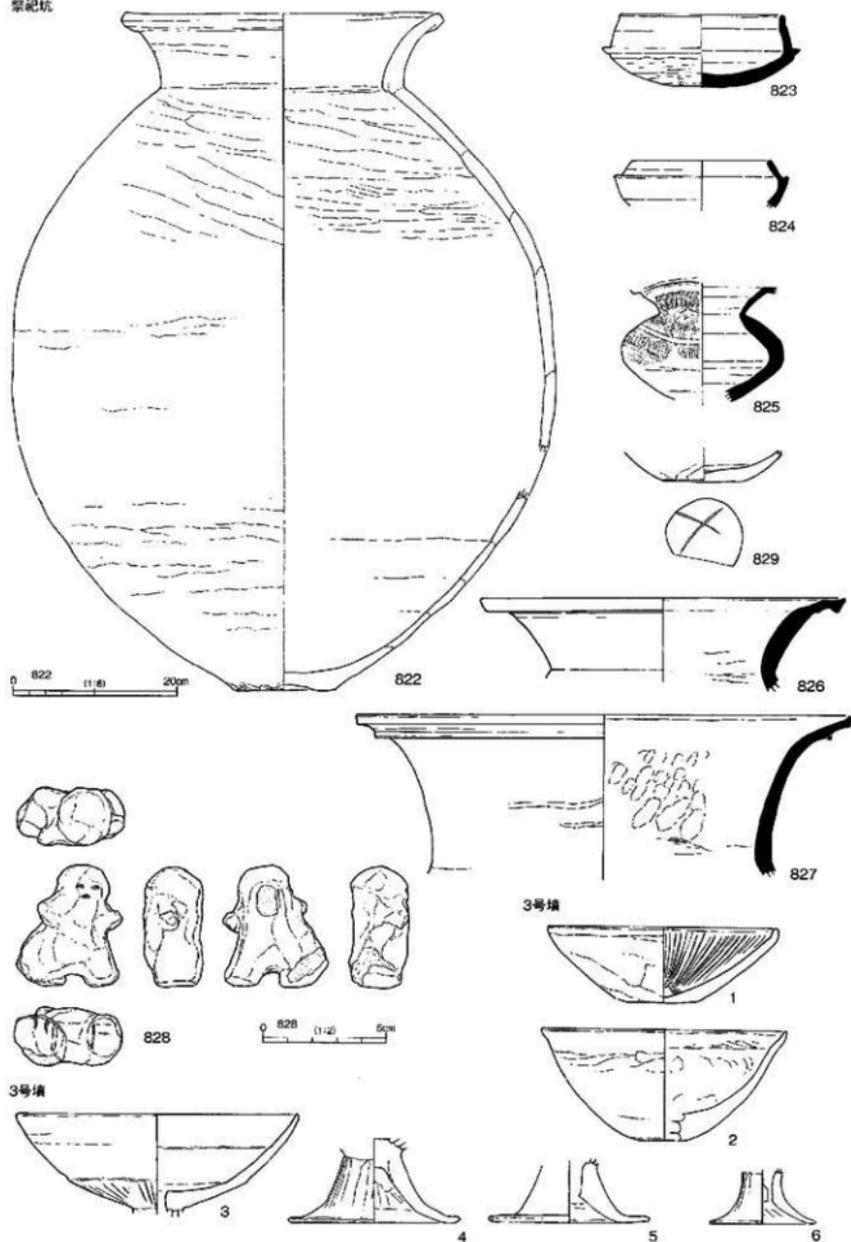


第56圖 祭祀坑遺物(23)



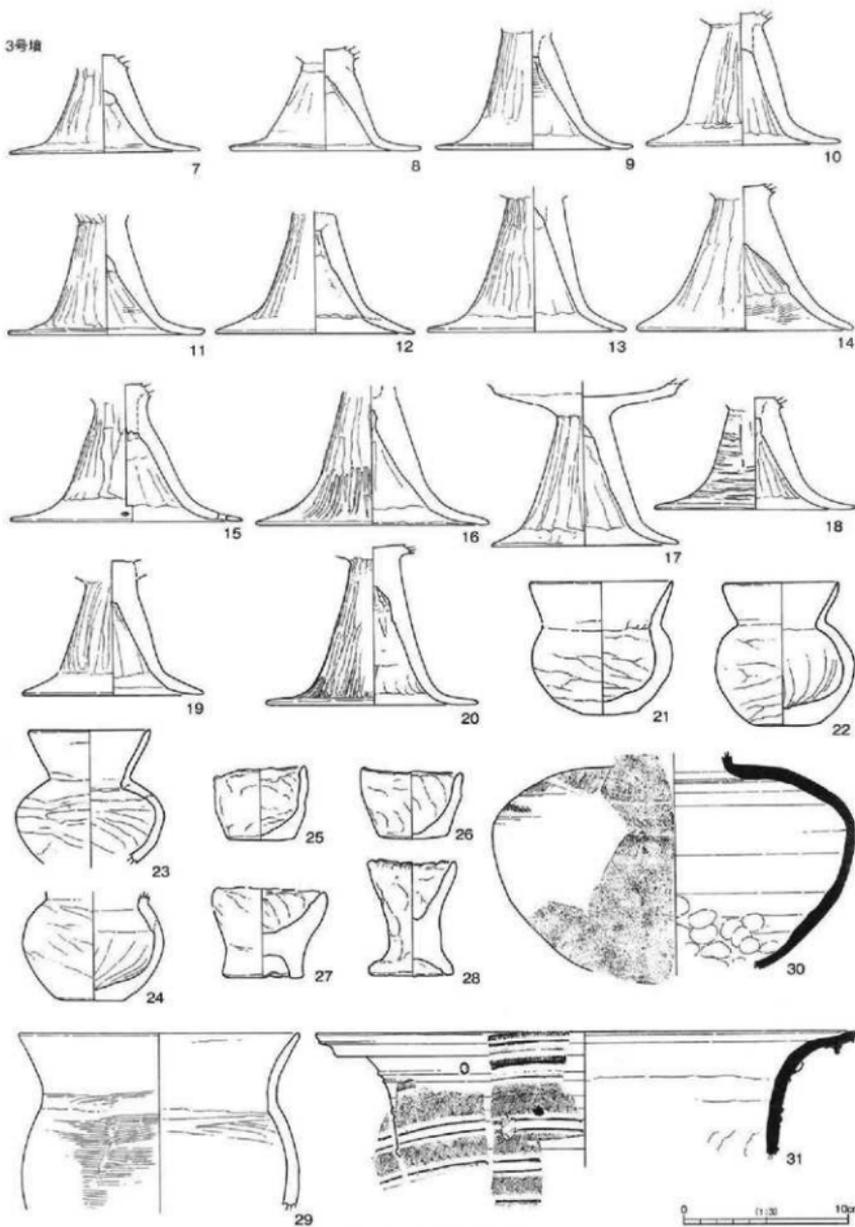
第57圖 祭祀坑遺物(24)

祭祀坑



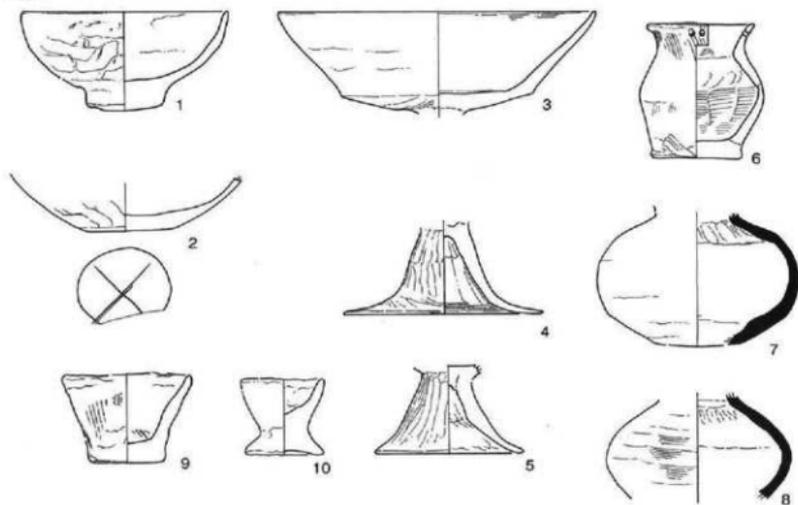
第58图 祭祀坑遗物(25)、3号坑遗物(1)

3号墳

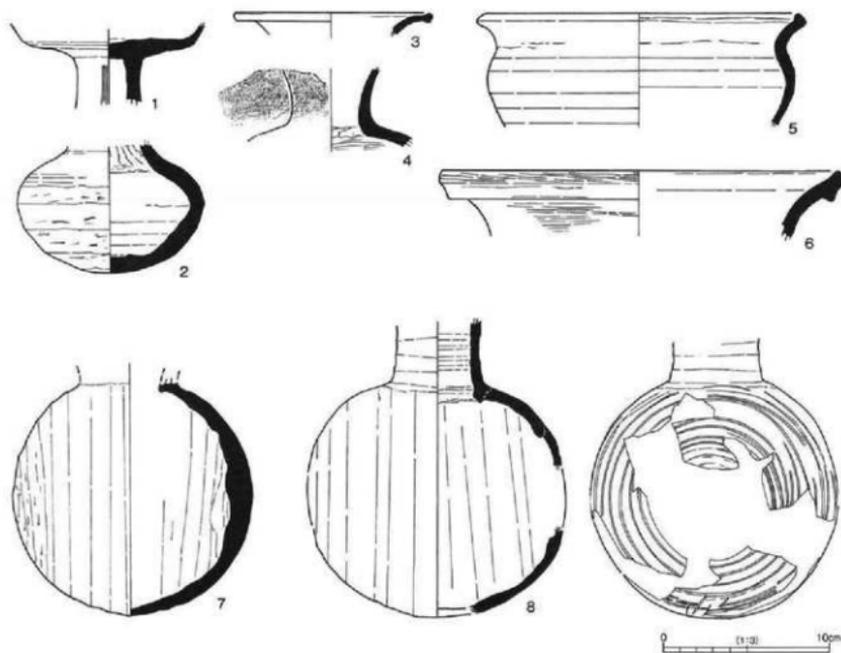


第59図 3号墳遺物(2)

4号墳

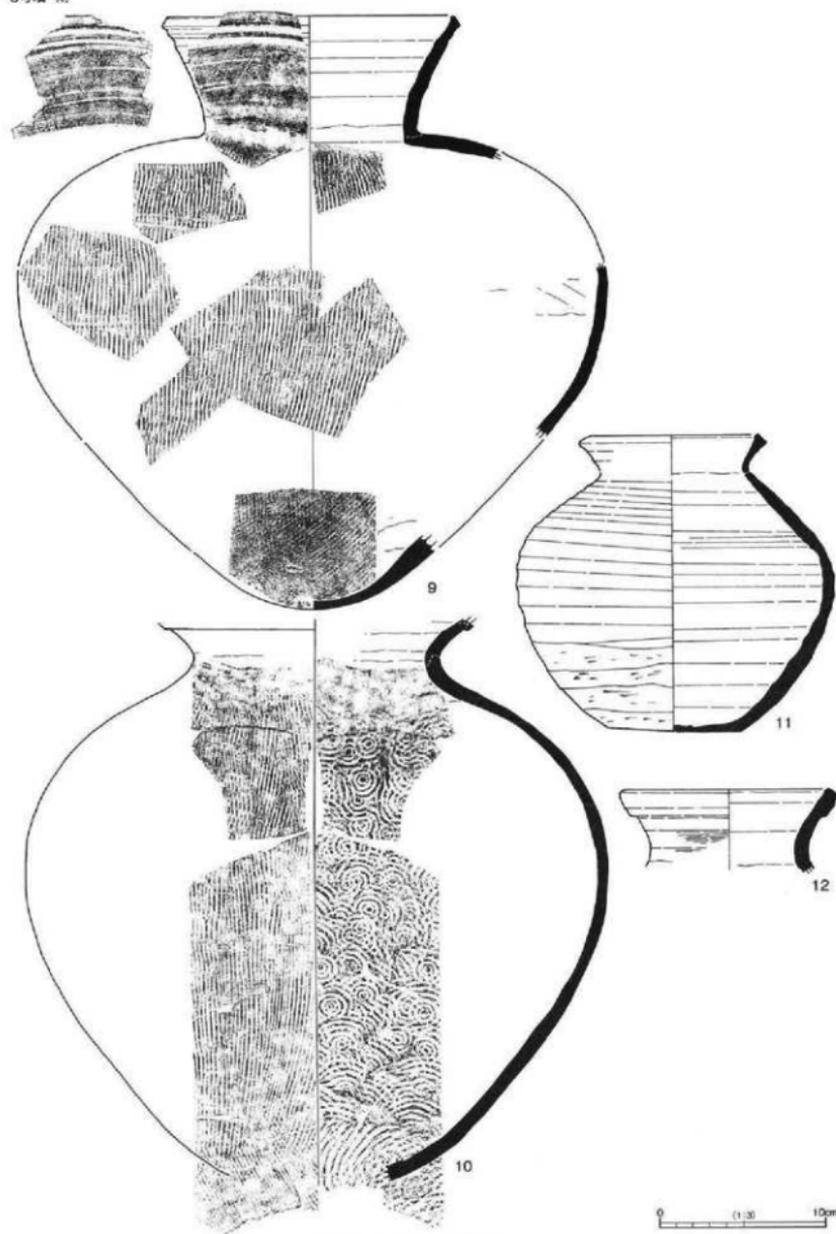


5号墳 南

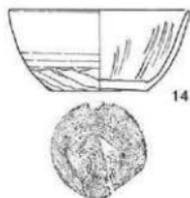
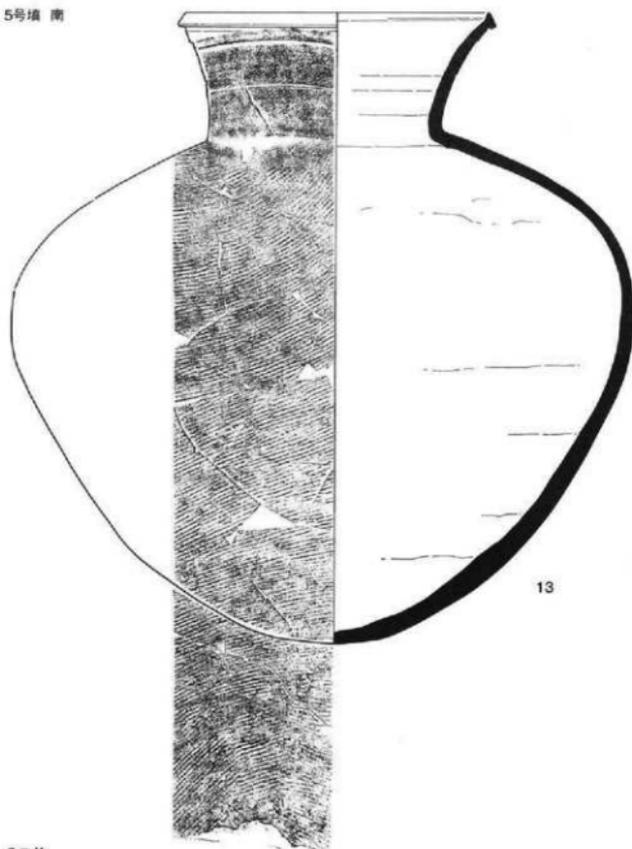


第60図 4号墳遺物、5号墳遺物(1)

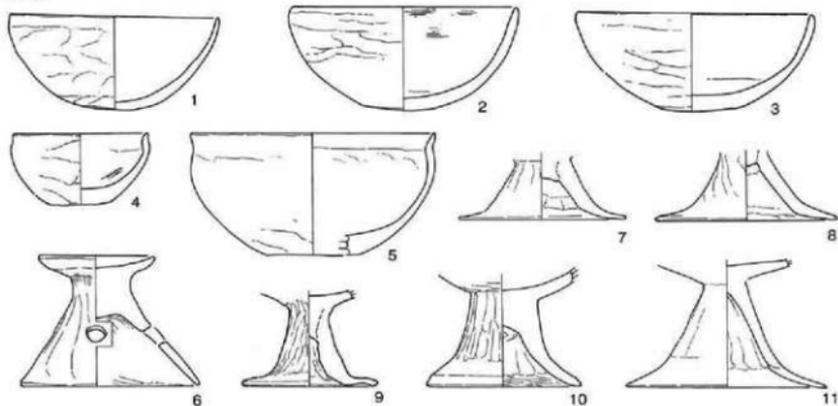
5号墳 南



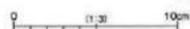
第61図 5号墳遺物(2)



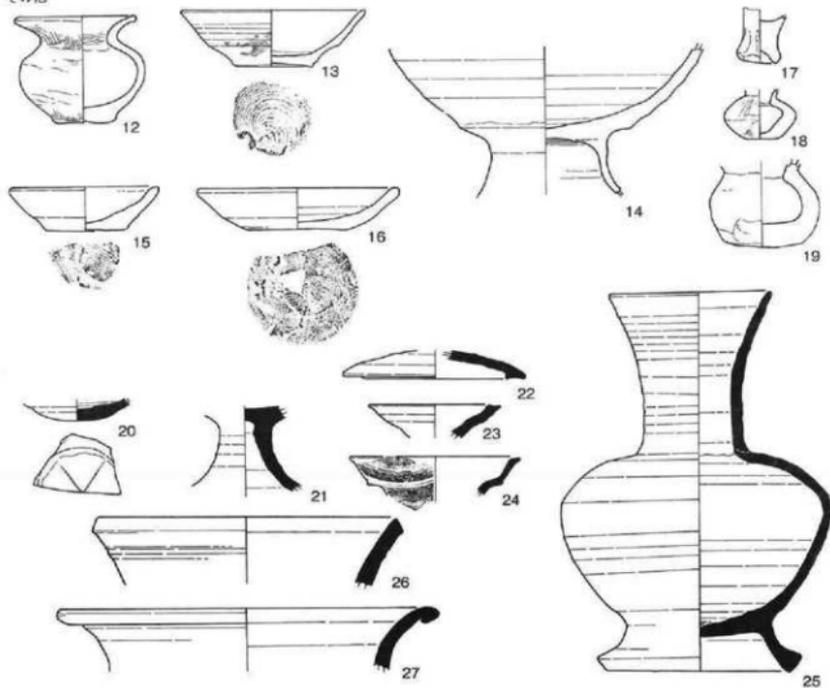
その他



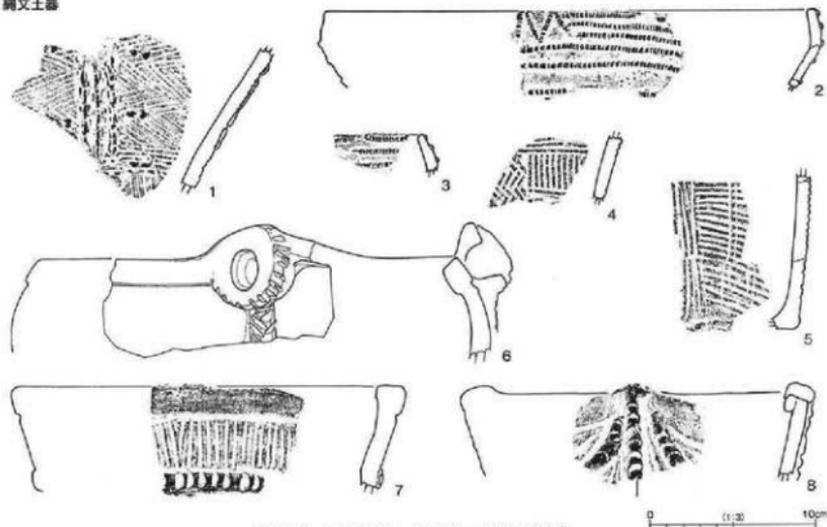
第62図 5号墳遺物(3)、その他(1)



その他

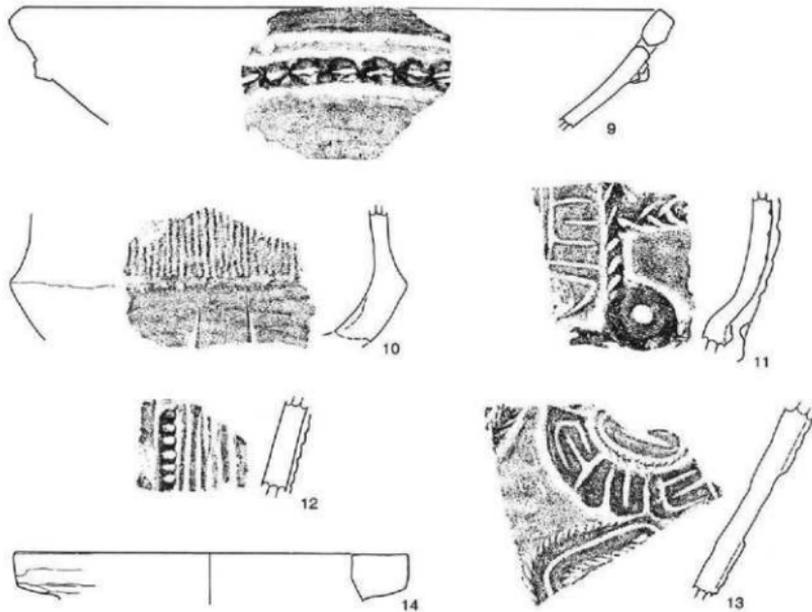


縄文土器

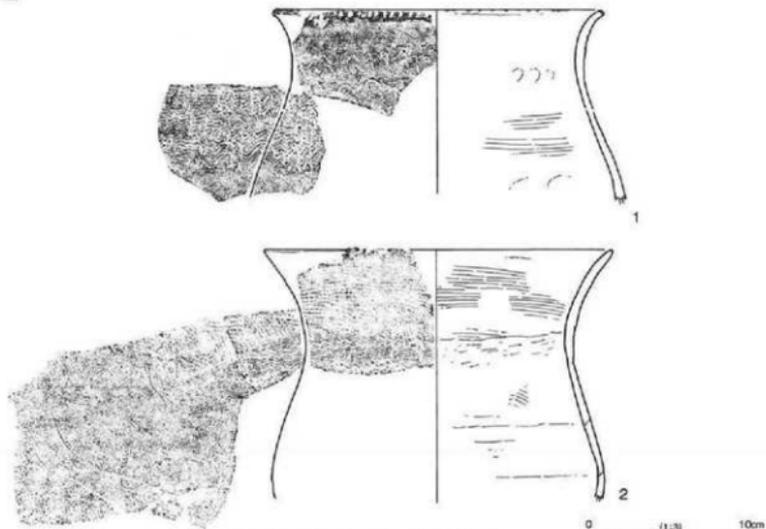


第63図 その他(2)、須恵器、縄文土器(1)

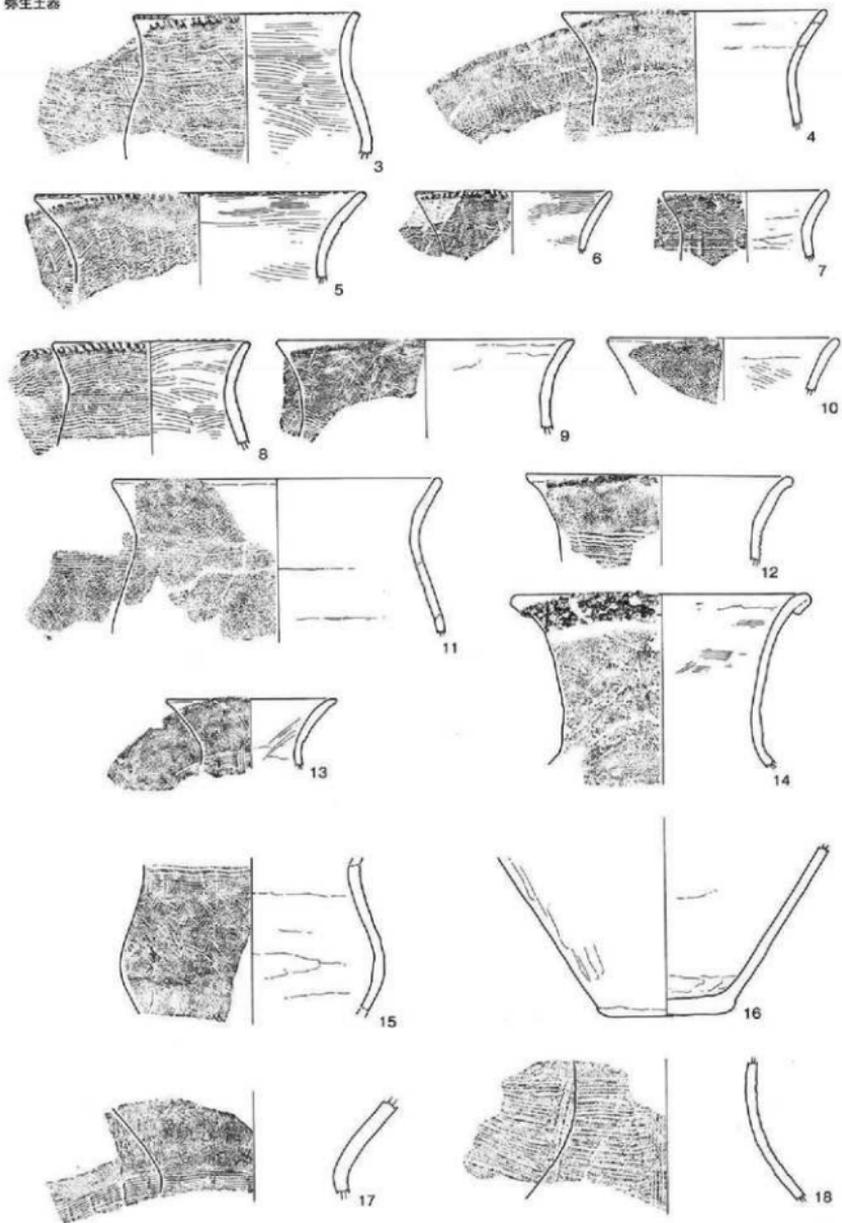
縄文土器



弥生土器

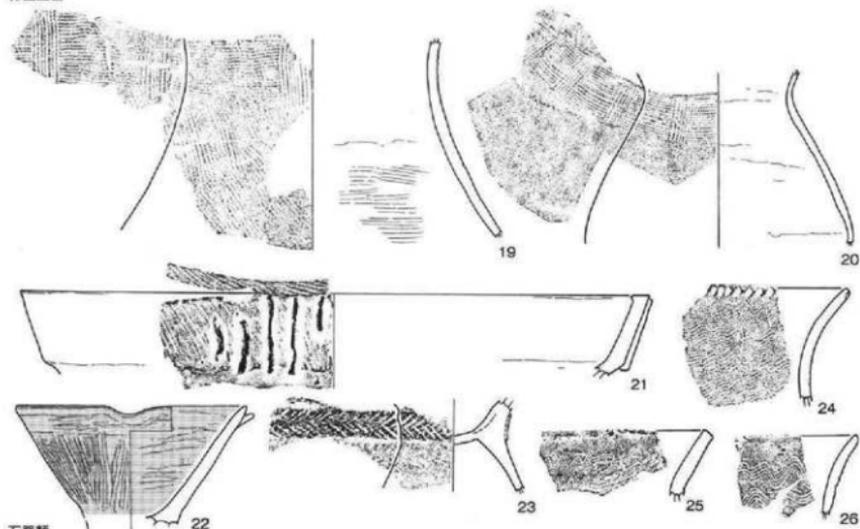


第64回 縄文土器(2)、弥生土器(1)

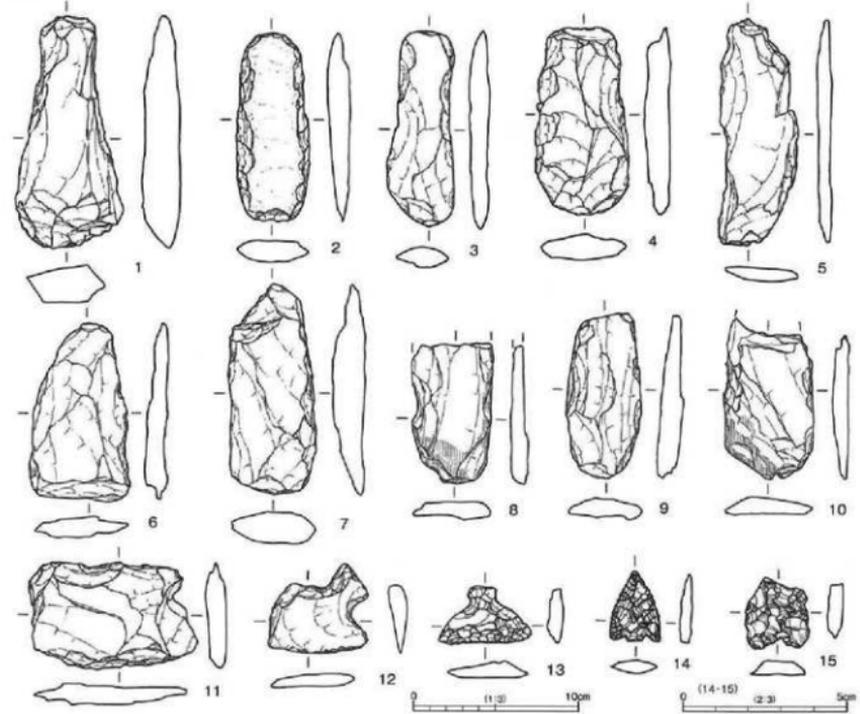


第65回 弥生土器(2)

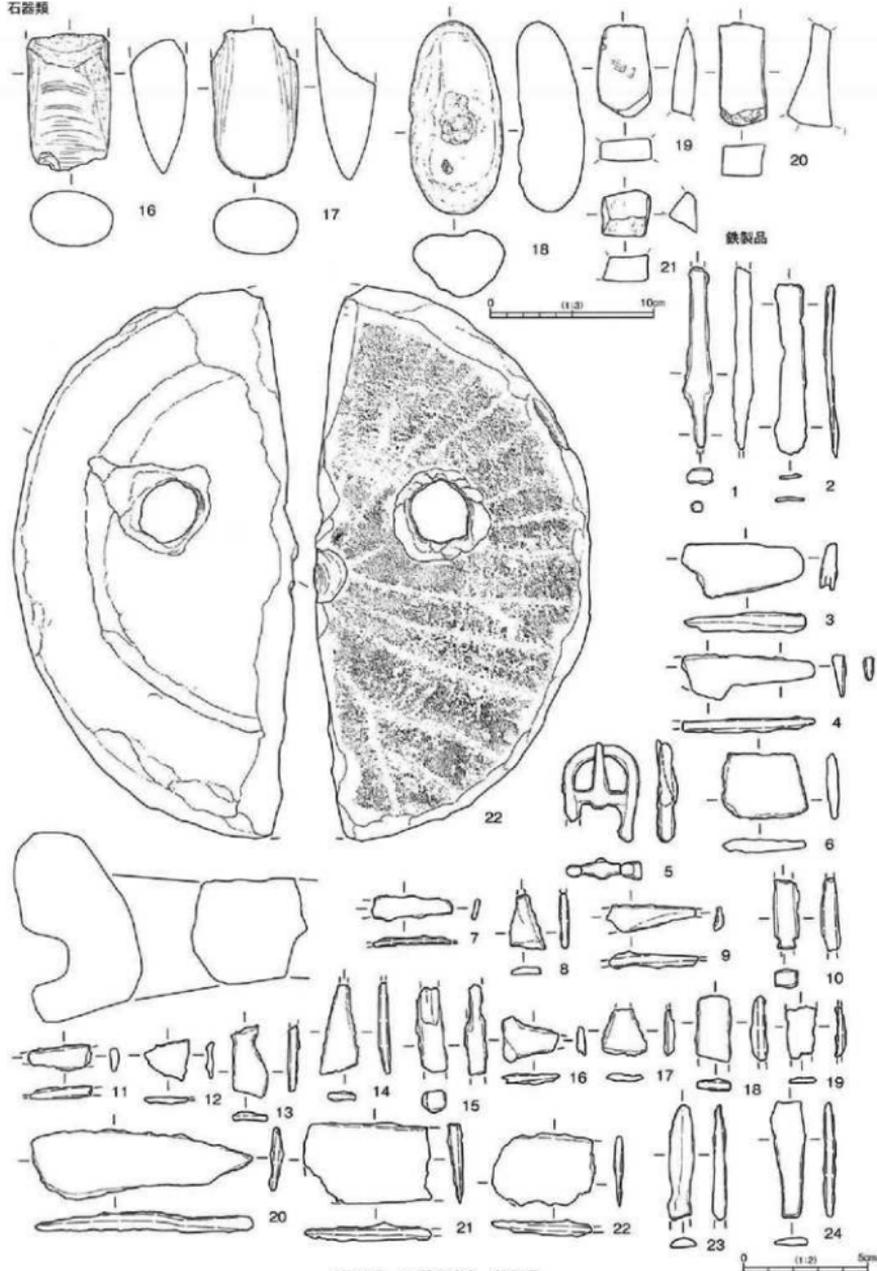




石器類

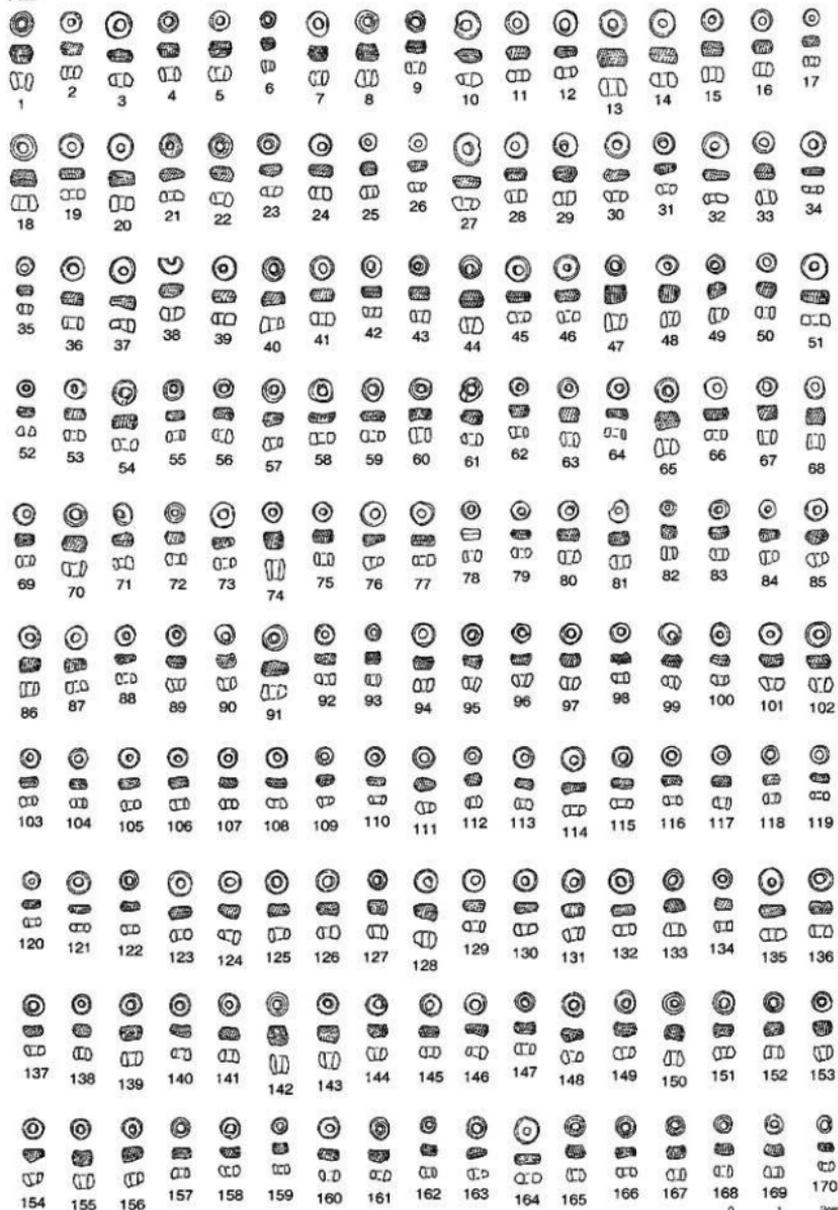


第66图 弥生土器(3)、石器類(1)



第67図 石器類(2)、鉄製品

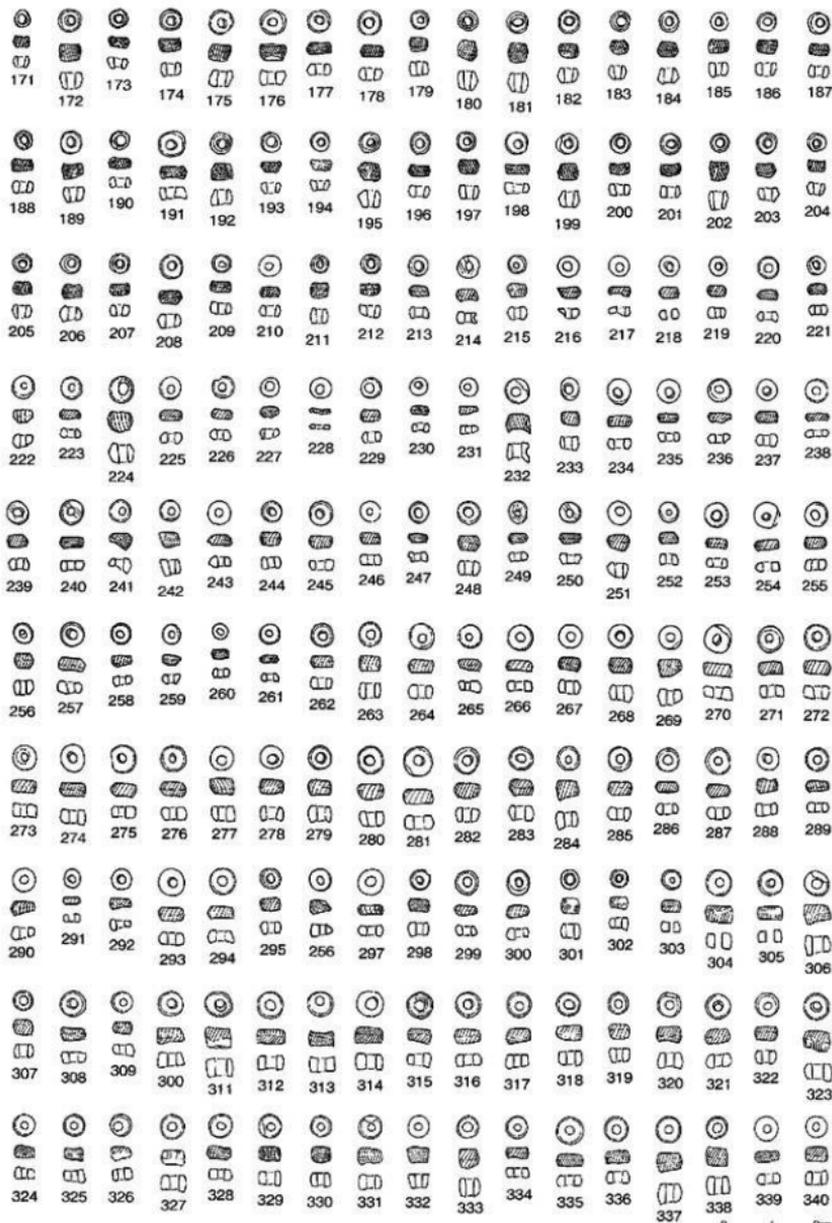
白玉



第68图 白玉(1)



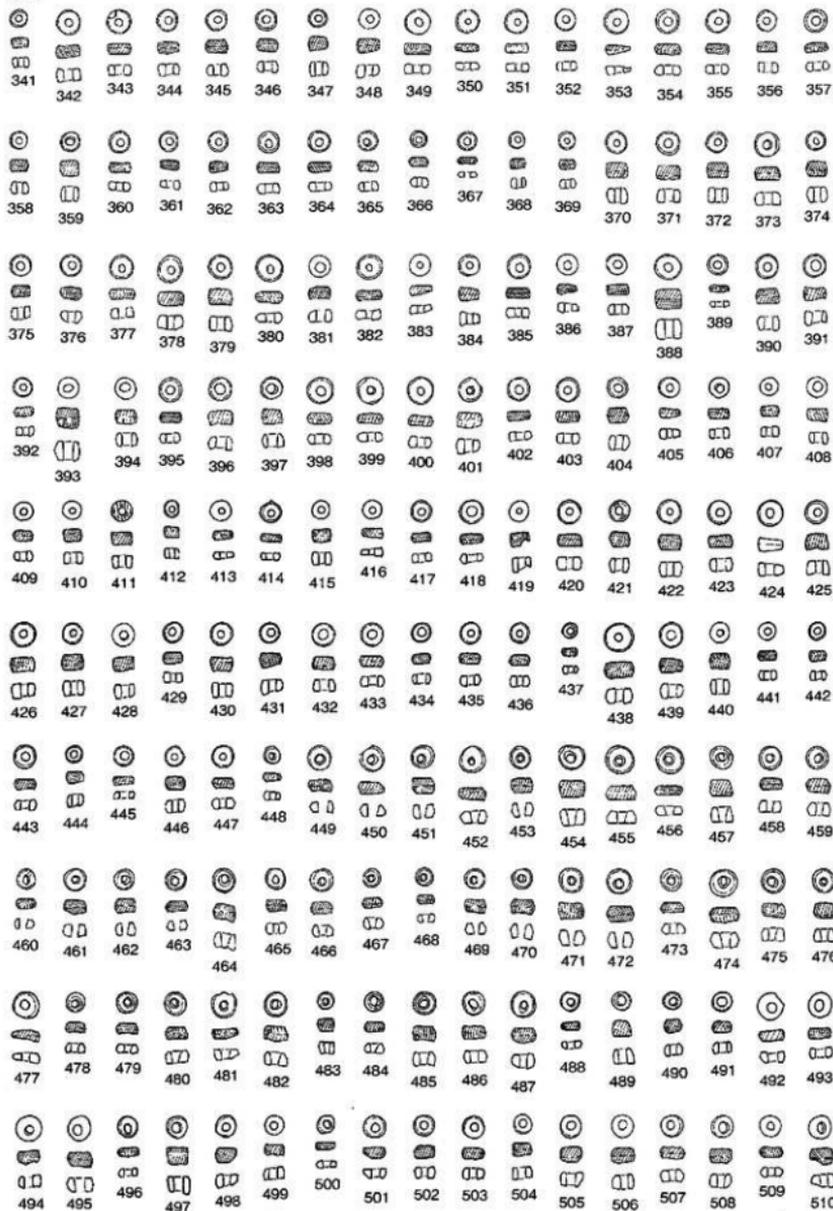
白玉



第69图 白玉(2)



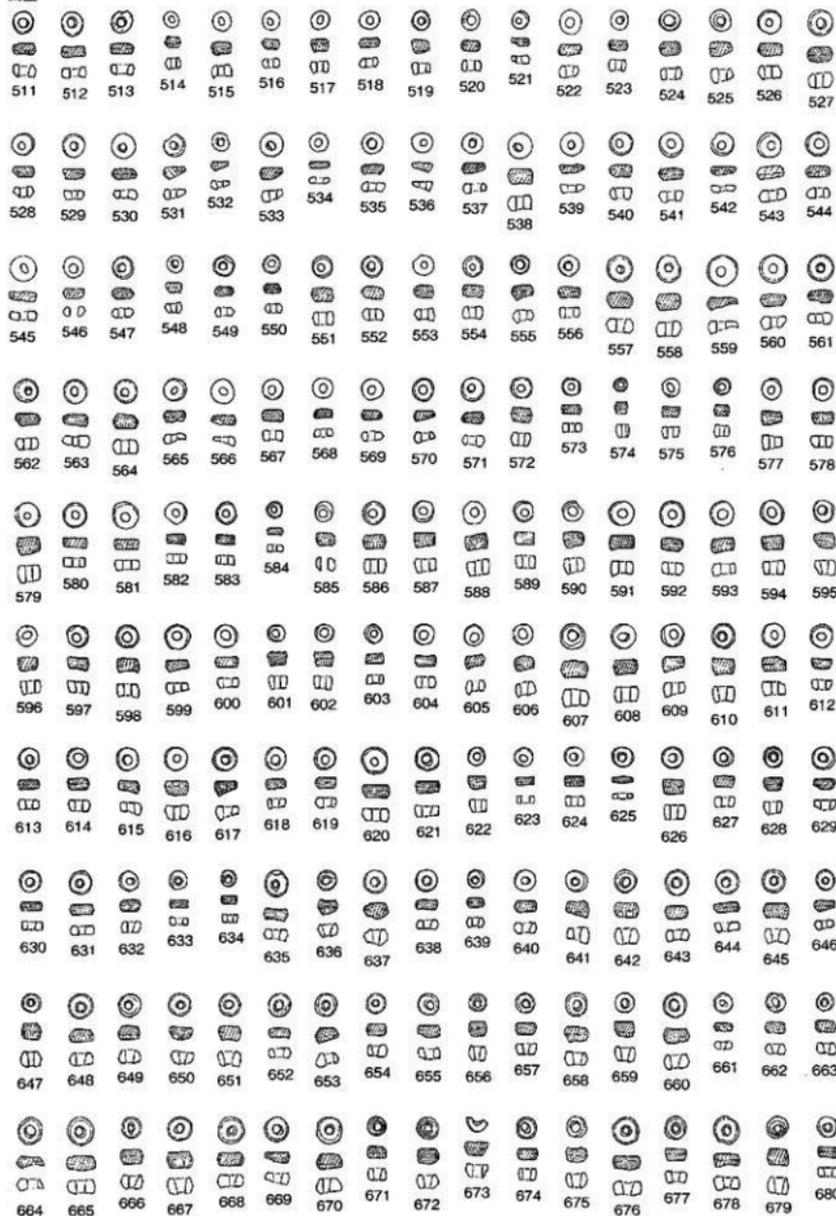
白玉



第70图 白玉(3)



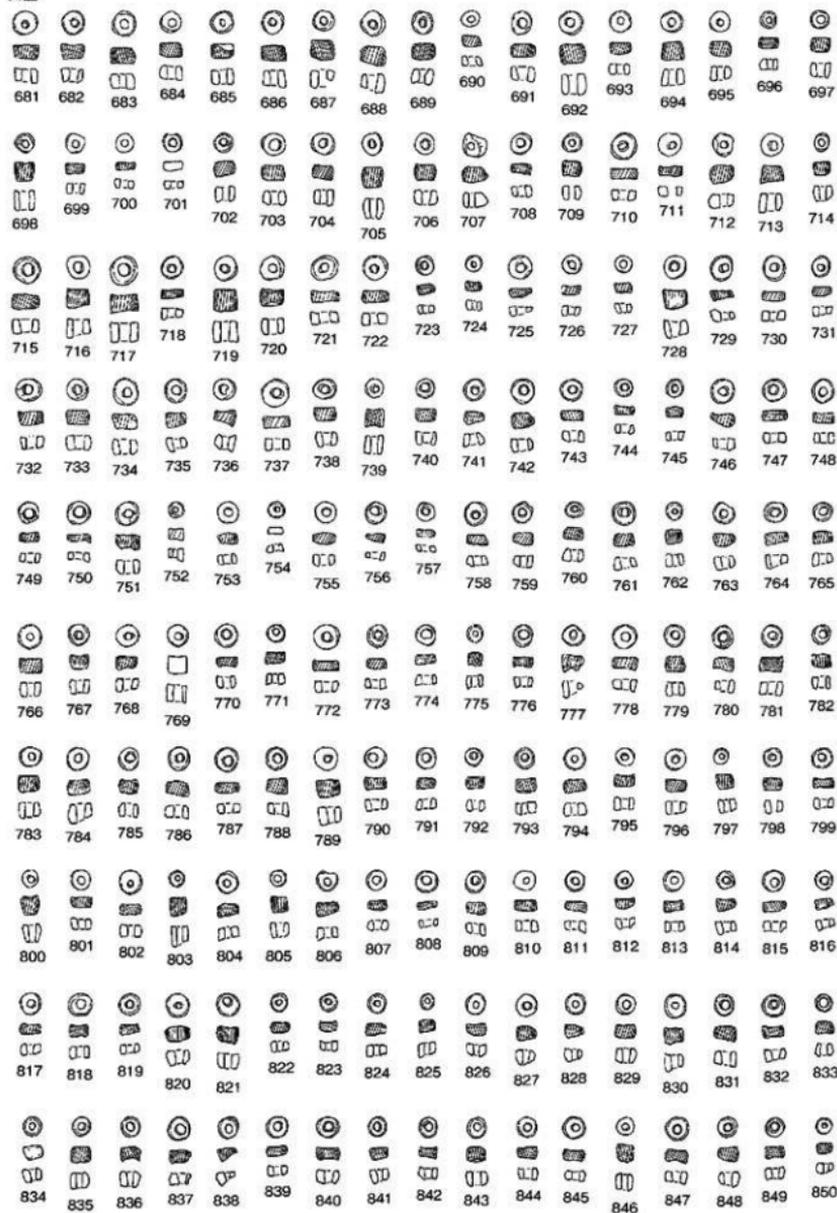
白五



第71圖 白五(4)



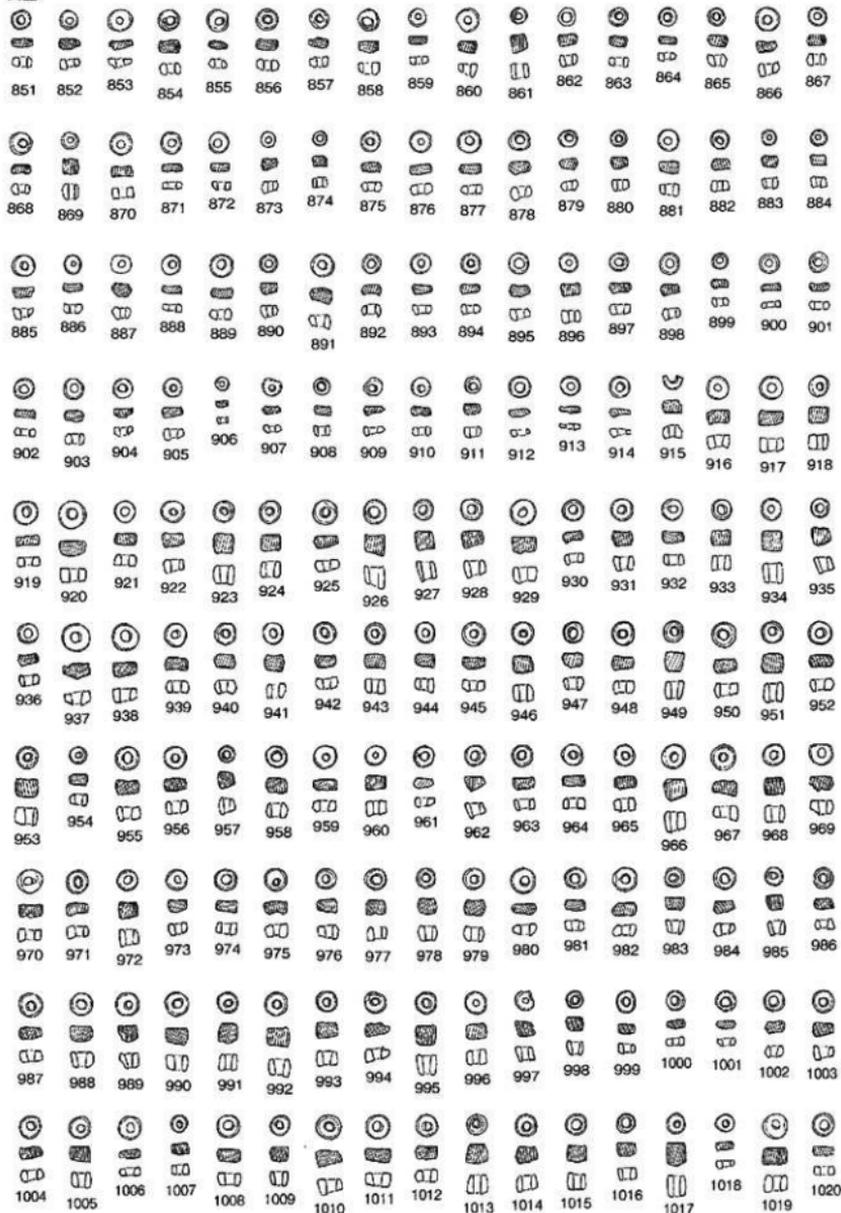
白玉



第72图 白玉(5)



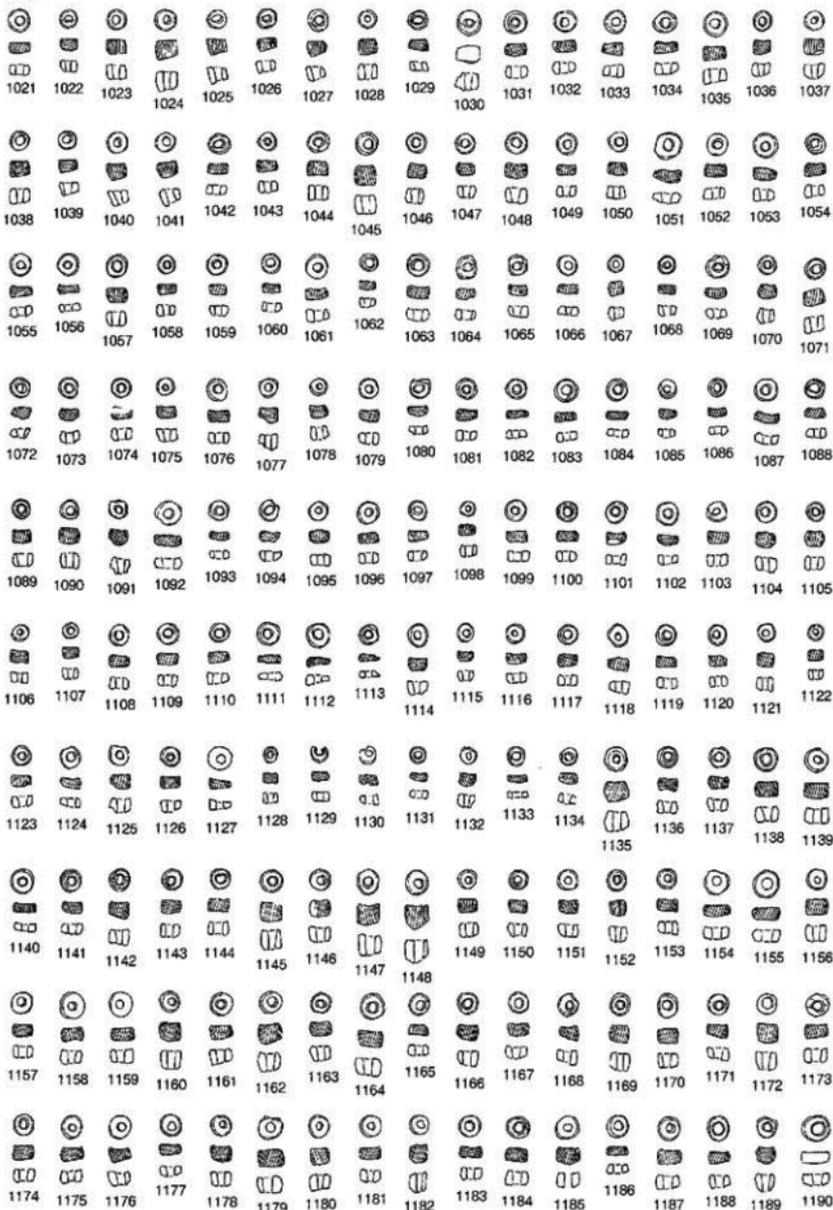
白玉



第73图 白玉(6)



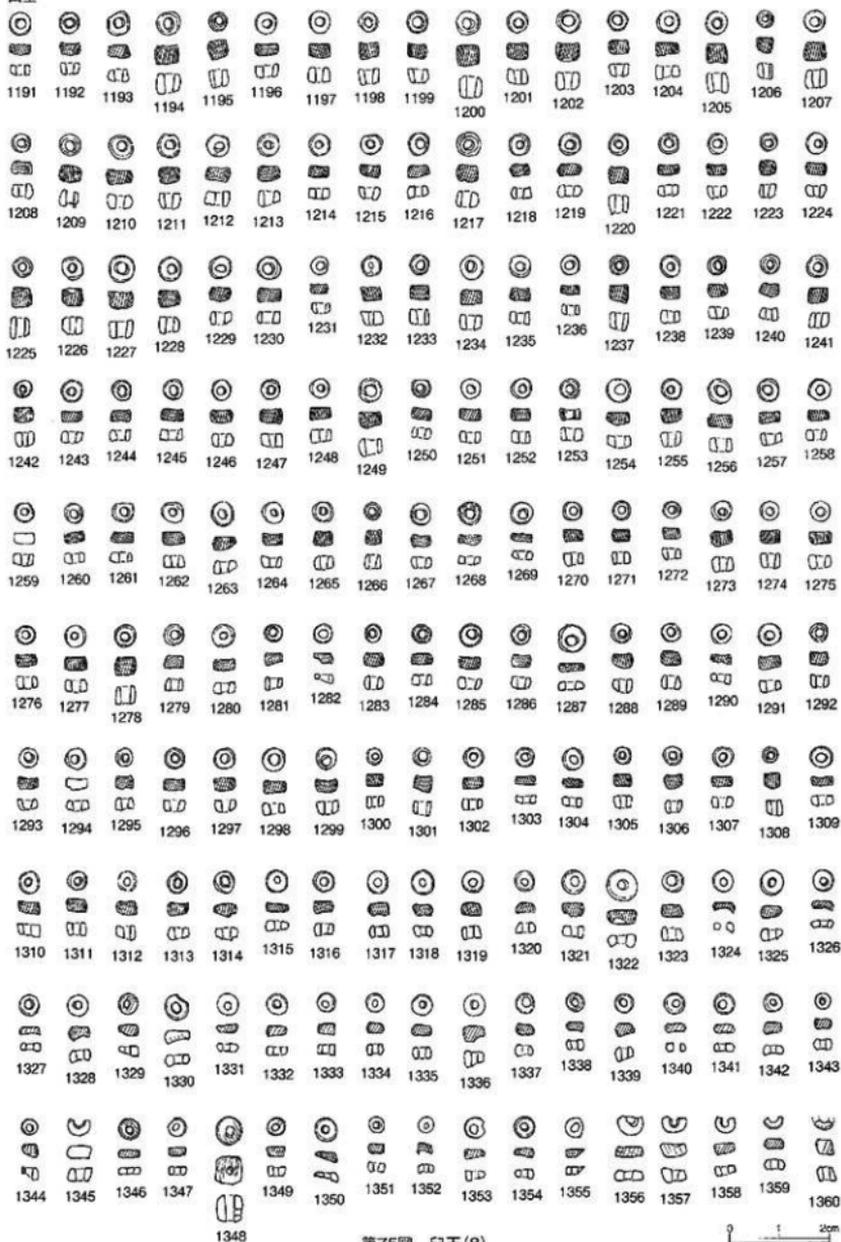
白玉



第74图 白玉(7)



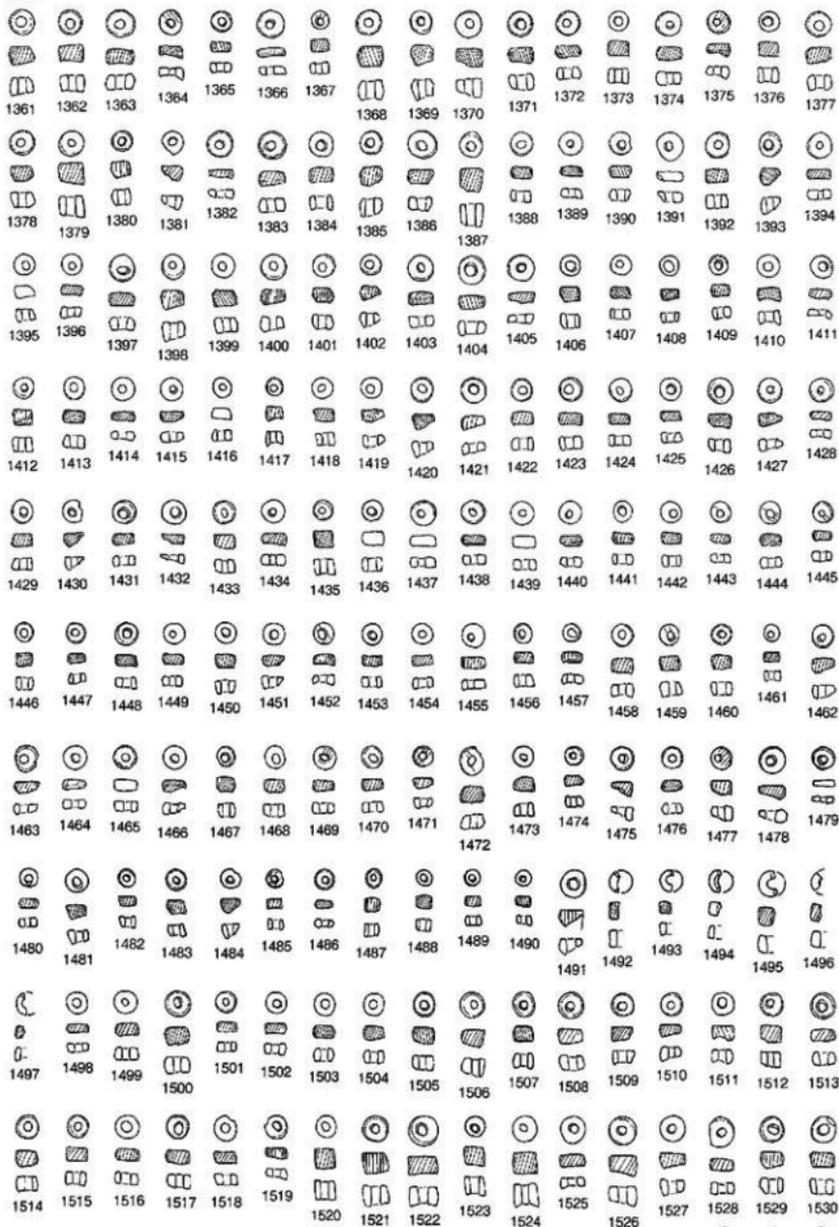
白玉



第75圖 白玉(8)



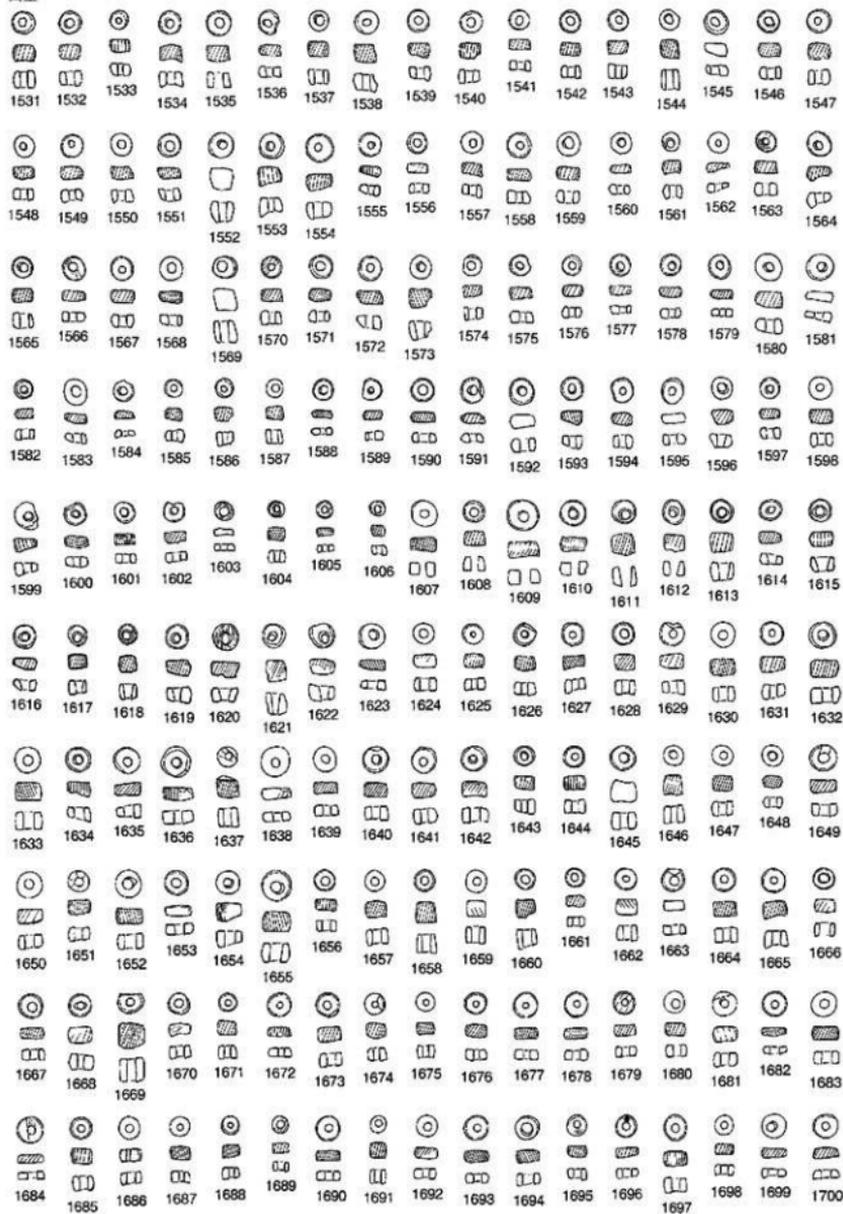
白玉



第76图 白玉(9)



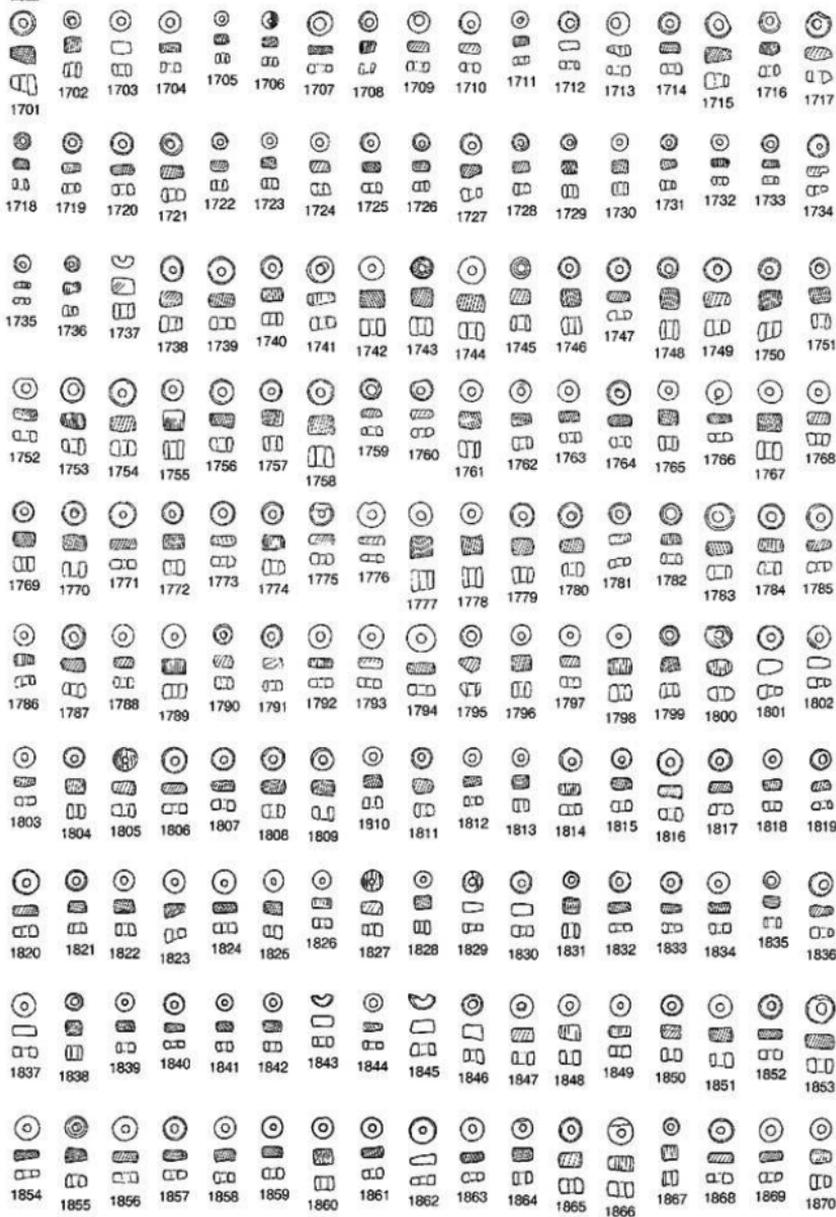
白玉



第77图 白玉(10)



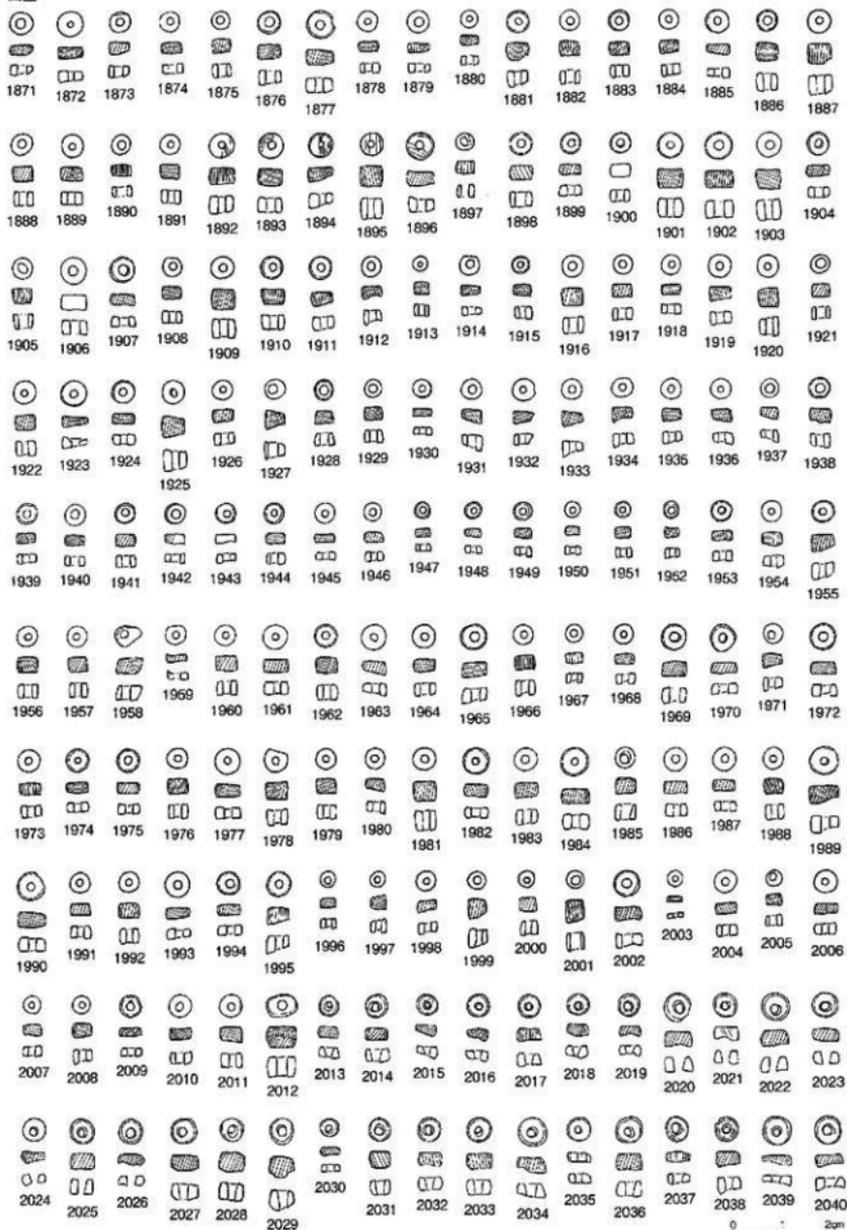
白玉



第78图 白玉(11)



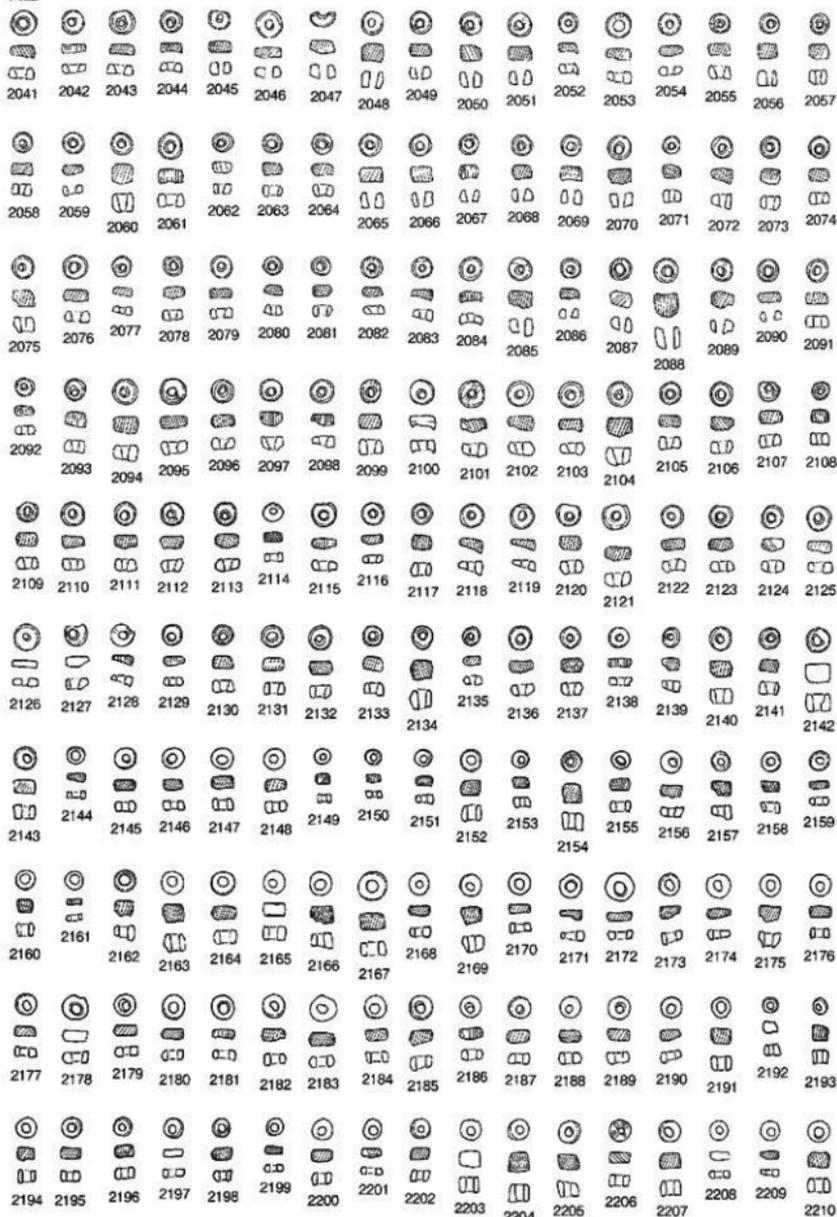
白玉



第79图 白玉(12)

2cm

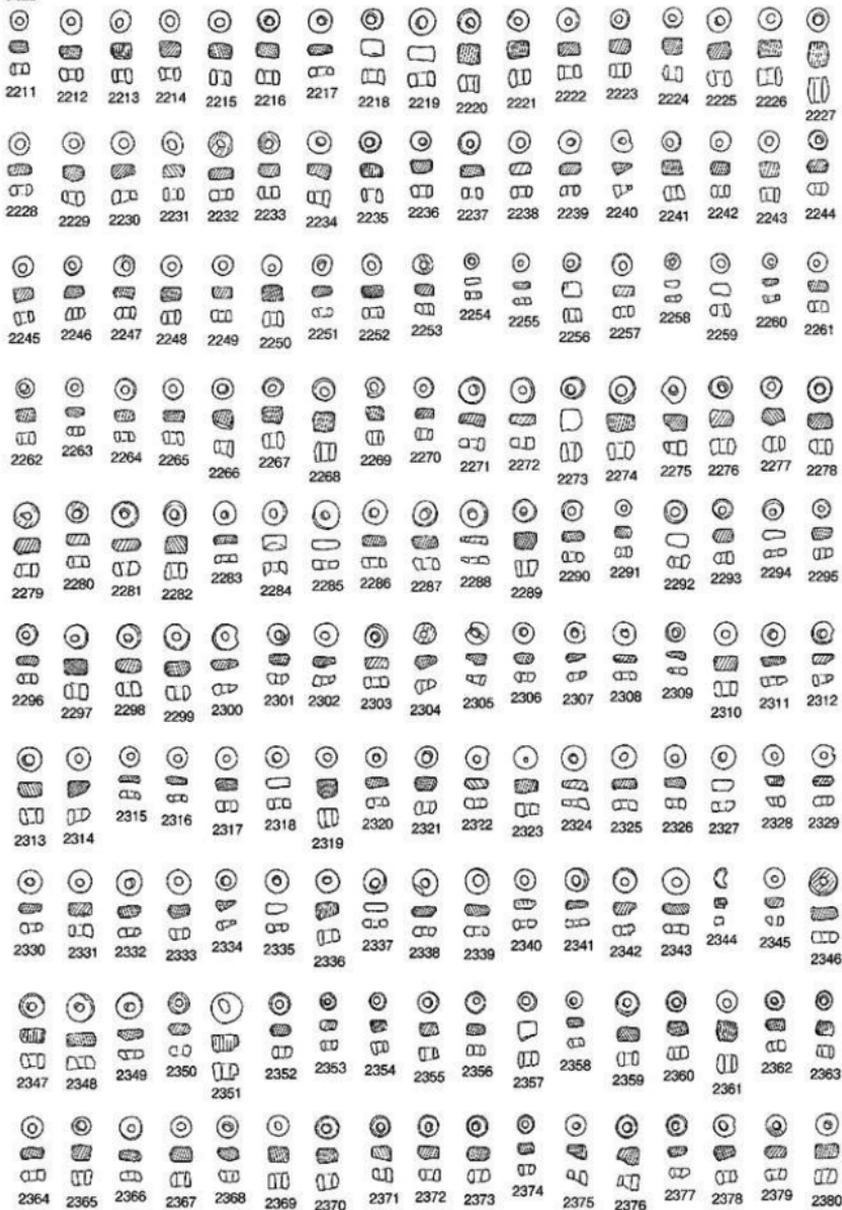
白玉



第80图 白玉(13)



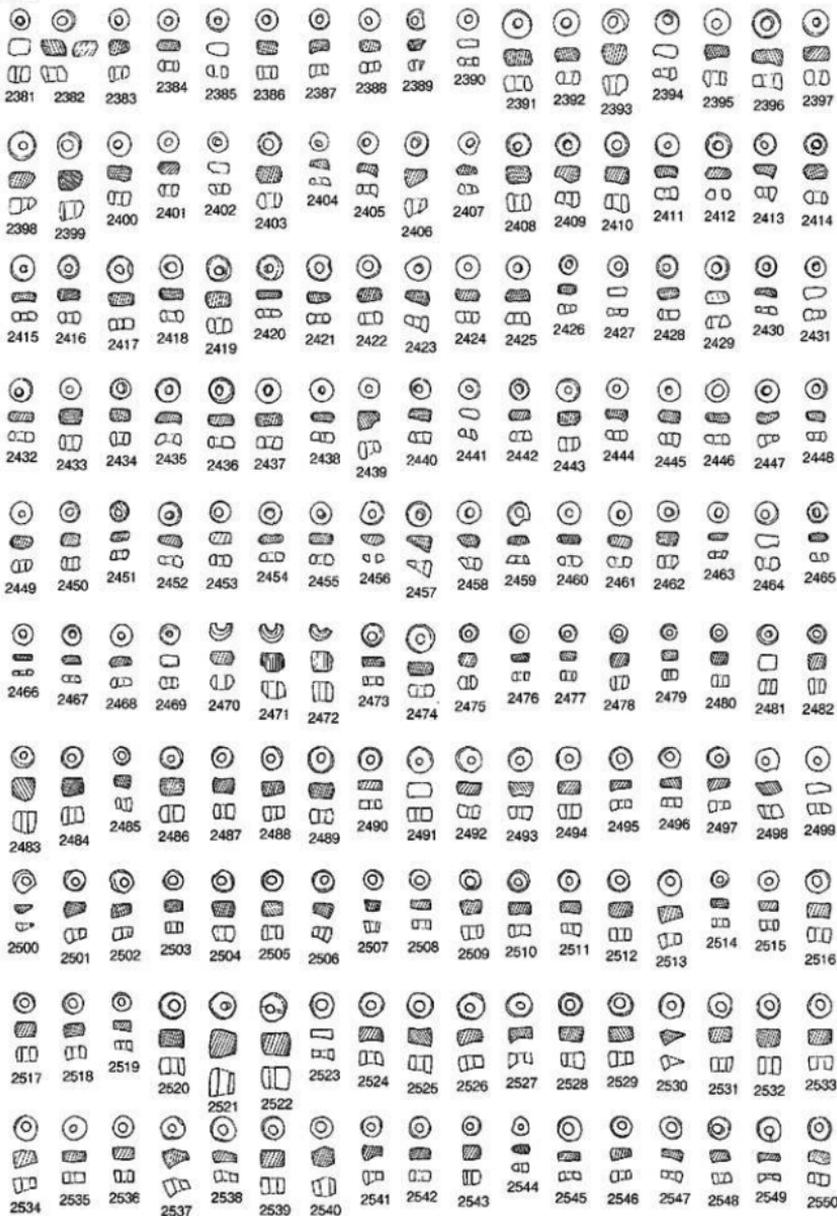
白玉



第81圖 白玉(14)



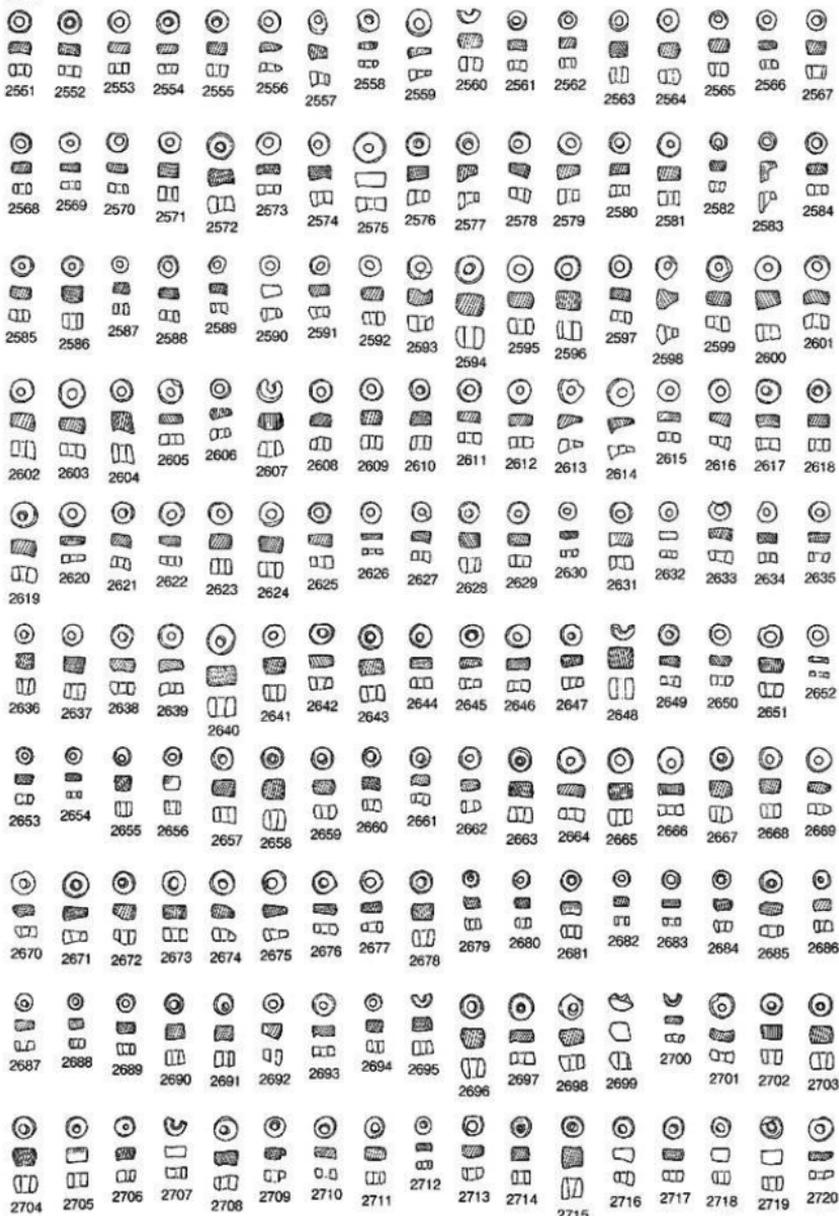
白玉



第82图 白玉(15)



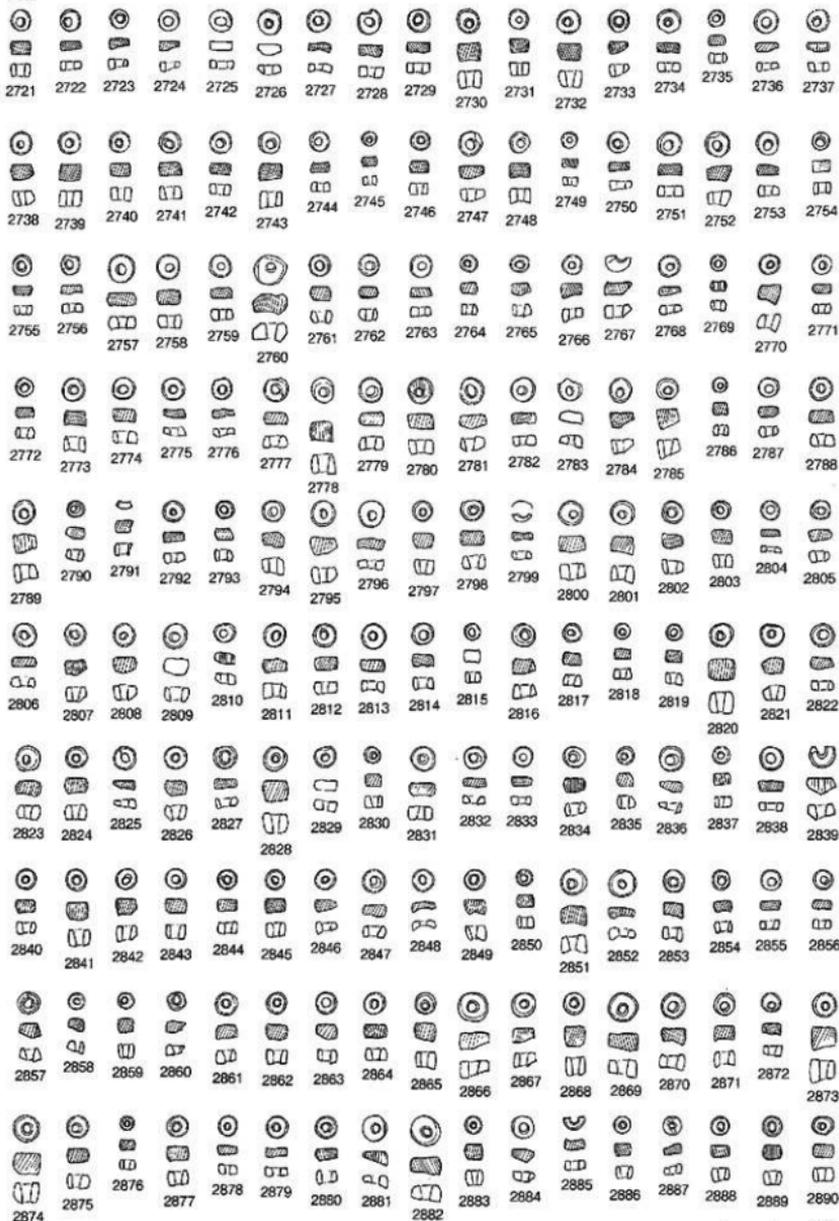
白玉



第83图 白玉(16)



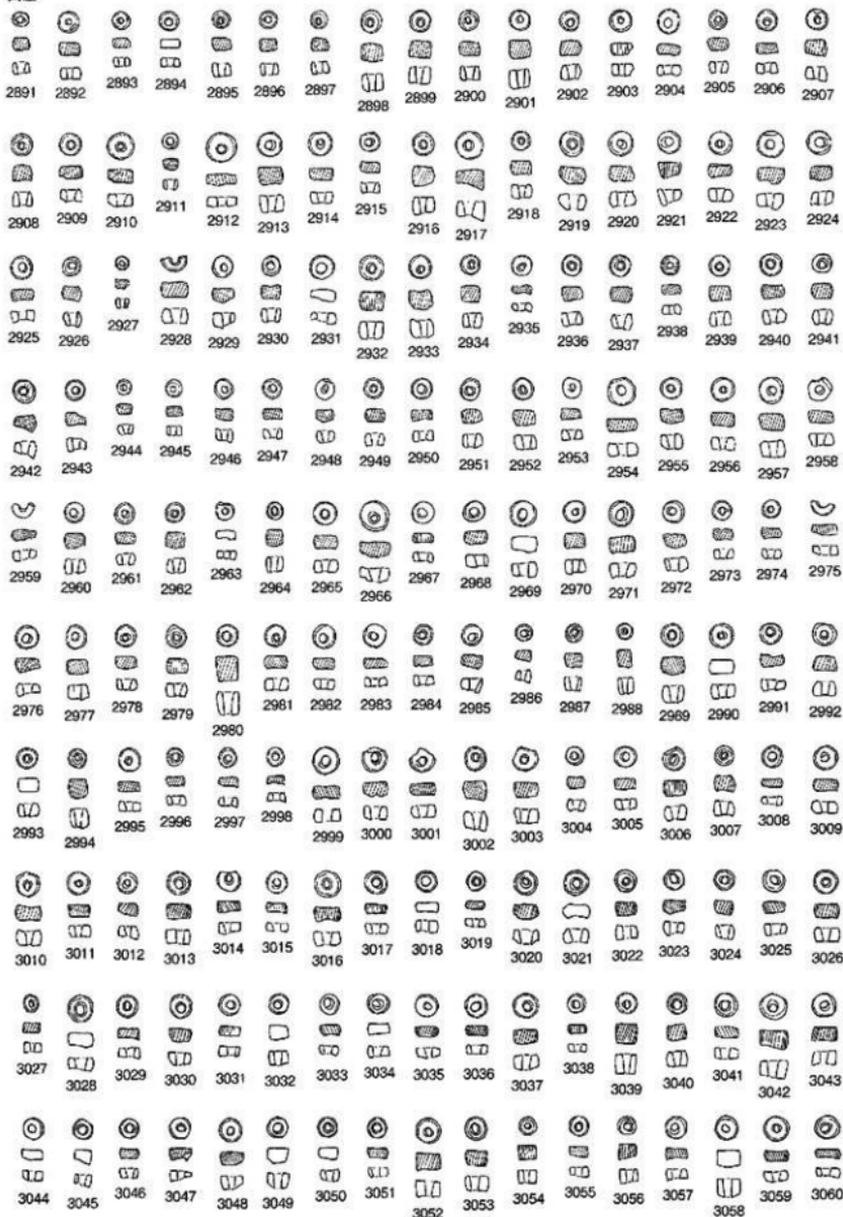
白玉



第84图 白玉(17)



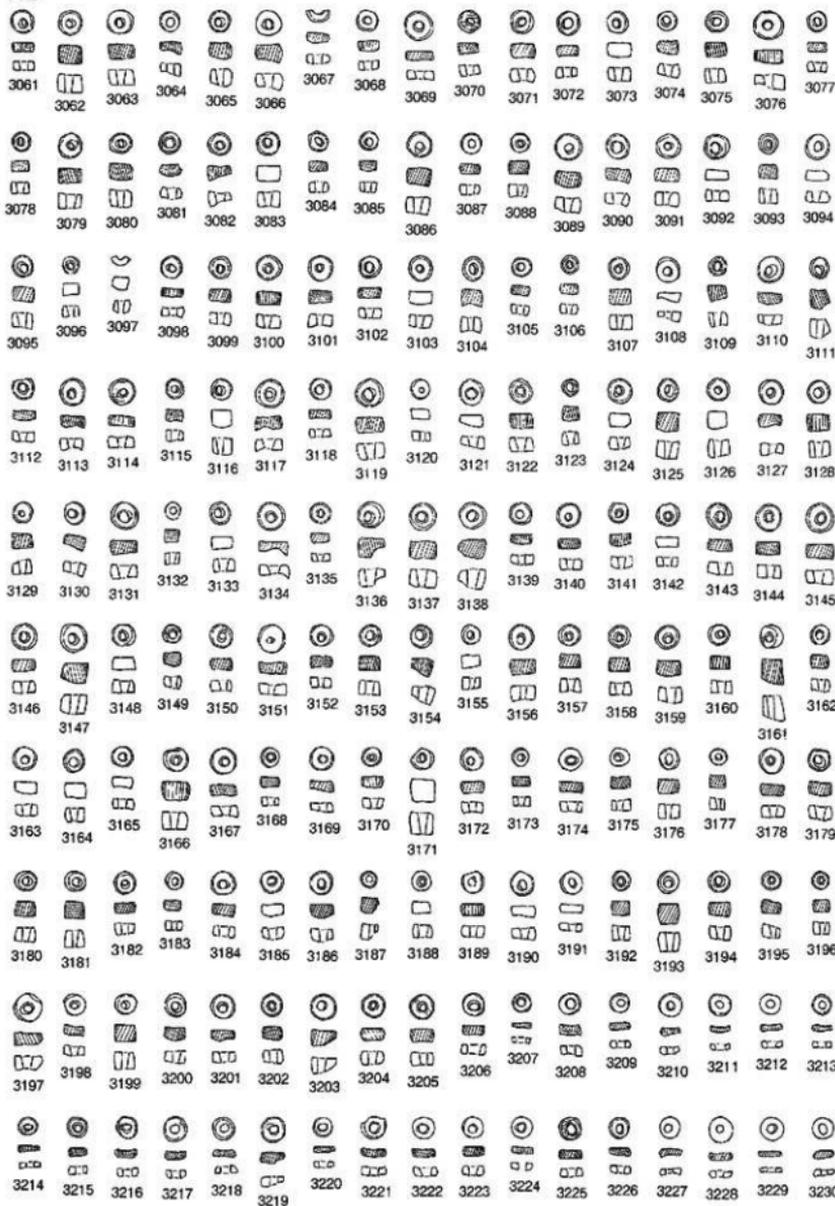
白玉



第85图 白玉(18)



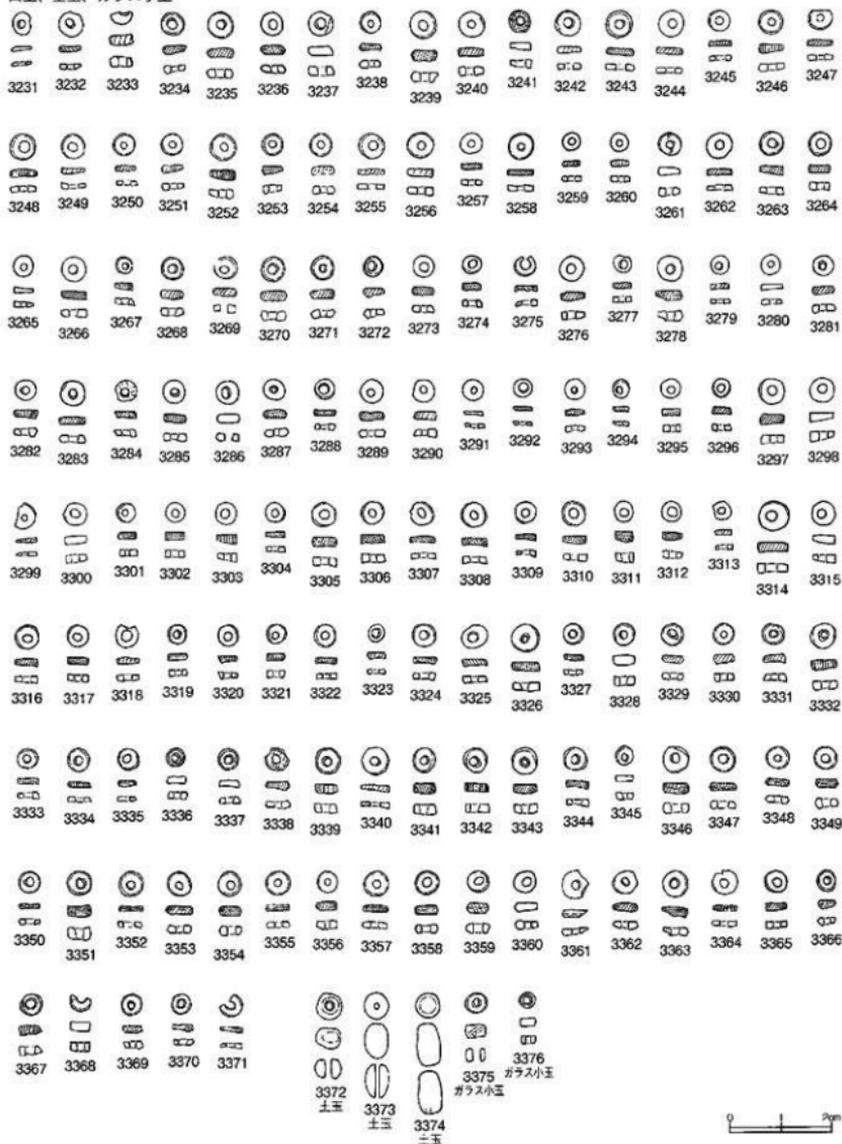
白玉



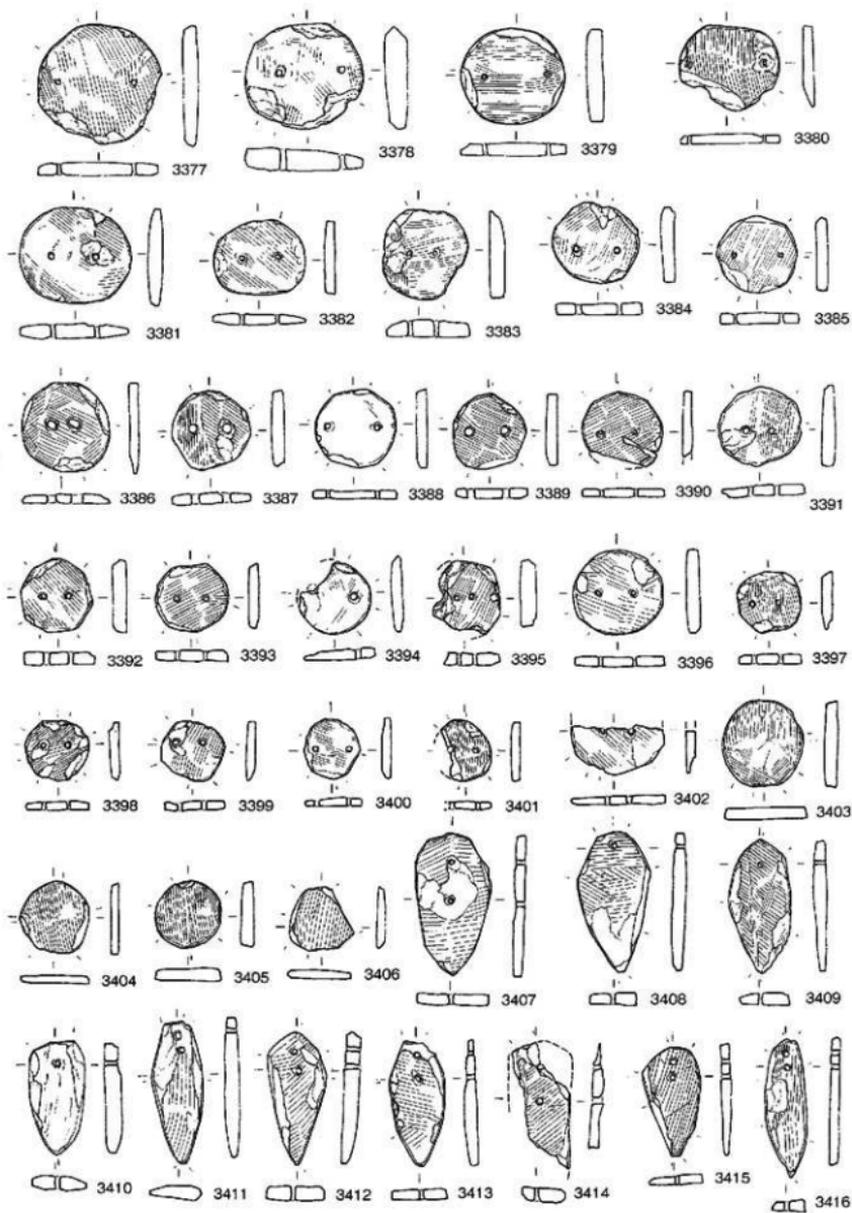
第86图 白玉(19)



白玉、土玉、ガラス小玉

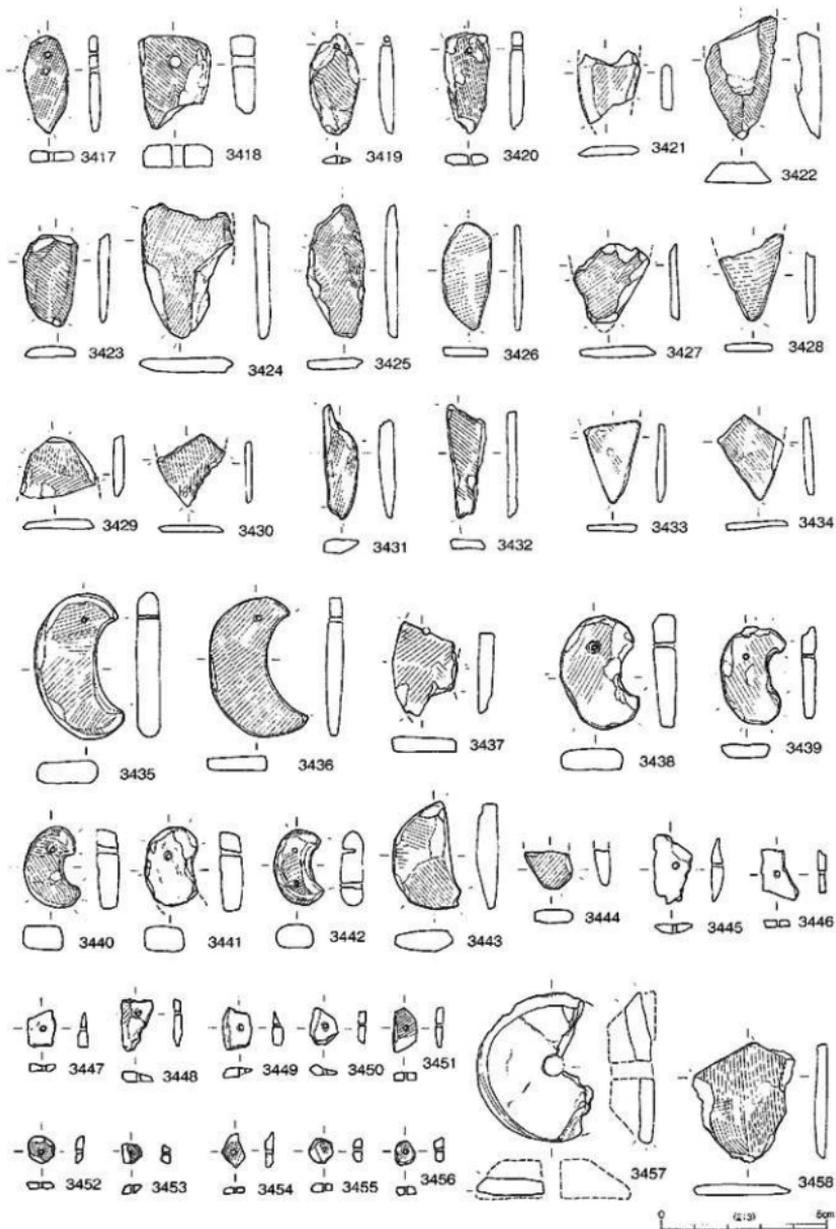


第87図 白玉(20)、土玉、ガラス小玉

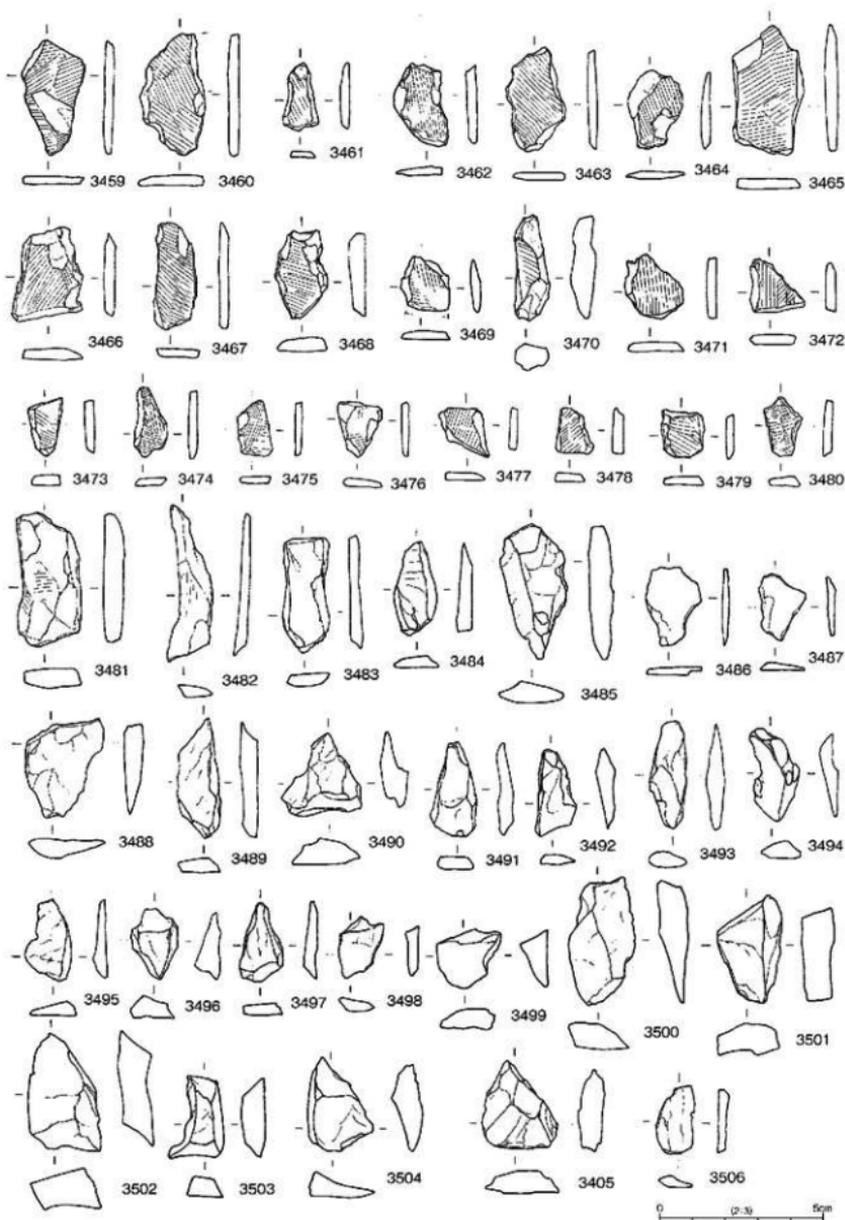


第88図 石製模造品(1)

0 2.5 5cm



第89圖 石製模造品(2)、他



第90圖 未製品、石材



1 調査区俯瞰写真（北西より石和温泉駅方面を望む）



2 調査区俯瞰写真（南より大蔵経寺を望む）



1 調査区俯瞰写真（上より）



2 祭祀坑下層遺物出土状況（南より）



1 道祖神塚古墳 (南より)



2 さんごうじ塚古墳 (北より)



3 無名塚古墳



4 大蔵経寺塔 (経藏) 跡



5 物部神社 (南より)



6 調査風景 (サイロ解体を背景に)



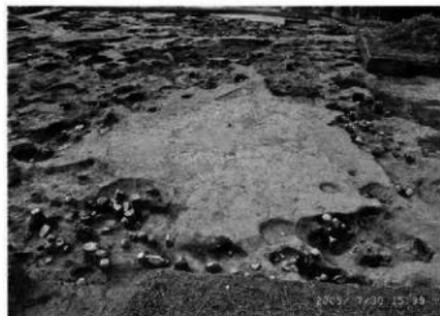
7 重機による表土剥ぎ



8 遺構確認面の精査後



1 1号墳 (南より)



2 4号墳 (南より)



3 2号墳 (さんごうじ塚古墳) と突出部 (北より)



4 3・5号墳 (西より)



5 3・5号墳 (西より)



1 1号墳断面 (北より)



2 1号墳主体部



3 3号墳周溝内調査風景



4 3号墳と5号墳の間の状況



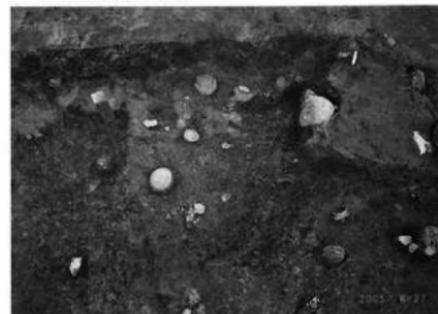
5 5号墳周溝出土須恵器甕



6 1号竪穴遺物出土状況



7 2号竪穴遺物出土状況



8 2号竪穴竈周辺遺物出土状況



1 2号竪穴墓石相状況



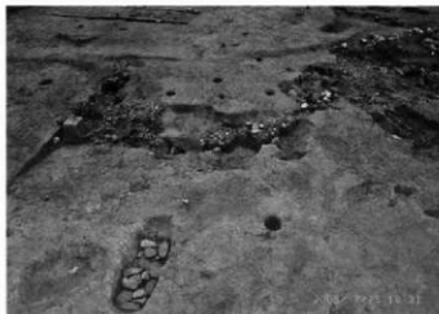
2 3号竪穴完掘状況 (北より)



3 4号竪穴遺物出土状況 (北より)



4 4~6号竪穴完掘状況 (西より)



5 2号墳突出部周辺遺物出土状況 (北より)



6 2号墳突出部調査風景 (北より)



7 2号墳突出部周辺遺物出土状況 (北より)



8 2号墳突出部周辺遺物出土状況断面 (西より)



1 2号墳突出部周辺遺物出土状況(南より)



2 2号墳突出部調査風景(南より)



3 突出部周辺完備状況(北より)



4 祭祀坑上層埋土堆積状況(西より)



5 祭祀坑埋土断面(西より)



6 祭祀坑上層出土須恵器破片



7 祭祀坑調査風景



8 祭祀坑下層遺物出土状況(南より)



1 祭祀坑遺物出土状況



2 祭祀坑遺物出土状況



3 祭祀坑遺物出土状況



4 祭祀坑遺物出土状況



5 祭祀坑遺物出土状況



6 祭祀坑遺物出土状況



7 祭祀坑遺物出土状況



8 祭祀坑遺物出土状況



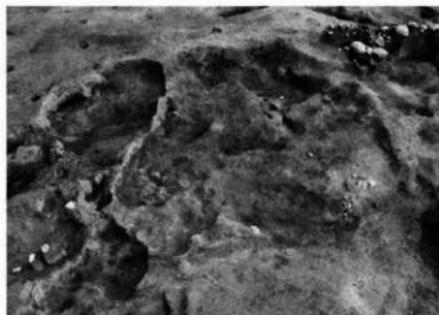
1 祭祀坑遺物出土狀況



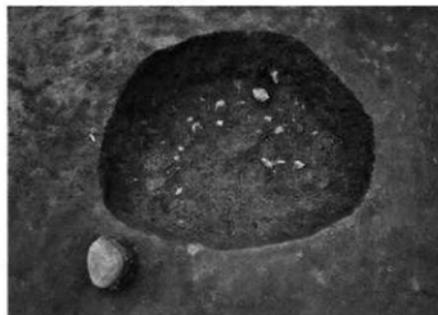
2 祭祀坑遺物出土狀況



3 土製人形出土狀況 (中央)



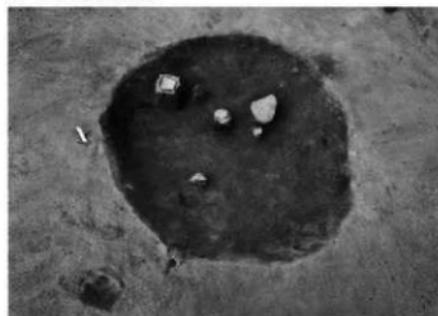
4 祭祀坑完掘狀況



5 1号土坑完掘狀況



6 2号土坑完掘狀況



7 3号土坑遺物出土狀況



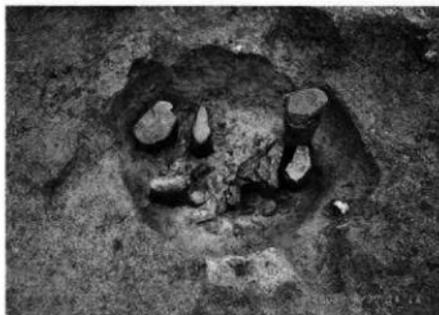
8 4号土坑遺物出土狀況



1 8号土坑 (配石)



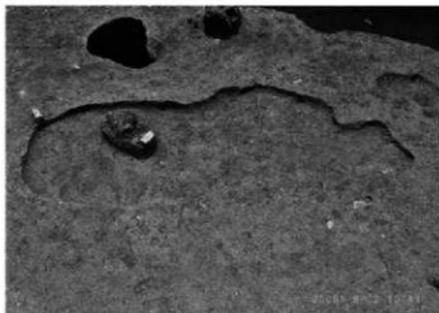
2 16号土坑遺物出土狀況



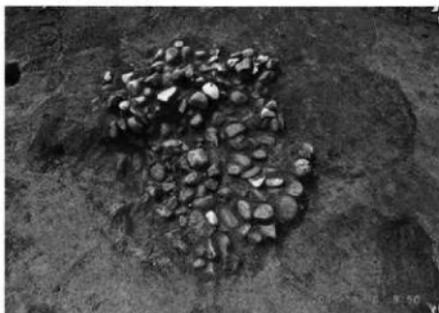
3 18号土坑遺物出土狀況



4 20号土坑完掘狀況



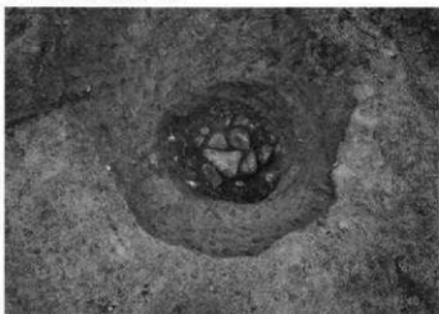
5 22号土坑馬齒出土狀況



6 21号土坑 (集石) 上層



7 21号土坑 (集石) 半截狀況



8 21号土坑最下層石相檢出狀況



1 1・4号墳間の発掘状況



2 調査風景 (1号墳付近)



3 調査区全景



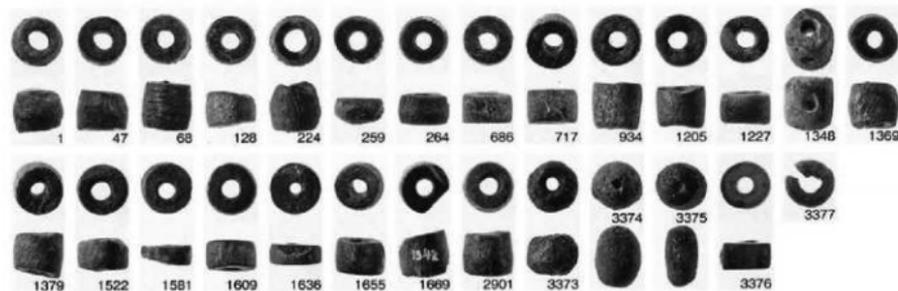
4 見学会風景



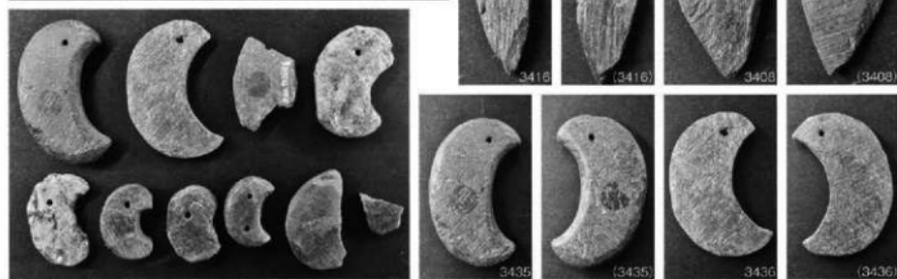
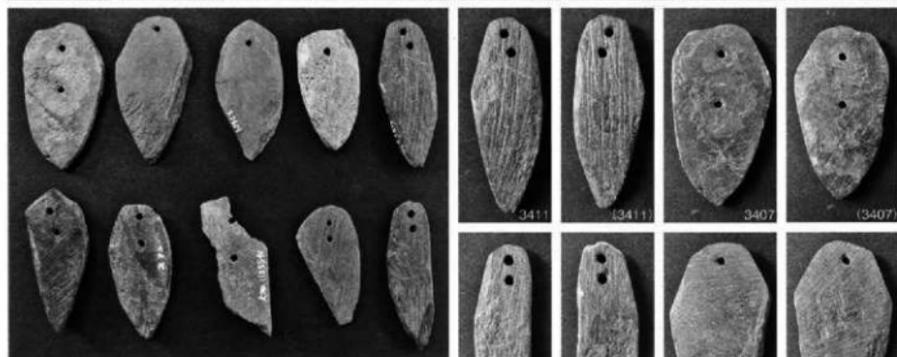
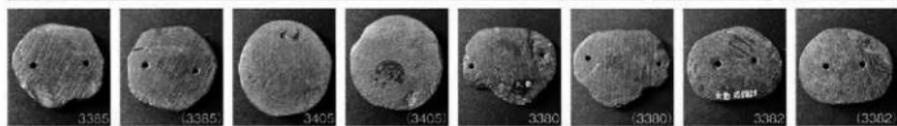
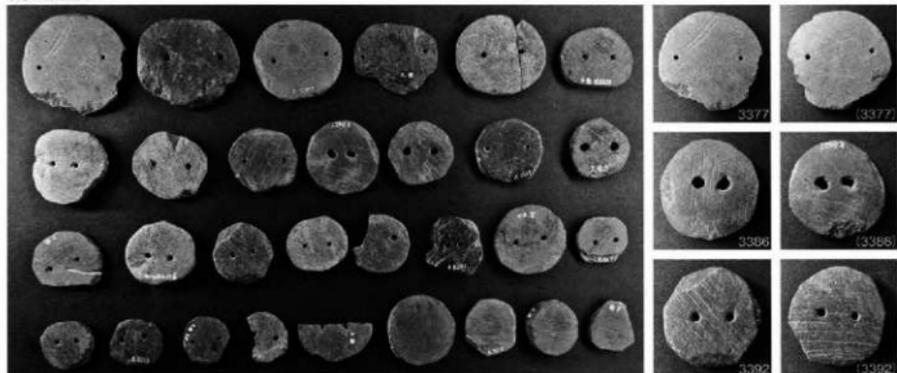
5 2号墳突出部周辺土壌水洗のための準備状況



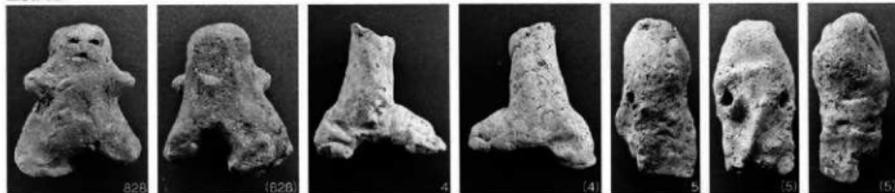
6 祭祀坑出土遺物 (一部)



7 白玉・土玉・ガラス小玉



土製人形



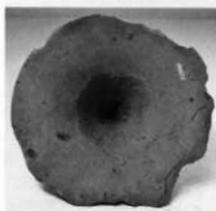
④古絵図 A (右側に笈形
火釜、上方中央の山中
に「弥勒堂」礎石を記
す)



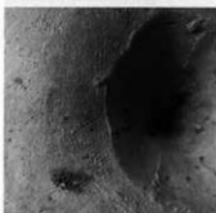
⑤古絵図 C (「道祖神」[蛇
ヅカ]「山宮寺塚」の
記載あり)

図版 14

炭化木葉痕・高坏内の布目痕



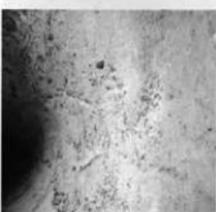
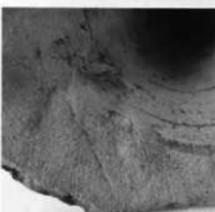
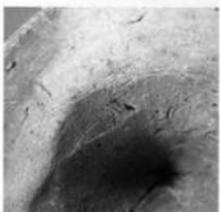
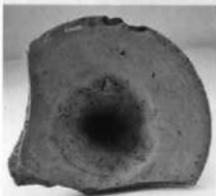
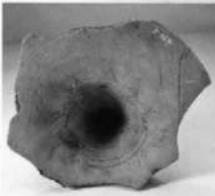
4号溝1 炭化木葉痕



突出部東10 布目痕

突出部東17 布目痕

祭祀坑140 布目痕



祭祀坑318 布目痕

祭祀坑359 布目痕

祭祀坑367 布目痕

祭祀坑370 布目痕

報 告 書 抄 録

ふりがな	だいぞうきょうじまいせき・てらのまごふんぐん
書名	大蔵経寺前遺跡・寺の前古墳群
副書名	遊技施設建設にともなう埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	笛吹市文化財調査報告書
シリーズ番号	第26集
編著者名	榑原功一・齋藤あや
編集機関	財団法人 山梨文化財研究所
所在地	〒406 0054 山梨県笛吹市石和町四口市場1566 Tel. 055-263-6441
発行年月日	西暦2012年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
だいぞうきょうじまいせき・てらのまごふんぐん 大蔵経寺前遺跡・ 寺の前古墳群	やまなしけんふえふきし いさわちようまつもと 山梨県笛吹市石和町 松本637-1はか	19201	石和20	35° 39' 34.8009°	138° 37' 59.5204°	2005年 6月15日 ～9月6日	3100㎡	遊技施設 建設に伴 う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大蔵経寺前 遺跡・寺の 前古墳群	集落遺跡・ 古墳	縄文中期・ 弥生後期・ 古墳中～後 期・平安末	古墳・低墳丘墓・ 竪穴住居・祭祀坑・ 溝・土坑	縄文土器・弥生土 器・土師器・須恵 器・石製模造品(白 玉・円板形・剣形・ 勾玉形)・土製人 形・手捏土器・鉄 製品	低墳丘墓2基、高塚系古墳3基 からなる古墳群で、2号墳突出 部(造り出し)周辺に祭祀遺物 が集積して出土。とくに祭祀坑 (竪穴状遺構)から多量の瓦片・ 坑・手捏土器とともに石製模造 品・土製人形が出土した。

要 約	<p>大蔵経寺前に広がる寺の前古墳群を主とした調査。5世紀後半～7世紀代の低墳丘墓の円墳(1・4号墳)、高塚系古墳の円墳(2・3・5号墳)のほか、古墳時代、平安末の竪穴住居が検出された。2号墳北側には突出部があり、西側に方形竪穴状遺構を配している。竪穴状遺構内を中心にした突出部周囲からは多量の手捏土器、土師器高坏、埴輪が集積し、その中に混在するように石製模造品、鉄製品、土製人形が出土したことから、祭祀行為ののち廃棄した場所(祭祀坑)と考えられる。石製模造品には円板形、勾玉形、剣形、白玉があり、とくに白玉は土壌洗浄等により3372個を検出している。</p>
-----	--

笛吹市文化財調査報告書 第26集

大藏経寺前遺跡・寺の前古墳群

— 遊技施設建設にともなう埋蔵文化財調査報告書 —

平成24年(2012) 3月30日 発行

編 集 榎山梨文化財研究所

〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場 1566 TEL 055-263-6441

発 行 ㈱マルニチ・笛吹市教育委員会・財団法人 山梨文化財研究所

印 刷 ㈱裕京サービス

DAIZOKYOJIMAE Site ·
TERANOMAE Burial Mounds(Isawa)

Archaeological Research prior to the
Construction of the Play Facility

2012

Marunishi Co.,Ltd.
Fuefuki Board of Education
Yamanashi Research Institute of Cultural Properties